

---

# 私のリリカル・まじカオスな転生記

KUMAZAKURA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私のリリカル・まじカオスな転生記

### 【Nコード】

N6126U

### 【作者名】

KUMAZAKURA

### 【あらすじ】

物心が付いたところに前世の記憶を思い出したミッド出身で才能そこそこな主人公が…空回りしながら頑張る物語です（現在はオリジナル風味なStrikers）

この小説は一人称のコメディちつくな話を目指しています。基本的にメインがリリカルですが、テイルズネタ（+その他）もたくさんあります。

お読みになる場合はそのところを理解してお願いします。

## 序章 1 ～ ぶろろーぐ

爽やかな日差しが差し込む早朝。

あまり人通りもない並木道を一人の子供が走っている。

「はっ……はっ……はっ……」

見た目、まだ5～6歳程度といったところの少年……というより幼児の方がしっくりくる。

息はあまり乱れておらず、そのまま並木道は駆け抜ける。

そしてその先にある公園で走るのをやめ、歩く速度で中に向う。

そして大きな木の木陰にて停止し、息を整える。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

ようやく息が整ってきたところでポーチからスポーツドリンクを取り出しあおる。

「ゴクッ、ゴクッ……ぶはぁっ!!」

そしてそのまま幹に背を預け座り込む。

「あゝ疲れたぁ……でも体力は資本だから……」

若干幼児らしくないセリフを言いつつ休憩し

「よし！ 朝食前に戻るとしましょうか」

と立ち上がり、帰路につく。今度はゆっくり歩きながら……

どうも。

とりあえず自己紹介をしておこうと思います。

私の名前は『アペリス・ウラノ』愛称は『リース』

だが言っておく！ 私は男である！ 一人称『私』だが男である！

重要だから2回言いました。でも漢ではないのであしからず……

突然だが私には前世の記憶がある。

俗に言う『転生者（笑）』だ。

ちなみに神様やトラックなどではなかった。

物心が着いた時には前世の記憶があつたのだ。

出産直後ではなく、羞恥プレイがなくて心底安心したものだ……

正直な話、前世ではしがないサラリーマン人生を詰らなく生きていたため

転生キタ

$$\begin{pmatrix} \circ \\ \circ \end{pmatrix}$$

！！だつた。

「私 t u e e e e e e e e e e !」とか「私 s u g e e e e e e e e !」には左程興味はなかったが、絶対に勝ち組ライフを過ごしてやると思いい情報収集したのだが……

「まさかのリリカルですか……ないです、（＾Ｏ＾）／」

そう！ この世界はリリカルに登場するミッドチルダだったのだ。

個人の資質がモノをいうあの世界である。

就労年齢がおかしいあの世界である。

三権分立？　なにそれおいしいの？　なせ（ry

この世界は勝ち組と負け組がハッキリしており、下手すると人生開始時点で負け組な可能性があるのだ。

あせった。メツチャ汗った。冷たい汗が出まくってた。

がそれも杞憂で、どうやら両親とも魔導師であり先天的にAランク以上はあるそうだ。

ちなみに両親は父が聖王教会所属の騎士で、母は元管理局員（現在は専業主婦）だ。

父のランクは陸戦A A A +、母は総合Aらしい。中々の高ランク魔導師な両親なのだ。

なので自分も先天的に高い魔力値を持っている。

なの破産（何故かこう変換された）には到底及ばないが悪くはないのだ。

だがこの世界は死亡フラグが蔓延している……

弱いと何も守れない。

この世界を生きるには、暴力にしろ、権力にしろ、力が必要なのだ。

そのため、幼い身でありながら、できる限りの力を付けている。

現在も早朝ランニングを終えたところである。

「はぁ…勝ち組ライフは未だ遠く……ですか」

そう言つて朝なのに黄昏る。

見た目は幼児だが黄昏る。

「んゝとりあえず早く帰つて朝食としますか」

そう言い帰路を急ぐことにする。

「はぁ……これから先どうなることなのでしょうか……」

正直、前途多難である……

## 序章 2 決意する幼児

前世の記憶を思い出して一番初めにしたのは現状確認だ。

その結果わかったのが、現在は新暦65年だということ、ここがミッドチルダ極北地区のベルカ自治領だということ。

家族構成は聖王教会所属で教会騎士団の騎士をしている父と、今は引退しているが元管理局員の母の3人暮らしだ。

両親を名前で呼ぶことはなさそうなのでここでは割愛することとする。

決して両親を軽んじているわけではないが、普通自分の両親を名前で呼ぶ人はそうそういないだろう。

さて、ここで重要なのが現在の新暦である。

そう、新暦65年は『リリカルなのは』の始まりである『無印』が始まる年である。

「まあ、かわるつもりはないからいいんですけど……」

年齢：2歳。

魔力：あるかどうかわからない。

場所：ミッド（↑ここ重要）

どう考えても、2歳のガキが行けるわけありません！

てか行つて何ができると……

超テンプレのご都合主義な展開があつてもゴメンだ。

とゆーより、基本的に危ないことはイヤだ。

暴力なんて絶対ダメ！ とは言わないが、現代人感覚的にあまり好ましくない。

「どーしましょーか……」

そこそこ考えた結果

とりあえず将来に向け、広い範囲の知識・技術を身に付けることにした。

スペシャリストではなくジェネラリストを目指す。

RPGでは確実に2軍落ちの選択だな！

明確に将来設計が決まってから選択肢を絞っても悪くはないだろう。

若いうちは選択肢が多いのだ（・ω・）キリ

それからまずは魔力制御の練習をすることにした。

2歳児が筋トレしてたら恐ろしいじゃん。

ほら、魔法ってなんだかんだ言ってたってあこがれるじゃないですか！

『EFB』とか『30歳過ぎてなる魔法使い』はマジゴメンだが

……

とりあえずスフィアをイメージしたところビー玉サイズの魔力球ができた。

理論はまったくわからんができた。

自分はロジカルではないかもしれない。

前世ではプログラムの授業とか嫌いだったし……

次は宙に浮くイメージを試してみた。

3mmくらい浮いた気がする。

余談だが某タヌキロボットも足が3mmほど浮いているため靴いらずで現代を過ごしているらしい。

ここまででわかったのは、才能は並以上あるらしい。

あまり訓練をせずに空を飛べるのは先天的にAランク以上であったハズなので、少なくともAランク以上の魔力資質はあるようだ。理論はまったくわからないが。

とりあえず5歳くらいまで魔力制御と知識習得を集中的にやっておくことにした。

幼いころから身体を鍛えるのはあまりよくないから、基本は体力作りのランニングだ。

両親は父も母も若くして就労していたからあまり息子の行動を不思議に思わないらしい。

ありがたいが現代人の感覚では若干問題ある両親な気もする……

てゆうかお母様、男なのに愛称が『リース』ってなんですか？

それスカートだよ！？（基本的に）女の子が穿くものだよ！？

何？かわいいは正義？

かわいければオールオツケー？

気持ちはわかるが本人にしたらたまったものではない！！

父親譲りの金髪とアメジストの瞳に母親似の顔立ち……

でも男の子なの！！ 男の娘ではないの！！ まあ漢でもないけど……

## 閑話休題

本日のランニングを終え、帰宅しシャワーを浴びる。

その後、家族3人で朝食をとる。

いつもの風景だ。

少し濡れた髪が鬱陶しい。

腰まである金髪。切りたいといったらお母様に猛反対された。

そこまで娘が欲しかったのですかお母様……

まあDQNネームでなかったのは不幸中(?)の幸いだ。

名前は出せないがアレらよりは相当ましだろう……

なんだか父さんが空気だが、コレがウラノ家の日常だ。

## 序章 3 龍に出会う幼児

突然だが家族旅行に行くことになった。

なんでも新婚旅行すらしてない両親だったらしい。

あんまり世間一般の常識は通用しない両親なのかもしれない。

それはともかく旅行だ。

行き先はとある管理世界の自然が豊かなところらしい。

きれいな風景を見ても何も感じないが……私は枯れているのだろうか？

正直な話、魔法世界の遊園地の方が万倍興味あったがそこは自重する。

横でお母様が「旅行なんて初めてだわ」と浮れているところを見ると言えない。

言えるわけがない。

てゆーかお母様、旅行行ったことなかったのか。

## 閑話休題

やって参りましたとある世界の観光地！

自然が豊か！　というか自然しかない気がするよ！

ホテルはないが予約しておいたペンションがあるらしい。

とりあえず荷物を置いてから行動とのことで、転送ポートのある  
ステーションから大きな湖の畔にあるペンションへ向かう。

歩きで……

いやさ、大自然の中を車というのはアレだからわかるけど徒歩は  
ないでしょ……

もちろんランニングで体力を鍛えているため問題はないのだが、  
荷物背負った6歳児に10kmも歩かせるか普通……

とりあえずトレーニングと思うしかない……うん、これはトレー

ニングなのだ！

……両親の常識が本当に心配になってきた。

と、途中休憩や寄り道をしながら3時間かけてペンションに到着した。

いくら荷物を置いてからでも来た道に戻って観光はしんどいゆえ、寄り道だ。

まあ及第点はあげてもいいかな、というくらいは楽しめた。滝とかキレイだったし。

ペンションに到着して少し休もうとしたところ両親が釣り道具を準備していた。

釣りをするのか、と訊ねてみると

「夕食の材料を釣りに行くのよ」

どうやら自給自足らしい……

旅行じゃなくてサバイバル訓練の間違いじゃないのだろうか？

またひとつ両親の常識が心配になった。

お母様から釣り竿を受け取り湖の畔に行く。

父さんはひと狩り行くそうだ。Ｔシャツとハーフパンツスタイルで。

そんな装備で大丈夫か？と聞きたくなつたがいざとなつたらバリ  
アジャケットなり騎士甲冑なり出すだろう。

一応は聖王教会所属の騎士なのだから。

草の上に座り、糸と水面の境界面を眺める。

お母様曰く

「これは『すごいつりざお』なのよー！  
らしい。」

でっかい角生えた赤い金魚とか青い竜王とか釣れたらマジでドン  
ビキだが、どうやらそっち方面の釣り竿ではないらしい。

てゆーかその場合は生命の危機だ。

何も持たず草むらに入るのが大変危険なのがよくわかる。

少し離れたところではお母様が

「17フィッツッッシュ！ ふっ、釣り尽くしてしまってもモーマ  
ンタイね！」

アングラーになっていました。

てゆーかそれは大問題です。

環境破壊です。

まあそこまで釣れはしないだろうから大丈夫「18&amp;1  
9同時フィッツッッシュッ！」

大丈夫だろうか？

両親の常識もそうだが、湖の生態系も心配になってきた。

そんなことを考えていると自分の釣り竿にも何か引っかかったようだ。

一瞬引っ張られたが、その後の抵抗はなかったのでゴミか何かと  
思い、ゆっくりリールを巻いていく。

以外と重かったが問題なく引き上げていく。

骨とかだったらやだなあ、などと思いつつ糸の先にあるものを確認する。

「これはないです……」

タマゴだった。

針が引っかかるころなどなかったが、糸と針が上手く絡まり引っかかったようだ。

変な模様があり、人間の頭蓋骨以上の大きさはある。

明らかにヤヴァイだろ！エイリアンとか生まれてくるんじゃないの！？

怖いので見なかったことにして、そのまま湖に投げようとしたところタマゴから音が！！

慌ててタマゴを落としてしまったが割れなかった…どうやら丈夫らしい。

いや不思議なご都合主義に守られているのかもしれない。

それもつかの間、タマゴが揺れている。罅が入ってきた。

ヤヴァイヤヴァ「3 1 , 3 2 , 3 3 , 3 4 , 3 5 ! ! 5 連フィッツ  
ツツツシュ！」

生態系も現在進行形でヤヴァイかもしれない。

とゆうより5匹もどこに引っかけているのさ？

そんなことを考えているうちに罅は全体に広がっていき……

「きゅー!!」

光とともに気の抜けた鳴き声が聞こえた。

恐る恐る見てみるとそこには

つぶらな瞳

青くて長い胴体？

エラのような耳がざり？羽？いやエラか？

口なのか鼻なのかわからん白くて楕円の……口？鼻？

……これなんてミニリュウ？

その日、幼児はドラゴンに出会った。

## 序章 4 龍を託される幼児

「お持ち帰りiiiiiiii!!--!」

3桁を超える魚を陸へと誘ったお母様がミニリュウ（仮）を見てのたまった。

かわいいは正義らしい。

そんなお母様を見てミニリュウ（仮）は私の後ろに隠れてしまった……とゆーか足に巻きついた？

とりあえず持ち上げてみる。

ぬるっと思うたがそうでもないらしい。

胴体が長くて全部は持ちあげられなく、体長は1・2mくらいありそうだ。

「きゅっ」

と鳴きながら頬ずりしてきよった!

もしかしたら親もしくはマスター?と認識されたのかもしれない。

ヤヴァくない?タマゴから生まれた以上は親がいるはず……

ハクリューが出てきて『はかいこうせん』してきたら……デッドエンドじゃねえ?

……そつとミニリュウ（仮）を湖に帰す。

「きゅー！きゅー！きゅー……」

振り返るな！ 振り返っちゃダメだ！ 行け！行くんだミニリュウ（仮）！

某アライグマの最後を彷彿させるやりとりだったが無事？帰すことができた。

ただ沈んでいただけかもしれないが……

お母様は感涙していた。

「うちの子供が立派になって……」

……お持ち帰り宣言した人のセリフではないな。

それもつかの間、急に天気が変わって曇り空になる。

なんか『ゴゴゴッ』と効果音が聞こえてきそうな空だ。

選択肢を誤ったかもしれない。

さすがのお母様も……って既に臨戦態勢だった！

『すごいつりざお』を構えている！

ちよい待て、何を釣るつもりだ……

「この急激な天気変化は湖の主が現れる前兆なのよ！！」

ネッ。ーか？。ッシーなのか！？

そう言っているうちに湖の水が一部分だけ盛り上がっていく！

そのまま現れたのは……

「キュウウウウウウー！」

先ほど湖に帰したミニリュウ（仮）を頭に乘せたハクリュー（推定4m）だった。

初代ではチート王ワタルの2番手、3番手。  
金銀では1匹リストラ。

ポケスぺでは『はかいこうせん』で街破壊。  
よくハクリュウと誤記されるアレである。

よくもうちの子を!!

『はかいこうせん』↓『めのまえが まっしろに なった』

のデッドエンドかと思ったがハクリュウ（推定4m）が近づいてきた。

この泥棒猫!!

『たたきつける』↓『めのまえが まっかになった』

のデッドエンドかもしれない。

などと思っていたらいきなりミニリュウ（仮）を私の腕の中に押しつけてきた。

わけもわからず突っ立ったままミニリュウ（仮）を受け取ってしまった。

ついでに首の水晶も渡してきた。

とれるのかよ！  
飾りなのかよ！  
そもそもこれによ！

このミニリュウ（仮）をどーしろと！

複数の同時思考がハクリュー（推定4m）の行動に対してツッコミを入れていた。

どうやらここにきてマルチタスクを習得したらしい。

だがこっちの混乱などお構いなしにハクリュー（推定4m）は湖の中に出ていく。

去り際の背中には『後は託したぞ』と語っているようだった。

とお母様が言っていた。

結局は育児放棄やん。

そう思った私はおかしいのだろうか？

てゆーかマジでミニリユウなのか？

仮に正式名が違ってても最終的にはあそこまで育つことがわかったのだ。

「きゅっ」

……どうやら相当おそろしいものを託されたようだ。

ピロリン！

【かけだしトレーナー】の称号を得ました！

ピロリン！

【謎の水晶（母の愛）】を手に入れました！

ピロリン！

【マルチタスク（4分割超高速思考）】を習得しました！

## 序章5 運命に出会う幼児

【かけだしトレーナー】

説明：トレーナーとして第一歩を踏み出した者の称号

条件：初めて自分のポケモンを手に入れたとき

効果：向上心→ 好奇心→→ 一般常識←←

備考：俺たちの冒険はこれからだ！！

ピロリン！

向上心が上がったような気がします！

好奇心旺盛になりました！

おきのどくですが一般常識がなくなってしまいました！

……いらんわ！

結局、ミニリュウ（仮）を連れて帰ることになった。

親公認のマスターになってしまったようだ。

そんなこんなで早めに旅行を切り上げることになり、ミッドに向うことになった。

まあ帰りも大変だった、と言っておこつ。

この両親に一般常識を求めるのはやめることにしよう……

そしてミニリュウ（仮）はどうやら魔法生物に該当するらしい。

施設行きかと思いきやそうでもなく、種によっては申請して講習を受ければ飼うことができるそうだ。

あまり魔法生物を飼っている例は少ないがゼロではない。

原作でのキャラとフリードみたいなものだろう。

教会で登録ができるようなので父さんが早速手続きをしてくれた。

それでお母様と共に聖王教会本部に行き、受付にて必要書類を書いていたのだが……

「名前ですか……」

正直考えていなかった。

ポケモンはニックネーム否定派であった。

だがいつまでもミニリュウ（仮）ではかわいそうだ。

進化してもミニリュウ（仮）ではもはや虐待の域だろう。

……進化キャンセルってどうやるんだろう？

不穏なことを考えているとお母様が思いついたらしく……

「よし！ この子の名前はブルーアイズ」「この子の名前は『ハク』にしようと思います！」 ホワイト……」

あぶなかった、社長嫁はマズイだろう。

お母様はやや不満げだが無視する。

「きゅっきゅっ」

ミニリュウ（仮）改めハクも嬉しそうだ。

無事登録が済み簡単な講習に入る。

まあ一般的な常識範疇の再確認である。

1時間ほどで無事に講習が終わった。

あとは帰るだけなのだが、せっかく教会にきたのだから見学していきたいとお母様に言つと許可を貰えた。

お母様は友人とお茶をしてくるとのこと。

6歳児に一人歩きを許可するのもアレだが都合が良いのでスル―する。

トレーニングを兼ねハクを抱きながら教会の周囲を歩く。

さすがに生き物抱えて聖堂内部に入るつもりはない。

ある程度の常識は弁えている……つもりだ。

聖堂の裏側に行くと屋外修練場らしきものがあつた。

時間的に誰もいなかった……いや、誰がいる。

小さい子供だ。

年は自分と同じくらいだろう。

そんな子供が装飾剣のようなもので素振り……いや型らしきものをやっている。

「……うわぁ」

ついつい声が漏れてしまう。

到底子供とは思えないほどキレイな型だった。

中には少々ぎこちない動作も感じられるが、それを補ってなお魅せる何かを感じる。

とさっきの声でこちらに気づいたようで型を中断した。

そしてこちらを振り向く「誰だお前は？」

「いや、あなたこそ誰よ？」

そう返した私は悪くないと思う。

自分から名乗った上で尋ねるのが常識だと思います。

「ふん！なら別にいい。邪魔だからさっさと立ち去れ」

「ここは公共の場……とまでは言わないけれど、あなたの許可をもらうような場所ではないでしょ？」

ちよつとからかってみたくなったのでそう返答すると……

「そうだな……」

と言……

「目ざわりなんだよ……僕の目の前から……消えろ！」

斬りかかってきやがった！

いや寸止めで脅しのつもりだろうか……

寸止めなら何もしない方がいい？

受ける？ それとも避ける？

てゆーか短気すぎだろ！？

今日の夕食はなんだろう？

瞬時に思考がマルチタスクに切り替わる。

一部おかしいが気にしない。

寸止め？ 本当に？

ハクを抱いているのに避けられるか？

誰かに似ているなこいつ……

昨日はシチュー（らしきもの）だったなあ

左上方より首筋めがけて装飾剣が迫る！

無理！ 受け止める！

左手を使つて受ける！ ハクはそのまま右手で支える！

イメージしろ！ この一撃を受けられるイメージを！

あつ今日は外食だって言つてたっけ

この間わずか0.1秒。マルチタスクまじパネエ！

キイイイイイン！！

「なっ！？」

短気な子供の驚いた声が聞こえた。

向こうは寸止めするつもりだったが、不意打ちの一撃を受けられたのだ。

左手から展開した魔力刃によって。

受け止めるイメージが盾じゃなく剣だったためこうなった。

止められてよかったあああ！

攻撃は最大の防御おおおおおおお！！

とまでは言わないが、防御するくらいなら回避か攻撃の方が性にあつてる。

形状はあれだ。

薬味な断罪の剣。

もちろん相転移な力はない。

なんちゃって断罪の剣だ。

イメージだけで再現できるとは……マジリリカル！

妄想乙！

左手を振り払う。

「くっ！」

短気な子供がよろける。

私は魔力刃（なんちゃって断罪の剣）を消しながら短気な子供に言った。

内心は超ビックビックだけどね！

「手荒いご挨拶痛み入ります。」

皮肉を込めて言い放つ。

「受け止めておいてよく言う……」

忌々しげに短気な子供が呟く。

「では自己紹介でもしましょうか？ 私はアペリス・ウラノ。この子はハクと言います。さてあなたのお名前はなんというのですか？」

お前絶対に6歳児じゃねえだろ！

と外野からツツコミがありそうだが無視して、丁寧に自分の紹介をしてから相手に尋ねる。

これが一般的に相手の名前を尋ねる態度なのだよ！ わかったか短気な子供よ！

「……失礼した。確かにそうだな」

反省したような自分の非を認めるセリフなのにどこか高圧的に感じる。

そもそも睨んでるし！

「ふんっ。僕はエミリオ・G・カトレットだ。覚えたらさっさと用を済ませて立ち去れ」

なんですと？

黒髪だ……装飾剣も良くみるとアレに似ている。

おまけにツンデレ（現在デレなし）な感じがする。

ついつい凝視していると……

「……まだ何かあるのか？」

そう言ってにらみ返してk【きっと坊ちゃん的美貌に慄いているんですよ！】

いきなり陽気な声が装飾剣から聞こえてきた。

「シャル！ お前、また……！」

【いやあ〜でも中々やりますね！ 坊ちゃんの一撃を受け止められるなんてスゴイですよ！】

なんか褒められた。

でもはつきり言って偶然てゆーか奇跡というか……

【あつ僕は坊ちゃんのデバイスでシャルティエといいます！】

「シャル！ お前の自己紹介などいらん！」

【ええゝひどいですよ坊ちゃん！ 横暴です！ 出番下さいよお！】

二人（？）のやりとりは続いている。

言い方はあれだが仲は良さそうだが……

エミリオにシャルティエ……

……これなんてデスティニー？

この日、幼児は運命に出会った。

ちなみの今回の空気はハクだった。

ピロリン！

【なんちゃって断罪の剣】を習得しました！

ピロリン！

【ポーカーフェイス】を習得しました！

## 序章6 心友に出会う幼児

咄然として二人（？）のやりとりを眺めること30秒ほど……

エミリオがようやく気付いたようで

「なんてアホ面をしている？ 用がないならさっさと行け」

【坊ちゃん！ ダメですよそんな言い方！ お友達できませんよ！】

「黙ってるシャル！ そもそもそんなものはいない！」

そうとう捻くれた性格のようだ。

「えーっと、エミリオ君にシャルティエ……さん？」

「気安く呼ぶな！」

【もう坊ちゃんったら！ あっ僕のこととはシャルティエと呼び捨てで結構ですよ】

「シャル！」

なんといつ凸凹コンビ……

「えーあーさつきも言ったけど、私はアペリス。愛称はリース。まあ好きに呼んでもらって構わないけど、一応『男』だから……」

「……」

【……】

「きゅっ」

ハクが空気を読んでくれた。

こいつら勘違いしてやがったな。

「……一応聞いておくが「親の趣味です」……そうか」

ん？ エミリオの剣呑な雰囲気はなくなった？

なんか憐みというか同情というかそんな目をしている気がする。

そんなエミリオの心情を代弁するようにシャルティエが

【いやゝまさか坊ちゃんと同じ境遇の人に出会え……】

それ以上は続かなかった。

エミリオがシャルティエを投げ捨てたからだ。

【坊ちゃああああああん！】

宙を舞いながら叫ぶデバイス。

正直ウルサイ。

とりあえずエミリオの態度とシャルティエのセリフから推測した

結果をエミリオに尋ねてみる。

「あの……あなたも「言うな！」……えっとごめん」

「「……………」」

「きゅっ？」

相変わらず空気を読む相棒だ。

が気まずい空気だ。

「あの……あなたはどやって……」

逃れたの？

気まずいのでそう聞いてみると

「……騎士になると、そうやって聖王教会で騎士をしている叔父夫婦の家に……」

「そっ、そうなの」

「ああ……」

また重々しい空気が流れる。

「きゅっうう……zzz」

空気を読んでくれる相棒も飽きて寝てしまったらしい。

「「……………」」

そんな空気を切り裂くように……

【ひどいじゃないですか坊ちゃん！ いきなり投げるなんて！ せつかく……ってまたああああああ】

飛んで来て飛んで逝った。

シャル乙！

「さっきのアレ……お前は剣か格闘技でもやっているのか？ いや、そんな動きではなかったか……」

今度はエミリオが訪ねてきた。

いやあわかる人にはわかるもんなんだね。

「うっん、まだ特にやってないんだ。毎日ランニングとか柔軟の基礎はやってるんだけど……あつ魔力制御の練習もしてるんだけどね」

すなおにそう答える。

それを聞いてエミリオは驚いた表情をした後、下を向きぼそぼそと呟く。

「……そんな素人に受け止められたのか」

お前はそんな素人に（寸止めとはいえ）切りかかったんだよ。

と心の中でツッコミを入れておく。

つとようやくエミリオが顔をあげて

「ふん……悪かったな。僕は平日のこの時間は大抵ここで練習している。来るなら勝手にしろ」

「えっと、その……」

「来るのは良いが僕の邪魔はするなよ！」

デレ……た？

「あつ、ありが……とう？」

「ふんっ！」

そう言つてエミリオは後ろを向いた。

そしてシャルティエの方に歩き出しながらこう続けた。

「……話くらいは聞いてやる」

なんかフラグがたつたらしい。

エミリオはそのままシャルティエを取りに行く。

そして……

【うおおおお！　とうとう坊ちゃんにお友達ぐあああああああ  
あああ】

シャルティエが星になった。

ムチャしやがって……

まあそんなこんなで、どうやら私にも友人（という名の被害者盟友）ができたらしい。

エミリオも行ってしまったので私も戻ることにする。

けっこう時間をくったようだ。

まあ出会いがあつたから良しとしよう。

しかしエミリオの剣（注：シャルティエではない）は本当にキレイだった。

てゆうかエミリオ何歳よ？

良くも悪くも同世代の子供の対応じゃねえよ。

きつと相当苦労してきたのだろう。

苦労は人を育てると言っし。

私も体力作りだけではなく、そろそろ本格的に格闘技でも始めようか。

ついでにハクも鍛えるか。

そんな事を考えながらお母様のところに向う。

こころなしか軽やかな足取りで……

その日の夕食はコンビニ弁当だった。

さすがにペットと一緒にじゃあ空気と化してもいてもダメだった……

ピロリン！

【甲種準一級フラグ建築士】の称号を得ました！

## 序章 7 修行を始める幼児

### 【甲種準一級フラグ建築士】

説明：ツンデレをデレさせフラグを立てた者の称号

条件：初めてツンデレをデレさせた

効果：主人公補正 → 一般常識 ← ←

備考：油断すると乙種（死亡フラグ）になるかも……

ピロリン！

主人公補正が付きました！

おきのどくですが一般常識がなくなっていました！

これもか！

エミリオに会うため、翌日にまた聖王教会本部に向う。

教会までは定期便が出ており、友達ができたので会ってくるとお母様に伝え、定期券と1人で行く許可を貰った。

お母様も会ってみたいと言っていたが、エミリオのトラウマを挟らないためにも連れていけない方がいいだろうと思い、もっと仲良

くなつてからと言つておく。

残念そうだったがなんとか納得してもらえた。

エミリオの危機を未然に防ぐことができたようだ。

ハクを連れて教会裏手の屋外修練場に向かうとちょうど休憩中のエミリオがいた。

「こんにちはエミリオ君、シャルティエ」

「ふんっ……エミリオで良い」

【こんにちはリースさん！ いやあ坊ちゃんにも……ってまだ何も言つてないじゃないですかあああああああああ】

シャルティエが空を舞う。

「不用意な発言をしようとするからだ」

いや早すぎるでしょ？

まあ昨日の言動を見るに言おうとしていたことは推測できるが……

「ところで昨日もいたが足元の生き物はなんだ？」

どうやらハクが気になる様子。

うん、なんか見た目よくわからない生き物だもんね。

「昨日もいったけどこの子はハクって言って、旅行先の管理世界で出会って飼うことになった……ドラゴン？」

「きゅー？」

「自分で言うておいて疑問形で返すな……要はペットということか」

「まあ概ねそんなとこだね」

進化するとペットの範疇ではないと思うが……

こっちからも気になってたことを訊くことにする。

「エミリオっていくつなの？私は6歳なんだけど……」

「僕もお前と同じだ」

どうやらエミリオは同い年のようだ。

絶対に態度とか言動とか6じゃないよね。

そんな怪訝そうな顔をしていると……

「必死に抗って生きてきたからな……」

「ゴメン……」

もう既に修羅の道を歩んできたようだ。

もうひとつ気になっていたことを訊いてみることにする。

「エミリオの型って凄いキレイだね。どんな人に習ってるの？」

そう、この年齢であれほどなのだ。

もちろんエミリオ本人の才能の割合も大きいだろうが……

「それは……【よくぞ訊いてくれました！ 坊ちゃんの師匠はこの僕！ ピエール・ド・シャルってまたああああああああ……はあ……はあ……】」

良く飛ぶデバイスだ。

「デバイスが師匠なの？」

そう訊ねてみるとエミリオが教えてくれた。

シャルティエは古代ベルカ諸王時代に生きた騎士、ピエール・ド・シャルティエの記憶・人格を入れたインテリジェントデバイスらしい。

正確には当時はソーディアンと呼ばれる試作機だったらしい。

そもそも古代ベルカなのにインテリ型っておかしいしね……

うん、ですていにくだ。

休憩後エミリオはまた型の練習に入った。

邪魔するなと言われているので、少し離れたところで自分たちの修行を始めることにする。

この修練場は受付に言えば基本的に誰でも使用可能らしい。

平日のこの時間は業務のためか人はいないが……

「じゃあいくよハク！ちゃんと避けるんだよ！」

「きゅう！」

伝わったのだろうか？　心なしに戦闘態勢に見えなくもないが…  
まあいいか。

野球ボールサイズのスフィアを3つほど作成する。

「Go！」

そのスフィアをハクに向け撃つ！

「きゅっ！　きゅうきゅっ！」

そしてハクがそれをかわしつつける。

プチ弾幕ごっこだ！

スフィアは誘導弾で制御の修練も兼ねている。

3つだけだと修行にはならないので徐々に数を増やしていく。

自分意思で完璧に操作できるのは7つまでなのでそれ以上は増やさない。

今度はスピードを上げていく。その次は動きを複雑にしていく。

またスフィアの一部はハクになるべく当てないようにも操作して

いる。

そうやってハクと自分の修行をしていく……

ボンツ！！

「きゅきゅう……」

あっぴちゅった。

さすがにまだ生まれて数日もんね……

ハクは一応覚えていた治癒魔法をかけて寝かしておく。

ハクが寝ている間は魔力刃の制御練習だ。

左手でなんちゃって断罪の剣を発動する。

それを維持しながらエミリオの型を真似て振るってみる。

「んっ、気を抜くと消えそうになるかも……」

まだまだ修練が必要だ。

また、大きさや形状もイメージして変えてみる。

多少大きくなったり細くなったりする程度だった。

どうやら基本形からはあまり変えられないみたいだ。

「きゅー？」

さて、ハクが起きたようなので第2ラウンドを開始することにし  
よう……

ピロリンー！

【初めての弾幕じっこ】の称号を得ました！

## 序章8〜水晶の謎にせまる幼児

### 【初めての弾幕ごっこ】

説明：初めて弾幕ごっこをした者の称号

条件：初めて弾幕ごっこを実践した

効果：集中力→回避力→忍耐力→妄想力→→一般常識←←

備考：very easyです

ピロリン！

集中力、回避力、忍耐力が若干上がりました！

妄想力がぐいーんと上がりました！

おきのどくですが一般常識がなくなってしまいました！

もついいよ……

再びハクがピチュツたので今日はここまでにする。

また治癒魔法をかけて寝かしておく。

エミリオも今日はもう終わりにするようで、型をやめてスポーツ

ドリンクを飲んで休んでいた。

一応帰りの挨拶をするため、寝ているハクを抱き抱えエミリオの方に向う。

「お疲れ様エミリオ。私も今日はもう帰ることにするよ。また明日も良いかな？」

「ふんつ。勝手にしろ。ここは公共の場なのだろう？」

素直じゃないな。さすがツンデレ剣士、口には出さないが……

「あつそうだ！　ねえエミリオこれってなんだかわかる？」

この間GETさせられた【謎の水晶（母の愛）】を見せてみる。

うちの両親もこれがなんなのかわからなかった。

無限書庫にでも行って調べようとも思っていたが、司書の資格がないと使用手続きが面倒なので、それは最終手段にしておく。

まあ早いうちに資格は取っておく予定だが。

「なんだコレは？　見た感じは水晶のようだが……シャルわかるか？」

【ええ、なんですかあ？　営業時間は終わりましたよあー】

シャルティエはなんかやさぐれていた。

剣なのに飛んではっかりだもんね。

「いいからどうなんだ？ 知っているのか？ それともお前は僕の話を理解すらできないポンコツキ。ガイドバイスなのか？」

エミリオひでえ……

まあシャルティエは自業自得だが。

【……泣いてもいいですか？】

「泣けるならな、ただし音は出すなよ」

擬音表現すら許されなかったようだ。

【・・・・・（つ、）・・・・・】

器用な剣だな……

閑話休題

「えーっとコレなんですけどシャルティエわかる？」

【ん〜どれどれ……ってこれエレメンタルスフィアじゃないですか！?】

「ほう、知っているのかシャル?」

「シャルティエ、エレメンタルスフィアってなんなの?」

どうやらシャルティエは知っているようだ。

てかエレメンタルスフィアってなんぞよ?

【簡単に言ってしまうえば魔力ブースト効果のある天然の水晶なんです……】

えっ魔力ブースト?それだけ?

【このエレメンタルスフィアは魔力ブーストと魔力を自然エネルギーに変換する能力があるんです】

「自然エネルギーに変換できるってことは、炎熱とか電気とか魔力変換資質持ちと似たようなことができるってこと?」

それなんてチート?

【理論上はそうですね。コレをデバイスのコアにするとあるいは……】

厨二まっしぐらやん!!

すると何やら考えていたエミリオが

「シャル、それほどのものならばロストログア……とまではいかないが個人持ちは厳しいじゃないのか？」

そう！ 確かにそんなもん研究とか利用とかできれば戦略兵器で  
きるんじゃないの？

と思ったのだが

【いえ、確かにすごく稀少なんです、研究に成功した例がなく、  
あくまで理論上に過ぎないので、そこまで重要視されていないんで  
すよ。一説では水晶自体が意思を持っていて持ち主を選ぶとか……】

どうやら持っけていても大丈夫のようだ。

【教会にもサンプルがありますしね】

「そっか。ちょっと残念だね。まあわかっただけでも良しとします  
か」

まあわかっただけでも僥倖だ。

「んっ、ありがとうエミリオ、シャルティエ」

【どういたしましてえ〜】

「ふんっ、もしそれでデバイスを作る気があるなら言え。僕の父は  
考古学者兼デバイスマイスターをしている。まあ水晶をダメにする  
可能性の方が高いかもしれんがな」

「そうなの？ デバイスは欲しいけどタダじゃないから親と相談するね」

やっぱりデバイスは欲しいもんね。

「うん、改めてありがとうエミリオ、じゃまた明日ね！」

「ふんっ、勝手にしろ……」

はいはいツンデレツンデレ。

【いやあ〜坊ちゃんも……ってまだ何も言っていないじゃあなあいでえすかああああ！】

シャルティエは再び星に帰った。

君のうっかりスキルがダメなんだよ……

未だ寝ている空気を抱えて帰路につく。

うん、充実した1日だった。

帰ったらデバイスの話をするにしよう……

プロローン…！

【謎の水晶（母の愛）】が【エレメンタルスフィア】に更新されま  
した！

## 序章 9 ～ デバイスを作る幼児

家に帰って早速お母様に水晶のこと<sup>エレメンタルスフィア</sup>を話してデバイスの件を伝える。

二つ返事でOKがもらえた。

うん、もう少し悩んで欲しかった。

まあせっかく許可が下りたのだからデバイスを作ってもらうことにしよう。

翌日も聖王協会本部に行き、エミリオにデバイスの件を伝えた。

「ふんっ、まあいいだろう。明日紹介してやる」

【もう坊ちゃんったら！ 頼りにされてうれs…ってまたああああああああ！】

ほんとに良く飛ぶデバイスだ。

さて今日も昨日に引き続き修行をすることにする……

その翌日、エミリオに会いに行くと

「ふんっ、案内してやるからついてこい」

練習をやめて案内してくれた。

シャルティエが言いかけたとおり頼りにされるのが嬉しいのだろうか？

てゆーか「ふんっ」から始まるのがクセなのか？

エミリオが案内してくれたのは教会本部の一室だった。

どうやら来賓控え室のような場所らしい。

「エミリオです。昨日お話しました件について参りました」

きちんとノックして丁寧に目的を述べてから入室する。

実の父親に対する態度じゃないなあとは思ったが他人の家庭事情まで首はつっこまない。

てゆーかエミリオお前さ、目上にはきちんと対応できるのね。

こっちには最初斬りかかってきたクセに……

エミリオの後について入室すると、学者風だがダンディーなおじ様がおりました。

「やあ、君がアペリス君か。私はエミリオの父でヒューゴという。よろしく頼むよ」

ヒューゴさんキタ

(。 。 )

!!

さすがにミクトランは……いないよね。

「初めましてアペリスといいます。今日はわざわざお越しいただいてありがとうございます」

挨拶はきちんとせねばな。

「早速で申し訳ないがエレメンタルスフィアを見せてもらえないだろうか？」

やはり学者として興味があるのだろうか？

とりあえず渡すことにする。

ヒューゴさんはしばらくそれを眺めながら何かを考えているようだ。

「その水晶でデバイス作りは可能なのでしょうか？」

エミリオがヒューゴに尋ねてくれた。

これでできなかったら無駄足だもんね。

「うむ。ブースト型デバイスとしては問題ないだろう」

おお！　どうやらデバイス作成は可能らしい。

が、ヒューゴは「だが」と続ける。

「自然エネルギーの変換まではできるかわからない。あれにはまだまだ説明されていないことばかりだからな」

厨二は先送りのようだ。

「君さえよければ早速デバイス製作にとりかかるが、どうするかね？」

「是非お願いします」

迷うことはないのでそう答える。

「では製作にとりかかるとしようか。ふむ、時間は1週間といったところか。できあがったらエミリオに伝えることにするから今日はもうおひらきしよう」

何か嬉々としている感じがする。

根っから学者、研究者体質なのか？

まあ何はともあれ1週間後が楽しみだ。

さて完成までの1週間だが相変わらずの修行だ。

ハクの回避も上達している。

しかも反撃の『でんじは』らしきものを撃ってきた。

もしかしてレベルが上がったのだろうか？

ちなみにシャルティエは相変わらず空を飛んでいた。

そんなこんなで1週間、ついにデバイスが完成したらしい。

今回はヒューゴさんが修練場に来てくれた。

試しに使用させながら説明するらしい。

「うむ、これが完成した君のデバイスだ」

そういつて以前とあまり変化ない水晶を渡された。

いや紐というかチェーンというかネックレス型にはなっているのだが……

「水晶自体は加工できないので形はそのままだが、きちんとしたデバイスになっているので安心したまえ」

と補足してくれた。

「名前とかは決まっていますか？」

DQNネームだったらいくら高性能でも使いたくはないからな。

「いや、君が決めてくれたまえ」

「わかりました。ちなみこのデバイスの特徴は……」

名前を決める上で重要なことだと思い訪ねてみると……

「うむ！よくぞ聞いてくれた！ このデバイスは基本的にはブースト型デバイスで補助魔法に適しているが、それだけではないのだ！

なんと！ なんと！ なああんと！！ 一部ではあるが自然エネルギー変換の力を使用することができるのだあああああつごほつごほつ……」

キャラ崩壊しました。

そつとエミリオの方を見ると、目を逸らされた。

どうやら父親にも苦労しているらしい。

てゆうか自然エネルギー変換できるの？

厨二まっしぐら決定ですか。

とりあえず訪ねてみることにすると

「一部と言っても直接的魔力を炎や電気にできるわけではないのだ。エレメンタルファイアはそれぞれ特徴があるようで、この場合は大気中の『水分』と『温度』を操ることができるのだよ」

大気中の『水分』と『温度』？ それって範囲を大きくすれば『天候』を操れるってことじゃないの？

確かハクリューの図鑑では天気を操れるとか書いてあったような…

「うむ！ 天候とまではいかないが凍結や電気の魔力変換に近いことができるだろう」

どうやら厨二デバイスを手に入れてしまったらしい……

ピロリン！

【エレメンタルスファイア】が【厨二デバイス】に更新されました！

ピロリン！

【魔法使い始めました】の称号を得ました！

## 序章10 ショッキングな出会いをする幼児

【魔法使い始めました】

説明：初めてデバイスを手に入れた者の称号

条件：初めてデバイスを手に入れた

効果：全ステータス→一般常識←←

備考：魔法使いの第一歩！さああなたも一緒にレッツ・リリカル♪

ピロリン！

全ステータスが少しだけ上がりました！

おきのどくですが一般常識がなくなっていました！

あきらめよう……

「さあ個体名称を登録して起動してみたまえ」

私の心情など知らずヒューゴさんは起動を急かす。

とりあえず起動してみるか……

「マスター認証 『アペリス・ウラノ』」

手順に乗っ取って起動していく。

「正式名称…… 『セイクリッド・スカイ』」

なぜかその名が頭に浮かんだのだから仕方ない。

略して『セカイ』…自分で言うておいて後悔した。

どっかでヤンデレフラグを立ててしまったかもしれない……

【マスター『アペリス・ウラノ』デバイス名『セイクリッド・スカイ』登録完了しました】

登録されてしまったようだ。

うん、強く生きよう……

「セイクリッド・スカイ！ セット・アアアップ！！」

ヤケクソだ。

どうとでもなれ。

【セイクリッド・スカイ起動します。バリアジャケットのイメージをお願いします】

デバイスに冷静に返された。

……悲しくなんてないんだからね！

しかしバリアジャケットかあ…選択肢をミスると終わりかも……

6歳児にはアレだが、無難に制服型にしておこうか。

「よし！ 改めてセクト・アップー！」

一瞬だが光に包まれる。

光が収まった後に自分の姿を確認してみる。

「うん、イメージ通り？」

イメージしたのはとりあえず白い制服系統の格好だ。

髪は邪魔になるので後ろで括っている。

でもこれは…この姿は誰かに似ているような……

なんか僕っ子で男装ヒロインのような……髪も眼も……ぶっちょ  
けシャル……

いや、気のせいだ。

気にしたら負けなんだ……

無事起動を終えたところでヒューゴさんが試してほしい術式があるとのことなので早速試してみる。

「セイクリッド・スカイ！ 試験魔法1発動！」

多少長くても『セカイ』とは呼ぶものか！

【拝承。試験魔法1発動します。ターゲットを選択して下さい】

ん？ ターゲット選択？

疑問に思っているとヒューゴさんがターゲットを指定。

サンドバックらしきものを狙う。

【試験魔法1発動】

うおっと、ごっそり魔力を持っていかれた感じだ！

その一瞬だが目を逸らしてしまったため、改めてサンドバックを確認すると……

「……コレなんてぜったいれいど？」

サンドバック周辺が完璧に凍りついていた。

辛うじて砕けてはいなかったからEFBではないだろう。

「うおおおおおおお！！ 成功したああああ！！ 私の理論はミッドーiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiごほごほ！！」

ヒューゴさんがスゴイことになってる。



集まってきた人が帰っていく中で1人だけ頭を抱えながらこちらに向ってくる女性がいる。

纏っている空気が……表現できないくらい淀んでいる。

「……またですか……またあなたなんですねジルクリスト博士……」  
逃げてほうが良いのだろうが魔力の枯渇からくる疲労感で動けそうにない。

「H A H A H A H A H A……んっ？ グラシア嬢ではないk……」

それ以上の言葉は発言すら許されなかったようだ。

見事なスカイアッパーだったとだけ言っておこう。

「また修練場を破壊して……」

修練場の破壊も複数回やっているらしい。

「あら？ あなたは？」

ヒューゴさんを華麗に葬った後、こちらに気付いたらしく訪ねてくる。

とりあえず事の顛末を話す。

話している内に纏っている空気がヤヴァくなってきた。

「……………」

美人の無言つてすごく怖い……

「えつと……お、お姉さん？」

「……いいのよ。悪いのは全部このオッサンだから……ベル力が滅んだのもミッドに月がふたつあるのも管理局が黒いのも全部このオッサンのせいなんだからああああああ！！」

スケールでけえよ！

てゆーかメタな発言しないで！

「はあはあはあ……取り乱してごめんなさいね」

一通り叫んで落ち着いたようだ。

「あのーあなたは？」

こちらの説明はしたが相手の話は聞いていなかった。

そつえばさつきヒューゴさんが……

「ああ！ごめんなさい！自分の自己紹介を忘れていたわね。私は聖王教会 教会騎士団所属カリム・グラシアよ」

うつわああお！

あの年齢不詳で預言持ち、聖王教会と管理局を股にかけるお姉さ

まですよ！

ここにきて初めて原作キャラと（物理的にショッキングですが）  
出会いました……

ちなみにエミリオ、お前こうなることがわかってただろ……

エミリオには後で復讐することにしよう。

ピロリン！

【厨二デバイス】が【セイクリッド・スカイ】に更新されました！

ピロリン！

【オリ主候補生】の称号を得ました！

ピロリン！

【なんちゃってぜったいれいど】を習得しました！

ピロリン！

【なんちゃってインディグネーション】を習得しました！

## 序章 11 えびろーぐ

### 【オリ主候補生】

説明：初めて原作キャラとの接点を持った者に与えられる称号

条件：初めて原作キャラに遭遇した

効果：全ステータス→→ フラグ率→→ 一般常識←←←

備考：オリーシュとは別物です

ピロリン！

全ステータスとフラグ率がやたらと上がりました！

一般常識？なにそれおいしいの？

＼（＾Ｏ＾）／

「ふふっ、お味はいかがかしら？」

「とてもおいしいですカリムさん」

「まあ悪くはないな……」

現在カリムさんの執務室でエミリオを含め3人でお茶しています。

ヒューゴさんは目覚めた後、再びスカイアッパーからの空中コンボで沈みました。

惚れ惚れしそうなコンボでした。

気絶した（正確にはさせられた）ヒューゴさんはシスターに引きずられ運ばれていった。

その後、彼の行方を知る者は誰もいなかった……

冗談はさておき、カリムさんがお詫び（？）にお茶でもどうかと言ってきたのでエミリオを連れ戻し、ハクを噴水に入れてからここにやってきて今に至る。

さすがに生き物を連れて聖堂内部には入らないよ？

まだ残っている（と思われる）常識的にね。

（注：ミッドでは自分の所有敷地外でのペットの放置は基本的にダメです）

ちなみにカリムさんとエミリオは知り合いらしい。

とゆうよりヒューゴさんのせいで互いに苦勞しているらしい。

うん、ドンマイ。

ところでカリムさんは何歳なのだろう……？

思い切って訪ねてみようとする<sup>と</sup>凄<sup>い</sup>悪寒<sup>が</sup>した。

どう尋ねてもデッドエンドしか見えてこない。

世の中には触れてはいけない法則<sup>おきて</sup>があるようだ……

穏やかな雰囲気でお茶会をしているとカリムさんが切り出してきた。

「エミリオ君のことは（被害者盟友のため）知っているのだけど、君のことも聞いていいかな？」

まあ事の顛末くらいしか説明してないからな。

「あつはい！ 私はアペリス・ウラノと言います。年はエミリオを同じく6歳です」

「ウラノ？　もしかしてウラノ卿のご子息……は男の子「私は男ですが」……そうなの！？　ごめんなさいね。ちなみに「母の趣味です」……そっ、そうなの……」

カリムさんがそつと目を逸らす。

「……あなたもエミリオ君と同様に苦勞しているのね」

何が、とは言わないが伝わってきた。

悲しくなんてないんだから……

その後は他愛もない将来についてとかの話をした。

エミリオは騎士になると言っただけで家出しているので騎士を目指すとのこと。

ただし、魔法学院に通うつもりらしい。

すぐに騎士を目指し修行するものだと思っていたからビックリした。

なんでも学歴もあつた方が今後のためだと言っていた。

まあ10歳から管理局勤めとかはアレだね。

もし再就職とかする場合は、行先あるんだろうか？

まあ中卒もどうかと思うけどミッドの教育って水準高いしね。

ちなみに私も来年からSt・ヒルデ魔法学院に通う予定である。

エミリオにそのことを伝えたと

「ふんっ、どうでもいいが僕の邪魔だけはするなよ」

はいはいツンデレツンデレ。

カリムさんはそれを微笑ましそうに見ている。

そして爆弾を落とす。

「よかつたゝ2人とも教会系列で。大変なことはみんなで頑張らないとねえ」

「……………」

どうやら逃げ道はないようだ……

さて、入学まであと半年ほど。

それまでは修行と勉強に時間を費やすことにする。

平日は聖王教会本部の修練場で修行。

時折エミリオと試合もしている。

もちろんボロ負け。

素人が勝てるわけありません。

そんなわけで私もシャルティエに剣を教えてもらっ

正直才能は微妙とのこと。

何をやっても『なんちゃって』になってしまう。

できないのではない。できるけどそこそこなのだ。

相当器用貧乏らしい。

RPGなら最初から2軍確定だろう。

でもめげない！　だって男の子だもん！

それと並行してハクの修行も行っている。

この修行だと努力値は体力と素早さだけだな……

ハクも成長しているらしく脱皮して一回り大きくなりやがった。

皮は気持ち悪かったがな……

ついでに反撃の衝撃波『りゅうのいかり』も使ってくるようになった。

いずれは『はかいこうせん』まで使えるのだろうか……？

ハクの将来が怖くなった。

逆に休日は勉強三昧だ。

ランニングと柔軟だけであとは体を休め勉強に励む。

目下の目的は『無限書庫司書』の資格取得。

あそこが自由に使用できればいろんな幅が広がるハズだ。

ちなみに『セイクリッド・スカイ』の調整はヒューゴさんが行ってくれている。

なんでもエレメンタルスフィアの自然エネルギー変換が実用できたのは初めてだったので、研究ついでだが調整してくれるとのこと。

そのため、開発費及び調整費はタダである。

が、いつも通り騒ぎを起こし、カリムさんに肅清されている。

うん、これもまた日常の1ページだ……

【KY（偽）】を習得しました！

## 主人公設定（序章終了時点）（前書き）

一応書いておきました。

大きな章が終わった時点でまた上げていきます。

## 主人公設定（序章終了時点）

主人公設定（序章終了時点）

名前       ：アペリス・ウラノ

性別       ：男

生年月日：新暦63年

出身地    ：ベルカ自治領

容姿       ：腰まで届く金髪、アメジストの瞳

家族構成：父（父さん）と母（お母様）の3人暮らし

魔力資質：先天的AAランク

才能       ：器用貧乏

備考       ：ハク（ミニリユウ）を拾いました

原作知識：アニメ版Strikersまで、Vivid&amp;F  
orceは知らない

称号（詳しい内容は各本編冒頭で）

【かけだしトレーナー】

【甲種準一級フラグ建築士】

【初めての弾幕ごっこ】

【魔法使い始めました】

【オリ主候補生】

スキルっぽいモノ  
技能

【マルチタスク（4分割超高速思考）】

・読んで字の如く並列超高速思考

【なんちゃって断罪の剣】

・ぶつちやけただの魔力刃

【ポーカーフェイス】

・ただのハッター

【なんちゃってぜったいれいど】

・試験魔法1

【なんちゃってインディグネーション】

・試験魔法2

【KY（偽）】

・場の空気を読み、（死亡フラグを）危険予知できる……かもしれない

デバイス

【セイクリッド・スカイ】

種類　　：ブーストデバイス（AIは搭載していない）

待機形状：レイハさんと一緒

戦闘形状：なし、バリアジャケットは白い制服系統をイメージ

所有能力：大気中の『水分』と『温度』を操作できる（らしい）

使用魔法：『試験魔法1』『試験魔法2』

## 学院編1〜プロローグ

### 入学式

それは学び舎に通う者が最初に通る洗礼。

新しい生活に小さな不安と大きな希望を持って臨む式典。

一般的にはね！

私たちにとっては入学式とは『親バカ』という人種にとって恰好の餌食だと言える。

始まりは入学式の1週間前に遡る……

今日も今日とて聖王教会本部の修練場で修行を終えたところ、『セイクリッド・スカイ』の調整でいつも通りハメを外したヒューゴさんを華麗な空中コンボで沈めたカリムさんが、お茶でもどうかと誘ってくれたのだ。

とりあえずホイホイとカリムさんの後に続く。

ちなみにエミリオも一緒だ。

でも何故かエミリオの表情は暗い。

父親がアレだからかとも思ったが、正直ソレは今更だ。

エミリオからは「あと1週間……時間がない……」とか聞こえてくる。

ホントどうしたんだろ？

ちなみにハクは噴水に投げ込んできた。

シャルティエも一緒に投げ込まれていた。

今日のエミリオにシャルティエの軽口は通じなかったようだ…

シャル乙！

カリムさんの部屋につき、お茶をいただく。

うん、今日もていすていゝだ。

そしてカリムさんがお茶を一口飲んでカップを置き……

「それでは1週間後に迫ったSt・ヒルデ魔法学院入学式における

ジルクリスト博士（+α）対策会議に入ります」

カリムさんは某ネ。フの司令のように腕を組み真剣の表情でそう言った。

なんですと？

そんな表情でカリムさんを見返すと

「あのジルクリスト博士が息子の入学式という大イベント（という名の餌）に喰いつかないハズがありません！！」

いやつまあ……うん。

正直あの人は絶対何かやらかすだろう。

対策が必要なのはわかるが私を巻きこまないでほしい。

「あのー私は「ああ！ アペリス君に渡すものがあるのよ！ ちよつと待っててね！」関係な……」

先手必勝、喋らせて貰えなかった。

するとカリムさんがどつかから段ボールを持ってきた。

「さあ開けてみてね」

有無を言わせない迫力を感じました。

とりあえず開けてみた

中身を見ると、St・ヒルデ魔法学院初等科の制服（男Ver）だった。

なんで？ 制服は既にお母様が注文しているハズなのに……

そこまで考えていると

「あなたは制服の試着はしたかしら？」

「……えっ？」

「お母様が全部準備してくれたんじゃないかな？」

「……………」

「ちゃんと半ズボン、ネクタイ……だったのかな？」

「何でも協力させていただきますカリムお姉さま!!」

「はい、素直でよろしい」

マジで関係ないから勝手にやってくれとか思ったりして申し訳ありませんでした！

ちなみにエミリオの横顔を覗き込んでみると……

『ざまあ!』って感じの笑みを浮かべていた。

こいつ！ デバイスの件でヒューゴさん紹介したのは絶対ワザと

だ！

エミリオを非難した目で見てやる。

「なんだ？ スカートで入学式に出たかったのか？」

言い返せない自分が悔しい。

大きな借りを作ってしまった以上、断ることはできない……

「異論はないようですね。それでは第1回入学式対策会議を開催します」

ないのではなく、言えないだけだが。

第1回親バカ対策会議が始まった。

そもそも（物理的に）出席させなきゃいいんじゃない？

開始1分で終了しました。

## 学院編2 少年は出会いをするようです

新暦69年春 St・ヒルデ魔法学院に無事入学することができた。

お母様が用意していた制服は案の定だったと言っておう。

当日に渡されたが、カリムさんに入学祝いにもらった（ことにした）制服で無事に入学式に出席できた。

半ズボンの制服を見てお母様は「なん…だと!？」と驚いていた。

そして、スカートじゃなくてもこの破壊力だと!？　これが男の娘か!？　と続けた。

更にスカウターがどうとかも言っていた。

うちのお母様はもうダメだ……

ヒューゴさん？

教会の一室で見事な氷像アイススタチュウになっています。

第1回会議で不穏分子は予防しておくことに限ると結論が出たからである。ウィルス

さすがに息子さんの（ある意味）一生に一度の晴れ舞台を見られないのは可哀そうなので、入学式の様子は録画しておいて後で見せてあげる予定だ。

エミリオはそれすらも拒否していたがな……

入学式も無事に終わったので各教室で簡単なホームルームがあるらしい。

保護者は別室で懇談会中。

ちなみにクラスはエミリオと一緒にだ。

ご都合主義という名のカリムさんの権力だ。ちから

戦力分散の愚は犯さないとのこと。

何に對してとは言わないが……

「ふんっ、僕に迷惑はかけるなよ」

主に迷惑をかけてるのは君の父親なんだけどね  
でも口には出さない。

「うん、まあこれからよろしくエミリオ」

「……ふん」

はいはいツンデレツン（ry

おや？ 担任がきたようだ。

「うむ、みな入学おめでとう。私は1年間このクラスの担当をするヴァン・グランツだ。主に担当する教科は初等科では音楽、中等科では古代ベルカ史だ。とりあえずは1年だがよろしく頼むぞ」

担任は先生<sup>せんせい</sup>じゃなく師匠<sup>せんせい</sup>だった。

その渋いヴォイスと老け顔の原因であるヒゲが音楽なんてトラウマもんだろ。

でもなんでだろう……このとんでも世界も慣れてきた。

「では軽くみなのお自己紹介をしておらおうか」

いきなりきました自己紹介。

でも何を言えばこの人的に満足するのだろうか？

「ヴァン師匠<sup>せんせい</sup>！ 質問です。どんなことを言えば良いのでしょうか？」

ちゃんと挙手してから発言する。

「ふむ、師匠<sup>せんせい</sup>か……良い響きだ。なに、自分の名前と一言言っておきたいことで良い。なんなら将来の夢などでも良いだろう。私も幼いころは……」

勝手に回想入りました。

ここで『若いころは』で始めなかったのは、老け顔なりの意地なのかもしれない。

そこまでまだ若いと主張したいならヒゲ剃ればいいのに……

師匠<sup>せんせい</sup>の回想も終わり前から順に自己紹介が始まる。

うん、1年生だとみんなかわいいね。

執務官とか艦長とか夢がいっぱいだ。

そんな空気に合わせ自分も無難なあいさつに努める。

エミリオはというと

「ふんっ、僕はエミリオ・カトレットだ。将来の目標は聖王教会騎士団に入ることだ。よろしく……」

それだけ言って座った。

GはどうしたGは？

そんなに名乗るのが嫌になったか？

順調に自己紹介が進み現在最後から2番目である自分の隣の子の紹介が……

「あたしはリタ・モルディオ。興味があるのはデバイスと魔導学だけだから、必要時以外は話しかけるんじゃないわよ。以上」

はい、関わらないことにします

だって厄介そうだもん。

エミリオと同じツンデレ臭がプンプンするのだ。

ちなみにそんな紹介のせいで最後の子がかわいそうだった。

「うむ、みな中々に夢を持っているではないか。夢に向け精進する  
ように。では連絡事項の書いたプリントを配るので前から……」

自己紹介を終えたので師匠<sup>せんせい</sup>が事務連絡をする。

リタの件はスルーしてやがる。

大人って汚いな……

そんなことを考えながら連絡を軽く聞き流し、明日からの学院生  
活に思いを馳せる。

窓の外は晴れ空が続いている。

「明日からも良い日々が続きますように」

うん、これくらいバチあたらないだろう。

「あんだ、それエレメンタルスフィア？ 珍しいもの持ってるわね？  
？しかもこれってデバイス！？ ちょっと見せなさいよ！」

ソッコーでバチがあたりました……

## 学院編3 まさかのエピソード

「なにこのムダな設計？ 全体出力の7割は損してるじゃない！？  
ありえないでしょ！？ てゆーかコレ作ったやつバカでしょ！？」

どうやらヒューゴさんはバカらしい。

「ありえない！ こんな希少なモノをムダ使いするなんて！！ あ  
りえない！！」

どうやらヒューゴさんはありえないらしい。

大事なことなので2回言っただろうだ。

うん、そこは同意します。

「こんなの見てられないわ！ 今すぐ最適化してやるわよ！」

じゃあ見るなよ、ついでにそんなこと頼んでいませんが。

そのまま風のように立ち去ってしまった。

……普通に窃盗じゃねえ？

明日には会えるだろうがこのまま帰るわけにもいかないのだからリタを追わねばならない。

が既に視界の範囲にはいない。

とりあえず師匠せんせいにリタについて尋ねてみる。

「ヴァン師匠せんせい、リタさんが私のデバイスに興味を持ったみたいでその……持ってちゃったんですけど……」

要は窃盗だ……

「ふむ、モルディオが……おそらく研究室に向ったのだろう」

「研究室……ですか？」

「うむ、モルディオは優秀だな。5歳で博士号を取っているのだ。それ故に研究室が与えられている」

まじパネエな!!

「すごいんですね。でもそれなら何で学院の初等科から……？」

まあ高等科でも物足りないだろうがな。

「うむ、まあこれ以上は言えぬが強制ではない……一応は本人の意思だ」

一応ね……まあいいけど。

とりあえず研究室を教えろやヒゲ。

「ここですか……」

学院の外れにある研究室棟。

その一角にリタの研究室があるらしい。

研究室棟に入りボードを確認。

どうやら一番奥らしいので向ってみる。

「……あつた。ここか」

扉には『無礼者は洗濯』と書いてある。

意味はわからないがとりあえず怖いのでノックしてからにする。

予想はしていたが返事はない。

さてどうするか……

いるはずなのにノックしても無反応…普通ならここで開けてみる  
ところだが『洗濯』という言葉が怖い。

1分ほど悩んでいたが、ここで立ち止まってもしょうがない  
ので勇気を振り絞る。

いざゆk「これが完全版よ！！ 天光満る処に我は在り……」

ありつたけの魔力を足に込め逃げました。

まさに疾風迅雷。

腕を顔の前でクロスし窓を突き破る。

2重の自動ドアでは間に合わないのだ。

だが窓は割れなかった。

実は強化ガラス仕様だったらしい。

「そんな……そんなバカな……！！」

絶望に打ちひしがれる。

自分でこのセリフを言うとは思わなかった……

そして世界は極光に包まれた。

# 【全治1年】

まさか入学式当日に学院生活が終わるとは思わなかったわ……

ちなみにデバイス出力の7割はリミッターだった模様。

後日ヒューゴさんがマジレスしてくれた。

それを聞いたリタは

「ふ、ふん！ そんなのわかってたわよ！！　そこに境界線が見えたら踏み越えるのが科学者でしょうが！！」

それはただの鬼畜マッドだ。

殴ってやろうにも腕が動かない。

全身ミイラ状態だ。

ちなみにリタも同じ状態だ。

「うん……アホでしょあなた」

口に出してしまったが反省も後悔もしない。

こっちは完全に被害者だ。

「ぐぐぐ……」

唸っているが完全にお前が加害者だからな。

しばらくは何もできそうにないようだ。

この際だ、入院中は読書魔法でも使いながら本を読み漁るか……

入院中は資格取得を目指して勉学に励むことにした。

動けるようになったらひらすらリハビリ。

時々エミリオも見舞いにきてリハビリに付き合ってくれた。

リタも罪悪感からか色々と魔導学について教えてくれた。

まあ同じ部屋のため仲良くはなれたと思う。

出会いはマジ最悪だったが……いや、絶対にいつまで経っても良い思い出にはならないだろう。

カリムさんも良く見舞いに来てくれたのだが基本的に愚痴ばかり。

対ヒューゴ戦線が一人脱落したためストレスがマツハのようだ。

予言で『自分の頭皮が……』という件が出てきたら、絶対にヒューゴさん消すねこの人。

んっ？ お母様はどうしたかって？

毎日世話してもらっていますよ。主に下の……ね。

嫌々やられるのもアレだが嬉々としてやらないで欲しい。

ハク？

エミリオに任せ修行を付けてもらっています。

そうでもない忘れ去られて、野生化という名の空気になってしまっからね。

なんでも最近『こうそくいどつ』を覚えたとか。

もっすぐ進化するのだろうか？

結局進化キャンセルってどうやるんだろう……

謎だ。Bボタンってスゴいな……

ピロリン！

【時を駆ける男（笑）】の称号を得ました！

ピロリン！

【なんちゃってインディグネーション】が【インディグネーション】

に更新されました！

ピロリン！

【基礎魔法一式】を習得しました！

リハビリ編――少年は原作事件に巻き込まれるようです（前書き）

どーにでもなれー

リハビリ編1〜少年は原作事件に巻き込まれるようです

【時を駆ける男（笑）】

説明：あのセリフでインディグされた者に与えられる称号

条件：あの迷セリフにてインディグされた

効果：全ステータス→ ネーミングセンス←←

備考：未来（明日）に向って戦略的撤退！

ピロリン！

全ステータスがやたらと上がりました！

おきのどくですがネーミングセンスが皆無になりました！

また、ご都合主義により時間経過を省けるようになりました！

\*・、・・\*。

—、\*。

。 —、\*。

もーどつにでも

なぐれ

+ (・・3・) \*。

、\*。、\*。つ \*。

、・+。\*・+。

。 \*。

、・+。\*。

あのインディグ（ry）から8か月がたった。

現在は退院しており自宅療養中だ。

とは言っても相変わらず教会本部に行つてカリムさんの愚痴を聞いたり、エミリオとリハビリがてらの稽古をしていたりする。

ちなみに入院中は勉強しかすることがなかったため、退院後すぐに『無限書庫司書』の資格も無事取得することができた。

無限書庫を初めてみた感想はまじカオス。

いやこれでも大分片付いたとのこと。

そこら辺は有能な司書長ユノイ ユノにおまかせしておこう。

さぶつ。

とりあえず無限書庫に来たのだから調べものをする。

これと言って今すぐに欲しい情報はなかったため、適当にソーデイアンについて調べてみることにした。

シャルティエ以外にもあるのかと気になったのだ。

探索、探索つと……

その結果、これといった情報はなかった。

思いつきだったため、検索方法が悪かったのだらう。

次回以降にやることにする。

しかし、中には興味深い古代ベルカの資料もあった。

その中でも真正古代ベルカという術式についての本があったのだが……ありえんだろうの一言。

……  
弾幕は投げ返すとか、バインドもシールドも意味をなさないとか

砲撃魔法も理論上は返せるらしい。

それなんて羂落とし？

超人テニヌの連中並みだな。

真正古代ベルカまじパネエ。  
エンシエント

まあ今度じっくり読んでみよう。

そして今日はリタの魔導学講座の時間。

退院後も定期的にリタは魔導学について教えてくれている。

本人曰く

「あたしのせいで授業に遅れてるんだから、その分の面倒みてあげてるのよ！」

とのこと。

ちなみに私とリタはリハビリで未だ休学中だ。

復学は2年になってからの予定なのだが、そもそも初等科の1年でこんな内容習わないだろう。

まあ厚意（？）は受けとっておこうと思う。

エミリオも興味があるらしく一緒にリタの授業を受けている。

同じツンデレ同士で反発力を起こしてしまうのではと危惧したが、今のところ特に問題はない。

せいぜいおやつプリンで揉めるくらいだ。

うん、今日も平和だな。

リタの魔導学の授業を終え、エミリオと別れ、帰宅する途中だったが、新しい本屋が目に入りつついつい寄ってしまった。

お金がなかったため見ているだけだったが、そこそこ時間を使ってしまったようだ。

立ち読みした内容を思考にて反芻しながら歩いていると後ろから急に腕を掴まれた。

そして首に腕をまわされホールドされる。

いきなりのことだったので啞然としていると……

「それ以上近づくんじゃねえ！！ このガキの命がどうなってもシラネエゾオオオ！！」

典型的な犯罪者の人質にされたようだ。

そのまま連れ去られ工事中のマンションへ……

そこには共犯者と思われるもう一人と、人質と思われる女の子がいた。

「さつさと要求通りにしやがれ！！ ガキ共の命がどうなってもいいの[か](#)ああ！！」

誰だ今日も平和なんて言っただやつは！！

思いつきり厄日じゃないか！！

犯人の要求は典型的なものだったため割愛する。

薬とかやってんじゃないの？

そして人質の女の子にナイフを向けながらベランダに出て行った。

私？

何もできないと思われているようでナイフを向けられているだけである。

人質の女の子がいなければ犯人はすぐに氷像アイススタチューなのだが……

地上本部の管理局員と思われる人が犯人を説得という名の時間稼ぎ中だが、あまり効果は見られない。

むしろ、犯人煽ってどうする？

そんなやつに現場任せるなよ……

女の子も今までは我慢していたが、とうとう泣き出してしまった。

「ぐすっ……おにいちゃん……うえええん、おにいちゃああん！」

そろそろヤバイだろう……

犯人側も限界かもしれない。

見せしめに人質を……やりかねないかもしれない。

「ひっぐっ……ヴァイスおにいちゃん……」

女の子がお兄さんの名前を呼ぶ。

はてヴァイスとな……ん？

……なんですと？

もしかこの子はラグナ……そんな名前だったっけ？

これって……ヴァイスの誤射事件！？  
ミスショット

どうやら原作に関わる重要な場面に出くわしてしまったようだ……

リハビリ編――少年は原作事件に巻き込まれるようです（後書き）

どーにもなったあ

リハビリ編2少年は無事(?)に事件を乗り切るようです

ヴァイスのミスショット誤射事件。

ヴァイスが武装隊に所属していた頃、立てこもり犯を狙撃する任務で、人質ラゲナの左目を潰すというミスショットをした事件だ。

その後、それがトラウマとなり武装隊を辞職し、妹とのギクシヤクした関係になったらしい。

確かに自分のミスで妹の片目を失明させるのはトラウマもんだよね。

正直トラウマなんて簡単な言葉で言えるようなことではないと思うが……

この事件が原作通りなら……まあ人質ラゲナは死ぬことは……ない。

私というイレギュラーがいる分アレだが、多分なんとかなるのだろう。

だから……何もしなくてもいい。

だから……何もしないほうがいい。

——  
だけど！

救えるかもしれないのなら……それを簡単に見捨てられるほど人間できていない!!

## 高速思考展開！

どうする？ 犯人1人だけだったなら一瞬の間があればなんとかなるが……

その場合は人質の安全が……  
 ラグナ  
 むしろ最初から1人に絞るか  
 アイススタチュウ  
 新世向けの氷像にしてやんよ！

相変わらず変な思考があるがスルーする。

自分に刃物を向けてる奴を無視して……

ラグナ人質を引き離して犯人から距離を取る

むしる飛び降りるか？

アイスタチュー芸術的な氷像にしてやんよ！

方向性は決まった……のか？

自分側の犯人が一瞬目を離れた隙に人質を犯人から引き離す。ラグナ

そして距離を取り氷像にしてやる。アイスタチュー

もしくは武装隊突入まで耐えるか……だ。

とりあえず人質を犯人から引き離してしまえば……ラグナなんとでもなる！

そう決意しポーチに入れていたデバイスを……

……アレ？

デバイスが……ない？

代わりに紙が入っていて……

『試してみたことがあるから、デバイスを借りるわ。リタより』

ファッキン……！

こんなオチか……？

決意だけではどうにもならない現実がここにあった……

おそらくもう時間がないだろう……

目の前で起こる（かもしれない）ことがわかるのに……何もできないジレンマ。

途方に暮れていると……

おいっ！ 聞こえているか！ 後40秒で人質抱えて飛び降りろ！

突然エミリオの声が聞こえた気がした。

もしかして念話？

えっ……なんで……てか後40秒で飛び降りろって……

わかったら早くしろ！ 特大のがいくぞ！ また入院したいのか！！

こっちの回答なんてお構いなしにそう続ける。

特大……また入院……ってまさか！？

後25秒！！ さっさとしろ！！ 飛び降りた後はこっちでフォロ―してやる！！

こっちの話も聞けよな！

ああもうヤケクソだ！！

「アストラルベルト！！」

某花の名の少女のパクリ技。

前方に突進しながら左右両手に発生させた魔力刃（なんちゃって断罪の剣）で犯人を切りつける。

大したダメージなどいらない。

一瞬だけ人質<sup>ラグナ</sup>から手が離れればいい。

「ぐあつこのガキイイイ！！」

1人目を吹き飛ばし、2人目が激昂し人質<sup>ラグナ</sup>から手を離れた瞬間、そのまま人質<sup>ラグナ</sup>を抱えベランダから……飛び降りた！！

飛び降りる瞬間に一瞬だが向いのビル屋上にリタの姿が見えた。

既に準備万端だったようだ。

「きゃあああああああ！！」

少女<sup>ラグナ</sup>の悲鳴が耳元で鳴る。

くっ！ デバイスがなければ、この速度と高さを無事に降りられるほどの技術はない！

エミリオの言葉を信じるしかない……だから！

「エミリオオオオ！！！」

そう叫んだ瞬間、何か柔らかいものの上に落ちた。

それと同時にあたりが極光に満ち、マンションに神雷が落ちた。

おそろおそろ目を開けて見ると未だ上空にいるようだった。

てつきりネットか何かの上に落ちたと思ったのだが……

「ふんっ、ようやく気付いたか。まったく世話のかかるやつだ」

「エ……ミリオ？……ここは……なんで……」

未だ上空にいるのか？

エミリオはいつも通り「ふんっ」と言ってから答える。

「こいつに感謝するんだな。主人のピンチに文字通り空を飛んで駆け付けたんだ」

「えっ……」

主人のピンチって……まさか！

「キュウウウウー！」

青と白の長い胴体と頭の羽根のような飾り……そして首元についている水晶……

「ハクリュー！？　もしかしてこの子ハクなの！？」

えええ！　進化したの！？　決定的瞬間を見逃したああ！！！！

「そうだ。なぜか急に光だしてこの姿になった。そしてお前のピンチに駆け付けたんだ」

そのおかげで助かったけど……けど！

「それで助かったんだ。感謝はすれど文句を言える立場ではないだろう」

エミリオは容赦なく言い放つ。

悔しくなんか……ぐすっ

ちなみに少女は極光と轟音、飛び降りて絶賛気絶中。

マンションは……ただの瓦礫の山だ。

犯人大丈夫だろうか……

てゅーか相手が犯罪者でも、ここまでしでかしてお咎めなしとはいかない気がするぞリタよ……

特にマンションなどは仮にも建築中だったのだから。

後が怖いが事情聴取を受けねば……落ち込みながら地上に降りていく。

私の明日はどこだろう……

気が重い……

ピロリン！

【ミニリュウ】が【ハクリュー】に進化しました！

ピロリン！

【オリ主属性】の称号を得ました！

ピロリン！

【なんちゃってアストラルベルト】を習得しました！

リハビリ編3少年は…一応被害者だよな？

### 【オリ主属性】

説明：初めて原作事件に遭遇した者に与えられる称号

条件：初めて原作事件に遭遇した

効果：全ステータス→→→ フラグ率→→→ ご都合主義→→→ その他諸々←

備考：目指せ真のオリ主！

ピロリン！

全ステータスとフラグ率が劇的に上がりました！

ご都合主義？どんとこい！

何か大切なものが無くなった気がします！

失くしたものの……それは平穩。

結論、怒られたがなんとかなった。

地上に降りて第一声は罵声だった。

「何を勝手な真似を！」とか「どうしてくれる！」とか。

先に人質の安否を確認しろよ……

まあマンション崩壊はやりすぎだとは思うが、説得という名の挑発で犯人を煽った指揮官<sup>あんた</sup>にだけは言われたくない。

あんたのせいで選択肢（時間）が無くなったのに……

そう思っているとエミリオが

「ふんつ、キサマの無能をフォローしてやったんだ。感謝はされど非難される覚えはない」

いや、少なくともマンションの件は非難されるだろう？

「マンションも建築途中で会社が倒産し、そのまま解体もままならない状態だったんだ。むしろ解体費がかからなくて済んだじゃないか」

そうなの？ でもそーゆー問題ではないと思うんだよ……

現に……

「そついう問題ではない！！ 子供が出しゃばって現場を荒らすな  
ナンセンス  
と言語道断！！ 公務執行妨害で……」

ナンセンス  
無能さんが逆ギレしてヤバイこと口走っていると…

「ふむ、マンションの件はともかく、あの時の状況では犯人が人質に手をあげる可能性が高かった。犯人も複数いたのだから、あの状況での判断はそう悪いものではないだろう」

そう言いながらヴァンせんせい師匠が現れた！

「ヴァンせんせい師匠！？ なんでここに！？」

久し振りに見たなこのヒゲ。

「なに、弟子せいとの安否が気になったのだよ。無事で何よりだ」

なんか変な響きだったが気にしないことにする。

「なんだお前は！！ ここはまだ一般人が入っていい場所ではない  
！！！」

突然の乱入者に無能ナンセンスさんが激怒。

だからこんなやつに現場やらせるなよ……

ヴァンせんせい師匠にはそんなのどこ吹く風みたいで……

「私はこの子たちの師匠だ。弟子を保護しにきた」

担任の責任って以外と重たそうなのね……

てか私は休学中なんだが……

「こいつらの教師か。ふん！ 生徒が生徒なら教師も教師だな！  
まったく管理局をなんだも……」

「自己紹介がまだだったな。私はヴァン・グランツ。聖王教会・教会騎士団・団長と時空管理局理事官を兼務させてもらっている」

「思っ……えっ？」

ええええええ！？

ヴァン師匠ってそんな偉かったの！？

そりゃあヒゲでもないし貫禄ないよね。

てゆーか何で教師やってんの？

しかも音楽……

「貴公の言い分と現場の状況はわかった……次の査定を楽しみにしているがいい」

こわっ！

無能さんが超絶に青ざめてるよ！

権力つてすごいな……

「まったく、4月の研究棟消滅事件に続いて……よく事件に巻き込まれるものだな」

いや、ほんとにね。

そして現場から離れたところでリタと合流した。

てゆうかこいつがデバイスを勝手に拝借したせいじゃねえ？

まあ結果オーライだから今回はアレだが、次やったら絶対泣かしてやる。

「あら、よかったじゃない。結局無事だったんだから」

ぜってー泣かす！！

そう心に誓った。

「あのっ……………ここは……………？わたし……………」

んっ？少女<sup>ラグナ</sup>が目覚めたようだ。

……………忘れてたわけじゃないよ？

「ふむ、目が覚めたか。安心していい。もう大丈夫だ」

「えっ？あ、はい……………？」

混乱しているようだ。

「ラグナっ！！」

そこへイケメンの管理局員と思われる青年が少女の名を呼びながら駆けつけてきた。

「おにいちゃん！！」

そう言って少女も青年を呼び、抱き合う。

うん、素晴らしき兄妹愛だ。

過程は正直褒められたものではなかったが、結果として兄妹の絆を壊さないで済んだのだから良しとしよう。

……………私は勝手に暴れ、少女<sup>ラグナ</sup>抱えてベランダから飛び降りたという

暴挙しかしてないけどね！

「失礼しました！ 自分は武装隊所属のヴァイス・グランセニックと言います！ 妹を救出して下さいありがとうございます！」

うん、よくできた青年だ。

エミリオにも見習って欲しいものだ。

そーなったら正直キモイがな！

「なに、貴公の妹が無事であって幸いだ。それと今回の件について私は特に手を出していない。この子たちの判断だ」

そういつてヴァン師匠せんせいは私たち3人を見る。

「ふんっ、多少の無茶はしたが無理はしていない……だが、あんな手段になって悪かったな。妹さんを危険な目に合せた……」

「あたしも怖がらせて悪かったわ……」

こいつらもずいぶんと殊勝な態度だな……一応は反省しているらしい。

てゆーか私に謝罪はないのかお前ら。

「いや……ありがとよ。俺は今回の狙撃手を担当していたんだが……正直ブルってた。狙撃の腕には自信があつたが、いざ自分の身内が人質になると……かつこ悪いが手が震えて照準が合わせられなかった。多分あのまま撃つてたら妹を傷つけていたかもしれない……だからよ、妹を助けてくれてありがとなボーズ共」

うん、中々に好青年だ。

「ほらっラグナ……」

「うん、少し怖かったけど……助けてくれてありがとう」

ヴァイス  
青年に続き、少女からも礼を言われる。

エミリオは「ふんっ」と、リタは「そっ」とそれぞれ素気なく返しそっぽを向いたが耳が赤かった。

まったくこのツンデレ共め。

それを見た兄妹も苦笑している。

「キュウウウ」

おっと空気<sup>ハク</sup>を忘れていた。

まったく！勝手に進化しよって！

「おや？ハクのように……とか言ってみたかったのに！」

「ついでに進化キャンセルの秘密を知りたかったのに……」

「あのっ！　この子はわたしたちを乗っけてくれたんだよね？」

少女<sup>ラグナ</sup>がハクについて尋ねてきた。

「うん、私の……ペット？　のハクって言うの。たぶんドラゴンか何かだと思う」

「ポケモン図鑑でもあればいいのだが……」

「ドラゴン！　すごいよねこの子！　……ハクちゃん、わたしたちを助けてくれてありがとうね」

「そういつてハクの頭を少女<sup>ラグナ</sup>が撫でる。」

「キュウウウウ」

「ハクも嬉しそうだ。」

「私が撫でた時より嬉しそうだな……さては、かお前！」

「いずれは番いでも見つけてやらねばならないのだろうか……」

そして……

「ふむ、ではそろそろ説教の時間に移ろうと思うのだが」

そんな空気を引き裂くかのようなヴァンせんせい師匠の口撃こうげきがきた。

不意打ちであつたため、まともにくらってしまった！

騎士のくせに不意打ちなんて！

まあ何のお咎めなしにいくわけないとは思っていたが……

兄妹は「礼はまた後日改めて！」といって退散しやがった。

今回の件について私は『前門の犯人、後門のインディグ（リタ）  
で、どちらかというと被害者なのだが……』

「問答無用、連帯責任だ」

だそうです。

説教と反省文です。

結果的に良いことをしたのに……どうにも締まらない終わり方だ  
じゃ……

リハビリ編 3 少年は…一応被害者だよな？（後書き）

しばらく書く時間が取れそうにないです。

多分次は土曜日になると思います。

復学編1〜少年は様々な経験をするようです（前書き）

なんか更新できました。

## 復学編1 少年は様々な経験をするようです

あの誤射事件ミスショットになるハズだった『T（立てこもり犯）・M（マンシオンごと解体）事件』から数か月が経ち、私とリタも無事に復学した。

ラグナはミッドの私立学校に通っており、現在はメル友だ。

まともな友人が初めてできたのだった。

また、ヴァイスさんに付き添ってもらって遊園地なども行ったりした。

エミリオは乗り物酔いでダウン、リタはアトラクションのダメダシ。

お前ら何しに来たの？

魔法世界の遊園地まじパネエのに……

ちなみに私たちの学院の方だが

ヴァン師匠せんせいが引き続き私たちの担任となった。

ちなみにヴァン<sup>せんせい</sup>師匠は時空管理局理事官を後任のカリムさんに任せたい。

未だ聖王教会騎士団長ではあるのだが教師を続けている。

理由も、そしてなぜ兼任できるかも不明だ……

本人曰く、

「未来ある若者たちに多くの可能性を教えてやりたいのだ」

とのこと。

そして

「迷う事無く、未来は私達が生み出していかなくてはならんものなのだから……」

そう続けた。

渋いね……だから年齢以上に老けて見えるんだ。

……でもなんで音楽なの？

結局、謎は謎のままだった……

授業の方だが、基礎は前世を含め勉強してきているし、魔導学も授業よりかなり進んだ応用をリタに教わっているため、特に問題はなかった。

とゆーより退屈だ。

リタなんぞ授業を聞かずに別の作業をしている。

エミリオも聞いているだけで板書すらしていない。

イメージトレーニング  
妄想でもしているのだろうか？

教師涙目だよ……？

私？ もちろん聞いているフリをして別の勉強をしている。

もちろん教師にはバレないように。

時間は効率的に使わないとね！

放課後は、研究室でリタの研究の手伝い（モルモット）をしたり、エミリオと稽古したり、聖王教会本部に行ってカリムさんの愚痴聞いたりと……

ラグナからの普通のメールが一番癒される……そんな毎日だ。

休日などは無限書庫に行き、ランダム検索でよくわからない本を見つけて読んだりするのが趣味になっている。

そのおかげで雑学や用途が微妙だったり、実践で使用するのが難しい魔法や技術ばかり習得してしまった。

まあ戦闘ばかりに重点を置くつもりはないのでいいだろう。

目指すはジェネラリスト！

万能で選択肢いっぱい未来……なのだが

「あまりお金が……」

そう、お金がないのだ！

様々な資格を取得するにはお金がかかる。

例えば免許関連だったら、その対象も欲しいだろう。

その他にもこの世界は未知なものに溢れているため、興味があるものばかりだ。

つまりお金がやたらとかかる。

でもこの年の子供が自ら稼ぐには、管理局入りとかしなくてはならないだろう。

それでは本末転倒なのだ。

なんとか今のうちからお金を稼ぐ手段を確保しておきたいが……

「デバイスマイスターとか……無理だよな……」

独学では無理あるし、周りはマッドだ。

そもそも相当それ系が好きでもない、この年齢で取得はまず無理だ。

しかもプログラム関係は前世からの苦手分野でもある……

「はあ、どこかにお金になる話はないかなあ……」

前途多難だ……

そんな話をカリムさんにしたところ

「じゃあ、ひとつアルバイトをお願いしようかしら」

「アルバイトですか？」

教会なのにアルバイトって……

いいのそれ？

聖王教会がどう成り立っているかは不明だが……

とりあえず金になる話なので聞くことにする。

なんでも教会が保管している（どーでもいいレベルの）ロストロギアの目録を作って欲しいとのこと。

また、ロストロギアの細かい資料も無限書庫で調べて添付して欲しいらしい。

うん、やりたがる人はいないだろうな……

やっても「できました！」↓「そこおいといて」で終わりそうなんだもん。

まあお金は欲しいし、ロストロギアにも多少興味はあるのでOKしてしまった。

その場所に案内されて絶望した。

どこのゴミハウスだよ！

しかもついでに部屋の片づけもよろしくと。

泣いてもいいですか……

期限は1年ほどを目安に、それ以上かけると更に増える可能性があるとのこと。

ようは雑用じゃん……

道は険しく先が見えない……

……やるけどね！

だってお金は欲しいもん！

前金もポケットマネーから頂いてしまった。

意外と高い金額だった。

まあ勉強にもなるし頑張ろう……

悔しくなんて……

それから平日は聖王教会本部、休日は無限書庫、夜にラグナから

の普通のメールで癒される日々が続いた。

まあ、リタのモルモットにされていなくてまだマシか……

カリムさんは作業中でも愚痴ってくる。

仕事させる気あるんだろうか？

そして半年かけ、ようやく7割程度が終わった。

ホントにくだらないものばかりだった。

なんでこんなものがロストロギアなの？ ってモノばかりだ。

ポケギアとロストロギアはギアしか合っていないよ？

期限までに余裕ができたため、ストレス発散も兼ね、ヴァイスさんに射撃場に連れて行ってもらった。

感想……ヴァイスさんまじパネエ。

百発百中やん。

長距離も一発、シミュレーターのへりで飛びながら射撃も満点。

正直舐めてたわ。

ヴァイスさんに撃ち方を習い私もチャレンジしたが難しい。

何度か修正していくうちにターゲット的にも当たるようになった。

どうやら射撃の腕はそこそこ良さそうだ。

まあ弾幕ゴッこやってるもんね。

「おお、中々に筋は良いんじゃないか？」

ヴァイスさんも少し褒めてくれた。

『なんちゃって』以上の才能有りは初めてかもしれない。

将来的な一つの選択肢に入れておこう。

これからも定期的に射撃場に来ることにしようか……

はあ、気は重いが残りの作業も頑張りますか……

復学編1〜少年は様々な経験をするようです（後書き）

次回はあの原作事件に進みたい…

それを書こうとなると早くて土曜日になるかと…

## 復学編2 少年は弟子入りするようです

「なんとか終わった……ホント長かった……」

あのロストログアの目録作り（という名の倉庫整理）がようやく終わったのだ。

タイムリミット  
期限の1年より早い9か月で終えた。

カリムさんに報告したら舌打ちされた。

どうやら最初から1年で終わる量ではなかったようだ。

定期的な愚痴相手の確保が目的か……

1年かかれば増えるので、その分を期間延長させるつもりだったらしい。

そろそろ原因を<sup>ヒューマン</sup>なんとかした方が良くのではないだろうか？

「それができれば苦勞はしていません」

「まあ、そうですね」

「ごもっともだ。」

無事終えることができたので、かなり高額なアルバイト代をゲットできた。

子供に払って良い金額ではないと思うが……

また、今回のロストログア情報を調べるに当たって、古代ベルカ語について相当知識を深めた。

そのせいでカリムさんの預言解読を手伝わされたが……（別料金）

今度、語学検定でも受けてみようか？

理数より文系の方が向いている気がするし……

しばらくはそっち方面の勉強を試してみようと思う。

うん、中々広い分野で知識を深めていける。

順風満帆だな。

入学式初日で入院したり、犯罪に巻き込まれたり……

……考えていて切なくなった。

初等科2年も終わりの3月、学年末試験を問題なく終了した日のことだ。

私とエミリオ、リタの3人はヴァンせんせい師匠に呼び出された。

進路指導室に。

「ふむ、良く来たな。まあ、座りなさい」

自分で呼び出しておいて、その言い草はどうかと思うがスルーする。

進路指導室はイメージと異なり、まるで応接室みたいだ。

なんでソファーなんだろう？

そんな無駄なことを考えていると…

「早く要件言つてちょうだい。こっちは試験期間が終わってようやく研究に戻るんだから」

「ふんっ、同感だ。さっさと済ませてくれ」

自己中極まりない連中だな。

「なに、ここは進路指導室だ。ならば内容は自おのずと見えてこよう」

いいからさっさと見えヒゲ。

「ふむ、モルディオ、ジルクル「カトレットだ！」…カトレット、ウラノ、お前たちの進路しんろについてだ」

進路？しんろ

まだ8歳なんですけど私たち…

「ふんっ、今更だな。僕は騎士になると言っいて家を出てきた。その言葉を曲げるつもりは……ない」

「あたしは自由に研究さえできればいいわ」

こいつらは……

「ふむ、お前はどんなのだウラノよ？」

私？

私は……

「あたしの実験台モルモットでしょ？」

ブツチキルぞリタ？

「私はまだこれといった進路はありません。今は自分に何が合っているかを探してみてる途中……です」

とりあえずそう答えておく。

「ふむ、お前たちの考えはわかった……………その上で問おう」  
ひと呼吸おいて……

「私の弟子<sup>でし</sup>になるつもりはないか？」

と、のたもつた。

なんですと？

「どうゆう風の吹きまわし？……………あたしたちを確実に教会側に引き込んでおきたいの？」

リタがど真ん中ストレートの直球で尋ねる。

いやもつと探り入れようよ？

そう思ったのだが

「ふむ、その通りだ」

ヒゲはそのまま打ち返してきやがった！

お前ももつとオブラートに包めよ！

「うむ、私が騎士<sup>ナイト</sup>団長である間に次代への継承をしたいのだ。なに、お前たちにとっても悪い条件ではないだろう」

そう言ってメリットを説明していく。

騎士を目指すエミリオは言わずとだが、リタにとっても聖王教は禁忌や制約が少なく緩いため、研究はしやすいだろうとのこと。

また、管理局では望まぬ研究を強いられるかもしれないだろうと続けた。

私にとっては権力のコネができるだろうとのこと。

将来的に考えれば悪いことはない。

「僕は騎士を目指す以上、その選択肢は悪くない……むしろ破格だろう」

「何かに属するのは好きじゃないんだけど……後ろ盾はあった方がいいか……」

エミリオ、リタ共に肯定的のようだ。

私としても父は聖王教会所属だし問題はないだろう。

結局3人とも是と答える。

「でもさ、一教師が生徒を弟子にするってのは鼻屑って見られるんじゃないの？ そこんとこどうなのよ？」

そうなのだ。

このヒゲは騎士団長でありながら教師などやっているのだ。

そこんとこホントどーなのさ？

「ふむ、私は今年度を最後に教職から引退する予定だ。元々一般の教師ではお前たちを持て余すだろうと判断したため、私が師匠<sup>たんにん</sup>になったのだ」

明かされる真実。

どうやら入学前から特別視されていたらしい。

リタやエミリオはわかるが私もか？

「お前たちの可能性を大人という立場だけで潰したくはなかったのだ」

らしい。

まあ私はともかく、リタやエミリオは一応子供だから、周囲の環境に影響される可能性があるもんね。

「ふーん……まあわかったわ。こっちとしても悪い条件じゃないし……この件、呑むことにするわ」

「……僕もだ。騎士を目指すには……悪くない」

「私も賛成です……よろしく願いますヴァン師匠<sup>せんせい</sup>」

3人とも弟子入りを承認した。

「ふむ、こちらもよろしく頼むぞ、リタ、エミリオ、アペリスよ」

こうして私たちはヴァンせんせい師匠でしの弟子になりました。

……そーいえば具体的に何やるのさ？

聞く前に了承してしまった……

そして……

「ああ！ これで身内価格利用できるわね！」

……カリムさんの罨が待っていた。

ピロリン！

【元ラスボスの弟子】の称号を得ました！

原作序章編1〜あのお方に会つようです(1)(前書き)

メンタルをやられ、しばらく執筆できませんでした。

皆さんも言動には気を付けて下さいね。

原作序章編1〜あの方に出会つようです（1）

【元ラスボスの弟子】

説明：ヤヴァイ人に師事した者に与えられる称号

条件：かつてラスボスを担当した者に師事した

効果：成長率→→→

備考：アビス仕様ではなくレディアント仕様ですのでご安心を

ピロリン！

成長率がヤヴァイくらい上昇しました！

あれっ？ まともだ…

ヴァン師匠せんせいに弟子入りして最初にやったのは実力を確かめるための模擬戦だ。

とりあえず3人まとめてかかってこいとのこと。

エミリオとリタはそれを聞いてプツチン（プリンじゃないよ？）

ブッチキル気満々だ。

とりあえずこの2人が連携なんてまず無理だ。

巻き込まれないように援護（と解説）に徹しますか……

「魔神剣！！」

牽制の意味も兼ね、エミリオがシリーズお馴染みの剣技をヴァン  
師匠せんせいに向け放つ。

剣圧なんて飛ばせたら人としてどうなんだろう？

まあ実際は魔力を伴った衝撃派なのだが。

それと同時に別方向からヴァン師匠せんせいに向けリタもシューターを放  
つ……って多っ！？

正面の魔神剣以外の範囲を全部覆っている。

よくもまあ簡易なストレージデバイスでそこまでできるもんだ。

私も時間差を付けて誘導弾でも放とうとも思ったが、とりあえず  
様子見することにする。

さてヴァン師匠せんせいはどう出るのか……

「閃空剣」

自分の周囲に剣のひと振りで衝撃派を発生させ、迫りくる全てをかき消しました。

まさか防ぐでも避けるでもなく、衝撃でかき消すとは……

「どうした？この程度か？」

再び2人がプッチンした。

沸点低すぎるだろ……

とりあえず2人の援護頑張りますか……

結論、一撃も与えられませんでした。

まっ連携のレの字もないもんね。

エミリオの剣技や魔法、リタの鬼のようなシューターも一切通じなかった。

ちなみに私は基本フルバックで2人のブーストやエミリオが魔法

を使う時だけ前衛になり、なんちゃって技で応戦した。

相手にならなかったがな！

ヴァン師匠<sup>せんせい</sup>の感想はと言うと、

「ふむ、エミリオはもう少し全体を見るのだな。剣と魔法で多彩な手段があるのだから周囲に合わせ行動するように。まああとは実践で経験していくのだな」

もつとはつきり協調性皆無野郎！と言ってくれば良いのに……

「リタはデバイスのせいかな戦術の幅が限定されているな。まあ狙いは悪くないが……それだけだ。今度お前専用のデバイスを作ることしよう」

まあシューターしか撃ってないからね。

「アペリス、お前は援護に徹した方が良いな。近接戦闘の才能は……ないだろう」

うっせ、わかってら！

「まあ護身程度ではわるくないだろうが……それよりは援護か後方指揮の方が向いているだろう。実際にブーストは及第点をやれるし、周囲を良く見れていた。または折角ドラゴンを飼っているのだから、それを使っではどうだ？」

近接は頑張れば一流までいけるかもしれないが、超一流には届かないので、あくまで補助や護身程度にしておくべきとのこと。

それにハクか……竜騎士にでもなれと？

様々な課題はあるが、とりあえず最初の實力確認の模擬戦は終了した。

それからは生活サイクルにヴァン師匠せんせいとの稽古けいこが加わり、休日が皆無になってきた。

有意義ではあるんだが……正直なんとかならんかねえ。

リタはデバイス開発にのめり込んでいるし、エミリオもヴァン師匠せんせい修行三昧の日々だ……

もっと気楽にいこうよね。

相変わらず癒しはラグナの普通なメールだけだ……

そして時折だがヴァン師匠<sup>せんせい</sup>の出張にも一緒に連行される。

ヴァン師匠<sup>せんせい</sup>曰く、良い経験になるだろうとのこと。

まあそうなんだが…別にお前の秘書でも小姓でもないんだぞ？  
単位でもよこせ。

今回連れてこられたのが第6管理世界。

なんでもロストログアの調査とか。

ちなみにリタは研究、エミリオは別件で不在のため、今回のお供は私一人だ。

そもそも騎士団長自ら行く任務ではないのでは？

そんなニュアンスで尋ねて見ると

「ふむ、イスに座って偉そうにしているのが仕事ではないからな」

どっしり構えているのも上司<sup>トッポ</sup>の仕事だとは思うが……

そして移動すること1時間、目的地の遺跡に到着。

管理世界なのに未だ謎めいた遺跡がある方が不思議な気もするのだが。

既に調査隊は中に入っているので悠々と行くことに……

「うわあああああああああ！！」

と思つてたら悲鳴が中から聞こえてきた！

なぜだ！ 今日には特にフラグを立てていないぞ！？

中から調査隊と……民間人？ いやなんか賊っぽい連中が飛び出してきて……

「……マジですか？」

「ふむ、中々に壮大だな」

遺跡を内部から突き破るように巨大な竜が飛び出してきました。

「シユアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

手の部分が翼となっているワイバーンのような白系の色をしたドラゴンだ。

唖然としていると……こっちに向ってファイアブレスぶっ放してきた！？

「守護氷槍陣！！」

ヴァン師匠<sup>せんせい</sup>が氷柱結界を張って防ぐ。

それ以外の範囲は火の海だが。

ヴァン師匠<sup>せんせい</sup>が周囲を隔離結界で覆い剣を竜に向け構える。

確かにこの人なら竜の一匹二匹は簡単にやりそうだ。

すると遺跡内部から人影が出てきて……

「もうやめてええフリードオオ！！ もう大丈夫だからああ！！」

と、ピンクの髪の女の子が泣き叫びながら竜に叫んで出てきた。

……フリード？

ピンクの髪の女の子と竜のフリード……って！？

「もう戻ってええ！ わたしは大丈夫だからああ！ フリードオオ！！」

もしかしてキャロ！？ とフリードリヒ？

「ふむ、何やら事情がありそうだな。とりあえず竜は気絶させるこ

とにしよう」

絶対強者なセリフですね。

とりあえずは賛成だが。

殺してなんてしまったら……ヴォルテールとか出てきそうだ。

エンドロールが見えた気がしたよ。

気絶か、気絶させるならば……

「ふむ、アペリス……可能か？」

普通ならやらせるな！　と思うところだが気絶させるだけならば

……

「まかせて下さい。さあ飛竜よ、覚悟はいいですか？」

シャルティエ直伝の奥義……

「尽く臥せよ！　不殺の鉄鎚——」

決めます！

「ピコハン!!」

……自分で言っておいて凹んだ。

効果的なのはわかるが……コレはちょっとね。

どっから召喚された物質なんだか。

「きゆるくうううう……」

とりあえず気絶させるのは成功した。

するとみるみる姿が小さくなっていき、原作サイズまで小さくなった。

「フリード！」

キャラ（仮）が竜の元に向う。

「ふむ、どうしたものか」

ホントね、遺跡なんていつ崩れるかわからないし。

そして周りは既に鎮火されているが焼け跡が目立つ。

原作キャラに会えたのは良い……わけでもないが、どうしたものか……

「前途多難ですね。いつものことながら」

「まあそれこそが人生そのものだ。苦もない人生に価値など見出せんよ」

できれば楽に生きたいものです。

はてさて一体どうなることやら……

ピロリン！

【ピコハン】を習得しました！

原作序章編 2 あの方に出会つようです (2) (前書き)

今回は前回の続きのお話。

書きたいことはあるのにそこまで中々持っていけないんです。

いつそ一気に数年分を飛ばしてしまいますか…

原作序章編 2 あの方に出会つようです (2)

どうやら調査隊と一緒に遺跡から飛び出てきたのは賊だったらしい。

キャラは部族を追放され当てもなく彷徨い、遺跡内部で雨宿りしていたところ賊に遭遇したようだ。

そして賊は二重の意味で犯罪者だったようで、キャラ暴走に繋がったらしい。

ナニをしようとしたかは想像にお任せするが……

そのキャラだが、過剰防衛ではあったが被害者であり、部族を追放され、行く当てがなかったため、とりあえずヴァン師匠せんせいが……と  
ゆーより聖王教会で保護した。

そして今回の件を受け調査は中止になり、ミッドに戻ることになった。

で現在、聖王教会本部のいつもの訓練場にキャラと共にいるのだ

が……

「わたしなんていない子なんだ……いちゃいけないんだ……」

暗い！ CRY！ クラスギル！

対ヒューゴさん時のカリムさんより纏っている空気がヤヴァイ。

そして目のハイライトが……

確かにわずか6歳で部族を追放され、各地を転々と彷徨い、賊に出会い、暴走して……

うん、よく考えるとスツゴク悲惨な人生歩んでるよねこの子。

正直かける言葉がありません。

「わたしなんてわたしなんてわたしなんてワタシナンテ……」

なんかこっち方が楽に生きててマジごめんなさいな気分になったきた。

ああ生きててごめ「なにをアホ面している」なさい？

振り返ると救世主エミリオがおりました。

どうやらエミリオはヴァン師匠せんせいとの稽古にきたようだが、忙しか  
ったようなので、いつものここで自主練をしにきたようだ。

とりあえず事の顛末を説明する。

【今のご時世で里を追放とかあるんですねえーまあ僕のオリジナル  
の時代では珍しい話ではないですけど】

なんか久し振りにシャルティエの声を聞いた気がする。

「ふんっ、くだらないな」

ってうおい！ いきなりかよ！？

エミリオのくだらない発言を聞いてキャラも反応を示した。

「……なにがですか」

怒っているような……縋すがっているような、色んな感情が入り混じ  
った声色でキャラがエミリオに問う。

「ふんっ、全部だ。過去かつこのいはどうあっても変えられない。だが未来これからのきな  
んてまだ決まっていない…自分で創つくっていくものだ」

それは正論だろうし真理かもしれない……でも所詮キレイゴトだ。

世界中の皆がそこまで割り切っていていたら世界はもっと……

「少なくとも僕はそうやって生きてきたし、これからもそうだ。お前達にそれを強制するつもりなんて更々ないが、いつまでも引き摺って周囲を不快にさせる真似だけはやめろ」

「……あなたは」

感情が読み取れない声色でキャラがエミリオに尋ねる。

「この世界が……今の生活が好きですか？」

ん？何かどこかで似たようなフレーズを……

「わたしはかつての生活がとってもとっても好き……でした」

あれ？

「でも……みんな変わってしまった。楽しかったこと、うれしかったこと全部……全部変わってしまいました」

これは……

「それでも……」

「ふんっ、見つければいいだろう」

まさか！？

「次の楽しいこと、うれしいことを。ただそれだけの話だ」

長い坂道を登り始めるやりとりですか！？

中の人違うだろ！？　ゴホンっ取り乱してしまいました。

「ふんっ、どうするかはお前の自由だ。僕は僕自身の選択に一片の後悔もない」

そう言ってエミリオは去っていった。

お前自主練に来たんじゃなかったのか？

その後、ヴァン師匠せんせいから念話で呼ばれたので、教会の応接室へキヤロを連れていった。

きちんと扉をノックして……

「アペリスです。キャロ・ル・ルシエさんを連れてきました」

「うむ、入りなさい」

扉を開けるとヴァン師匠せんせい、そして……

「初めまして。時空管理局本局執務官のフェイト・テストロッサ・ハラウンです」

まさかの2浪でホームランな執務官だった。

キャロに会ったから、もしかしたら会うんじゃないかと思っていたが……

なんでもフェイトさんは冒頭の二重の意味での犯罪者を追っていたらしい。

それで聖王教会に来ていたところキャロの件を耳に挟み今に至ると。

「ねえキャロ？ 私と一緒に行かない？」

どこへさ？ 心の中でツッコミを入れておく。

結局のところキャロはフェイトさんが保護することになった。

フェイト  
運命は変わらず……

いや、違<sup>デスティニー</sup>う運命に出会ったのだから、未来<sup>さき</sup>なんてわからない。

もしかしたら原作なんてとくにブレイクしているのかもしれない。

「わたしは……何をしたら……どこにいけばいいんですか？」

疑心暗鬼というか、絶望しかないのか……キャラはフェイトさんにそう尋ねる。

「それは君がどこに行きたくて、何がしたいかによるよ。キャラはどこに行つて何がしたい？」

中々に難しい質問だと思うがな。

「わたしは……」

助け舟を出しておきますか。

決して今回口クに話してないからじゃないよ？ 出番がなかったからじゃないよ？

「キャラ……さん。さっきエミリオの言っていたことをよく考えてみて。過ぎ去ったものは……辛いことも幸せだったことも変えられないから。だから楽しいこと嬉しいことは……また見つけていくしかないんだよ」

ホント、世界はこんなハズじゃなかった、そんなのばかりだ。

さすがにこれは口に出さないが。

「……色々と考えてみることにします」

そう言ってフェイトさんに手を引かれ退出していった。

「ふむ、過去と記憶、未来と予言……世界は常に流動している。結局は自分が何をしたいか、何をすべきか……いや止めておこう」

ヴァン師匠せんせいも何か思うところがあつたようだ。

それはさておき、この邂逅がどんな未来を紡ぐのか……

まあ、いつも通りの前途多難な日々だろう。

窓の外は憎らしいほど晴れ渡っている。

「アレルヤ」

そんな気分な一時でしたと。

あつヤベ！ 学院の宿題<sup>レポート</sup>忘れてた！？

結局いつも通りの締まらない終わりだった……

ピロリン！

【もしかして脇役？】の称号を得ました！

原作序章編 2 あのお方に会おうです (2) (後書き)

フラグを立てちゃったのはエミリオさんでした。

そして主人公が脇役道に…

原作序章編3〜あのお方に会つようです(3)(前書き)

とりあえず切りがいい話まで上げることになりました。

### 原作序章編3 あの方に出会つようです(3)

【もしかして脇役？】

説明：主人公の座が危なくなつた者に与えられる称号

条件：イベントシーンを他人にとられた

効果：出番←←

備考：いつかきつと良いことあるよ……

ピロリン！

おきのどくですが出番が減つたような気がします！

頑張つてオリ主に帰り咲いて下さい！

をゐ！

「Destiny」と「Fate」

どっちも「運命」と訳す言葉だがニュアンスは異なっている。

変えられない、避けられない宿命か

自ら行動し切り開いていく未来か

何が言いたいかというと……

「この度St・ヒルデ魔法学院の初等科に編入することになったキヤロ・ル・ルシエです……これからよろしくお願いします先輩方」

キヤロの運命は変わってしまったようだ。

今日もヴァン師匠せんせいの稽古で3人揃って聖王教会本部に来ていた。

今回は空気ハクも連れてきている。

3人揃ってでのリベンジマッチなのだ。

リタは試作デバイスのテストを兼ねてヴァンせんせい師匠に挑むと意気込んでいる。

エミリオは……まあいつも通りだ。

そして訓練場に行ったら、ヒューゴさんが何か怪しい装置を弄りながら笑っていた。

エミリオに視線を向けると逸らされた。

うん、絶対碌なことじゃないな。

そもそもなんでこの場所で実験（？）しているんだろう？

いつもカリムさんに沈められているのに……ドMなのか？

【多分ですが坊ちゃんに会いたくて、毎回ここでやらかしているんでしょうね】

シャルティエが絶望的な回答をくれた。

息子と仲良くしたいなら、更生しろよ……

一応ヒューゴさんは聖王教会の運営に多大な貢献を……しているらしい。

それである程度は目を瞑ってもらっていると。

カリムさんお疲れ様です。

【まったく……ベルセ……オ……に手……して……まう……ら……】

シャルティエが何か呟いていたが聞き取れなかった。

まあシャルティエもエミリオ同様に苦勞しているようだ。

さてカリムさんが来る前に片づけてしまいますか。

ヒューゴさんをいつも通りの氷像にしてからしばらくするとヴァ  
ン<sup>せんせい</sup>師匠がやってきた。

「ふむ、よく来たな。では早速だが稽古に取り掛かるうか」

ヒューゴさんのことはスルーですか。

「ええ、覚悟しないさいヒゲ。今日をあんたの【ヒゲ剃り記念日】  
にしてあげる」

「ふんっ、覚悟はできたか？ 敗北の言い訳でも考えておくんだな」

なんで君たちそんなに傲岸不遜なの？

前回まったく歯が立たなかったでしょ？

「ふむ、まずはその鼻っ柱を折るとしよう」

そう言ってヴァン師匠せんせいは最初からOVL状態オーバーリミッツになってしまいましたが！

おかげで私の心情はOTL状態ごめんなさいだよ！

なんで格上の相手を煽るかなこの2人？

そんなんで隙ができるような相手じゃないのに……

そして絶望的なリベンジマッチが始まった。

結論、ヴァン師匠<sup>せんせい</sup>まじパネエ。

本人の前でヒゲ呼ばわりは禁句らしい。

あまりに一方的過ぎたので描写（解説）はしないでおく。

「ふむ、リタは……医務室で寝かしておくか。エミリオ、アペリスは動けるな？」

「……ふん」

なんかエミリオも返事に覇気がないな。

まあ大見え切ってアレだもんね。

「ふむ、リタは私が医務室に運んでおく。2人は汗を拭いたら応接室にいきなさい」

反省会……というわけではなさそうだが。

とりあえず汗を拭き、<sup>ハク</sup>空気に治癒魔法をかけてからエミリオと応接室に向う。

そこにいたのは……

「こんにちは、君に会うのは2度目で、もう1人の君は初めまして

だね。改めて自己紹介するけれど私はフェイト・テストロッサ・ハラウン。時空管理局本局執務官です。そして……」

「先日はどうも……キャロ・ル・ルシエです」

フェイトさんとキャロでした。

今日は先日の礼と、これからの挨拶に訪れたらしい。

そしてこれからの挨拶というのが冒頭のキャロのセリフに戻る……

どうやらキャロは魔法学院に通うことにしたらしい。

でもこれって確実に原作ブレイクだよね？

確かに魔法学院なら魔法制御についても学べるし、常駐というわけではないけれど聖王教会の騎士も数人いる。

それに今のキャラは原作と違って、暴走による管理局の部隊タライ回しもないから心情的には……まあどうなんだかね？

「まだ……やりたいことわかりませんが、これから探していきたいと思っています」

「ふん、それがお前の選択なら僕は何も言わない。好きにすればいい」

このヒーロー属性野郎め。

「何はともあれ、こちらこそよろしくキャラ……さん？」

「キャラでいいです。よろしくお願いします……えっと」

「ああ、私はアペリス・ウラノ。St・ヒルデ魔法学院初等科3年生だよ。気軽にリスって呼んでもらっていいから。そしてこっちが……」

「ふんっ、同じく初等科3年のエミリオ・カトレットだ。好きに呼べ」

だからGはジルクリストどうした？ そんなに嫌いになったか？

「あつ……はい。えっとリスさんにエミリオさん。これからよろしく願います」

学年が違えばあまり遭わない気もするが……

「うん、よかった。ふたりとも学年は違うけど仲良くしてあげてね」  
フェイトさんにも念押しされました。

「それと今日ここには来られなかったんだけど、私が保護責任者をしている子でもう1人編入する予定なの。エリオっていう子なんだけど、その子とも仲良くしてあげてほしいの」

エリオもか！？

2人とも学院に編入！？

完全に原作ブレイク……六課フラグばつきばき？

まあキャラだけ学校行かせてエリオだけずっと保護施設というのも変だし……

フェイトさんは原作で2人が管理局の魔導師になったのを快く思っ  
てなかったようで、JS事件後は2人に学校へ通わないか持ちかけていたからな。

だけどこれでJS事件がどうなるか予想がつかなくなった。

関わらなくても大丈夫かとタカをくくっていたが……

カリムさんの<sup>レアスキル</sup>預言解読に協力して事前になんとかするしかないか

……

誰かの幸せは、きっと誰かの苦勞なんだろう。

そんな気がした邂逅でした。

原作序章編3〜あのお方に会つようです(3)(後書き)

2人の六課フラグばつきばきです。

とりあえず前書きに書いたように切りがいい話まで。

これからは相変わらず不定期になります。

原作序章編4〜あのお方に会つようです(4)(前書き)

ようやく原作1話のあの事件…

とりあえず書けたところまで

## 原作序章編4～あの方に出会つようです（4）

先日、正式にキャラとエリオがSt・ヒルデ魔法学院に編入してきた。

エリオは素直で良い子だ。

うちのツンデレ2人にツメの垢を飲ませてやりたい。

キャラも出会った当初よりは明るく前向きな印象だった。

そしてフェイトさん……教室ドアの隙間から覗き見はやめましよう。

見つかつてもしニックムーブで逃走しないで下さい。

あなた執務官でしょ？

証拠がなければOK？ 動機も目撃証言もあるんだが……

執務官相手に法で勝ち目はないのでスルーするしかない。

管理局の闇の一旦を垣間見た気がした……

## 閑話休題

キャラとエリオだが順調に学院生活に馴染んでいるようだ。

しかもエリオは騎士を目指しているようで、よくエミリオと稽古をしている。

ちなみにキャラの授業以外による魔法制御の訓練は私とリタで見ている。

竜といい補助系といいなんかキャラが被っているからね！

……もう少し頑張ろうか。

決して出番が少なくなるのを恐れてではないよ？

ゴホンッ。

そのエリオとキャラだが連休を利用して、現在ミッドチルダに來ているフェイトさんの元に遊びに行っている。

その際にフリードは連れていけないそうなので私が預かることになった。

そして珍しく何の予定もない休日テレビを見ながら過ごしていると……

「こちらミッドチルダ臨海第8空港です！！ 現在原因不明の火災が……」

あつ……そーいえばそんな事件あったよね。

確か死者は奇跡的に0だったハズ……

ここからは遠過ぎるし、そもそも出張るつもりはない。

自分の力量は弁えているつもりだ。

？気にテレビを見ていると……

「んっ？ これは魔法陣……！？」

足元に魔法陣が！？ これは確か召喚魔法！？

「キュルクウー！？」

えええええ………

そして……

「フリード！ と……リースさん！？」

周りは火の海、目の前にはキャロとエリオがおりました。

「……キャロ、エリオ？ ここは……？」

大方予想がつくが……

「あのっ！ ここは臨海第8空港で！ 火が、爆発が……あのっその……」

うん、おもいつきり巻き込まれたようだ……

おお神よ、聖王さまよ……私が嫌いなのですか？

最近はこんなばっかりだ……

どうやら2人はフェイトさんの元に遊びに行く途中で巻き込まれたようだ。

そしてフリードによって壁をぶち抜き脱出しようと考えており、フリードを召喚したところ近くにいた私も巻き込んでしまった……らしい。

「ごめんなさい！」

いや、この状況でキャラが悪いわけではないので

「いや、しょうがないよ。とりあえず冷静になろうか。……周囲も含めてね」

ここは暑いのだ。 空気もアレだが。

なので……

「セイクリッド・スカイ行くよ？」

なんか久し振りに名前を呼んだ気がする。  
セカイ

まあそれは置いて……

「――無慈悲なる白銀の抱擁」

あれから【なんちゃってぜったいれいど】の術式を見直し作り上げた新魔法……

「――アブソリュート・ゼロー！」

まあ意味は同じだが。

周囲の全てを凍らせ、フロア全体の鎮火と周囲の温度を一気に下げてしまう。

が威力は予想以上で……

「「寒いです……」」

ごめん、やりすぎた。

凍死の危険性が出てきた……火災なのに凍死は勘弁して欲しい。

結局、周囲に結界を張り、温度を一定に保ちながら救助を待つことにした。

下手にフリードが暴走すると更なる災害になるかもしれないからね。

とりあえず家族と知人に巻き込まれた旨の連絡をする。

セイクリッド・スカイの通信機能はヒューゴさんの魔改造でキチガイレベルなのだ！

だから災害現場だろうと平然と使用できる。

ケース？ 両親

「よく巻き込まれるわねえ、無事に帰ってくるのよ？ あっハクはこっちでおさえしておくからね」

ややこしかったため、比較的問題はないと伝えておいた。

また前回のT・M事件時のようにハクがくると後始末が面倒だし。

ケース？ ヴァン師匠<sup>せんせい</sup>

「ふむ……救助が来るまでは動かないことだ。ただし近くに救助が必要な者がいた場合はお前の判断にまかせる……健闘を祈る」

珍しく心配していたが、若干呆れていたようだ。

また巻き込まれたのかと……

こっちだって好き好んで巻き込まれているわけじゃないんだよ！

ケース？ エミリオ（＋シャルティエ）

「ふん、2人を無事に連れてくるんだぞ？」

【混乱に乗じて盗みを働いたらダメですよ？】

私の心配は？

ケース？ リタ

「研究の邪魔！」

あれ？ 目から汗が……

ケース……後は事後報告でいいか。

気分も←←だし……

通信を終え凹んでいるとエリオが話しかけてきた。

「あのっ！ フェイトさんにも連絡をとりたいんですけど……」

ああ、2人の保護者に連絡するのを忘れてた。

確か救助に当たっているハズだよね。

一応連絡をとってみますか。

通常の連絡端末じゃなくて緊急時のデバイスを通じた連絡先がある  
ようなので、そちらに連絡を試みる。

「——こちらアペリス・ウラノと言います。フェイトさん応答お願いします」

「——こちらフェイト・テストロッサ・ハラウン。……アペリス？  
どうして私の緊急連絡先を？」

ここから先はエリオに任せるか。

「——フェイトさん！ ぼくです、エリオです！ ぼくたちは今、火災の起きている空港の中にいるんですが……」

エリオがフェイトさんに現状を伝え……

「——中に！？ 今どこなのエリオ！？ もしかしてキャロも一緒に！？」

フェイトさん冷静に……

「えつとあの！」

エリオも一気に聞かれたら……もう仕方ない。

「——こちらアペリス。現在地はエントランス奥の待合ロビーと思われるフロアでキャロも一緒です。現在は周囲を完全に鎮火し結果を張って救助待ちの状態です。怪我もありません」

周囲は比較的安全で、ある程度余裕を持てるので冷静に答える。

「——そっか……エントランスの方なら、なのはの方が近いから向ってもらっよ……無事でよかった」

魔王さま待ちか……

あの天井抜きをリアルで拝むことになるのか。

ん？ 天井抜きとエントランス？

……もしかして近くにスバルいる？

そして、もしなのはさんが先にこっちに来たら……………女神さまのボディプレス？

「……………」

うおおおおい！！

それはなんか色々まずいよ！！

「キャロ、エリオ！ 私は救助が来るまで近くに人がいないか確認してくる！ アンチ・マテリアル 対物の結界を強化・追加しておくから、ここで救助がくるまでおとなしくしてるんだよ」

既に救助されていれば良いが……

「あっハイ！ わかりました！ 気を付けて下さい！」

「じっ、ご武運を！」

「キユルク〜！」

2人（+1匹）に見送られエントランス方面に向かう。

「——間に合え…………！」

ピロリン！

【なんちゃってぜったいれいど】が【アブソリュート・ゼロ】に更新されました！

原作序章編 4 あの方に出会ったようです (4) (後書き)

続きは近いうちにあげたいと思っています

原作序章編5〜あのお方に会つようです(5)(前書き)

すぐ上げるつもりだったのに…

中々上手くいかないですね

原作序章編5 あの方に出会つようです(5)

チートは努力で越えられない壁なんだと思う……

いや、別に超えるつもりはないんだけどね。

進んで苦勞する将来を歩むつもりはないし。

……ホントだよ？

スバルを探してエントランスホールの方へ駆け抜けていく。

もし、なの破産（何故かこう変換された）が先にキャロとエリオの救助に行ったら、スバルは高確率で女神のボディプレスだからだ。

もう救助されていればいいが……砲撃による破壊音（聞こえるか怪しいが）や魔力を感知していないため可能性は低い。

探査魔法等は一通り習得しているので、サーチャーを用い人影を探しているが見つからない。

ここではない……？

エントランスはここだけではないのか？

さすがに空港の詳しいマップは持っていないのでわからないが……

案内表示でも探すか……っん？

前方のサーチャーに人影が写った！

確認のためサーチャーを近づける。

「ビンゴッ！」

スバルと思われる少女だ！

こっちに向って泣きながらよろよろと歩いてくる。

ん？ こっちに向って……？

一瞬何かが頭をよぎったが無視して叫ぶ。

「そのあなた！！ 大丈夫ですか！？」

「……えっ？」

こちらに気付いたようだ。

そして足を止めこちらを確認する。

「今そちらに行きます！」

そう言ってスバルの元に駆けつけようとして……

「——グアッ！」

いきなり側面から爆風がきて吹き飛ばされた。

「えっ……き、きみ！ 大丈夫！？」

一応助けにきたのに心配させる始末、いつものことながら……  
なんとか受身はとれたため致命的なダメージはない。

「いたたた……あのっ！ 私は大丈夫で……」

そう言いかけて、ふと目に入ったのは女神像。

位置的に私の後ろにある……なんかヒビが入ってますよ？

……えええええ！？

私が原作のスバルの位置い！？

まずいセイクリッド・スカイ……あれっ！？ ない！？

もしかしてさっき吹き飛ばされた！？

——そして女神さまが無慈悲なるボディプレスをかましてきた。

「きゃああああ！！」

スバルの悲鳴が聞こえる……リアルにヤヴァイ！！

こんな時こそ高速思考展開！！

乙

……人生終了のアナウンスのみでした。

我が思考ながら役に立たたねええええ！？

迫り来る女神が……よく見るとオッサンに見えるかも。

これが辞世の句かと思うと激しく後悔した。

ヤヴァイ死ねない。

こんな辞世の句を残してたまるかああ！！

現実には厳しいが物語は続くようで……

「……あれ？」

生きてる？

女神像が空中でバインド系魔法により拘束されている。

「——よかった……間に合った」

そんな声が聞こえてきた。

そして……

「——助けにきたよ！」

白い戦装束に黄金の戦槍を持った女神さまでした。  
バリアジャケット レイジング  
ハート  
なのは

なのはさんマジ魔王！<sup>まおう</sup>とか思ってたスミマセンでした！

てゆうか、まさか私がこの役を演じてしまうとは……

「よく頑張ったね……偉いよ」

「ごめんなさい。」

ただ暴走しただけで今回も……何もしていません。

「もう大丈夫だからね……安全な場所まで一直線だから！」

おっと、キャラとエリオのことを伝えないと。

「あの！ 奥の待合ロビーにまだ2人が……キャラとエリオって子  
がいるんです」

「もしかして……君がフェイトちゃんの言ってた……うん、わかつ  
たよ！ すぐ近くに反応があるね……今2人を連れてくるから君た  
ちはここで待っていて！」

そう言っ て私たちの周囲に結界を張り2人の救助に向かった。

「あの……これ」

どうやらセイクリッド・スカイはスバルの方に転がっていた模様。

「あっ、拾ってくれてありがとうございます……お怪我はありません  
でした？」

吹き飛んだのはこっちだけだね。

「うん……大丈夫」

そして会話が途切れる。

スバルは泣きそうな……何かを耐えるような、悔しそうな、色々な感情が入り混じったような表情をしている。

何か話しかけようとしたが、なのはさんがキャロとエリオ（とフリード）を連れて戻ってきたのでやめた。

ここからの脱出が最優先だ。

「一撃で地上まで抜くよ……デイバイイン……」

ピンク色の超高密度な魔力がデバイスの先端に収束する。

そして……

「バスタアアア!!」

ピンク色の魔力の奔流が天井を抜き、夜空を駆け抜ける。

うん、まじパネエ。

直径数十メートルはありそうな大穴を開けて下さいました。

将来、これ以上の砲撃を味わうことになりそうなメガネさんに合  
唱。

「みんな私につかまってね。一気に……」

さすがに厳しいだろう。

でもいくら結界を張ってもここに残すのは……それ故の判断だろ  
う。

なので

「あの！ 私は自分で飛べます！ それとキャラコがエリオ1人くら  
いなら抱えて飛べます！」

なるべく負担はかけない方がいいだろう。

今回もまともな活躍をしてないからじゃないよ……？

「……うん、わかったよ。一応私が下を飛んでフォローするからお  
願いね」

なのはさんも了承したのでキャラコを抱えて大穴から外へと脱出す  
る。

なぜキャラコかというとキャラコの方が軽いためだ。

邪な理由はないのですよ？

「——ヒドイ……空港が……」

キヤロが夜空から災害現場を眺め呟いた。

最終的には都市ひとつが廃棄されるくらいだもんな。

いったいどれだけの被害損額なんだか。

なのはさんが通信本部と連絡している間にこちらもフェイトさんに脱出した旨を連絡しておく。

「——こちらアペリス。局の魔導師の救助によりみんな無事脱出できました」

「——よかった……私も救助活動をしているからまたあとで……2人をありがとう」

そして私たちは西側の救護隊に引き渡され、なのはさんは救助活動に戻っていった。

その飛んでいく後ろ姿は……見えそうで見えないな。

何がとはいわないが。

ゴホンッ！

さて今回の件を省みてみると……

巻き込まれる↓吹き飛ばされる↓潰されそうになる↓助けられる

なんていうか……いつも通りだな。

いい加減慣れたものだ。

しかし今回の件でよくわかった。

おとなしくしていても巻き込まれるのだ。

チートオリ主ではないのに……どのみちオリ主なのか？

「修行にも……もう少し力を入れていきますかね」

未だ燃えている空港を眺めながらそう呟く。

チートが無いなら無いなりに頑張っていくしかない。

そんな決意をした序章<sup>はじまり</sup>でした。

ピロリン！

【略してオリ主】の称号を得ました！

原作序章編5〜あのお方に会つようです(5)(後書き)

とりあえず原作事件は終了。

次回この件のエピソード的な話を予定。

原作序章編 6 あの方に出会ったようです (6) (前書き)

今回で原作序章編の空港火災事件終了です。

## 原作序章編 6 あの方に出会つようです (6)

【略してオリ主】

説明：新たな決意をした者に与えられる称号

条件：大きなイベントでこれからについて覚悟を決めた

効果：全ステータス→→→ 成長率→→→ フラグ率→→→

備考：主人公補正が付きます

ピロリン！

ようやく主人公補正がかかりました！

なんだろう……あまり嬉しくない。

てゆうか今まではなんだったんだ？

空港火災の事件は原作通り、負傷者は多数だったが死者は0だった。

現在は鎮火しており原因調査中とのこと。

まあ原因はレリックだと思われる。

公にはされないだろうが……知る権利はないだろうか？

やっぱり三権集中は歪んでいると思う……

## 閑話休題

目立った外傷はなかったが念のため病院に行き検査を受けることになった。

いつもの聖王医療院ではなかったが担当医は一緒だった。

今回の件で応援に来ていたようだ。

そして呆れられた。

「医者としてこういうことは言いたくないが……呪われているのではないかね？」

ほっとけ！

自分が一番実感してるわ！

検査も問題がなかったためすぐに終了した。

健康な人にかけている時間はないもんね。

キャロとエリオも問題なかったようで合流してフェイトさんの元に向う。

ちなみにスバルにはあれから会うことはなかった。

戦闘機人だから一般の病院ではないのかも……

まあどつかでまた会うだろう……確実に。

自分の巻きこまれ体質のせいだな！

……切なくなってきた。

まあ会えないものは……いや会うつつもりはないのだが……ゴホンッ！

それはともかく！ キャロとエリオと一緒にフェイトさんがいる

ホテルへと向かう。

そしてホテルを見て一言。

「なんですかこの高級ホテルは？」

一般人なめてんのか？

キヤロとエリオも苦笑いしている。

どうやら2人とも金銭感覚は普通のようなのだ。

どうかそのまま育って下さい。

この規模のホテルだと直接部屋を訪ねるわけにもいかないの  
で、フロントから連絡してもらい案内された。

部屋の内装もスゲー……このブルジョア共め。

まあその分の仕事はしているんだろうが……

部屋には魔王さま、2浪さん、歩くセクハラ……ゴメン訂正しま  
す。

なのはさん、フェイトさん、多分はやてさんがいた。

祝福の風2号機さんは寝ているのが見える。

3人ともある程度は着崩しているが、さすがにスカートは穿いて  
た。

別に悔しくなんてないんだから……

とりあえず自己紹介とあの場でのことを説明した。

巻きこまれた旨を説明すると、なのはさんとフェイトさん苦笑い。

はやてさんウンウンと1人納得顔……なんで？

「カリムの言っとった通りの子やな」

あの人……！

そしてスバル救助に向かった件は少し怒られた。

無茶はしないで、と。

9歳から魔法少女しているあなた方には言われたくないセリフだ。

ミッドの就労年齢が低いこともあるが、この人たちのような英雄譚も子供を無茶させる要因のひとつなのではないだろうか？

まあ口には出さないが。

一通り報告も終わったところでヴァン師匠せんせいから連絡がきた。

断りを入れてから通信を繋ぐ。

3人ともあの恰好じゃマズイしね。

「——ふむ、無事でなによりだ。私もこれから現地入りをして調査に参加する」

「——ヴァン師匠せんせいがですか？　もしかして今回の件は……」

ロストログア関連……知ってはいたが濁して尋ねる。

「——そうだ。お前もくるか？　低レベルとは言え管理主任者の資格もあるし大丈夫だろう」

をみコラ！

「——そんな資格初耳なんですが!？」

どうゆーことだ！

「——ふむ、以前に騎士カリムの依頼を受けただろう？　その実績から彼女の方で申請していたようだ」

聞いてないぞコラ！

これだから権力者は！

「——今回はやめておきます。カリムさんに用事ができましたので……」

「——そうか。では迎えをよこすからそれで帰りなさい」

そう言っで通信を終える。

場所も指定していないが……まあなんとかなるだろう。

なのはさんとフェイトさんはまたもや苦笑いをしていた。

はやてさんは「カリム乙」とか言っで合掌していた。

こんなばかりだ……もう慣れたけどね。

「……しかし聖王教会が動いたんか」

はやてさんが皆には聞こえない音量で呟くが、位置的に聞こえてしまった。

どうやらはやてさんは今回の件にて聖王教会が動いたことで、ロストロギア関連の災害だと感じたようだ。

それに私たちがここにくる前には六課フラグを立てているハズだから、今回の件について色々と思うところがあるようだ。

しかしキャロとエリオの件を含め、六課はどうなることやら……正直見通しがつかない。

「――未来は私達が生み出していくもの……か」

不意にヴァンせんせい師匠の言葉が思い出された。

フェイトさんと笑いながら話しているキャロやエリオを見て、今まで選んできた選択肢が間違っていたとは……思いたくない。

まあ実際のところ、私は何もしていない気がする……いつものことです。

「……とりあえず帰ってカリムさんを問い詰めますか」

資格取得申請の手間は省けたが絶対に善意からではない。

あの人のことだから、これからも面倒事を押しつけるためだ。

そう思い窓から外を眺める。

さすがは高級ホテル、景色も良い。

「アレルヤ」

いつぞやも呟いた一言。

どうか未来も今日のように晴れ渡っていますように……

そんな祈りを込めて。

しかし現実は無常で、課題<sup>じかん</sup>提出は待ってくれませんでした……

## 原作序章編 6 ～あのお方に会おうです（6）（後書き）

今回で原作序章は終了です。

次回からは原作……ではなく幕間（個人サイドのお話）とフラグ回収編など。

せっかく遺跡やお宝がある世界観なのにあの人たち（テイルズキアラ）が出ないのは寂しいので。

原作StS時代はしばらく先になります。

しばらくはリリカルからテイルズよりになりそうです。

興味がある方は読んでやって下さい。

主人公設定（原作序章編終了時点）（前書き）

久々に設定を更新

## 主人公設定（原作序章編終了時点）

主人公設定（空港火災終了時点）

名前　　：アペリス・ウラノ

性別　　：男

生年月日：新暦63年

出身地　：ベルカ自治領  
ミッドチルダ

容姿　　：腰まで届く金髪、アメジストの瞳

家族構成：父（父さん）と母（お母様）の3人暮らし

魔力資質：先天的AAランク（現在値AA+程度）

才能　　：器用貧乏

備考　　：ハク（ハクリュー）を飼っています

原作知識：アニメ版Strikersまで、Vivid&amp;Forceは知らない

現在所属：St・ヒルデ魔法学院 初等科3年

取得資格：無限書庫司書、C級遺失物管理主任者（本人は知らなかった）

称号（詳しい内容は各本編冒頭で）

【かけだしトレーナー】

【甲種準一級フラグ建築士】

【初めての弾幕ごっこ】

【魔法使い始めました】

【オリ主候補生】

【時を駆ける男（笑）】

【オリ主属性】

【元ラスボスの弟子】

【もしかして脇役？】

## 【略してオリ主】

スキルっぽいモノ  
技能

## 【マルチタスク（4分割超高速思考）】

- ・読んで字の如く並列超高速思考

## 【なんちゃって断罪の剣】

- ・ぶっちゃけたただの魔力刃

## 【ポーカーフフェイス】

- ・ただのハッター

## 【なんちゃってぜったいいいど】↓【アブソリュート・ゼロ】

- ・絶対零度の空間凍結魔法（やたら寒い）

## 【なんちゃってインディグネーション】↓【インディグネーション】

- ・撃っていいのは撃たれる覚悟のある人だけ、現在トラウマなため使用不能

## 【KY（偽）】

- ・場の空気を読み、（死亡フラグを）危険予知できる（回避できるわけではない）

## 【基礎魔法一式】

- ・治療、結界、弾幕等の基礎魔法

## 【なんちゃってアストラルベルト】

- ・左右の手に魔力刃を展開させ前方に突進しながら斬りつける技

【ピコハン】

・HITすると気絶させることができるシャルティエ直伝不殺の奥義

デバイス

【セイクリッド・スカイ】

種類　　：ブーストデバイス（AIは搭載していない）

待機形状：レイハさんと一緒

戦闘形状：なし、バリアジャケットは白い制服系統をイメージ

所有能力：大気中の『水分』と『温度』を操作できる（らしい）

使用魔法：『インディグネーション』『アブソリュート・ゼロ』  
『各種ブースト』

人間関係（登場順）

【エミリオ】　↓心友だと思っていたのに……

【シャルティエ】　↓乙

【ヒューゴさん】　↓マッド

【カリムさん】　↓仲間だと思っていたのに……

【ヴァン師匠】　↓師匠ししやう兼ヒゲ

【リタ】　↓もしかして私わたしって実験動物？  
モルモット

【ラグナ】　↓メル友（唯一の癒し）

【ヴァイスさん】　↓気のいい兄貴分

【キャラ】

↓ 不幸な人生を歩んできた後輩

【エリオ】

↓ よくエミリオと入力タイピングを間違える……

【三人娘】

↓ 魔王、2 浪、歩くセクハラ

主人公設定（原作序章編終了時点）（後書き）

人間関係はテキトーです。

そもそもシャルなんて人間じゃないし（笑）

~~~~あなたと響きあいたい……（1）（前書き）

暑さにやられていました…熱中症には気を付けて下さい。

個人サイドの話はシリアスにしなければならなかったので封印しました（笑）

ここからはテイルズノリ的な話が続いていく予定です。

「あなたと響きあいたい…」（１）

長いものには巻かれる。

なかなかの名言だと思う。

天才や馬鹿、社会不適合者でもない限り、少なくとも凡人にとつては。

何が言いたいかと言うと……

「じゃあよろしくね 管理主任殿？」

結局カリムさんには勝てなかったよ

しかも余計な面倒事のオンパレードだ……

あの後だが聖王教会本部に向かった。

カリムさんに話を聞くため……

一応受付にて手続きをしようとしたら既にカリムさんが御呼びと

のこと。

この展開を読んでいた……？

どうやら向こうの方が何枚も上手のようだ……わかっていただけだね！

悲しくなんてないんだから……

「あら？ 団長と調査に向かわなかったのですか管理主任殿？」

執務室に入って第一声がこれだった。

そもそも自分で受付に話を通してる時点でわかってんだろ！

それよりも気になるのが……

「なんなのですかその『管理主任』というのは？」

何勝手に決められているのさ！？

そんなこっちの心情を知らずにカリムさんは語る。

「ええ実は……」

そこから始まるカリムさんのサクセスストーリー。

衰退した世界を救済するため、神子が旅立って行く物語……

「どのシンフォニアだ……要約するとロストロギアの危険性と管理のお話だった。」

「管理主任の名前だけでも必要なのよ」

「……今まではどうしてたんですか？」

「それが……その人が冒け……じゃなかった、長期出張から帰ってこないのよ。だからしばらくは代理を立てようと思って……」

をゐ！ 冒険といったぞ今！

「じゃあその人をさつさと探してくれば良いじゃないですか！」

そう言って後悔した。

カリムさんが某新世界の神のような顔に見えた気がした。

「じゃあ搜索お願いね      グランツ団長に伝えておくわ。これも修行の一環ということだ」

謀られたああああ！！

【搜索クエスト（強制）】がエントリーされました！

そんなアナウンスが聞こえた気がした……

そんなわけで作って参りました無人世界。

なんでも前任者は休暇でこの遺跡調査に行ったまま帰ってきていないとのこと。

普通に搜索隊とか出せよ……あんまり心配されていないのかな？

ちなみに今回もエミリオとリタは来ていない。

別に休みでもなんでもないからね。

学院には一応ヴァン<sup>せんせい</sup>師匠やカリムさんから話を通っている。

聖王教会の依頼だと融通は利くらしい。

もちろん単位なんてでないがな！

そんなわけで今回も例の空港事件調査を終えたヴァン<sup>せんせい</sup>師匠と一緒に  
だ。

「キュウウウ！」

おっと忘れていたが今回は空気<sup>ハク</sup>も一緒だ。

無人世界なら役に立つかもしれないし、制限もなさそうだし。

「では遺跡に向うぞ」

ヴァン師匠<sup>せんせい</sup>がそう告げる。

飛行魔法で行くのかと思いきや徒歩でだった。

距離もそこまで離れているわけでもなく、魔力温存にとのこと。

さすがに山道は辛いが……

「なに、これも修行だ」

正直しんどいわ……

2時間ほど歩いただろうか、ようやく目的地の遺跡に付いたのだが

「……なんですかこのお城は？」

どこが遺跡だよ！

なんとも立派な古城だ。

「なに、見た目だけだ。中身はただの瓦礫の山だ」

「以前にも来ているのですか？」

そういえば迷わずにここまで来たが……

「最初の調査の際にな。まあ何も得られなかった調査ではあったが」  
ん？

じゃあ何で前任者が遺跡調査なんてしてるのさ？

そんな顔をしていたつもりはないがヴァン師匠せんせいが疑問に答える。

「ふむ、自分で見たものこそを信じる者でな……調査不十分だと言  
いだして飛び出していったのだ」

自分が納得できないことをそのままにしておくよりは良いが……

「自分勝手ですね」

「ふう、学者というものはそういう人種だ」

ヴァン師匠せんせいが珍しく溜息をつきながら言った。

「しかし、まあ……どんなに優れた文明であろうと滅亡を迎えるの  
は、世の摂理なのですかね？」

後世に謎を残すばかりか、ロストログアなんていう危険物すら投  
げっぱなしだ。

「ふむ、断絶された歴史、後世に残される負の遺産、その影響によ  
る滅び……か。人とは愚かで救いようがない生き物なのかもしれな

いな……」

あれえ？

何かネガティブモードに入ってます？

もしかしてキチガイラスボススカ…じゃなかった、栄光を掴むヒゲフラグが立ってます？

「いや、だからこそ…か。陽の下では星の輝きはわからぬか……」

なんか自己完結しましたよこの人。

その台詞もポジティブに考えていいのかな？

なんか心配事が増えた気がするな。

そんな師匠は無視して、とりあえず古城に入ろうと思って近づいていくと……

「揺れていませんか？」

「ふむ、揺れているな」

辺り一面が揺れている。

そして古城から全速力で出てくる人影が……

「ぬおおお！！ 私としたことがあああ！！ な、あああつ！！」

その人がすごい形相で断末魔を上げ古城から脱出(?)した瞬間  
……古城が吹っ飛んだ。

あるええ？

「木端微塵ですね」

「ふむ、見事消え去ったな」

自爆装置でもいじくったのだろうか？

出てきた人をそっちのけで考えていると……

「むっ！ 淀んだ魔力が跡地に流れ込んでいるな。これは……」

なんかよくわからんが頭の中をアラートが……

【KY(偽)】がピンピン逝ってる……『ヤヴァイ』と。

そして飽和した真っ黒な魔力が形を作っていく……

「……なんですか、このセンスの欠片もなさそうな化け物は？」

カリムさんの話がシンフォニアだったせいか、イメージ的にはエクスフィギュアのすごいでっかいやつに見える。

もう大抵のことには驚かないつもりだったが……いや、むしろ呆れ気味なのだが、これはちょっとね。

「——悠長に眺めているわけにもいかないようだな」

大剣<sup>デバイス</sup>を構え、（割と）真剣な顔でヴァン<sup>せんせい</sup>師匠が呟く。

とりあえず……神さま、聖王さま、どっちも私のこと嫌いでしょう？

今回もいつも通りにトラブルが始まった。

「あなたと響きあいたい…」(1)(後書き)

遺跡から出てきたのはあの方。

わかる人にはわかると思いますが…

次回はバトルかも…

~~~~あなたと響きあいたい……（2）（前書き）

相変わらず暑い日々が続いております……

とりあえず前回の続きを……

シンフォニアのお話は次回で最後です。

「あなたと響きあいたい…」（2）

目の前にセイバ…じゃなかった、金髪で虹彩異色オッドアイなお姉さんがいました。

「あなたの望みはなんですか？」

優しくそう問うてきた。

「平穏です」

なので迷うことなくそう答える。

「そうですか、では頑張ってください」

えっそれだけ！？

平穏は頑張らなきゃいけないものですか！？

「そうですね……些か無責任でしたか。ならばそのための技能すべを伝授しましょう」

まさかのサトラレ！？

てゆーか結局頑張らないとダメですか！？

「いいですか、右手に魔力を、左手に……根性を」

できるかああ!!

どこの咸卦法だあああ!?

そもそも根性でどうにかなるかあああああ!!

そんな現実逃避という名の白昼夢を見た気がした……

……意識を取り戻して現状把握。

すぐさまハクに乗って空へ撤退した。

絶対ヤヴァイよアレ。

RPG風に言うならイベントボスって感じた。

「GYAaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa!!」

凄まじい雄叫びを上げながら腕と思われる部分を地面に叩きつける。

「ワォ」

ものごつつ地面が抉れました。

だがしかし、向こうがイベントボスならこちらには（元）ラスボスがいるので……

「――魔を灰燼と為す激しき調べ……ジャッジメント!!」

さすがに野太い声で詠わないか……ちよつと聴いてみたかった。

そんな心情を無視する<sup>スルー</sup>ように、上空から光の束が雷となって降り注ぎ、エクスフィギュア（仮）に全弾HITした。

てゆーか全弾HITって鬼畜仕様だな。

[illegible]

倒し……つ危ない。

フラグを立てるところだった。

「ふむ、やったか……？」

無駄な努力でした。

あんたがフラグ立ててどうする……

ああ エクスフィギュア（仮）がみるみる再生してゆく……

「ふむ、中々の再生速度だな……どうしたものか」

凍らせればいけるかもしれないが、標的ターゲットにされたら嫌だし、あの大きさの的だと一発で魔力がピンチなので自重する。

ヴァン師匠せんせいも一旦、上空まで避難してきた。

狙われるからこつちくんなよ……

「で、アレはどうするんですか？ いえ、そもそもアレはなんなのでしょうか？」

「ふむ、アレが現れる前に淀んだ魔力の流れを感じた。おそらくだがアレは「ぬおおおおおおお！！ 遺跡が跡形もないだとおおお！！」……そういえば忘れていたな」

おそらく件くだんの前任者と思わしき女性が叫んでいる。

古城から脱出と同時に吹き飛ばされていたようだ。

それにしてもよく叫ぶ人だこと。

「この遺跡の価値もわからぬ木偶の坊がああああ！！ 貴様もこの遺跡のようにしてやるぞおおおお！！」

そもそもあなたが内部で何かやらかしたせいでこうなったんじゃ

ないのか？

どうやら自分のことは棚に上げているらしい。

「——生命を糧とし、以下略！ セイクリッドシャイン！」

その台詞と共に光が収束していき……大爆発しました。

「GYAaaaaaa!」

凄まじい爆音と雄叫びが辺り一面に響き渡る。

正直淒くウルサイ……

そして極光が直撃したエクスフィギュア（仮）から球体の何かが垣間見えた。

「あれが核コアだな——光龍槍!!」

ヴァン<sup>せんせい</sup>師匠<sup>デバイス</sup>が大剣からビームを出してエクスフィギュア（仮）の内部にあるエクスファイア（仮）を破壊した。

そもそもエクسفイギュアはエクススフィアを要の紋なしに取った場合になるんだっけ。

いくら（仮）でもいい加減過ぎたか。

まあどーでもいいが……それにしてもなんかシュールだな光龍槍

エクスフィギュア（仮）は今度は再生しないで崩れていった。

「ハーハッハッハッハッハ！！ この遺跡の（以下略）（相応しい末路だ！！）」

てゆーか結局この人、自分で遺跡を更地にしたよ……

「キュウウウ！！」

ん？ 空気に徹していたハクが何かに気付いたようだ。

「……雪？ いやこれは光でしょうか？」

砕けたエクスファイア（仮）から雪のように……だが天に向かうように光の粒が流れていく。

それはとても儚く、まるで……

「——ようやく解放されたのだろう……フッ、我ながら非科学的なことを言っているな」

自嘲するかにようにヴァン師匠せんせいが呟く。

「……どうやらこの古城は、まともとは言えないモノだったのです  
ね」

だから滅亡したのか……今となってはわからんが。

「人間は罪深い生き物だな……いや、だからこそ救いを求めるのか」  
またネガティブモードに入って勝手に自己完結しましたよ……

もしかしたらJS事件よりもこの人の方が厄介かも。

「ぬおおおおお!! 遺跡があああああ!! 何も残ってない  
だとおおお!!」

とりあえず今は自分の所業に悶絶している件くだんの前任者、銀髪美人  
の遺跡マニアさんをなんとかしますか。

まあ大方予想はついているが。

そんなてんてー達を横目にもう一度だけ空に向って逝く光を眺め  
る。

アレがなんなのかは想像の域を出ないが、今回の行為は正しかっ  
たのだと思いたい。

「——アーメン、せめて安らかなれ」

らしくない台詞を呟き……ふと思い返す。

「私って今回……何もしてない？」

「キュウッ」

それもまたいつも通りだが……何か釈然としない終わり方だった。



~~~~~あなたと響きあいたい……（2）（後書き）

次回はこの続き……とゆーかあとがき。

一緒にできればよかったのですが暑くてダレました。

なるべく早めに次をあげたい……とは思っています

~~~~あなたと響きあいたい……(3)(前書き)

前回の続き……でもシンフォニア関係ない。

迷走しております……

「あなたと響きあいたい…」（3）

とりあえず絶叫の果てに啞然と佇んでいるてんてーを連れて帰還した。

一体あの古城内部で何を見つけたのやら。

それを尋ねたら超長い講義が待っていていそうなので自重するが……

そして聖王教会本部に着いたので、カリムさんの執務室に直行する。

「任務お疲れ様でしたグランツ団長、無事に回しゅ…見つけられたようで何よりです」

おい、回収って言いかけたぞこの人。

「若干トラブルはあったがな……それは報告書に書いておこう。アペリス頼んだぞ」

「私がですか!？」

おいこら！

一般人（と思っているのは本人だけ）にやらせるでない！

「なに、何事も経験だ。では次の仕事があるのでな、後は頼んだぞ」

そう言ってヴァン師匠<sup>せんせい</sup>は去っていった。

「そうですか、では明日までに作成しておくようにお願いね」

しかも期限短つ……今日は徹夜コースか!?

まあそれはともかく、今回の発端である『管理主任』について相談しなければ。

「それで? 前任者は連れてきましたので『管理主任』についてはやらなくて良いんですね?」

「そうねえ……『今回』は前任者の継続という形でいいでしょう」

やたら『今回』を強調しているように聞こえたが……まあ将来的にはやつてもいいんだけどね。

そして燃え尽きているてーに話しかける。

「聞いていますかアーヴィング女史? 引き続き聖王教会の遺失物管理主任お願いしますね」

攻略王<sup>ロイド</sup>おおお!?

「ああ……遺跡、遺跡が……」

しかしこの人、話を聞いちゃいねえよ。

「では了承も得られたのでこの件は終了ね。これからお茶でもいいかがかしら?」

絶対に聞いていないし頷いてないよね……まあいいか今回は。

しかしお茶か……報告書の件があるから今回は遠慮しますか。

「折角ですが報告書の作成が「では用意させるから先に中庭で待っててね」……なので今日は遠慮……」

もうどうにでもなれ……

「ふふっ、お味はいかがかしら？」

「とてもおいしいですカリムさん……」

中庭に移動してお茶会です。

いつぞやと同じやりとりだな。

お茶も茶菓子も美味しいのだが……

「それで……要件はなんなのですか？」

今回はこちらからストレートに尋ねることにした。

「あらあら、すっかりお見通しね」

さすがにね……慣れたわ。

「ええ、実は……」

今回はサクセスストーリーではなかった。

要約すると、なんでも今後しばらくは忙しくなり、予言解読に時間を割けなくなるため、解読に協力して欲しいとのこと。

おそらく六課新設に向けた件のことだろう。

こういうことをオープンな場所で話して良いのだろうか？

まあ後ろめたいことではないとのアピールかもしれないが……

この件だがもちろんタダではなく正式な依頼だ。

こちらとしても六課の戦力不足フラグが立っているため問題は無い。

お金も入るし、翻訳のコネもできるかも。

「実績が証明できれば予言解読の専門チームもできるかもしれないね」

「ええ、この件お願いできるかしら？」

「わかりました。私でよければ喜……ゴホンッ！ 謹んで協力させていただきます」

危なかった……言動には気をつけないと。

喜んでなんて言ったらどんな無茶を要求されるか……

「……そう、じゃあお願いするわね」

微妙な沈黙があつたな……

【翻訳クエスト（任意）】がエントリーされました！

翻訳クエストってなんだ？

この件で少しだけカリムさんに感謝したのは秘密だ。

「そつえばアーヴィングさんは？」

「彼女なら旦那さんが回収していったわ」

来たのか攻略王<sup>ロイド</sup>……ちょっと見てみたかった。

「ご結婚されていたんですね」

予想はついていたが。

まさかの攻略王攻略……奇跡の所業だな。

「ちなみに……」

ついつい以前にやらかしそうになった禁句を訪ね……

空間が凍りついた。

背筋に刃物が当たっている（気がする）

息ができない。

冷汗が出まくっている。

少しずつ侵食されていく感じ……

ヤヴァイヤヴァイヤヴァ…

「？ どうしたの」

「ハッ！…」

以前より明確なデッドエンドが視えた。

KYというより、もはや未来予知レベルだな……

最後の最後でやらかしそうになるとは……まあいつも通りだが。

何かと最近は諦めの境地に達しかけている気がする。

それにしても報告書どうしよう？

ヴァンせんせい師匠もサンプルくらい渡していけよ…

結局、徹夜で頑張るハメになりました。

ピロリーン…！

【KY（偽）】が【直感（偽）】に更新されました！

〜あなたと響きあいたい…（3）（後書き）

コレットさんは中の人がアレですので出場前に退場しました。

むしろTOSRでは攻略王を攻略しているのは彼女なのに…

F　美しいは正義？（前書き）

今回も題名は関係ありません（笑）

しばらくゲームに集中しており執筆しておりませんでした。

とりあえずクリアしたのであればちばち書き始めるかと…

F　美しいは正義？

面倒事も厄介事も基本的にゴメンだ。

まあ既に相当アレだが……

チートなんてものは非日常への片道切符だと思う。  
デットオアアライヴ

自ら進んで苦勞はしたくない。

それは今も変わらない。

変わらないのだが……

——強くてカッコイイのに憧れたっていいじゃん！

だって男の子だもん！

カリムさんとお茶会の帰りに、ふと最近の行動を客観的に省みてみた。

『自発的には何もしておらず基本的に巻き込まれ』

『それなのに原作ブレイクのフラグが立っている』

『助けようとしたら逆に救助された』

『訴えにいったら何故か異世界へ』

『そこでも結局何もしていない』

正直ひどい有り様だった……

「……………」

これはマズイ。

主にアイデンティティと言うか何というか……………とにかくマズイ。

相棒の空気具合もマズイと思うんだ。

なので……

「セイクリッド・スカイの改造…フレームか……………」

空港火災の時なんか爆風で吹き飛んでいったしな。

デバイス強化とは短絡的だが未だフレームがないのは虚しいしな。

その依頼を出すとしたらヒューゴさんか……………

頼む相手としては不安極まりないが……………一応デバイスの製作及び

メンテナンスをしてくれているため信用はできる。

普段の言動から信頼はまったくできないがな。

「うむ！ その言葉を待っていたぞ！ 既に構想は練ってあるから3日もあれば完成させれるぞ！ ハーハッハッハッハッハハハハ  
A H A H A H A H A H A H A ……ゴホッゴホッ！！」

うん、どっから湧いてきた？

「うむ！ ついでにリミッターも何割か外すことにしよう！ なに、今の君なら大丈夫・無問題だ！」  
モーマンタイ

一体何が大丈夫なんだ？

選択肢というか、選択すらしてない気がする。

まだ頼んでませんよ？

今回もまた流されてしまった……

ただでさえ報告書の件で頭がいっぱいなのに……

そして期限までの比較的平和だった3日間……これが嵐の前の静けさ、か。

そんなことを考えながらヒューゴさんに呼ばれた……聖王教会本部の修練場。

なんでここでやるのかな？

そんなにカリムさんにボコられたいのか？

ヒューゴさんのドM疑惑が再浮上した。

「うむ、きたか……」

修練場に行くとき既にヒューゴさんがスタンバっていた。

「それで依頼（？）していた件ですが……」

「うむ！ まあ実演込みで説明するから起動させてみなさい」

実演って……何をする気だ？

疑問は多々あるが待機状態のセイクリッド・スカイを渡される。

待機状態は以前と変わらずだ。

「では機動します。セイクリッド・スカイ、セット・アップ」

【セイクリッド・スカイ・ファンダム起動します】

名前が既にアウ…いやギリセーフか？

デバイスが起動しフレームが現れる。

セイクリッド・スカイの見た目が短剣になった。

美しい装飾がなされたナックル・ガグザップキヨン護拳、握にフレイド鍰。そして刀身は白い翼のようなデザインになっている。

コア核であるセイクリッド・スカイは刀身のリカッソ刃根本に組み込んである。

イメージは上記特徴のシャルティエミニチュア版だ。

「——キレイです」

そう、思わずそう口にしてしまうほどだ。

だけど……

「これを振り回して使用して大丈夫なのですか？」

なんてゆるーかヴァンせんせい師匠と正面からやりあったら一発ポツキリな気がする。

もしかしたら儀式剣とかそーゆるタイプなのかな？

補助に特化しているとか？

まあ本来はブーストデバイスなのだが。

「うむ、そこまで頑丈ではないな。直接斬りかかる等には使用しない方が良さだろう。まあ魔力刃を展開すれば使えないこともないが……」

つまりは補助特化型か。

「ちなみに機能的な追加はない。あくまで見た目だけだ」

「……えっ？」

「まあ2割ほどリミッターを外したから出力は上がっているが、これは次のモードへと至るために用意されたものである。一応これからは起動時デフォルトがこれになる」

まさかの見た目だけ！！

「……そこまで言うからには次のモードには期待できるんですね？」

すごく怪しいが……

「うむ！ 早速起動してみたまえ！ 次はモード『ガンディーヴァ』だ」

ガンディーヴァって……

とりあえず起動してみる。

「セイクリッド・スカイ、モード『ガンディーヴァ』」

【モード『ガンディーヴァ』起動します】

短剣モードのセカイが2つに分身し、弓の形を形成する。

刃身の翼部分が伸び、弓の押付と手下を美しく形成している。  
アッパリープロアーリフ

確かに美しいのだが……弓ってどうなんだろう？

遠距離攻撃の手段を持っていれば必要なくない？

そんなことを考えているとヒューゴさんが回答をくれた。

「うむ。このモード『ガンディーヴァ』の特筆すべき点は遠距離用ではないのだ」

「えっ？ どういうことですか？」

「本来このデバイスはエレメンタルスフィアを改造して作りあげたブーストデバイスだ」

「まあ、そうですね」

「ブーストデバイスの主な特性は魔力射出・射出魔力制御の補助だ。このフレームにはそれを最大限に引き出せるよう回路を組み込んでいる」

「？ ということは遠距離攻撃用ではなく補助用？ 回路を組み込んでいるだけで弓である必要は……ない？」

え？ なにそれ？

「うむ。弓を用いた射撃・砲撃魔法はない。まあ補助・治癒魔法なら射つてもいいかもしれないな。だが特筆すべき点はそこではないのだ」

よかった、まだあるのね。

このままではどうかのおっさんみたく「愛してるぜ」とかいいながら治癒効果のある矢を撃つだけの存在になってしまう。

「このフレイムと回路にはエレメンタルスフィアの特性を更に引き出せるようになっているのだ」

「特性というと大気中の『水分』と『温度』を操れるという性質ですか？」

「うむ！　今まではそれを利用した魔力変換であつたが、これからはもっと直接的に大気中の『水分』と『温度』を操ることができるだろう……　ハーハッハッハッH A H A H A H A H A H A H A H A H A……　ゴホッゴホッ！！　まあ限度はあるがな」

それはすごいが……

「……弓の形状である必要はないですよね？」

「うむ！　美しいは正義だ！」

「……そうですか。ならその正義に殉じて逝って下さい……　セイクリッド・スカイ・ファンダム起動……　モード『ガンディーヴァ』」

「うつ、うむ、少々待つてく…」

「氷と雷のコラボレーションです。美しいものを目にしながら逝けるなんてヒューゴさんは幸せ者ですね？」

「いやっ、その……遊び心でな、決して無駄な……」

聞く耳持たん！！

どんだけ人をおちよくるつもりだ！！

今までの出来事の鬱憤<sup>ストレス</sup>……ここで晴らす！！

「絶氷と断罪！ いい加減その身に刻んで下さい！ セルシウス・キャリバー（仮）！！」

右手に冷気を纏った魔力刃、左手に雷を纏った魔力刃をそれぞれ展開・合体させ、敵対象を一閃する。

いつぞやの白昼夢で出会ったセイバー似のお姉さんの根性発言を参考にしたのだ。

まあ元ネタは『君と殴りあうRPG』からだが。

「ぬおおおお！！ よさんかああああ

ゝ  
／／  
………  
+  
— : 1 —  
／ \  
1 < —  
／  
i 1 —  
、



これからは定期的に何らかの形で息抜きもしなくては……

結果はいつも通りしようもないが、今回は珍しく何かやり遂げた感に満ちた終わり方だった。

ピロリン！

【セイクリッド・スカイ】が【セイクリッド・スカイ・ファンダム（SSF）】に更新されました！

ピロリン！

【なんちゃって断罪の剣】が【絶氷の剣】と【断罪の剣】に更新されました！

ピロリン！

【セルシウス・キャリバー（仮）】を習得しました！

ピロリン！

【魂のセカンドステージ】の称号を得ました！

## F 美しいは正義？（後書き）

集中してゲームする以前に書き始めていたお話：時間を空けるとその時に何を考えていたのか忘れますね。

何を書きたかったのか今になってはわからなくなってしまったお話です。

だいぶ迷走してまいりました…

りたまにはほのぼのを（前書き）

ほのぼの？ な話です。

面白さなんてありませんのでご了承ください...

どしたまにはほのぼのを

## 【魂のセカンドステージ】

説明：厨<sup>チュウニ</sup>二ングデバイスを手に入れた者に与えられる称号

条件：やらかしちゃったZE

効果：魔力→→ 妄想力→→ 羞恥心←←

備考：俺たちの黒歴史はこれからだ！ ちなみに名前に深い意味はない

ピロリン！

魔力がかなり向上したような気がします！

妄想力が「もういらんわ！！」

デバイス（正確にはフレーム）の件については現在見直し案を作成中だ。

作成から改造までヒューゴさんが行ってきたものだから中身が半ブラックボックス化しているため他には依頼できないからだ。

とりあえず短剣としても弓としても使えないことはないので取り急ぎというわけではないが……

件のヒューゴくたんさんはこれから別件で多忙になるらしく時間を見つけて考えておく、とのこと。

一体いつになるやら……

そして相変わらずの日々を過ごし、季節は流れた。

いつの間にか夏も終わり秋が近づいてきたこの頃、見事な晴れ空、お出かけ日和な休日。

今日は新作の甘味巡りスイーツの予定だ。

なんとカリムさんが一流パティシエ新作スイーツ試食会の招待券（てゆうか賄賂？）をくれたのだ。

「私は忙しくて行けそうにないから楽しんでらっしゃい。あとお土産は忘れず」

「丁度休みの日ですね、この日なら行けそうです。ありがとうございます」  
いますカリムさん。でも腐るのでお土産は無理です」

まあそう簡単には腐らんだろうが品質は落ちるだろうからお土産なんて無理だ。

「当日に悩んで何を買ってくるのか楽しみたかっただけよ。気にしないで」

鬼畜だな！！

そんなやりとりがあつて試食会の招待券をゲットしたのだが限定30組で1組2名までと書いてあつた。

しかも注意事項で『甘味ニウルサイ人求ム』と書いてある。

試食会というのだから意見を求める場なのだろうし当たり前か。

最初はラグナでも誘おうと思ったのだがSt・ヒルデ魔法学院の休日（祭日）であつて他にとっては平日なのだ。

どうしようかと悩んでいる矢先に会ったのがエミリオだった。

ヴァン師匠せんせいに用事があつたようで聖王教会本部まで来ていたそう  
だ。

早速スイーツの件を話すと……

「ふん、別に甘味スイーツなどに興味はない……が、どうしても言うなら行つてやる」

はいはいツンデレツンデレ。

「じゃあ今週の休日に駅前14時で、昼食は取り過ぎないようにね」  
そう約束して解散した。

なんかデートの約束っぱいなと思って後悔したのは内緒だ。

今更だがなんで野郎を真つ先に選んでしまったんだ……

まあ甘味スイーツにウルサイのは確かなのだが。

はあ、今回は友人と甘味スイーツを楽しむということにしますか。

## 閑話休題

件のお店は華やかなイメージではないが、どこか洗練された印象くだんを持っており、ウェイトレスに招待券を渡し歩道側のテラス席に案内された。

とりあえず準備に10分ほどかかるため、先に紅茶を入れてもらい一息つく。

「ふう、こんな休日は久しぶりです」

いつ以来だろうか、こんな穏やかな休日は？

まあ依頼アルバイトを受けたり、無限書庫に行ったり、修行だったり……

「ふん、自分で選んだ結果だろう。だったらウダウダ言っな」

「ごもつとも。」

「あれ？　そういえばシャルは？　やけに静かなのだけれど……」

うん、一言も喋ってないな。

「最近調子に乗っていてな。待機状態では喋れないようにしてある」  
その分修行中にうるさいがな、とのこと。

うるさいのもシャルのアイデンティティだと思うのだが……

「まあ外出時だけだ。普段はそこまで律していないさ」

よかったねシャル、まだ救いがあつて。

シャルがいないとエミリオも基本冷静だな。

折角の機会だし、踏み込んだ話をしてみるか。

「ねえエミリオは騎士になってどうしたいの？　最初は家出の理由だったかもしれないけれど、いつまでもそうじゃないよね？」

「……なんだ唐突に？」

「単なる興味と参考です」

目指すのは別にいい、だがそれを叶えてどうしたいのか、次はどうするのか。

ただそれが気になったのだ。

「ふん、多くの人を救いたい、なんてことはない。僕の望みは「もっかい言ってみやがれゴルアアア！」……なんだ？」

なにやら歩道の方で喧嘩騒動が……

「何度でも言ってやるよ！！ てめーがごぶわあああああっふ！！」

おいおい言う前に殴ったよ今。

てかそのままこっちに突っ込んできた！？

咄嗟にテーブルから離れなんとか回避！

飛んできた人はテーブルに突っ込み、おまけで頭から紅茶（HOT）を被って悶絶している……ちなみに顔面も痛そう。

殴った人を見ると……なんか世紀末なヒヤッハ―を連想させる人であった。

なにこれ不良？  
チンピラ

「おうおうわりいなボーズ共、廃棄物の不法投棄をしちまったぜ、ヒュファア！！」

いや廃棄物つてあんた……

「廃棄物は「焼却処分だな」……おうおうボーズわかってんじゃねえか！」

エミリオが割って入ってそう答える。

でもエミリオが言いたいのが多分あなたがたのこと……

「シャル出番だ」

【やっと出番が回ってきましたね！ もう退屈でしたよ！】

エミリオがシャルを抜き……

「廃棄物は貴様だ——塵も残さん！！ 浄破滅焼燬！！」

「ヒュファアアアアアアアアアアアア……」

エミリオがシャルに黒い炎を纏わせ振りかぶり——振り抜いた。

見事に周囲に被害を出さずに対象だけを燃やしているようだ。

これって炎熱変換の応用なのだろうか？

今度聞いてみようか……それはともかく実際に塵も残さないほど燃やし尽したら大変だろうが……

まあ実際は生きているし気絶しているだけのようで大丈夫そうだが。

「――闇の炎に抱かれて消えろ」

いや、生きているからその人。

「っ痛う、ハンツ、ざまあねえ「喧嘩両成敗です」へぶっ!!」

テーブルに突っ込んできた人の第一声が腹立ったので、顎を蹴ってこちらにも気絶させておく。

「シャル、モードリリース待機状態」

【えっ!? 出番これだけでええ……………】

シャル乙!

「まったく……食べている時じゃなかったからよかったものの」

でもなんでだろうか、自分一人だったら絶対に食べようとした瞬間に吹っ飛んできた気がする。

結論、どっちにしろ食べ損ねた。

あの後事情聴取で警防署へ……

エミリオが派手にぶっ飛ばすから……ほっとして絡まれるのは嫌だが。

そのおかげで新作スイーツを食べられなかった。

まああのまま通常営業というわけでもなさそうだが……

「穏やかな休日なんて幻想だったのでしょうかね？」

少し自嘲気味に嘆く。

「僕にもお前の悪運がまわってきたか……」

失礼だな。

「そういえばあの時の続きは？　僕の望みはぐっっていう件くだりのところ……」

ふと、あの時遮られた続きが気になった。

「ふん、あそこで横やりが入ったのも何かの『運命』だ。続きは胸の内にしまっておくことにするさ」

あらら、はぐらかされたよ。

運命というよりただの悪運？

「今回はアレだった機会があれば声をかける……付き合ってたやらんこともない」

はいはいツンデレツンデレ。

結局は何も食べられなかったけど、そこまで不満というわけではなかった。

これがプライスレスというやつかな？

何がと言わないが。

時刻は既に夕方、互いに悪態を付きながら帰路につく。

歩きながらふと紅く染まった夕空を眺める。

自然が彩る美しさはどこも変わらず、か。

「——今日は「ふん、疲れる休日だった」……ソウデスネ」

……今回は言う前にエミリオに締められました。

Ｄ たまにはほのぼのを（後書き）

そろそろリリカル（原作準備編）に戻ろつか悩み中…

原作準備編1〜主人公は調べものをするようです(1)(前書き)

今回はギャグオチではありません。

(ほんの) 少しでもStSに向けた準備のお話。

原作準備編1 主人公は調べものをするようです(1)

己を知り、敵を知ればなんとやら。

まあ己はともかく……

季節は更に流れ秋から冬へと移り変わった今日この頃。

ようやく時間もとれそうなのでStSのラスボス(?) 『聖王のゆりかご』について調べてみようと思った……のだが

「そもそも聖王について全然知らないですorz」

以前、シャルの件で真正古代<sup>エンシェント</sup>ベルカについて調べたことがあったが、肝心の聖王については調べたことがなく、ヴィヴィオの複製母<sup>オリジナル</sup>体で『最後のゆりかごの聖王』としか知識がなかったのだ。

既に聖王教会にだいぶ入り浸っており、教会系列のミッションスクールに通っているのに聖王に関して知識がないのは……マズイな。

まあ聖王教自体が緩いため、学院でもあまり徹底していないのか？

まずは無限書庫でゆりかごについて調べるより、学院の図書室で聖王や教会のルーツについて調べるところからだな。

今日は午前授業であつたため、午後から学院の初等科校舎図書室に行き、聖王について調べようと思つたのだが……

「『聖王』の項目多すぎます……」

そりゃそうだよな。

この学院は聖王教会系列だもん。

ここでは検索魔法を使うわけにもいかないので途方に暮れていると……

「あれ、リースさん？」

誰かに呼ばれ振り向くと、つい先日也会つたハズなのに何故か久々に会つた気がするエリオがおりました。

「こんにちは。リースさんここで会うのは珍しい……というより初めてですね。今日は何か調べものですか？」

相変わらず礼儀正しい子だこと。

ツンデレ共に見習わせたいね……気持ち悪いだけか。

「うん、少し調べてみたいことがあってね。エリオこそ調べもの？  
その言い方だと頻繁に来ているようだけれど？」

エリオは真面目だが、あまり勉強とはイメージが合わない気がするが……

「はい、放課後はよくキャラとここで宿題をやったりしてるです」

何気に青春の1ページだな。

「今日はキャラとは一緒じゃないの？」

キャラともしばらく……いや、つい先日会っているんだけどね。

なんでだろうか……しばらく会っていない気がする。

気のせいかな？

「今日はリタさんに連れて行かれまして……」

リタに連れて逝かれた……だと？

魔<sup>リタ</sup>の研究室にか！？

極光のトラウマがああ！？

「……研究室？」

「違いますよ、何でもこれからショッピングだとか……僕も誘われた

んですが、以前シャルティエさんに「女の子の買い物に付き合うには決戦に臨む覚悟が必要なんですよ？ 敗者に待っているのは別れのみです】って言われたことがあるんですよ。意味はよくわかりませんが今日は課題があったのでこっちを優先したんです」

シャル……お前は剣<sup>デバイス</sup>なのに何を経験してきたんだ？

それにしても仲良くショッピングとは……ちょっと……いや、かなり意外だ。

「最近によく『猫』派か『竜』派かで2人で盛り上がっているんですよ」

なんだその二択<sup>チョイス</sup>は？

まあきつとキャラの髪がピンクだから気が合うのだろう、そう思おう。

「そういえば何を調べているんですか？ 確か司書の資格を持っているんですからココより無限書庫の方が調べものには向いているんじゃない……」

「あつ、いや、たいしたことじゃないんだよ。ちょっと聖王教会のルートについてね」

この際、正直に話しておく。

「あつそれなら前回の課題で使ったオススメ本があります！ よければ持ってきますよ？」

1年生の課題レベルの話だったのか！？

そーいえば入学式から1年間休学してたっけ……

そりゃあ知らないわな。

「じゃあそれお願い。他にもオススメがあつたら教えてもらえる？」

「はい！ 今持ってきますのでちょっと待ってて下さい！」

元気なのはいいけど図書室では静かにね。

エリオが持ってきた本のおかげで聖王教会について基本的なことはわかった。

なんでも次元世界最大規模の宗教組織で『聖王』と『血族』、彼らの傍にいた『騎士』たちが信仰の対象らしい。

もしかしてシャルも信仰対象の騎士なのだろうか？

……嫌過ぎる。

「そついえばどうして聖王教会のルーツを？ この内容は1年生の授業でやったハズじゃあ……？」

エリオが痛いところを突いてくる。

極光のトラウマが……

「……入学式当日に全治１年の重傷でね、１年間休学していたんだよ」

「あつ、えつと……ごめんなさい！」

「気にしないで、ただのトラウマだから」

「そうは言っても……ってトラウマ？」

おつと失言だったか……さっさと切りあげよう。

さて、今後はもう少しだけ歴史について調べてみますか。

それから『聖王のゆりかご』について調べるとしよう。

図書室でエリオと別れ、借りた本を鞆にしまって外に出るとチラチラと雪が降っていた。

それは積るような量ではなく、まるで景色を彩るグラデーションのようだ。

それにしても雪か……どうりで普段より暖かいハズだ。

これでウチの自宅警備獣も活動すればいいのに……

冬はトグロを巻いて暖房の傍から離れないからな。

ただでさえ空気なのに自ら活躍の場を放棄するとは。

まあ、どーでもいいんだが。

雪景色に少しだけ浮かれながら帰路につく。

確かにJS事件は六課フラグが怪しいので不安だらけだが、幸い時間的に余裕があるので今の生活を、将来目的も含め犠牲にしてみても無理はしたくない。

自分にできる範囲で、できることをやっていくしかないのだ。

「少しずつ、少しでも前へ」

そんな思いを胸に抱きながら……

何気にギャグオチ以外の終わり方は久しぶりかも……ちよつとだけホロリときた。

原作準備編1〜主人公は調べものをするようです(1)(後書き)

もう一話似たような話が続きます。

原作準備編2 主人公は調べものをするようです(2) (前書き)

前回の続きのようなお話です。

まじめではないけどギャグでもない。

そんなお話。

## 原作準備編2 主人公は調べものをするようです(2)

オリヴィエ・ゼーゲブレヒト

『最後のゆりかごの聖王』でヴィヴィオの複製母体オリジナルにあたる人物。

古代ベルカ戦争終結後、他国を制し、ベルカ統一を図った人物…  
…？

その辺の記載は本によってバラバラで歴史研究でも諸説あるようだ。

中には後世でも有名で、物語にも出てくる英傑『霸王イングヴァルト』とも関わりがあったとか、そういう説もある。

ちなみに霸王イングヴァルトの伝記『シュトウラ戦記』は以前に読書レポート用で読んだことがあったが、オリヴィエの話は出てこなかった。

歴史は正確に伝わらないからこそ、ロマンが溢れるのだろうか？

一体どの説が正史なのやら……考えても仕方がないか。

とりあえず今は『聖王のゆりかご』について調べることになろう。

冬も終わりが見え始めた3月。

学年末試験を問題なくクリアし、長期休みに入ったある日のこと。

まとまった時間がとれたので無限書庫に向い、以前調べてみよう  
と置いていた『聖王のゆりかご』について調べることにした。

試しに『聖王のゆりかご』の単語で検索してみたが膨大な数がヒ  
ットしてしまった。

そのほとんどが歴史書であんまり役に立ちそうにない。

原作で司書長<sup>ユノ</sup>は短時間でよくあそこまで調べられたものだ……

仕方ないので検索ワードを変更してみるが上手くいかない。

検索方法が下手なのか、対象が探しづらいのか。

どうやら長期戦の覚悟で臨む必要があるようだ……

と挑み始めたのが2日前……もう既に挫折そうだ。

連日、無限書庫に来て調べているが成果は得られていない。

「聖王と霸王のキャフフなお話はもうおなかいっぱいです……」

霸王自身の回顧録とか相当貴重な本も見つけたが、もはや感動で  
きないくらい精神的に消耗していた。

もう諦めようかと真剣に考え始めていたところ、後ろから声をか  
けられた。

「キミ、大丈夫？ 連日ここに来て何か調べものをしているようだ  
けれど……困っているのなら僕でよければ手伝うよ？」

おお、有能な司書長さんだ……もはや自分にすらツツコム気力も  
ないわ。

さすがに疲れたのでユーノさんに簡単な経緯を説明し手伝っても  
らうことにした。

自分も忙しいのに見知らぬ子供の趣味（一応そついうことにして  
いる）にまで手を貸してくれるとは……

ユーノさんマジ有能！！

うん、少しは気力も回復してきたようだ。

自分の今まで集めた情報をユーノさんに教えキーワード及び除外項目を絞ってもらい、調べ始めて15分ほど……目的の資料が出てきた。

目的の資料が見つかった歓喜とスペック差を見せつけられた絶望感が心に響く。

「うん、これだね。しかし、この『聖王のゆりかご』はすごいね……」

ユーノさんが『聖王のゆりかご』のスペックを見て驚いている。

古代ベルカにおいて既にロストログア扱いの戦略兵器だもんね。

何か使えそうな情報はないか見てみるが、原作以上の情報は得られそうにないようだ。

ゆりかご内の『王座の間』と『駆動炉』くらいの位置は把握しておくか……

てゆーか、大質量の氷塊でも急襲してぶつけてやれば墮とせるんじゃないかな？

まあ、周囲の環境や内部の安全、『鍵の聖王』<sup>ウィウィオ</sup> +  $\alpha$ を気にしなければの話だが。

最悪はその方向も検討してみるか……そんなことを考えているとユーノさんがAMFの項目を真剣な表情で調べていた。

「これは……もしかして……いや、まさか……でも……」

何かブツブツと呟きながら思案している。

もしかしてガジェットの特との関係性を考えているのだろうか？

「あのーおにいさん？」

「あつごめんね！ 中々興味深い内容だったからつい……」

「いえ、こちらこそありがとうございます。おかげで知りたいことが知れました」

原作以上の情報は得られなかったが。

「うん、役に立てたならよかったよ。それとこの資料は僕の方で預かってもいいかな？ ちよつと調べてみたいんだ」

「ええ、かまいません。私の調べものは終わりましたので」

ユーノなら情報が『敵』側に漏れないと思われるし……これはもしかしてプラス方向の原作ブレイクフラグか？

ちよつとだけ希望が見えてきたかも。

「あつそうだ。僕は無限<sup>コ</sup>書庫の司書長をやっているユーノ・スクライア。キミの名前も聞いていいかな？」

なぬ？

何か厄介事の臭いがそこはかなくなるが……手伝ってもらって

おいて答えないわけにはいかないし、司書の資格もあるから嘘付いてもバレると思われるので正直に話しておく。

「St・ヒルデ魔法学院3年…いえ今度4年になるアペリス・ウラノです。一応ですがこの司書資格も持っています」

「そうなんだ。これからここで会ったらよろしくね」

「はい、では今日はここで失礼させていただきますね」

「うん、またね。今日は貴重な資料をありがとうアペリス」

礼を言うのはこちらだが……まあいいか。

ユーノにもう一度礼をしてから無限書庫を後にする。

未来はまだまだわからないが、少しずつは進んでいる……ような気がする。

少しだが希望も見えてきた。

「一步一步を着実に……」

そう自分に言い聞かせながら……

「キユウッ」

帰宅するとウチの自宅警備獣も暖かくなってきたからか、中々活発的になっている。

だからといって出番があるかは別の話であるが……

そして季節は冬から春へ

原作開始まであと3年

原作準備編2 主人公は調べものをするようです(2) (後書き)

そこはかとなくVividのフラグが…いずれ回収したいとは考えています。

次回はまたコメディ路線を予定。

次のキャラ(予定)は…

原作準備編3／主人公はあの人とすれ違ったようです（前書き）

当初予定の話と変わってしまいました…が連載2か月記念ということとであげることにしました。

ちなみに、すれ違いニアミスでは使い方おかしいんですね。

おかげで変なタイトルになってしまいました…

原作準備編3／主人公はあの人とすれ違ったようです

無事に4年生になることができた。

昨年を振り返ると色々とおったものだ。

……うん、色々とあり過ぎたな。

振り返るのはやめておこう……ただの自傷行為だ。

こうやって過去を切り捨て大人になっていくんだな……

ミッドでは色々な資格の受験資格が10歳から与えられるようだ。

魔法世界の就労年齢が低いだけはあるわ……

とりあえず講習のみで取得できるものから受講、単位になる魔法技術関連の資格を取得し、少しだけだが授業に出る時間を減らすことに成功した。

ちなみに他の生徒はほとんど知らない方法だ。

学院側としては授業に出て欲しいもんね。

まあ私たちはヴァン<sup>せんせい</sup>師匠やカリムさんの件で授業に出られない場合もあるので、特別に裏ワザを教えてもらったのだ。

今回はその空いた時間を有効利用し、遺失物管理の勉強をしてB級遺失物管理主任者の試験を受験することにし、見事合格することができた。

B級といっても結局C級に色が付いた程度といえるが……

ちなみにロストログア専門の研究者や聖王教会の管理主任であるてんてーは基本的に皆A級だ。

いずれはとっておきたいものである。

さて、季節は春から夏に移り変わろうとしている6月。

上記の話とはまったく関係ないが、今日はキャラ、エリオと一緒に第四陸士訓練校の見学にきている。

なんでもフェイトさんが昔ココの校長にお世話になったとか。

今日はその校長への挨拶と相談があるらしい。

せっかくの機会なので以前から訓練校に（ちよっぴりだけ）興味を抱いていたエリオに声をかけたようだ。

キャラもフェイトさんと会える機会なので一緒についてきている。

ちなみにフリードはお留守番。

ウチのハクと遊んでもらっている。

ドラゴン（？）同士なかなか仲が良いうで、ある日突然タマゴでもできないか心配な位だ。

さておき、フェイトさんも中学卒業したのだから、ミッドに住居を構え3人で暮らせばいいのに。

まあ今の実家は地球だし、本局勤めだから簡単な話ではないのだろうが。

てゆうか家族団らんの空間は部外者にとっては居心地悪い……

なぜ私が一緒についてきているかというと、フェイトさんからの要望だ。

なんでも2人の学院生活について聞きたいとのこと。

まあ、私自身も訓練校に少しだけ興味があったからOKしたのだが……正直この空気は辛い。

3人の後ろで一緒に来ていたフェイトさんの副官シャリオさんと苦笑いせざるを得ない。

それにしてもこのシャリオ…改めシャーリーさん、人懐っこいと

いつか、なかなか話しやすい人だ。

なんでシャリオをなぜわざわざシャーリー（酢飯）と呼ぶのか激しく疑問ではあるが、見た目で判断して子供扱いしないのかなかなか会話が弾む。

（ 実際はまだ10歳の子供です ）

デバイスマイスターの資格も持つておりセイクリッド・スカイにも興味津々で尋ねてきたのだが、製作者クリエイターのことを話すと「まさかあの伝説の…」と眩きながら目を逸らされ、謝られた。

それ以上デバイスの話題には触れてこなかった……公式メカオタ眼鏡を黙らせるヒューゴさんの伝説って……

フェイトさんが校長と話している間にシャーリーさん引率で訓練の様子を見学する。

シャーリーさんも専攻は違うがココの卒業生らしい。

道中懐かしみながら歩いている。

そして屋上からグラウンドで行っている訓練の様子を眺める。

どうやら今は障害突破の訓練のようだ。

連携して壁を突破する訓練のようだが……

「飛んでいますね……人を投げる訓練なのでしょうか？　なかなか斬新ですね」

「なるほど！　投げ方を練習する訓練なんですね！」

「ふえええ、怖そう……」

「いやいや違うからね！？　いや、投げるのは一理あるけど……一応連携して壁を越える訓練だから！！　間違つて覚えなくてええ！！」

上から、私↓エリオ↓キャロ↓シャーリーさん。

冗談だったのだが……お姉さん涙目。

ツッコミ役がいると楽だな、と思つたのは内緒だ。

障害突破の次、今度はグループで別れ射撃訓練と打撃訓練を行うらしい。

「せっかくだから近くで見てみようか？（間違つて覚えられない前に確実に説明しなきゃ！）」

シャーリーさんからそう提案があり、そこに鬼気迫る何かを感じたので一同頷き、射撃訓練場の方へ足を延ばす。

どうやら木々の奥に設置された的に誘導弾を当てる訓練のようだ。

「すみません。見学の者ですが近くで見せていただいてもよろしいでしょうか？」

「むっ見学だと？……まあいいだろう。未来の候補生を無碍に扱うわけにもいかないからな」

興味があっただけで誰も入校するつもりはないのだが……

担当と思わしき金髪美人の女性教官の許可を貰って近くで見学する。

「よし！最初に私が見本を見せる！皆、見学者もいる手前、情けない姿は見せるなよ」

何気にハードルを上げてしまっただけで申し訳ありません。

エリオわくわく、キャロおどおど、シャーリーさん苦笑い。

「よく見ておけ……いくぞ！」

どうやら見本が始まるようだ……とゆーかそんなに気合いを入れるものなのか？

「光の欠片よ、的を撃て！！」

えっ？

「プリズムバレット！！　　終わりだ！！」

……うん、確かに的を撃ったよ。

ちょっとダイジェストに説明していいとか。

『光の欠片よ』で足元に魔法陣が出現、周囲の訓練生を発生した衝撃波で吹き飛ばす。

『的を撃て』で二丁拳銃デバイスによるバレット連射、それにより障害物となる木々を吹き飛ばす。

『プリズムバレット』で障害物の無くなった的に向け極太レーザーを放つ。

『終わりだ』でレーザー着弾、爆発。そして的を消し飛ばす。

確かに『的』は撃った。

「吹き飛ばしましたね……これも障害突破（+的の撃破）の訓練でしたか。弾幕の数と威力、双方を重視しているんですね」

「なるほど！ ジャブとストレートの使い分けをする訓練なんですね！」

「ふえええ、スゴイです……」

「違うから！　違うから！！　違うからああ！！！！　ただの誘導弾で的に当てるだけの訓練だからああ！！　お願いだから間違っ覚えてないでええ！？」

ヤヴァイ、何かクセになるかも……ごめんねシャーリーさん。

それにしても魔にゆ……じゃなかった、魔弾さんがいらっしやるのは……ヴァン師匠せんせいとフラグは立っているのだろうか？

今更だがこの世界は一体どうなっているんだろう……？

カオスだ……

すっかり消沈してしまったシャーリーさんを連れ、フェイトさんと合流し帰路についた。

それにしても訓練で2回とも吹き飛ばされていた人に見覚えがあるようない……

まっ気のせいかな。

さて、休日はおしまい。

明日からまた学業に励むとしますか。

原作準備編3／主人公はあの人とすれ違ったようです（後書き）

漫画版は知らなかった主人公。

まさかのティアナさんと…すれ違い？

そしてティア繋がりであの人が登場。

ティアナ強化フラグが立ちました

ゆかなさんはツヴァイさんだが…モーマンタイ！

原作準備編4、主人公は勝負に勝って試合に負けるようです（前書き）

少しずつだけ原作に向け時間は流れます。

今回は一気に時間を飛ばしたかったが、飛ばせなかったための小話。

原作準備編4 主人公は勝負に勝って試合に負けるようです

夏も終わり秋といえる季節になったころの放課後、ヴァン師匠<sup>せんせい</sup>から呼び出しの連絡が入った。

呼び出し場所は来賓用の応接室。

ソファの座り心地がハンパない、憧れのサボタージュスポット。

指定された時間に行ったがヴァン師匠<sup>せんせい</sup>はおらず、エミリオしかなかった。

どうやらヴァン師匠<sup>せんせい</sup>は若干遅れている模様だ。

「ふん、呼び出しておいて遅れてくるとは……何様のつもりだあのヒゲは」

きつとあなたと同じ俺様だよ。

「ヒゲはどうせまだ来ないんだろう？ 喉が渴いたからお茶を入れろ」

うん、お前も俺様確定だな。

てゆーか私はお前の茶坊主でもねーんだが……まあせつかなので高級茶葉でも使わせていただきますか。

ちやつかり高級茶菓子もいただきながらヴァン師匠<sup>せんせい</sup>を待つこと30分、ようやく件<sup>くだん</sup>のヒゲがきた。

「うむ、遅れてすまないな。手短に話そうと思うが、なにぶん先ほどまで音楽の講師をしていてな。悪いが茶を一杯入れてもらえるか？」

ヴァン師匠<sup>せんせい</sup>は教師をやめてからも非常勤講師として音楽を担当している。

そんなに音楽が好きなのかこのヒゲは？

てゆうーか私はお前の茶坊主でもねーよ。

師弟揃ってなんてゆうー俺様だ……まあもう一人の弟子<sup>リタ</sup>も唯我独尊だが……あれ？

「師匠<sup>せんせい</sup>、今日の用事にリタは呼んでいないのですか？」

いつもは3人揃ってが多いのだが……

「うむ、リタには先に話してあるのでな。来週の休日の話なのだが……」

要約すると来週に知人の結婚式を聖王教会本部で行うため、来週

は稽古なしで式の準備を手伝ってくれとのこと。

「それは構いませんが具体的には何をするのですか？」

「なに、指輪を持っていく仕事だ。昨今の式ではSt・ヒルデ魔法学院の生徒がその役をやることが多くてな」

ああいわゆるリングボーイ……

「ああいわゆるリングガールでな……」

ヴァン師匠せんせいがそう言った瞬間、私は屋外に飛び出していた。

以前の研究棟消滅事件より習得していた物質透過跳躍魔法だ。

これも無限書庫でのランダム検索で見つけた戦利品だ。

スマン、エミリオ……式を挙げるカップルに幸せを届け……

「逃げ切れると思ったか！！ 墜ちろ！！ デモンズランスー！！」

一瞬でもエミリオに謝ったことを後悔しまし……

「なにを勘違いしている？ その役は既にリタに頼んである」

要は雑用ね……無駄にダメージを受けたよ。

でもなぜだろうか、あの時は逃げた方が良いと直感（偽）で感じたのだが…？

「ふん、面倒だがまあ良いだろう」

エミリオはOK、てゆーカリタがOK出したのだろうか？

激しく疑問だ……

そして式の当日、私たちの仕事は主に来客の案内だ。

とゆーかビックリ！！今日はKY……じゃなかった、クロノさんとエイミィさんの結婚式のように。

着飾ってはいるがドコかで見たとある人たちばかりだもん。

聖王教というか、ミッドの習慣というか、結婚式といえど厳密に親族だけではなく上司、友人と思われる人たちがたくさんいる。

「あれっアペリス？ 今日の手伝いなのかい？」

声のする方を向くとばっちり礼服で決めているユーノさんが来ていた。

ちなみに私たちの恰好は学院の制服（長ズボンVer）だ。

「ええ、こんにちはユーノさん。今日は案内係ですが」

ユーノさんとは半年前の無限書庫での出会い以来、ちよくちよく話す仲になった。

「そっか。あつ、式を挙げるクロノなのだけど僕の友人でね。よかったら君も式を見ていつて祝ってあげて。じゃあ、お仕事頑張つて」  
そう言つて中へ入つて行つた。

来客の案内をしている途中だったが、ヴァン師匠せんせいから呼ばれていると教会スタッフに言われたので、残りは中等科生徒の手伝いに任せ教会スタッフがいる控え室に行くと……

「うむ、来たか……少しトラブルでな」

ヴァン神父とカリムさんがおりました……激しくツツコミを入れたところだが今日はめでたい日なので自粛する。

いつものパイナッポーヘアではなく髪を下ろし、なんだかいつもよりキリッとしている。

なぜだろうか、この声この姿で某マーボー神父を連想した私は悪くないと思う。

「それで……トラブルとはなんだ？」

エミリオがそう尋ねる。

視線は微妙にヴァン神父せんせいから逸らしているが……

「うむ、リタが交通事故による渋滞でこられないらしいのだ」

絶対ウソだ、エミリオと視線を交差させ頷く。

初めからくる気なんてなかったんだろうアイツ……本気でくる気があるなら転移魔法とか絶対使っているハズだ。

「……それで？ 僕たちを呼んで……どうすると？」

薄々と感づいてはいるが一応尋ねるエミリオ。

あの時の直感（偽）はコレのことだったか……

カリムさんがヴァン神父せいせいの代わりに答える。

「最初は中等科の生徒にでも代理を頼もうと思ったのだけれど、何分用意したドレスのサイズが合わなくて……なので……」

それ以上の言葉はいらなかった。

エミリオと向かい合い、互いにデバイスを起動する。

そう、これは男と男のプライドを賭けた聖戦たたかいだ。

「——覚悟はできたか？」

【覚悟はできましたか？】

「——あなたの晴れ姿を眺めて笑いを堪える覚悟？」

【それもいいですねえ】

「……」

【誰か構って下さい……（泣）】

一瞬の沈黙……そして……

「遠慮はしません！ アストラルベルト……」

片やデバイスを使うと見せかけ、逆の手で発生させた魔力刃による抜刀術の如く高速の薙ぎ払い。

「くっ、散れ！ 月閃光……」

片や三日月のような軌道を描く斬り上げと魔力による衝撃波を伴った剣技。

一瞬の交差、結果は……

「くっ、この僕がつ！」

魔力刃がシャルを吹き飛ばしエミリオの肩にヒットしている。

デバイスと見せかけた不意打ちの分こちらの方が早かったようだ。

「ごめんなさいエミリオ、男には絶対に負けられない戦いがあるんだよ」

エミリオは肩を押さえ俯いている。

スマン、恨むならリタを……

「エミリオくん大丈夫？ ああ痛そうね、これじゃあ指輪運びは厳しいかも……」

なぬ？

「ふむ、ならばアペリス、申し訳ないが頼んだぞ？」

あれっ？

今回は勝った……よね？

【オワタ＼（＾o＾）ノ】

シャルうつさい。

勝負に勝って試合に負けた。

ピロリンー！

【なんちゃってアストラルベルト】が【アストラルベルト】に更新  
されました！

結論、なんとか回避できた。

なんでも身内（？）ということでエリオが花撒き、キャロがベールガールを務める予定だったので急遽変更してもらい、キャロがリングガール、キャロの代理にアルフ（幼女）がベールガールを務めることになった。

最初からそうしろよ！　と思った私は悪くないと思うんだ。

普通は身内とかでやるもんだろくに……カリムさんは確信犯だろうが。

無駄な聖戦たたかいを繰り広げた自分たちは後方の席で式の進行を眺めている。

すっかり意気消沈……とユーが精神的にまいった。

ヴァン神父せんせいの普通の台詞では「誓いますか？」のところ、「汝は誓うことができるか！！」とかツッコミどころ満載の台詞にも反応する気がしない。

式は滞りなく進み披露宴へ、自分たちお手伝いの生徒はここでお開きだ。

はつきり言って今日も碌なことをしていないが……めげない。

だって主<sup>ミ</sup>「さつさとリタを探しにいくぞ」……言えなくたって泣かないし。

ちなみにその後の『外道なるタイダルウェイブ』と『仁義なきピコピコハンマー』は別の物語……  
おはなし

原作準備編4〜主人公は勝負に勝って試合に負けるようです（後書き）

実はクロノとエイミィの結婚式である必要性がないお話でした。

会ったのユーノだけですし…しかも挨拶のみ。

ちなみにヴァン神父とマーボー神父は中の人と同じなので…

ちなみにクライド（クロノ父）も同じらしい。

そのネタを書きたかったが無理でした…

次回は原作2年ほど前のお話を予定中。

中々原作が見えてこない…

原作準備編5、主人公は超展開についていけないようです（前書き）

どうしてこうなった？

原作準備編5／主人公は超展開についていけないようです

旧い結晶と無限の欲望が交わる地

死せる王の下、聖地より彼の翼が甦る

使者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる

——預言者の著書より

確かこんなだったっけ？

明らかに管理局がヤバイと思われる内容なのに、トップの好き嫌いで蔑ろにしているものではないだろう……まあ今の段階では漠然とした管理局システムの崩壊程度しか読み取れないが。

大規模災害などに関しては的中率が高く、管理局や聖王教会からの信頼度はお墨付きなのね。

新暦73年、春から夏に移り変わろうとしている季節のこと。

預言はさておき、カリムさんの紹介で文芸翻訳の仕事をしたがやらせてもらっている。

なかなか大変だが……訂正、凄くハードだ。

正直、最初の依頼で朽ち果てかけたが、そこそこの評価を貰え、そのクライアントの紹介で別のクライアントから少量だが仕事をもたらしている。

現在の仕事内容は主に古代ベルカの書物について、本質を失わない程度に面白可笑しくコメディチックな翻訳をしている……もちろんクライアントの依頼だが。

なんでも、正確な翻訳なら自分でできるが、あえて他人の意見（面白い解釈）を聞いてみたい、という考えらしい。

なめてんのか？ そう思ったこともあったが古代ベルカ語は正確な解釈の方が難しいので、こっちの方が性に合っている……気がする。

ちなみに評価はなぜか上々、クライアント曰く「娘たちが気に入っている、独創性があり（過ぎて）もはやマジキチ」らしい。

決して褒められてはいないのがミソ。

クライアント名は『オレンジ博士』……期待には全力で、か？

どーにでもなれ。

最終チェックが完了し、クライアントに送ったのが今朝方。

いわゆる完徹状態だ。

幸いにも今日の授業は午前で終了だ。

理由はなんだったか忘れたが……早く下校しろとは言っていた気がする。

とりあえず図書室から借りていた本を返却して帰ろうと思ったのだが、あまりの眠たさに少し仮眠をとっていくことにした。

20〜30分程度でも睡眠をとるだけで大分違うのは実証済み、  
図書室隅っこの目立たないところで仮眠を……おやすみなさいZZZ

「——そんなことはありません!!」

何か言い争うような声が聞こえて目を覚ました。

時間を確認すると既に15時を回っていた。

「寝過ごしましたか……」

まあ帰っても今日は寝るつもりだったので別にいいが……

とりあえず声がした方を見ると人影が……大人と子供？

片方は見たことがある、確か新任教師の糸目野郎だ。

確か歴史が専門で良家の出だとか何とか……どーでもいいが。

もう片方は……見覚えがない幼女だ。

碧銀の髪に虹彩異色……どこのオリ主だよ！　って感じた。

ミッドでも虹彩異色は非常に珍しいのに……

「——その解釈は正しくありませんよ？　まったくこれだから子供は……」

なんだかよくわからんが良い雰囲気ではないようだ。

てゆーか教師がそんな台詞を言うな。

このまま帰るのもアレなので、ついでに話を聞いてみるか……スルーも辛いし。

「何をもめていらっしゃるのですか先生？　それにそちらの子は？」

「ん？　なんだ、まだ生徒が残っていましたか……今日は来年度入

学予定者の見学会で早く帰るよう連絡があつたでしょう?」

ああ、そういえばそうだったけ……忘れていたのはそれだった。

「お恥ずかしい話ですが、疲れていて眠ってしまったようです。何やら言い争う声で目が覚めたので気になりました……」

「ならばさっさと帰りなさい。本日の下校時間はとくに過ぎているですよ」

あらら、取り付く島もないよ。

しょーがない、こっちも切り出してみるか……

「ええ、帰りたいのは山々ですが少し気になりました……見学会ということはこの子1人だけではないですね? もう時間が時間ですし、他の子は帰っているのかもしれないですけど、女の子と2人きりで図書……」

「少し歴史について講義していただけです! 変な勘違いはやめていただけますか!？」

どうやらニュアンスは伝わったらしい。

「そうのですか? その割にはもめていたようですが……?」

今度は幼女の方に尋ねてみる。

んっ? この特徴的な髪と瞳の色についてどっかで見たような……

「……わたしが図書室を見ていきたいと頼んだんです。シュトゥラの歴史について知りたかったので……」

幼女がそう答える……この年齢でシュトゥラの歴史についてとはなかなかに渋いなこの子……まあここは聖王教会系列だから、古代ベルカ関連の本もたくさんある。

「ええ、そうです。それで案内をして少しばかり教鞭を振らせていただきますしてね……まったく、この子は聖王と霸王の関係について間違った解釈してしましてね。ですから正しい歴史について教えていたのですが……」

「——ですから霸王と聖王は同じ時代で……！」

何やら歴史うんぬんの考えでもめているようだ。

でも確か古代ベルカ諸王時代の話は……

「そもそも現代の歴史研究でも明確になっていない事項では……？」

ギロリ！

2人に揃って睨まれました……

どうやら2人には譲れない持論があるようだ。

2人の目が『お前はどっちだ！』と語っている気がする。

「……まあ私はどちらかというと聖王と霸王の姉弟仲説ですね」

以前に回顧録を読んだことあるし……

「——いいでしょう……ならば決着をつけましょう。聖王と霸王、どちらが優れた王であつたかを！」

えっ？ 何言ってるのこの教師？

「——わかりました。あなたに霸王の悲願を受け止められるかわかりませんがお相手いたします！」

ええ！？ この子も何言ってるの！？

てゆーか何この超展開！？

レッドクリムズ「ほら、あなたも行きますよ！ わたしたちの説が正しいと証明するんです！」ドナドナアッ！

そう言つて少女に引つ張られる自分……

なんだか（超展開な）厄介事に巻き込まれたようだ。

聖王マンセーな糸目教師（狂信者）VS霸王幼女（+主人公）

始まる……のか？

「——ん？」

ふと目が覚め、時間を確認すると既に17時を回っていた。

「寝過ごしましたか……」

まあ帰っても今日は寝るつもりだったので別にいいが……

「何か理不尽で超展開な夢を見ていたような……」

思い出せない……まあ夢ってよく忘れるし、気にすることでもないか……でもなぜだろう？ 体の節々が痛い気がする。

「ふああゝ、早く帰ることにしますか……ん？」

よく見ると一冊の本が机の上に置いてあった。

「はあ、誰か知らないですけど、ちゃんと片付けていつて欲しいですね……」

そう呟きながら本棚に戻す。

「それにしてもシュトゥラ戦記ですか……懐かしいですね」

背表紙を見て懐かしんだが、時間が遅いのでさっさと帰路につく。

——本に挟んであったメモには気づかず……

原作準備編5}主人公は超展開についていけないようです(後書き)

Vividまでいけたら語ります(笑)

原作準備編6、主人公は盗み聞きしてしまったようです（前書き）

原作準備編では常に称号『時を駆ける男（笑）』が発動中！

おかげで時間が勝手に進んでおります。

原作準備編6、主人公は盗み聞きしてしまったようです

マイナスも極端な値であれば『いつそのこと』と思える。

何事も中途半端なほど扱い難く、大変だ。

いや、ホントにね……

新暦74年の春、無事に中等科に進学することができた。

これでようやく短パンからの卒業だ。

時が経つのはホントに早い……まるで時を駆けているようだ。

言いて妙だと思ったが気にしない。

今年に入って聖王教会が保管するロストログアが増えてきたので、目録作成を再依頼された。

別にいいのだが……なんで他にやる人がいないんだろう？

確かにやり甲斐はないが……やれよ教会、そう思った私は悪くないだろう。

今回は量が少なかったので休日に無限書庫で徹夜し、目録を完成させた。

その足で聖王教会本部のカリムさんのところへ向かう。

「依頼あった目録の件ですが完了しましたので報告します……ふあ……」

話している相手には申し訳ないが眠いものは仕方ない。

「あら、徹夜かしら？ 今日午後からグランツ団長との稽古ですよっ？」

そうなのだ……どこかで仮眠をとらなければやってられん。

「仕方ないわね、横に仮眠室があるからそこを使いなさいな。その調子では稽古にも身が入りませんしね」

珍しく優しいな、と疑問に思いつつも睡眠欲には勝てず仮眠室を借りることに……

仮眠室は執務室の隣であり、どちらかというと執務室の付属部屋といった感じだ。

中に入ると眠気に拍車をかけるように簡易ではあるがベッドが設置してあった。

いざ飛びこまん！　と思っただ、直感（偽）が警告を上げる。

なぜだかわからないがベッドは危険という信号を発している。

まあベッドで眠ると時間までに起きられる自信がないので、仕方なくデスクに腕を枕代わりにして顔を伏せ眠ることにする。

「おやすみなさい……ZZZ」

意識が朦朧としてきた中、そういえばここはカリムさんの執務室付属の仮眠室だと思いだした……ベッドも普段は……それをネタに……ああ意識が……

何気にカリムさんへの信頼感0だな、眠りに落ちる寸前に思った……

「——そーなんよ。お上は頭が固くてたまらんわ」

ふと、隣の執務室から話声が聞こえてきて目を覚ます。

稽古の時間には……まだ余裕があるようだ。

今出ていくのも躊躇われたので、どーしよーかと悩んでいると会話の続きが聞こえてきた。

「——ええ、それでも試験的とはいえ、新規部隊の発足を認めてくれたのだから……」

「——それはわかってるんやけど……」

この独特なイントネーション & amp・話し方は……もしかしてはやてさん？

話の内容は六課のことについてだろうか？

てゆーかこれって盗み聞きだよね……

「——保有制限に関しては仕方ないわ。リミッターはあくまで裏ワザに過ぎないもの」

「——せやけどな……結局思った通りにはいかんか……」

リミッター……六課メンバーについてか……

「——確かに偏り過ぎとるし、無理言ってるんはわかるんやけど……」

「——今回は相手の方が正論ですしね」

「——なにが『戦力を遊ばせておいて、いざという時に全力を出せないなど言語道断！』や……正論な分辛いわぁ」

えっ？　もしかして裏ワザは認められなかった？

「——その分、私やなのはちゃん、ヴィータのリミッターは無いから、完全に詰んだわけではないけど……やっぱりフェイトちゃんやシグナムがおらんのはな……新人もBランク程度を2人までしか獲れんし……」

ええええええええ！！　六課戦力に変更あり過ぎじゃねえ！？

「——まあ、正式な事件となればリミッターのないフェイトちゃんやシグナムとも合同で調査に当たれるから、致命的なマイナスではないんやけど……」

そーなんだ……かしなんでこんな差異があるのだろうか？

「——仕方ないわ、正論は向こうにあり、しかも相手はアレクセイ・デイノイア閣下……海の英雄ですもの」

まいたけ政権か！？

まさかいたのか、セン＝ハラン星人……しかも海の英雄って……

「——設立自体は賛成しているのだからポジティブに考えないと」

「――夢の部隊が……」

どうやら差異はDQNな鬼畜閣下のせいらしい。

リミッターという裏ワザが認められなかったため、発足前にライトニング分隊の消滅が確定したようだ。

「――現実は厳しいな……」

いやホントにね。

始まる前からStSは詰んでしまっている気がするのは私だけだろうか……

はやてさんが帰った後、何食わぬ顔でカリムさんに礼をして稽古に向う。

「どうしたのでしょうか……」

正直な話、六課は原作より戦力不足だろう。

それが決定的なマイナスかというと微妙だが……

自分にできること……戦力？ ……あり得ない。

原作時、エミリオやリタなら専門・得意分野でA A A→Sランク  
はありそうだが、私は頑張っても総合でAランクくらいだろう……  
まあ限定的にならSランク相当の魔法も使えないことはないが……

管理局員の平均を考えると高いのだが……その程度のランクで」  
S事件に関わるには危険過ぎる。

本気で氷塊作戦でも考えようか、いつそのことロストロギアでも  
使って……でも調べたらアレって『限りなく黒に近いグレーな魔法』  
なんだよね……ロストロギアも基本的にアウトだろうし……周囲の  
被害も甚大じゃないだろうし……

「とりあえず今日こそはヒゲを燃やしてやりますか」

考えてもすぐに答えなど出ない。

楽観的だが、今はVSヒゲに集中しよう。

……原作まであと1年。

原作準備編6、主人公は盗み聞きしてしまったようです（後書き）

別の黒幕（と思われる人物）が出現しました。

次回もまだ原作前のお話です。

（多分原作時間まであと1、2話です）

積ゲーがハンパないのでしばらくはそっちに集中するかも…です。

原作準備編7／主人公は男同士で語らうようです（前書き）

会話がメインなお話。

割とまじめ？ と見せかけて…

原作準備編7／主人公は男同士で語らうようです

結論、様子見。

あまり悩み過ぎるとゲシュタルトがマツハだったので切り上げた。

新暦74年の8月のこと。

とうとうバイク免許を取得することができた。

12歳でOKなのかは激しく疑問だったが……

まあ転倒防止のための非常用オートジャイロや衝突時の防護フィールド発生装置が搭載されており、かなり安全な仕様らしい。

せっかく免許を取得したのにバイクがないというのは悲しいので、バイクに詳しいと思われるヴァイスさんに相談したところ……

「おつ、もう免許をとっちゃったのか……しかも自分のバイクだとはガキのクセに生意気だなーおい」

そりゃあね、12歳のガキが自分のバイクなんて生意気そのもの

だろうが……

「まっ、俺もガキのころから単車いじってるからな……いいぜ、俺の中古を格安で譲ってやるよ」

なんでもヴァイスさん新車購入予定があるようで、中古を格安で譲ってくれるとのこと。

「とりあえず走ってみてからだな。よし、今度ツーリングに行くぞ。予定空けとけよ?」

ちなみに妥当でリーズナブルな値段でした。

翻訳と目録作りで稼いだ額の半分近く持っていかれた……まっ、もう半分は免許取得の際、既に消えていたが……おかげで残高が……

次の休日の昼前、予定通りヴァイスさんとバイクの見定めを兼ねツーリングへ。

件のバイクは黒がメインのどちらかというとシンプルなイメージ<sup>くだん</sup>だった。

個人的には見た目だけで80点以上はあげられる、といったところだ。

ちなみにヴァイスさんのバイクは赤がメインの新車だったがな……

…多分だけどゆりかごに突入するやつだと思われる。

ヴァイスのバイクはティアナのモノ、ティアナのバイクはティアナのモノ、そんなフリーズが一瞬頭をよぎった……うん、きつと気のせいだな。

「おう、きたか。さつさと用意しな。すぐにでるぜ！」

ヴァイスさんも新車が楽しみなのかノリノリだ。

まあ私も同じ気分なので、ヴァイスさんの言葉に従い準備する。

「——これより私は風になります」

ドキがムネムネしたきたぜ！！

ヒヤッハー！ と叫びたくなる気持ちがあるほんの少しだけわかった気がした。

「——少しばかりはしゃぎ過ぎたみたいです……」

「——だな、だがいいもんだろバイクは？」

1時間ほど走ったところでドライブインと思われるところがあったため、食事も兼ね休憩に立ち寄った。

軽食を済ませ、食後のコーヒーで一休み、ヴァイスさんがバイクの感想を求めてきた。

「どうだったアイツは？」

「気に入りました。流石はヴァイスさんがチューニングしていたバイクですね」

「当たり前だろ？ どれだけ費やした愛車だったと思うんだ？」

まあ、あなたはそれを売ろうとしているじゃないですか……

「一括で……よろしいでしょうか？」

「おう、商談成立だな」

しかも面倒な手続きはやってくれるとのこと。

ピロリン！

【ヴァイスのバイク（中古）】を手に入れました！

そんなフレーズが聞こえた気がした……

そしてツーリングを再開し……時刻は夕方。

最初の場所まで戻ってきて、ヴァイスさんがバイクの調整を行ってくれている。

今日の走りのデータより私に合わせセッティングしてくれるとのこと。

何気にデバイスでデータを取っていたらしい。

やるなストームレイダー……さすがはインテリ型。

ヴァイスさんが調整している間にバイクから離れ、朱色に染まった空を眺める。

今日は楽しかった。

そんな日々が続けばいい……でも

「——」S事件……そんなに楽観視はできないんですね」

あれから自分はどうするべきなのか考えた……その結果は……

「——」な〜に黄昏てんだ？ 顔に悩んでいます！ って書いてあるぜ」

おっと、調整が終わったであろうヴァイスさんが缶コーヒーを両

手に、そして片方を私に投げながら話しかけてきた。

うーん、ポーカーフェイスには自信があっただけど……

「まっそれでも飲んどきな。あんまり悩んでるとおっきくなんねーぞツルペタ？」

もともとねーよ。

「すみませんね、朝に『悩みの多い人には見えないマジック』で書いてきてしまつて……」

「なんだ皮肉か？ 俺がノーテンキな奴つて」

皮肉に対して皮肉で返したただけだ。

「俺にもでっかい悩みがあるっつーの。まっ、それで？ 何悩んでんだ？」

「いえ……結論は出ています。結局はしばらく様子見です」

考えた結論だ。

「なんだかわからんがえらく消極的だな。もっとう……俺がやってやる！ ってのはないのかよ？」

「ないですね。そもそも不確定要素が多すぎて……当事者になると最悪を招きかねないですから」

キヤロの件とかは微妙だが、少なくとも六課リミッターの件につ

いて自分は関係ないだろう。

つまり、関わらなくても世界は最初から原作通りではないということ。

まあ変な生物<sup>ハク</sup>が出てきた時点で既にアレだったが……

「まあアレだ。やらないで後悔するより、やって後悔した方がいいんじゃないのか？ まっキレイゴトだとは思うがな」

「ごもつともだが……」

「——頑張った結果がバッドエンドでは嫌ですから……」

何事も報われるわけではない、そんな世界だから……

「はあ、好きにすればいいんじゃないか？ 俺としてはラグナさえ泣かせなければ

文句は……最小限にとどめてやる」

この人、地味にシスコンだった……まあいくら様子見とはいえ、最悪を起こすつもりはないし、いざという時は動く覚悟も……って結局は文句を言うのかよ！

まったく……文句を言われないように頑張りますか。

「そうですね、ヴァイスさんに文句を言われない程度には頑張るとしましょうか……ところで、ヴァイスさんの『でっかい悩み』というのはなんなのですか？」

せつかなので切り返して尋ねておく。

「ん？ ああ……いや、その……なんだ……アレだ……」

えらく歯切れが悪いな、そう思いながら缶コーヒーを飲み……

「——実は今度……結婚するんだ」

吹き出した。

うん、この世界はなかなかカオスだ……改めてそう思った瞬間だった。

原作準備編7ゝ主人公は男同士で語らうようです（後書き）

世界が変わっても歩く死亡フラグ男は変わらず…

とりあえず積みゲーは準備編が終わってから消化します。

ちなみに準備編は次がラスト…

原作準備編8〜主人公は覚悟を決めるようです（前書き）

原作準備編ラスト…

最初の予定から3回は書き直して、結局別の話になりました（笑）

原作準備編8 主人公は覚悟を決めるようです

「俺、今度の新部隊への出向任務が終わったら結婚するんだ……」

——その後、彼の行方を知る者は誰もいなかった……

……ならばいつそ先に入院させておこうか？

そう考えた私はだいぶ焦っていたんだと思う。

新暦75年、冬も終わりを告げ、春の足音がヒタヒタと聞こえてきそうな2月のこと。

時刻は昼過ぎ、場所は聖王教会本部中庭にある噴水前。

着崩した黒いYシャツに赤いネクタイ、黒のスラックスという  
つもより（ちよっぴり）決めた格好で佇んでいる自分<sup>わたし</sup>。

なんでこんな恰好 & a m p ; 場所にいるかというと……

「お・ま・た・せ　もしかして待ったあゝ？」

「……イイエ、イマキタコロデス」

これだけ聞けばまるでデートの待ち合わせのようだが……

「もうっ！　このっ子たらあゝ　ちゃんと待ち合わせの常套句を  
わかっているじゃないゝお母さん嬉しいわゝ」

待ち合わせの相手はお母様だ。

「じゃあ早速行きましようゝ」

「……ハイ逝キマシヨウカ」

そう言いながらノリノリで腕を組んできた……

唯一の救いは意外と年相応の落ち着いた恰好であったこと……言  
動はアレだが。

なぜこうなったかというと数日前に遡る……

「JS事件のことやヴァイスさんの死亡フラグ発言、カリムさんの……まあ、色々な件で悩んでいたある日のこと。

「——リリース！ 今度お母さんとデートするわよ」

「……はい？」

お母様がいきなりそう宣言した。

「だって最近難しい顔ばかりしているし……それに2人でお出かけなんて数えるほどしかないじゃない！！ お母さんも寂しいのよハッ！！ もしかしてこれが反抗期なのかしら！？ どうしましょう！！ ウチの子がグレ……」

「別にグレてませんから！ ただ色々と考え事というか……」

「じゃあ決定ね 今度の休日にしましようか、場所は……」

……流されました。

それよりも【検閲削除】歳で（キラッ）はやめてホシい……星なだけに。

さぶっ！

まあ結局いつも通り流されただけなんだがな!!

「この服なんてリースに似合うかも」試着してみない？」

「しません」

現在、絶賛ウィンドウショッピングしている。

てゆうかそれレディースやん……

「もう」似合うと思ったのに」

お母様とは顔立ちこそ似ているが、髪色も瞳の色も異なるため、ギリギリ親子として見えるようだ。

てゆうかこの世界は妙齢の婦人が多すぎるといつか……お母様も未だ20代前半くらいにしか見えない……

「せっかくカツコイイんだから可愛い恰好しないと損だぞ」

その理論は変だろ？

「仕方ないかゝじゃあ次行くわよ」

はあ、先が思いやられる……

それから2時間後……

さすがに歩き疲れたので休憩を兼ね喫茶店へ。

いつぞやの新作スイーツを食べ損ねたお店だ。

あの時と同じように紅茶を飲んで一息つく。

「いっぱい見てまわったわね　でも一着くらい買ってもよかったのに……　リースも遠慮ばかりじゃダメよ」

全部レディースだったろうが!!

「はあ、疲れました……」

正直な感想だ……

「あら？　そんなんじゃ『いざ』という時にダメダメよ　もっとうとう全てを許容できるデカイ器を持たないと！　お母さんとお父さんなんてね……」

昔話というかノロケが始まった……マジ勘弁して下さい。

「……それでね、あの人ったら……って、聞いているのリース？」  
聞いていません。

「まったく……」

注文していたパフェがきたので一旦ノロケ話は切り上げ……

「——それで？ アペリスは何を悩んでいるの？」

真剣な顔でお母様が訪ねてきた……ただし口元にクリームをつけて。  
マジ

なんか色々と台なしだった……

「将来の不安というか……まあ思春期ならではの漠然とした悩みですよ」

そうテキトーに言うておく。

「厨二病ってヤツね」

それは断じて違う！！

「大丈夫！ 黒歴史も大きくなれば笑い事よ」

大人になって思い出したらイタ過ぎるわ！！

「はあ、もういいです……」

そもそも答えなんてないことに悩んでいるんだし……

「——自分の思ったように生きれば……後悔したっていいの……  
だってそれはあなた自身が選んだ未来<sup>みち</sup>なのだから」

ふいにお母様がそう呟いた。

「——ただ、疲れたら帰ってきなさい？ 抱きしめて話を聞いてあげるから」

「——」

言葉が出なかった……そもそも何て返せばいいかもわからない。

ただ……

「お母様……」

「な～に？」

「どうして私のパフェまで食べているのですか？」

最後まで台なしだった……

休憩後も引き続きショッピング。

ただし、先ほどより心なしか軽やかに感じる。

時と空を隔てた世界でも母親というのは……なのかな？

時刻もだいぶ遅かったので夕食も済ませ、帰路につく。

「今日は楽しかったわー リースも楽しめたかしら？」

「ええ、ただし少しばかり疲れましたが……」

今日は久々に母子水入らずの時間を過ごせた。

実際に問題は解決していなし、案のひとも浮かんでいない状態だが不思議と穏やかな気分だった。

「もうーそんなんじゃダメよー 　　いつかリースの隣で歩く子のためにもね」

それまではお母さんが隣をもらつわね、と言いながら腕を組んで

きた。

いつの間にか並んだ身長。

それだけ時間が流れたという証拠だ。

それも1年後には一気に追い抜かしているだろう。

1年か……追い抜かすのが先か、世界が滅びるのが先か。

そればかりはわからない。

事件に関わって自分のせいでバッドエンドなんて結末はもちろん嫌だ。

でも……

「せっかく、後押しをもらったのだから……裏方、やってやりますか」

「んゝ何か言った？」

「いいえ、ただ……今日は楽しかったと、それだけです」

これから先もこんな穏やかな日々を過ごせるように……そう、小さく決意をした春の日の夜のこと。

——原作開始まであと僅か……

すっかり忘れ去られていた父さんとハクの夕食はカップ麺と缶詰  
だったらしい……

スマン……

ピロリン！

【脇Y：影で頑張る主人公】の称号を得ました！

ピロリン！

【OVER】オーバーリミットを習得しました！

原作準備編8〜主人公は覚悟を決めるようです（後書き）

次回からはようやくStS原作時間へ

しばらくは予定通り積みゲー消化に励むので遅れるかも…

主人公設定（原作開始時点）（前書き）

久々に追加しました

## 主人公設定（原作開始時点）

主人公設定（原作開始時点）

名前       ：アペリス・ウラノ

愛称       ：リース（母親命名）

性別       ：男

生年月日：新暦63年

出身地    ：ベルカ自治領  
                        ミッドチルダ

容姿       ：腰まで届く金髪、アメジストの瞳、ツルペタ（笑）、身長は150cm程度

家族構成：父（父さん）と母（お母様）の3人暮らし

魔力資質：先天的AAランク（現在値AA程度）

才能       ：器用貧乏+ぶち不幸体質（魔導師ランク的には総合Aくらい）

備考       ：ハク（ハクリュー）を飼っています 最近は空感が激しい

原作知識：アニメ版Strikersまで、Vivid&amp;Forceは知らない

現在所属：St・ヒルデ魔法学院 中等科2年

取得資格：無限書庫司書、B級遺失物管理主任者

初級魔法インストラクター、バイク免許

称号（詳しい内容は各本編冒頭で）

【かけだしトレーナー】

【甲種準一級フラグ建築士】

【初めての弾幕ごっこ】

【魔法使い始めました】

【オリ主候補生】

【時を駆ける男（笑）】  
【オリ主属性】  
【元ラスボスの弟子】  
【もしかして脇役？】  
【略してオリ主】  
【魂のセカンドステージ】  
【脇y：影で頑張る主人公】

スキル  
技能

【マルチタスク（4分割超高速思考）】  
・読んで字の如く並列超高速思考

【なんちゃって断罪の剣】↓【断罪の剣】・【絶氷の剣】  
・電気と冷気を纏った魔力刃

【ポーカーフエイス】  
・ただのハツタリ……最近はサトラレ気味

【なんちゃってぜったいいいど】↓【アブソリュート・ゼロ】  
・絶対零度の空間凍結魔法（やたら寒い）、魔力消費もやたら凄い

【なんちゃってインディグネーション】↓【インディグネーション】  
・撃っていいのは撃たれる覚悟のある人だけ、現在トラウマなため  
使用不能

【KY（偽）】↓【直感（偽）】  
・（ヤヴァイフラグのみ）未来予知できる（必ずしも回避できる  
わけではない）

## 【基礎魔法一式】

・治療、結界、弾幕等の基礎魔法

【なんちゃってアストラルベルト】↓【アストラルベルト】

・近接用の魔力刃による居合い、高速の薙ぎ払い

## 【ピコハン】

・HITすると気絶させることができるシャルティエ直伝不殺の奥義

【セルシウスキャリバー（仮）】

・右手に断罪の剣、左手に絶氷の剣……合体！

対象を完全氷結させます（笑）

オーバーリミッツ

## 【OVL】

・感情とか魔力とかストレスなどが溜まると発動する無敵状態（笑）  
おそらく秘奥義とか出せます

凹んだ人のポーズや土下座に見えるのは気のせい

## デバイス

【セイクリッド・スカイ・ファンダム】

種類　　：ブリストデバイス（AIは搭載していない）

待機形状：レイハさんと一緒

戦闘形状：翼をイメージした短剣と弓、バリアジャケットは黒スーツに新調しました

所有能力：大気中の『水分』と『温度』を操作できる（らしい）  
使用魔法：『インディグネーション』『アブソリュート・ゼロ』

『各種ブリスト』『物質透過跳躍魔法』など

主人公設定（原作開始時点）（後書き）

さて、これで「」まで暗躍できるのやら...

原作時間軸、prologue（前書き）

とりあえずゲーム1本だけクリア…

合間を縫って書いていきたいと思います（笑）

## 原作時間軸／prologue

【脇Y：影で頑張る主人公】

説明：舞台裏に徹する者に与えられる称号

条件：脇Y：影で頑張ることを決意した

効果：全ステータス→→→影の薄さ→OVLが使用可能！

備考：OVLのご利用は計画的に！

ピロリン！

以下略！

ちゃんと言えよ！？

私って意外と幸せ者なんじゃないかって時々思っんだ。

家庭環境は良好だし、学院生活も悪くない。

ちょっと（？）大変なトラブルもあるけど、それもまた経験だ。

自分の糧としてきつと将来に生きてくるだろう。

うん、なかなか贅沢者です。

それじゃあ今日も張り切って逝きましようか！

魔法厨二リリカル・まじカ「気は済んだ？」……始まりません。

「いつまでも現実逃避してるんじゃないわよ」

したくもなるわ……

「さつさと行くわよ、はあ、日が暮れる前には寢床くらい確保したいわね」

それはともかく……

「……は……どこ？」

「……さあ？」

もうイヤ……（Ｔ　Ｔ）

新暦75年5月、そろそろStS原作時間軸に入ったところだろうか？

以前にお母様より後押しをもらったので、自分にも出来そうなの

とを色々と考えてみた。

もちろん六課が事件を片付けてくれるのがベストだとは思うが、最悪だけはならないよう保険は欲しい。

つまり『聖王のゆりかご』だけは破壊が停止手段が欲しい、という考えだ。

三脳はむしろ滅んでしまえ。

地上本部は……一旦再構成した方が良いのかもね。

我ながら酷いエゴだ……

だけどこの世界にとっては意外と好機なのかもしれない。

「——言わば劇薬ですか……より良い未来のための」

ここで悩んでいても仕方無い。

事件が終わってから……たくさん悩むことにしよう。

それから、件の『聖王のゆりかご』<sup>くだん</sup>を止める方法としていくつか検討してみた。

最悪をイメージしているため『聖王のゆりかご』は起動すること

が大前提な案だが……

まあ、起動させずに終わらせられればベストなんだけどね。

以前の氷塊（案）は、周囲の環境への被害も大きく、許可も大変……事後申請でいけるものではない。

というわけで保留。

次の案を検討し、多少内容をぼかしてリタに相談した。

なぜリタに相談したかと言うと、ヴァン師匠せんせいやヒューゴさんでは事態が大きく成りかねないからだ。

決して出番が少なかったからというわけではない……あくまで水面化、最悪の場合を想定しているため……だと思う。

「——できるんじゃない？ まあ現物があればベストだけど……」

そこはご勘弁……てゆうかそんな権限はない。

まあ、こっそり入手できれば……それも難しいな。

「……いいわ、あたしも多少思うところがあるから、この件やってやるわ」

別に検討した案が使えるものが相談しただけなのだが……

「べつ、別にあんたの為じゃないんだからね！ これはあたしも気になったことであって……」

はいはいツンデレツンデレ（笑）

なかなか心強い味方ができたようだ。

リタ曰く3日もあれば試作機を作れるとのこと。

ただし質と安全を気にしなければ、とこっさり付け加えて。

そして3日後、リタから呼び出しがあった。

実験で使うため、低レベルでいいのでロストログアをかつぱらってこいとのこと。

ムチャ言つなよ……まあ教会から正規手段で借りることができたが。

こういつ時に資格とか案外役立つものだ、そんなことを考えながら……

「トラウマが……」

研究棟消滅事件いっぱい魔<sup>リタ</sup>の研究室へ。

頑張ろっ……

「来たわね」

ドアを開けるにはなかなか勇気が必要だったがな。

「じゃ早速始めるわ、持ってきたロストロギアはそのケースに入れて」

指示された通りに準備を手伝う。

「……最後、部屋全体に結界。まっ、ないとは思っけど一応ね」

部屋全体に結界まで？ リタにしては慎重だな。

「やるわよ……」

実験は対象ロストロギア（エネルギー結晶）への干渉が目的だ。

これはレリックに外部から強制的に干渉して、止めるなり破壊するなりできないか考えた結果だ。

これができれば聖王化自体を止められるし、最悪は内部から……ボン！だ。

魔力ダメージで内部から取り出して破壊しているシーンを思い出して考えついた案だ。

まっ、あくまで『案』に過ぎないが……この事件はレリックから始まったのだからレリックで終わらせてやるのが乙というもの。

そのためには現物のレリックがあればベストなのだが……さすがに無理。

とゆーわけで代替のエネルギー結晶型（極弱）のロストロギアで実験している。

「……今のところは問題なし、さて……」

なんかフラグを建てそうな台詞だな。

んっ？　なんか紅くなってきた？　しかもかなり光を発している。

「大丈夫、それは想定の範囲内……実験自体は概ね成功よ」

モーマンタイ  
無問題らしい……どうやら実験は成功……えっ？

ロストロギアが急に青白くかなりの光量で発光し出した！！

「リタ！　これは！？」

これも実験の一部！？　そう訊ねたら……

「……失敗ね、なんか別のロストロギアに干渉したみたい」

「……それって大丈夫……なわけないですよねえ！？」

2人揃って青白い光に吞まれ……目を開けるとそこは……

——見知らぬ森、いや山の中でした。

「……どこ？」

「……さあ？」

そして冒頭に至る。

どうやら干渉した謎のロストログアによって異世界に飛ばされたようだ。

なぜ異世界かというとリタ曰く、空気中の魔力素が低く該当する管理世界がないということ、ヒューゴさん作のキチガイ通信がないという点からだ。

まあ魔力素が無いわけではないが、適正值より低いいため魔力回復は時間がかかるかも、らしい。

魔法の運用も慎重にしないといけない。

もし魔法圏の世界でなければ更に厄介だ。

「それにしても一体、何に干渉したんでしょうか？」

もしかしてレリック……？ それはヤヴァイよね、主にガジェツトが。

「はあ、コレね、とりあえず封印するわ」

そう言ってリタが足元にあったロストロギア（仮）を拾って見せて……

「——えっ？ ちょ、ちょっと見せて下さい！！」

「今封印するから待ちなさい！！」

怒鳴られた……それよりも気になったのはリタが持っているロストロギア（仮）、植物の種子のような形状の青い宝石だった。

これって……もしかして……

「——封印完了、ハイどーぞ」

リタから渡された宝石には番号が書いてあった『05』と。

「エネルギー結晶型のロストロギアね……それかなり強力な」

「——ジュエルシード？」

一体全体、何がどーなってるのさ？

——こうして私のリリカル・まじカオスな物語が幕を開けた。

原作時間軸 } p r o l o g u e (後書き)

ようやく幕開け…

ただしオリジナル展開が続きます。

原作時間軸く神さまがいないなら、お猫さまを崇めればいいじゃない（前書き

A m a z o nでまたゲーム（2本）を買ってしまった（今日届く予定）

積みゲーばかり増えていく…

もちろんプレイはしますけど

原作時間軸へ神さまがいないなら、お猫さまを崇めればいいじゃない

100と101は大して差がないように見える。

だがそれが0と1になると明確な差が見えてくる。

『ある』か『ない』か。

『経験がない』か『経験がある』か。

失敗は成功の母、という言葉聞いたことがあるだろう。

失敗、マイナスの経験は次に生きてくる、活かすことができる。

無駄なことなんて……意味のないことなんてない。

だからこそ「もういい？」……もうちょっと時間が欲しいです。

「ハイハイ、タイムオーバー。だいたい人生における失敗なんて学んだところで大抵の場合やり直せないでしょ？」

人がポジティブに考えているのに容赦なく蹴り碎いてくれますね。

「まっ、実験における試行錯誤は価値あるけど」

何事も経験だ！ とはよく言っよ……

誰か助けて……ぐすん。

とりあえず現状確認。

リタの研究室で実験↓失敗、何かに干渉・転移↓どっかの異世界……そしてジュエルシード。

ジュエルシードの件は一旦保留にしておく。

まずは……

「一旦、空から見ましょ？ ここにいても埒あかないし」

「そうですね、一応認識阻害もしておきましょうか」

魔法圏の世界ではなさそうだし。

空に上がる……自分だけ……

魔力の節約、とは言っていたが高いところが苦手なのだろうか？

そうになるとT・M事件の時って……いや、本人が言わないのならそれはそれでいい。

ちよっぴり改めて感謝を……まったくツンデレなんだから。

まあそれはさておき、そこから見たものは……

「……海、それに割と近代的な都市……いえ、街かしら？」

サーチャーで見ているリタがそう呟く……てか、初めからそーすれば良かったじゃん！？」

無駄に魔力を消費してしまった……

「とりあえず文明は進んでいるように見えますし、行ってみましょうか？ いきなり取って食われることはないでしょう……多分」

ここにおいても仕方ないし。

「はあ、めんどくさ……仕方ないか」

息のできる場所であっただけ良しとしよう。

「……着替えた方がいいわね。制服だと補導されやすいし」

確かに2人とも今はSt・ヒルデ魔法学院中等科の制服だ。

先刻までは学院にいたんだし当たり前だが。

「……何驚いた顔してんのよ？」

「いえ、リタにしては至極まともな意見だと……」

「失礼ね！ まっ、以前に徹夜明けの休日朝帰りで補導されたの、そーいうとコレも経験が成せる業<sup>ワザ</sup>ね」

何やってんだか……とは言ったものの……

「着替えなんてないですよ？ 精々バリアジャケットくらいなものです」

その場合は常時魔力を食うので、魔力素が適正值ではない場所での長時間使用は却下だ。

何か案でもあるのか？ そう尋ねる。

「何着かデバイスに収納してるわ。いちいち着替えるの面倒だし」

リタの私服なんて今まで見たことないのだが……

「たつ、たまにキャロと買い物に行った時に買ってるのよ！ ……着てないけど」

そういえばエリオも2人がよくショッピングに行っていると言っていたっけ……

「あんたが着れそうなの貸してあげる、着替えたらさっさと行くわよ」

そう言ってチョイスしてくれたのは……七分丈の黒いパンツと白くてちょっぴりフリフリなブラウス……

着れそうなのを合わせた結果なのだが……いかせん葛藤が……

そう思ってリタを見ると……ねこねこウェイターでした。

むしろそっちのYシャツよこせよ！ そう思わざるを得なかった。

てゆーかねこみみと尻尾（＋前掛け）は外しなさい。

別の意味で補導されてしまう……

背に腹は代えられず、借りた服に着替え下山する。

私は空を飛んで、リタは短距離転移魔法で……お前さっき魔力の節約って言って空飛ばなかったクセに……転移の方が魔力を食うだろ？

さておき、無事下山できたので街に入ることにする。

「——何ここ？ 街に入った途端に魔力素が適正值になった……」

私も同感、街に入って最初の感想だ。

魔力素は空気中に含まれるもの……なので急激な変化はおかしい。

「あの山がおかしかった……いえ、あたしたちの転送反応になんらかのアクションもなかった、ここは魔法圏の世界じゃない……ならアレくらいが普通のハズ、つまり……」

「——この街がおかしいかもしれない、ってことでしょうか？」

リタの言葉にそう続ける。

「……そうね。思い過ごしであることを祈るわ」

少しリタらしくない台詞だ……はあ、一体どんな魔窟なんだか……

そんな思いとは裏腹に街中を探索。

見た感じはミッドの都市とあまり遜色はない……てゆーか

「——日本じゃないですか」

うん、どうやら日本のようだ。

コンビニで北海道や沖縄と書いた旅行雑誌があつたし。

見た目が外人なのでちよっぴり奇異な目で見られたが。

だか肝心の県や都市名がわからない……あんまりそういうのって書いてないのだ。

コンビニも。。町店とかは書いてあるのだが……道路標識も知らない名称しか書いていなかった。

まあそれがわかったところでどうしようもないが……

時刻は既に夕方、歩き疲れたので公園のベンチで休憩中……もう無印のように無差別での広域念話を試してみようか？

どのみち望み薄だが……

「はあ、ここがどこかわからないし、お金ないし、SOS出せないし……翻訳魔法があるから言葉くらいは通じるけど字が読めないし……最悪ね、あんたもそー思わない？」

リタは公園で見つけた子猫に話かけている。

「にゃにゃにゃん……」

「そっか、あんたも迷子なんだ」

えっ？ 会話できてるの？

「にゃにゃん……」

「ホント世知辛い世の中よね」

ツッコミを入れたら負けだ……

「——にやつ！？ にゃん」

「えっ 飼いまきたの？」

……ツッコミは負け。

そんな葛藤をしていると子猫の飼い主らしき女性がこちらへ走ってきた。

子猫も女性に向って走っていく。

「にゃ〜ん!」

「こんなところに……もう心配したんだよ?」

はあ、無事に見つかってなによりです。

「にゃにゃ! にゃにゃにゃ〜ん……にゃ!」

「えっ? あの子がかまってくれたから寂しくなかった? そっかじゃあお礼しないかね」

「にゃ〜ん! にゃにゃ……にゃ〜ん?」

「えっあの子たちも迷子なの?」

……もう負けていいかな?

「にゃにゃにゃ〜ん! にゃにゃ!?!? ……みゃー」

「ええ!?! 異世界からの迷子なの!?!」

ええい!?! 一体どーなってるんだ!?!

特に最後の『みゃー』はなんだ！？　なんで最後だけ『みゃー』なんだ！？

「この子のこと、ありがとうございました……あっ言葉は通じるのかな？」

子猫との会話を終えた女性……お姉さんがこちらを向いて話しかけてきた。

「……その子ことは特に何もしてないわ、ただちよつと話してただけよ」

そう、子猫に関しては別に何もしてないんだが……えっ？　ホントに会話してたの！？

「それでその……あなたたちは異世界からの……」

えっ？　信じるの？　ここって魔法圏の世界じゃないでしょ？　てゆーかお姉さんもなんで普通に猫と会話してるの！？

そんな心情を無視するようにお姉さんは続ける。

「異世界からの……『魔導師』なんですか？」

……魔導師、魔法使いとかではなく魔導師とハッキリ言った。

つまりこの人は……

「——ええ、転送事故でここにきてしまった魔導師よ。逆に尋ねるわ、ここは魔法圏の世界じゃないハズ……どうして『魔導師』とい

う単語が出てきたわけ？」

魔法、異世界についてある程度知識がある人！！

「えっと、友達が魔導師でミッドチルダにいて……」

えっ？ 日本で魔導師、ミッドチルダ、さらにジュエルシードという因果律を考えると……

「にゃー！」

そして猫……まさかこの女性<sup>ひと</sup>は……

「あっそうだね。わたしは月村すずか、あなたたちのお名前を聞いてもいい？」

……にゃんですと？

とゆーことは……ここ海鳴市？

……ご都合主義万歳。

——とりあえずはお猫さまに感謝を……ニャーメン

「みゃー」



原作時間軸へ神さまがいらないなら、お猫さまを崇めればいいーじゃない（後書き

海鳴市は魔窟…とら八的に。

むしろ猫ネタが書きたかっただけ（笑）

なんとか連絡手段をゲット！

そして…サウンドステージへ

原作時間軸〱世界はいつだって…こんなハズじゃないことばかりです（前書き

久し振りにリリカルなのは（原作）をプレイしました。

感想…泣けた（感動的な意味で）

思ったのですが『なのちゃん』と『なのはさん』は完璧に別人ですよね…

ギャップが激しすぎました…

あとイデアシードって厨二な黒歴史集めれば良かったんじゃないだろうか？

多分みんな喜んで分けてくれるよ。

ヒドウンとは比べ物にならない災害を引き起こしそうだが（笑）

原作時間軸／世界はいつだって…こんなハズじゃないことばかりです

並列世界に来たら……まず何を確認するだろう？

歴史？ 政治？ それとも文化？

なににせよ、共通して言えるのは『差異』を探すことだ。

まあ調べてみたいことは色々あるが、私が最も気になるところと言えは……原作知識にある場所とか『昔』の記憶にある景色……だろうか。

この世界は「やめときなさいよ」

「これは師の受け売りだけど……『個人が一生で知りうることなどたかが知れている、ならばどう行動すべきか自ずと見えてこよう』ってね」

そういえばいつのことだろう？ なんでも出来ると思っていた時代は。

「だから一時的にしか関わらない世界に肩入れなんてしない……思い入れが強いと後悔するだけ」

そういえばいつからだろう？ 人間の可能性が有限だと思いつたのは。

「目的があるけど時間は少ない。なら寄り道は不要……そうでしょ？」

至極まともな意見だ……だからこそ訊ねたい。

「——その本はなんですか？」

『ネコネコ大百科』これであなとも猫マスターにゃん（¥2,500＋消費税）』

「……にゃー」

……台なしだった。

世界単位の迷子になすすべもなく、とりあえず案内されたのが……

「……喫茶店？　なんて読むの？」

「あゝ『翠屋』かと……」

魔王……じゃなかった、なのはさんの両親が経営している喫茶店『翠屋』。

どうしても魔王イメージが抜けないな……気をつけないと。

「中にいるエイミィさんっていう人に相談してみて、先に電話で話

してあるから……ごめんね、一緒に行つてあげたいところだけど店内に動物はダメだから……」

「いえ、ありがとうございます。正直、右も左もわからない状態でしたから……」

「あんたも……もう迷子になるんじゃないわよ？」

「にやにやつ！ にゃーん……みゃー」

「はいはい、気をつけるわ……じゃあね」

……もう気にしないことにしよう。

「うん、この子のことがとうとう……じゃあね」

「にゃーん」

そう言つてすすかさんとお猫さまは去つて行つた。

「じゃ、さつさと行くわよ」

そう言つて扉を開ける……やっぱ何か緊張してきた。

「いらつしゃいませー」 あっ、可愛いお客さま……日本語は大丈夫かな？

Can you speak Japanese? 「

店内に入ると、ウエイトレスらしき『眼鏡・黒髪・おさげ』の3点が揃ったお姉さんに声をかけられた。

多分、なのはさんの姉（正確には従姉妹）の美由希さんだろう。

日本語が大丈夫かと言われたら……微妙だな。

多分、翻訳魔法なしで話したら発音がスゴイことになりそう……あとで試してみよう。

「あつ来たね」 美由希ちゃん「その子らあたしのお客さんなの」

奥の席から声がかけられた。

確か3年ぶりくらいだろうか……直接話したことはないがエイミイさん本人だろう。

「エイミイの？ ふむむう、何か飲み物はある？」

「んーじゃあ紅茶2人分追加で」

「かしこまりましたー」 じゃあ案内するね「

2人って確か同い年くらいだっけ？

そんなことを思いながら案内された奥のテーブルでエイミイさんと向き合う。

「え」と初めまして、エイミー・ハラオウンです。すずかちゃんから連絡もらってるけど2人とも『漂流者』ってことでいいのかな？」

「……そうよ、転送事故でこの街の近くの山中にね」

本当はロストログアを使用したのだが……それを話したらややこしくなりそうなので黙っておこう、と事前にリタと相談しておいたため転送事故ということにしている。

それにジュエルシードの件は正直きな臭い……なので管理局より先に教会側に相談する予定だ。

ついでに実験の件をもみ消してくれたら万々歳なのだが……

「なになにエイミー？ この子たち『魔導師』なの？」

そう言いながら紅茶を持った美由希さんが現れ、私たちに紅茶を入れてくれた。

……お金はないんだが……これが好意だったら無下にするわけにはいかない。

そう葛藤している自分を無視してリタは飲んでいるが……少しは躊躇しろよ。

そして自分の分を入れて美由希さんもエイミーさんの隣にかける。

仕事はどーした？

不審な動きをしたら斬られるのだろうか？

「そうみたい……ああ、ごめんなさい、名前しか言っていなかったわね。あたしは時空管理局に務めているの、今は育児休暇中だけどね……あなたたちの名前と出身世界を教えてもらえれば連絡するけど……」

渡りに船とはこのことだろう。

とりあえず一難は去ったようだ。

どーする？ 信用できる？

リタが念話でそう話しかけてきた。

大丈夫でしょう。直接の面識はありませんが知っている人です。まあ先に管理局より教会に連絡したいところですが……

それは同感ね、この人知ってたの？

ええ、3年ほど前に聖王教会本部で結婚式を挙げていかれた方です……リタがリングガールをさぼった時のね

あっそ

こんチクシヨー！

「えっと……相談は終わった？」

あっバレテラ。

そして美由希さんはちょっとぴり警戒している？ 気をつけよう……

「すみませんでした…… 2人とも出身世界はミッドチルダです。私はアペリス・ウラノ、それでこちらが……」

「リタ・モルディオよ」

とりあえず先に警戒を解くことに専念しよう。

「そつか、2人ともSt・ヒルデ魔法学院の生徒だったんだ」

自己紹介ついでに色々と札を切っていく。

これで警戒心は薄くなるハズ……

また、当時の結婚式の教会スタッフ（お手伝い）と辺境世界で会うなんて思ってもみなかっただろう。

エイミィさんは驚きと少しばかりの羞恥心がこみ上げてきているようだ。

「しかもグランツ騎士団長のお弟子さんとは……世の中意外と狭いものよね」

そういえば知人の結婚式とは言っていたが……まあ後で聞いてみ

よう。

「それで申し訳ないのですが、管理局より先に聖王教会に連絡を入れて相談したいのですが……」

「あゝうん、わかったよ。そもそもあたしも育児休暇で休職中の身だし、あまり強く言える立場じゃないから……」

連絡手段の確保はできた……ついでに警戒心も取り除けたと思う。

「へえ〜キャラとエリオの先輩なんだ〜あの2人の学院生活ってどうなの？」

ここ翠屋からミッドまでそのまま通信を繋げてくれるそうなので、翠屋の閉店時間までとりとめのない話を続けている……

「普通に楽しんでいると思いますよ？ キャロの生い立ちは知っていますが……それでもです。エリオは詳しい事情を知りませんが2人とも楽しいキャンパスライフを過ごしているように思えます」

まあ素直な感想だ。

放課後に友だちとショッピングに行ったり、図書室で一緒に勉強したり……なかなかの青春を送っているじゃないか。

「……そっか。うん、それならよかった。」

さすがに2人の事情は知っているようだ……うん、頃合いか。

この際なので少しばかり10年前の事件に関して聞いてみよう……

「ええ、ですが2人ともフェイトさんと頻繁に会えなかったのは寂しかったようです。フェイトさんも以前はこの世界に住んでいたそうですが、この世界の出身なのですか？」

「ん？　ここって魔法圏の世界じゃないでしょ？　……ありえない」

リタの言うこともわかる。

あんな高い魔力資質を持った人が魔法の無い世界で生まれるとは考えづらいだろう。

「あゝちよつと違うんだゝ昔にロストログアを巡る事件でこの世界と関わってね。それ以来、あたしたちもフェイトちゃんもこの世界で暮らしていたの……まあ10年くらい前の話なんだけど」

よし、ロストログアという単語さえ出れば……

「10年前といえば……ジュエルシードというロストログアによる次元断層が起きかけた事件があったと記憶しています……もしかして？」

「そーいやあんたって遺失物管理の資格持ってたっけ」

おっ、リタがフォローしてくれるとは……てゅーかお前、忘れてたのに実験用ロストログアをパクッてこいって言ってたのか？

ただの犯罪者になるだろうが……

てかジュエルシードって……

ええそうです。ちょっと聞き出したいことがあるので話しを合せて下さい

「あゝうん、知ってるなら仕方ないか……あまり公にはできないけどこの街で起こった事件でね。フェイトちゃんもそれに縁<sup>えん</sup>があつてここで暮らしていたの」

縁<sup>えん</sup>ね……言い得て妙だな。

「そうだったのですか……あつ、その時はジュエルシードを無事回収できたのですか？ 確か複数個あるロストログアと記憶していたのですが……」

なんか白々しいわね

ほつといってください

「うん、ホント色々トラブルがあつたけど『21個全て』回収できたんだよ」

……なんですと？

「いやゝホント大変だったんだけどね……主にクロノくんが」

確か原作では回収できたのが『12個』、プレシアと共に虚数空間に落ちて回収できなかったのが『9個』のハズ……まあエイミィさんが一般人(？)相手にホントのことを言っているかどうかまではわからないのだが……

じゃあ、あたしたちが拾ったコレって……

……管理局は一枚岩ではありませんから……まあ、それは聖王教会にも言えるかもしれませんが

……はあ、頼りたくないけどヒゲを頼るしかないか……メンドクさ

どうやら思った以上に大きい原作との『差異』があつたようだ。

これが大きな影響を出さなければいいのだが……望み薄だろうか？

——世界はいつだって…こんなハズじゃないことばかり、か……

名言だよね、まったく……はあ、冷めた紅茶が身に染みるや。

翠屋ってシュークリームと『コーヒー』が自慢のお店じゃなかったっけ？

そう思ったのは内緒だ……

原作時間軸〱世界はいつだって…こんなハズじゃないことばかりです（後書き

ようやく原作との『差異』が…

そして書く時間がない…

原作時間軸へご存じですか？ ラスボスからは逃げられないのです（前書き）

早く先の話を書きたくなったので海鳴編をさっさと終わらせるべく  
…執筆頑張ります

原作時間軸へご存じですか？　ラスボスからは逃げられないのです

逃げることは悪いことだろうか？

戦略的撤退と言うくらいなのだから目的のための逃走は有りなのだろう。

未来がわかっているのならば「以下略！！」……モノローグもどんどん短くなっていくな……

てかモノローグくらい最後まで言わせてよ！

「いつまでダラダラしてるのよ？　さっさと覚悟しなさい」

そうは言っても……確実に怒られる未来しか視えないんだよ。

はあ……

「——この愚か者が！！」

ヴァン師匠に事の顛末と現在の状況を伝えた結果だ。

第一声がコレでした。

場所はお店を閉めた後の翠屋なので、エイミィさん、美由希さん、そして美由希さんから状況を聞いた高町夫妻が同席……とゆーか聞いていたのだが、みんな苦笑いでアチャーな顔をしている。

夜に大声は近所迷惑だろうが……

「——まったく、無事だったから良いものを……わかっているのか！？ 一歩間違えれば無人世界の可能性もあったのだぞ！？ 管理外世界で知り合いに出会える確率など……」

はい、説教が始まりました。

これは長くなりそうだ……きつと反省文も書かされるんだ。

被害者だろうが問答無用の連帯責任だ！ だもんね……

あゝこれは長くなるわ……しかも反省文付き。なんとか切り上げられない？

かつての経験よりリタもそう判断したようだ。

はあ、仕方ない……

なら協力して下さい……少しばかり話を合わせて

いいけど失敗したら洗濯するわよ？

退路はなくなった……覚悟を決めよう。

「——そもそも「少し補足をよろしいでしょうか？」……なんだ？」

ヴァン師匠せんせいの説教を遮ったのだが……正直怖い。

「この世界……いえ、この場所であつたことが『偶然』ではない、  
としたら？」

……言うの？

背に腹は代えられませんよ

あまりこの場では言いたくなかったが……やむを得ない。

「……どういうことだ？」

ヴァン師匠せんせい、声が低くて怖いです。

「ごめんなさいエイミィさん、実は先ほどの説明で『言っていない  
こと』があります」

「えっ？ あーうん。そーいえば転送事故の原因とか聞いてなかった  
かね？」

あつ、わかってて聞いてこなかったのね。



ただ雰囲気的に事の重さを感じており沈黙している。

「……理由はわかった。だが何故私や騎士カリムに相談しなかった？ お前ならば個人でどうにかできる問題ではないとわかっていただろう？」

まあ普通はそうなんだが……

「信用できなかったんですよ、せんせい 師匠方ではなく『管理局』が」

そう言って持論を述べる。

預言について対策がイマイチということ、信頼性は担保された能力なのに対策が成っていない、管理局の腰が重すぎるのでは？ それはつまり邪魔している者、内通者がいるのでは？

ならばヴァンせんせい師匠やカリムさんが動いたら……怪しまれる、バレるのではないか？

そして……

「——そもそも、管理局は秘密主義過ぎます。重大な事件ですら正しい内容が報道されず、偽りの情報を平然と流す……そもそも空港火災の件ですら原因について報道されていないではないですか！！ そんな不透明な組織など信用できません！！……ですから今回は秘密裏にリタへ相談してその実験を行いました」

うん、一呼吸も入れずに言うことができた。

思ってもないことをよくペラペラ言えるわね？

人が頑張つて語っているのに……！

心臓バツクバクいつてんぞ！

ポーカーフェイスをなめんなよ！？

この局面を乗り切るためです！ ついでに実験の件をもみ消してもらいましょう

外で偉そうに持論を述べているが、内心は酷く打算的な2人だった……

「「「「「……「「「「

また静寂が訪れていた。

ヴァン師匠せんせいもそうだが、管理局員のエイミィさん、家族が管理局に務めている高町家にとっても重たい話だからだ。

「ねえヒゲ、あんたも最初に言つてたでしょ？ 管理局では望ましい研究を強いられるかもしれないって……それもつまり同じことですよ？」

静寂を切り裂いたのはリタだった。

そしてそれは弟子入りの際にヴァン師匠せんせいがリタに向けて言った言葉だった。

てゆーか第三者がいる場面で師匠せんせいをヒゲと呼ぶな……

「……そうだったな。そう言っていたハズだったが、どうやら私も年を取ったものだ……いや、そういう『上』の思考に染まっていたということか……」

ヴァン師匠せんせいが苦笑いしている……ようやく落ち着いたようだ。

まあ世界を混乱、不安にさせないため事件等を公表していないと推測できるし、ある程度理解もできるのだが……そう考えると管理局ってめっちゃブラックだな。

企業だったら確実にアウトだろ。

やはり三権集中は歪んでいると思う……

「ふむ、わかった、今回の件は不問としよう……幸いに怪我人も被害も出ていない。それにお前たちの言いたいこともわかった」

おっ！ 説得できた？

おお、やればできるじゃない！

失礼だな！

周囲がアレ過ぎるだけで、もともと私はやれば出来る子だったんだよ？

ふふーん♪

ふう、一時はどうなるか……

「ただしリタは反省文を書くように……帰ったらすぐにだ！」

すっかり安心して油断しきったリタにヴァンせんせい師匠の容赦なき口撃くげきがきた！

「なんでよ！？」

他人の前でヒゲ呼ばわりするからさ。

ザマア

あんた後で洗濯ね

リンチ私刑宣告受けました……

「ところで……その場所が『偶然』ではないとはどういう意味なのだ？」

あつ、ジュエルシードの報告忘れてた。

よりもよって難題を残してしまったようだ……

原作時間軸へご存じですか？ ラスボスからは逃げられないのです（後書き）

次はジュエルシード件について…

なるべく早くあげます…

原作時間軸さようなら脇役（じぶん）、こんにちは主人公（じぶん）（前書き）

サウンドステージXとVividって繋がりが微妙だと思っんです。

ルーテシアの物静かな印象がStSより変わらず。

ノーヴェの印象とかも…

やっぱり最初はVividは考えていなかったのかな？

原作時間軸さようなら脇役（じぶん）、こんにちは主人公（じぶん）

『偶然』と『必然』について、それは各々の考え方次第だろう。

この世に『偶然』などなく全ての事象は『必然』の重なりから成り立っている、そう考える人もいれば、自分の人生は生まれた時から『偶然』の重なりだと言う人もいるだろう。

確かに……どんな出来事も『必然』すなわち『運命』だと、その一言で片付けられると堪ったものではない。

では自分が歩んできた過程は……？

それは『自分自身で選んできた進路』だとハッキリ言えるだろうか？

私は……「ハイハイ、厨二病乙」……今までで一番痛い一言でした。

「どうでもいいわ、そんなこと。科学者にとっては自分の選んできた結果が全てよ、くだらない」

今回のモノローグ全否定でした。

もう慣れたけどね……

ジュエルシードの件は……（自分たち以外の人）驚きの連続だったと言っておこう。

どうやら10年前に確実に『21個全て』封印していたようだった。

一体何があつたんだろう？

10年前のことも後で詳しい話を要求してもいいよね？

それと確かStSでは地方の研究施設にいくつか貸し出していた物をスカリエッティに奪われたという設定だったハズ……でもそれはガジェットの動力として使っていた……だったけ？

そこはあまり覚えていないが……

なんでまたこの世界にあるのだろうか？

これが『偶然』の事故だとしたら……もの凄い確率だ。

つまりは『必然』何者かの意思が働いていると考えるのが道理か？

だとしたら……

「ふむ、早急に調査せねばな……」

ヴァン師匠<sup>せんせい</sup>もいつも以上に険しい顔をしている。

まあ、仕方ないか、対象のジュエルシードは次元断層をも引き起こしかねないロストロギアなのだ。

正式な調査となると艦隊クラスがくるのではないだろうか？

もしくはこの世界に詳しく、10年前の事件の関係者が……ん？

なんだろう少しだけ……『何か』が引つかかる。

んゝ違和感の正体がわからん……

「うむ、本件は早急に管理局に問うことにする。お前たちには別の任務でその世界に行った際にジュエルシードを発見したということにしてもらう。ちょうど騎士カリムの方に低レベルのロストロギアがその世界で発見されたとの報告が入っていてな……」

実験をもみ消してくれたのはいいけど……任務つて。

「聖王教会の騎士団か管理局の遺失物管理チームが動けるまでジュエルシードの管理と搜索を頼む……無茶は許す、だが無理だけはするな……」

緊急事態だから仕方ないが……危ないことはしたくないのだが。

メンドクサ……

リタの言うこともごもつともだ。

てゆーか私たちの立場ってどうなんだろう？

St・ヒルデ魔法学院の生徒……民間人だよね？ 聖王教会関係者ではあるが……

ヴァン師匠せんせいに連れていかれた異世界任務などはあるが……これってOKなんだろうか？

「こちら明日の夕方には母さんが……リンディ総務統括官が休暇で帰宅するので事情を説明して協力を仰ぎます」

エイミィさんがヴァン師匠せんせいにそう告げる。

まあ、あのリンディさんがいるというなら……大丈夫だろう。

それにしても違和感が拭えない……一体なんなんだろうか？

うーん……何だろう？

「学院と親の方にはこちらから連絡しておく。それとその世界での拠点となる場所だが……」

学院と両親に師匠せんせいから連絡してもらえれば万々歳だ。

そして拠点、寝床とお金は重要だしな。

「あつ、それならウチを使ってももらえれば……」

エイミイさんがそう言ってくれたが、確か子供がいるんじゃない……

「その申し出はありがたいのだが、幼子がいるのであるう？　ウチの馬鹿弟子共に幼子の相手が務まるとは思えなくてな……」

失礼だな！　まあ、その通りだと思うが……

幼児の世話なんて嫌よ

予想通りの回答ありがとうございます。

ただ野宿だけはゴメンなのだが……ちなみに子供だけでホテルとか無理じゃね？

「うゝん、そうになると「ウチを使うのは？」……美由希ちゃん？」

今度は美由希さんがそう言ってくれた。

「いいでしょ父さん、母さん。今は恭ちゃんもなのはもいないから部屋も余ってるし、無関係とは言いきれないでしょ？」

おっ、まさかの高町家か？

「んっ、了承（一秒）っ」

桃子さん、それはキャラが違う！

邪夢<sup>ジャム</sup>はやめて!?

「こんな可愛いお客様ならOKよ」

「ああ、この街で起こっている事件なら俺たちだって無関係じゃないだろう? こんなことでいいなら喜んで協力するさ、それに近頃ウチも寂しくなってきたからな」

高町家はOKらしい……いいのか?

「ふむ、聞きそびれていたが……この方たちは?」

あつ、説明してなかった……

「あつ、こちらの方たちは機動六課に出向中である高町戦技教導官のご家族で、魔法文化に関しても理解ある方々です」

エイミイさんが補足説明してくれた。

「あのエースオブエースの……ふむ、不肖の弟子共ですがよろしくお願いできますか?」

あれっ? 私たちの意思は?

まあ反対ではないのだが……

「はい」 承りました」

どうやら拠点は高町家で決定のようだ。

……いいのか？

ヴァン師匠せんせいとの連絡終え、入れてもらった紅茶を飲んで一息つく。

「……厄介事になったわね、あたしにもあんたの悪運がまわったか」  
エミリオと同じことを言われた……てかお前もそう思っていたのか！？」

なら少しは助けようと……思わないなコイツ等は。

なんでこんな友人しかいないんだろう……なんか泣けてきた。

「あつ、自己紹介がまだだったよね。あたしは高町美由希、こっちが……」

「その母の高町桃子です」それとこちら士郎さん」

「よろしく2人とも」

高町家にご紹介もらいました。

みんな見た目若いよね……うちのお母様もそうだが……いつか自分の方が老けて見えるのではないのだろうか？

……嫌過ぎる。

「あっ、私はアペリス・ウラノ、こちらはリタ・モルディオです。短い期間だと思いますがお世話になります」

「……よろしく」

「はい♪ よろしくね2人とも♪」

今更だが期間くらい指定していけばよかったのに……ヒゲめ。

とりあえず異世界での拠点をゲットできたので良しとしよう……  
厄介事には変わらないのだが……

こうして私たちの海鳴市でのロストログア搜索クエストがスタートした。

ピロリンー！

【勇者爆誕（笑）】の称号を得ました！

原作時間軸 さようなら脇役（じぶん）、こんにちは主人公（じぶん）（後書き

まさか六課の代わりにサウンドステージをこなすことになりました。

頑張ってちゃっちゃんと書き上げます。

原作時間軸／海鳴クエスト（旅立ち編）（前書き）

T O D D Cをプレイ中…オート稼ぎ中に執筆してます（笑）

## 原作時間軸／海鳴クエスト（旅立ち編）

### 【勇者爆誕（笑）】

説明：爆誕してしまった勇者に与えられる称号

条件：ナニ気ニスルコトハナイ

効果：成長率→→ 邪気眼→→ フラグ率→→→

備考：勇者様は絶対正義です      きっと新しいナニかが目覚めます

！！

ピロリン！

住居不法侵入および家宅「いらんし、やらんわ！-」

海鳴クエスト／ロストログアを求めて

これは10年前に封印されたハズのロストログア『ジュエルシード（不特定多数）』を集める冒険である。

そして現在はサブイベントとして謎の低レベルのロストログア回収を「もう片付けたけど？」……えっ？

「昨日あんたが寝ているうちにサーチャーに引っかかってさ、空間

ごと遠距離殲滅しておいたわ。まったくゴミみたいにうじゃうじゃ増殖して……」

え〜と……

「一応残骸は回収しといたから任務完了、後任がくるまでのんびり搜索しましょ〜Zzz」

……出番なし？

異世界生活2日目の朝は某戦闘民族な高町家にて向えた。

とりあえず5時には起床し、昨晚急ピッチで作成した運動用のバリアジャケット（ジャージタイプ）に着替え日課のランニングへ。

バリアジャケットは常時魔力を食うが、この街は魔力素も適正値だし、適度な魔力消費もした方が良く考えたため作成することにした。

ちなみにランニングは土郎さんと美由希さんとは別々だ。

いや、朝からランニング30kmとか勘弁して。

夜の分を減らしたから朝に走り込むのだ、とは言っていたが……

とりあえず10kmくらいを目標に街並みを眺めながら走ろう。

1時間くらいかけ高町家に戻ってきた。

思いのほか色んな箇所に移りしてしまったようだ。

既に土郎さんと美由希さんは帰宅しているようで、道場から音が聞こえてくる。

てか1時間程度でホントに30kmを走ってきたのだろうか？

それって世界新じゃね？

そう思った私の感性はおかしいのだろうか……？

最初は道場の方を覗いてみようかとも思ったが、見世物ではないだろうし、空いているうちにシャワーを使った方が良いと思い、見学はやめることにした。

まあ、どこかで機会があるだろう……

やはり御神の技は見てみたいものである。

先にシャワーを浴びて、一旦部屋に戻り布団を畳む。

今回借りた部屋はかつての恭也さんの部屋らしい。

ちなみにリタも一緒に問題ないと言ったため同室だ。

部屋も広いし良いのだが……まあ、気にしないことにしよう。

ついでに寝ているリタにも声をかけて……やめとくか。

昨晚（自分が寝ている間）に（一応）任務のロストログアを回収してくれていたようだし……そもそも実験の準備であまり寝ていなかったのだろう。

寝かせておくか……

昨晚のうちにエイミィさんから借りたクロノさんの御下がりの服に着替えリビングへ向かう。

ちなみに着れそうだったのは基本的にYシャツ類、スラックスと言ったところだ。

なんてゆうか枯r……うん、落ち着いた人だったのだろう。

リビングに向い朝食の準備をしている桃子さんに挨拶、手伝えることがないかとは聞いたが……食器の準備すら他人様の家では勝手からないのでここでも出番なし……

さすがに居たたまれなくなつたので、リタが昨晚封印（破壊）したロストロギアの残骸でも眺めることに……ってなにこれ？

既に原型を一切留めていなかった。

別に無傷で回収しろとは言われていないし……大丈夫だと思いが。

うん、ロストロギアを簡単に紛失して自分で回収する気もないよ  
うな奴なんてロクでもない奴だろう……無問題だ。モマンタイ

回収できたのだから幸先は良いハズなのだが……

「はぁ……」

溜息の一つ二つくらい許して欲しいものだ。

朝から黄昏ているうちに朝食の時間になったようだ。

「はい、あゝん」【注：脳内イメージです】」

「あゝん」 うん、今日も桃子のメシは最高だな」【注：脳内イメージです】」

「もう、士郎さんったら」【注：脳内イメージです】」

ラブラブイチャイチャ……

うん、なんていうか……約2名ほど仲良が過ぎたろ？

確かに原作なのはさんの疎外感が……なんとなくだがわかる。

現在は美由希さんがその役なのだろう……もしかしてウチを使えと言ったのはこのためではないだろうか？

そつと視線を美由希さんに……あつ、逸らされた。

「『幸』という字と『辛』という字は良く似ているよ……ホント悲しいくらいね！」

後に美由希さんはそう語ってくれた……強く生きて下さい。

高町家における魔王生誕秘話の一端を垣間見た気がした……

「ところで今日はこれからどうするんだい？」

朝食も終わり、皆それぞれが仕事の準備に入ろうとしているころ、士郎さんがそう訊ねてきた。

「そうですね、フィールドワーク、というわけではありませんが、街に出てみようと思います。一応、常時サーチ…探索魔法の類を飛ばしているので必要ないと言えませんが……」

他人様のお家でグータラしているのも常識的にダメかと……

「リタの方はもう少し寝ているかと……色々と疲れているみたいですし」

「ふーん、色々か……最近の子は（ry」

美由希さんがブツブツ何か呪詛のようなものを呟いている。

ナニを想像してるんだか……

「そうか、外は十分気を付けるんだよ？ お昼には一旦翠屋…昨日の喫茶店においで、昼食をご馳走しよう」

ええ人や……自分の周囲には一切いなかったタイプだ。

ふむ、ついでにすすかさんへ昨日のお礼もしたいな。

どうせなので聞いてみることに。

「あつ、そうです。もし知っておられるなら月村すずかさんの住所が連絡先を教えていただけないでしょうか？　昨日のお礼をしていなかったの……」

恩は返さねばな、自分の場合は返された覚えが少ないが……なんか虚しくなってきた。

「そうか、すずかちゃんが案内してくれたんだ……うん、こっちから連絡をいれておこう。都合が合えばお昼にでも会えるかもしれないし」

お昼に翠屋で、か。

それなら心置きなく……はないが、海鳴を散策することに。

「いつてらっしゃいゝまたお昼にね」

「はあ、若いつていいなあ……」

桃子さんにそう笑顔で（美由希さんには複雑な眼差しで）見送られ、いざ街へ。

「まあ、そもそもジュエルシードが这个世界、この街にあるとは限らないのですが……」

ぶつちやけ、ヴァン師匠せんせいの連絡待ちだ。

正直な話、ないこと祈りたいのだが……

「まっ、なるようになれですね」

昨日もなんとかあったのだから、今日もなんとかなるだろう。

そんな超樂觀的な考え……でもないと言ってられんな。

こうして私の長い1日（冒険）が始まった。

原作時間軸／海鳴クエスト（旅立ち編）（後書き）

海鳴クエスト続きます。

原作時間軸／海鳴クエスト（遭遇？編）（前書き）

まだゲーム中…短いのでタイミングを見計らって書いています。

ちゃっちゃと続きを書きあげれるよう（一応）頑張ります。

原作時間軸／海鳴クエスト（遭遇？編）

海鳴クエスト／ロストログアを求めて（その2）／

さあ、冒険という名の散策に飛び出した主人公<sup>アベリス</sup>！

彼の行く先にあるものとは！？

そしてついに本編最大の謎である……………はあ……………

虚しい………… ツツコミの大切さを失ってから気付くなんて…………

いや、寝ているだけなんだけどね。

さつさと散策に行こう…………

いざ散策と言っても実際はただの散歩に過ぎない。

常時サーチャーを飛ばしているし、反応があれば自動で結界まで張るという超スグレものだ。

むしろ散歩という名の逃げか…………

他人様の家に残っているのもいたたまれないし。

「何か異変でも感知できれば万々歳といったところでしょうか……」

ヴァン師匠<sup>せんせい</sup>に依頼された件は片付いているので実際は連絡待ちなのだが……何もしていないとなると、なんというか沽券に関わる気がする。

出番がないのは割といつものことだが……うん、なんか釈然としない。

「……はあ、少しばかり広域探査に力を入れてみますか」

オートより少しはマシ、といったところだが他にすることもなし……

それにリタが（一応）仕事を片付けたのに自分だけ遊んでるわけにもいかない……

「とりあえず適当に歩いてみますか」

行先は……人の多い所から行ってみるか。

「目標……大きなショッピングモールで」

いざ……！！

「……人多すぎです」

忘れていたが今日は休日だったようで、家族連れのお客がわんさかいた。

……うえ、人波に酔いそうだな。

どこかに避難を……てかデパート屋上とか高いところがいいのだが……今のご時世、屋上付きとかあるのだろうか？

とりあえず通路真中に設置してあるベンチで休憩……携帯端末を模擬したデバイス（セイクリッド・スカイ）を弄る。

まあ幻術の応用なのだが……まあ、ヒューゴさんに頼めばそんな機能も付けてくれるかもしれない……

結果は……サーチャーに異常なし、この区域での反応もなし。

昨日に封印したジュエルシードのデータを反映し、封印状態でもヒットできるレベルのサーチャーなんだが……

「この周辺にはなしですか……いえ、こんな所で反応がなかっただけ御の字ですか」

まっ、そもそもジュエルシードがこの街にあるかもわからないのだが……

「それにしても、こんな世界<sup>とら</sup>まで来て、私は一体何をしているんでしょうか……」

少しばかりの自嘲……あの時リタに相談なんてしないで、じっとしていれば良かったのだろうか？

それとも危険を承知でヴァン<sup>せんせい</sup>師匠にでも頼ればよかったのだろうか？

または……いや、そんな『IF』ばかり並べても意味はない、か

……

そんなネガティブな思考に陥っていると……

「……ごめんなさい、友達と約束……」

「……ならさ、その友達も一緒に……」

「……その、困ります……」

「……いーじゃん、いーじゃん……」

なんか典型的なナンパのやりとりが聞こえてきた。

別にどうでもいいので無視することに。

そもそも出しゃばるような正義感があるわけでもないのに、むしろナンパ君に頑張れと応援してやる……むろん犯罪者にならない程度に、だが。

「……じゃあ、その子が来るまで一緒に……」

「……あの、だから……あつ！……もう来てみたい……」

次はどこに向うか……

「……えっあの子？　可愛い……じゃん外人さ……ぜひ紹介してよ……」

臨海公園……は遠いか、河川敷を歩きながら適当に散策して翠屋に……

「……もう、だいぶ待ったんだよ？　早く行こう？」

急に声をかけられた……って私？

顔を上げると……

「昨日約束したでしょ？　さっ、買い物に行こう？」

……昨日会ったばかりのすずかさんがおりました。

……なんでさ？

だがそこは空気が読める主人公<sup>アベリス</sup>、なんとか話を合わせます。

すずかさんも困り顔で『お願い』と目で訴えていたし。

相手はチャラチャラなヤングボーイ（推定20歳前後）の野郎が2人、顔は……普通じゃね？

よくすずかさんに声なんてかけられたものだな。

2人だと勇気も2倍なのだろうか？

「えゝ買い物なら一緒に見てやるよ、そのあと一緒にカラオケ行こうぜ！」

常識は2人で2分の1な気がするが……午前中からカラオケってどんだけハードなんだよ？

「そうそう、そっちの『彼女』も一緒にさ、いわゆるダブルデート！ うん、完璧！」

うん、完璧だな、お前らの脳のイカレ具合が……

どうしても母親似の顔なので見た目は仕方ないが……まあ髪も原因か。

以前に幻術で髪を切ったバージョンを作って見たが……なんていうか想像以上に似合わなかったのだ。

とりあえず余程な切欠でもない限り切ることはないだろう。

まあ、身長が伸びて声変わりするまでの辛抱だが。

……てゆーか見た目が中学生にナ二言ってんだコイツラ？

どうやら色々と『アウト』かもしれない輩だ。

「あの、だから……」

すずかさんならこーゆー輩の振り方とか心得てそうだけど……仕方ない。

ハッキリ言ってやりますか。

「――sorry……shoppingの邪魔ナので、ツうテこー  
にや」『いデくらさい』

翻訳魔法使わないで言ったら凄い発音になった。

いかにも日本語が苦手な外人を装ってハッキリと『拒否の言葉』  
を示すつもりだったのが……

「……ぷっ、ついてこーにや」『いデくらさい、だつてさ！ かつわ  
いー』

神は死んだ。

いや、むしろ神さまにも聖王さまにも既に見捨てられている気は  
するが……

すずかさんも『あちゃー』という顔をしている、笑われていない  
だけマシだが。

仕方ない、こういう時は……………戦略的撤退だな！！

「——しツレい！」

「えっ、きゃっ！？」

すずかさんの手を取り、人波の中に消えることに。

「あっ、おい！？」

もう遅いわ！！

勝手に『にゃ』の余韻にでも浸っているがよい愚か者どもが！！

異世界生活2日目の午前は、成果なしの探索結果と痛恨の発音ミス、そして女性の手を取り逃走することから始まりました。

原作時間軸／海鳴クエスト（遭遇？編）（後書き）

海鳴クエストまだ続きます

原作時間軸／海鳴クエスト（遭遇！編）（前書き）

モチベーションが低下気味…

原作時間軸／海鳴クエスト（遭遇！編）

人は生まれながらにして罪を背負っている。

そんなフレーズをどこかで聞いたことがあるだろう。

確かに人が、というより生き物が生きていくためには他の命が必要だろう。

そう考えると人生とは『救う』より『奪う』の方が圧倒的に多いのではないだろうか？

まあ、だからと言ってどーしたわけでもないのだが。

ツツコミ不在のためテキトーなこと言いたい放題だが……寂しい。

……リタ早く起きて。

「ハッ、ハッ、ハッ……ちょっと止らない？」

結局、当初予定していた河川敷辺りまで走ってきてしまった。

ずっとずかさんの手を引いて……

「あつ……すみません、つい……」

いくら戦略的撤退のつもりでもこれは……

それにだいぶ走らせてしまった。

まあ、私もずかさんもほとんど息を切らしていないが……

私は体力には自信があつたが、ずかさんも凄い。

色々と気になるが……触らぬ神にんとやら、気にしないことにしよう。

「すみません……確か友人と買い物の予定があつたのでしょうか？」

そんなこと言っていたような……

「えっ？ ああ、大丈夫だよ。あれは嘘だから♪」

……そつですか。

「でも君を探してたのはホントだよ？」

なんですと？

「なのはちゃんのお父さん……えっと、翠屋のマスターさんから連絡もらって……」

お昼に翠屋ではなかったのか？

「ちょっと散歩気分だったのから、居場所は……そう、女の感だよ。」

女の感ってスゲーな。

「ちょっとお話してみたくなって……時間いいかな？」

「そっかアペリス君っていうんだ……」

ひとまず河川敷の土手らしき草の上に座りながら自己紹介を……  
今更だが。

「……空？ 解……どういう意味なんだろう？ ブツブツ……」

「どうかしましたか？」

「えっ、うん、なんでもないよ……えっと変わった名前だね？」

名前か、一応名づけは父さんらしいが（愛称はお母様だが）……  
そっいえば由来とか聞いたことがなかったな……今度聞いてみよう。

とりあえず今は昨日のお礼を言うのが先だ。

「昨日はありがとうございました。おかげで路頭に迷わずに済みました」

「うっん、わたしにできることはそれくらいだから……」

ん？ 若干トーンが落ちたような……

「それで話したいこととはなんでしょう？」

特に話題もないので要件を聞き出してみる。

「発音上手だね……それも魔法なのかな？ うん、聞きたいことは魔法……うっん、魔法世界についてなの……」

なんですと？

要約すると親友が住んでいる世界はどんな世界なのか、現地の人に聞いてみたいらしい。

どう、と言われると……

「日常生活においては『この世界』とも大差はないかと。文化は……まあ、差異はあれど方向性の違いというか……」

なんてゆーかもつと具体的な質問にして欲しい。

「あつ、要領を得ない質問でごめんなさい……えっと、じゃあ『魔法』を使って戦う、というのは常識の範疇というか……割と当たり前  
前の考えなのかな……？」

……そーゆーことか。

親友が命を賭してまで頑張ることに心配を……いや、疑問を持っているのか？

確かに魔法圏の世界でもないのに才能が『たまたま』あつただけの普通の少女が、巻き込まれたとはいえ世界のために戦い、傷ついて、他人のためにその力を振るって……

それは自分で選んだ進路<sup>みち</sup>であり、行動理念も立派だが……やはり周囲はそう簡単に納得しないのだろう。

現にこうして会えない親友の心配をしている女性がいるのだ。

「……日常で利用できる魔法もたくさんありますが、やはり戦闘向  
けも多いと思いますね。人によってはリンカーコアがなく……最初  
から魔法を使うことのできない人もいますから、才ある者にとつて  
は割とそうなのかもしれません」

リンカーコアの有無でだいぶ選択肢が変わるのは事実だろう。

実際にとある別世界ではリンカーコアの有無で差別もあるらしい。

「その中でも有無大小というのは人生における大きなウェイトです。

それを活かせる場となったら自ずとそうになっているのが現状でしょう……人は才能の奴隷ではないのに」

私も魔力値だけは高いから、聖王教会側じゃなかったら管理局にあの手この手で勧誘されていたかもしれない。

「……そっか「ただ」……えっ？」

すずかさんが何か言いかけたようだが遮る、折角だから切りの良いところまで話すことに……これはそう、滅多にない『私のターン』な気がする。

「過程があるなら結果は付きものです。魔法によってあった出会い、痛み、喜び、そして救い……それらを否定はしません。それは全部私自身の大切な経験ですから」

確かに痛みとか苦労とか『非常に多い』が、魔法によって救うことができたこともあったし、救われたこともあった。

まあ、元凶が魔法のせいだと言われると黙るしかないが……

それらをひつくるめて私自身を構成する一部となっているのは事実だ。

いや、ホント苦労はいっぱいなんだけどね。

「まあ、私にはそのご友人の考えまではわかりませんが……」

ただの持論だが、と言いまとめる。

やはり魔法圏の世界はこの世界の常識と比較すると歪んでいるだろう。

だけど何が正しくて何が間違っているなんて問答をするつもりなんてない。

結局は……

「結局は個人の考え、行動次第なんだね……」

まあ、そうなるわな。

「うん、少し考えてみて……話してみるかな、こっちはかり心配するのも不公平だよな」

そーゆーもんだろうか？

それで納得するならそれでいーんだが……

その他、あーだこーだ話している内にほどよい時間に……

「そろそろ翠屋に向おつか。今から歩けばちょうど良い時間だし」

すずかさんがそう提案し、特に異論もないので翠屋に向うことに。

「お手をどうぞ、お嬢様？」

そう言って草むらに腰かけているすずかさんに手を差し伸べる。

男子たるもの紳士であれ、とヒューゴさんが言っていた。

それを見習ったわけではないが……てゆーかヒューゴさんはカリムさんに気を使って下さい、マジで……そのうち円形脱…ゴホン。

「あら、なら翠屋までエスコートお願いしようかしら、小さな騎士<sup>イ</sup>さん？」

すみません、道がイマイチわからないのでそれは勘弁して下さい。

と、手を繋いだ瞬間……隔離用封時結界が自動発動した。

範囲広っ！？ 発生源は……海だろうか？

ここからでは目視は不可、サーチャーで確認を……

「——ってデカッ！？」

場所は臨海公園だろうか？

なんかやたらでっかい海洋生物……えっとティルズ風に言うならクラーケン？らしきものが暴れている映像だった。

ちなみにこのクラーケン（仮）ってタコとイカどっちを取り込んだのだろうか？

まあ、それはどーでもいいか……

とりあえず現場近くに向って確認と報告をした方がいいのだろうか？

正直、嫌だな……危なそう。

結界が持つ限りはほっといっていーんじゃね？

生憎と戦うつもりは一切ないので……任務外、任務外。

そんなことを考えていると……

「あゝ？ わたしはどうしたらいいのかな？」

「……………えっ？」

その声に振り向くと、手を繋いだままのすずかさんがいました。

……………あれ？ もしかして巻き込んだ？

どうやら私の悪運は割と伝染するようで……

ちなみにこの結界は私の張ったものではないので脱出させるのは地味に困難だ。

……リタ早く起きて（泣）

原作時間軸／海鳴クエスト（遭遇！編）（後書き）

忙しくなってきたので、またゆっくりペースになります。

原作時間軸／海鳴クエスト（激闘？編）（前書き）

相変わらずモチベーションは低く…

なんとか週一くらいにはあげたい…

原作時間軸／海鳴クエスト（激闘？編）

ただ『生きたい』と思うこと、願うことは罪なのだろうか？

それは生物の本能そのもの……言うならば自然の摂理、か？

逆に『死にたい』と願うことのある人間とは摂理の叛逆者なのだろうか？

そう考えると人間はなんて傲「えつと厨二病って言うんだっけ？」

……海鳴クエスト始まります。

「えつと、今回のツッコミは月村すずかで御送りしました……コレ次回もやるの？」

やりません。

「えつと……どうしよう？」

すずかさんがそう訊ねてくるが……ホントどうしよう（汗）

まさかジュエルシールドが実際にこの地にあつて発動するとは……

仕方ない、こんな時こそ高速思考展開だ！！

結界からの脱出は？

内から外は難しい、てゆうかほぼ無理！！

結界を一旦解除するのは？

クラーケン（仮）が一般に見られる

ほぼタイムロスなしでは？

あの質量の相手だと物理的な損傷が現実に出る

いつそリタを起こすのは？

殺される！？

いや、半殺しだろ？

洗濯かも

むしろインディグ？

トラウマがああああ！？

ああ、もう！ 我が思考ながら役に立たない！！

とりあえずエイミィさんに連絡してみれば？

.....

おっ、どうやら結論がでたようだ。

この間まさかのジャスト1秒。

「とりあえずエイミィさんに相【こちらエイミィ・ハラウン！  
ジュエルシードの反応あり！ アペリス君は今どこにいるの！？】  
……結界内です」

言う前に連絡がきた。

【よかった、ジュエルシードなんだけど……って、なんですずかち  
やんがいるの！？】

かくかくしかじかうーまうま。

「えっと偶然巻き込まれちゃって……」

ちよっと視線を逸らしながらエイミィさんにそう答えるすずかさ  
ん。

【偶然、ね〜】

2人とも意味深な言動しないで……

「……とりあえずアレはどうするんです？」

あのクラーケン（仮）はほっといていーんだろっか？

【おっと、そうだね。うん、単刀直入に聞くよ？】

エイミィさんがやたら真剣な表情で……

【——アレ封印できる？】

そう問うてきた。

……正直、その言い方はずるい。

アレの封印を『できる』『できない』かと聞かれれば、おそらくできるだろう。

『できる』と言えば、自ら危険に飛び込むもの。

『できない』と言えば、安全かもしれない選択。

正直、危ないことはしたくないが……

「——できます」

なんてゆーか……格好悪い姿は見せたくないものだ。

他にも理由を付け足すならいくらかでもあるが……たまには最後まで  
で恰好良くいきたいものである。

【……うん、お願い！ こっちも緊急職場復帰！ 全力でサポート  
するよ！】

やるっきゃないか。

久々に全力で「あゝわたしはどうしたらいいんでしょうか？」  
……早速出鼻を挫かれた気がしたよ。

【あつ、ずっとそこで待機してもらうのも危ないかもしれないね。  
普段だったらこっちから転送するところだけど……この結界、ずい  
ぶんと強力みたいで干渉できないんだよね……】

リタさんマジパネエっす。

「わあゝ！ すごいね！ わたしたち生身で空を飛んでるよー！」

結局、すずかさんも一緒に近くまで連れていくことに。

いざという時、すぐ連れて逃げれるように、と。

封印手段が遠距離なので、こちらとしても問題はないのだが……

「うわあゝ！　大きいね！？　あれはイカなのかな、タコなのかな！？」

私の腕の中でずいぶんとはしゃいでいる様子……まっ、強張っているよりはマシか。

腕の中ということはご察しの通りの『お姫様だっこ』だ。

その状態で目的地まで飛行している。

役得かもしれないが……ある種の拷問でもある。

【あらあら、まあまあ】

エイミィさん  
外野の視線がとっても痛い。

映像なんかは消してもらわねば……後で酒の肴になってしまいうだらう。

……覚悟しろよクラーケン（仮）

木端微塵にしてくれるわ！！

その後、数分程度で臨海公園上空まできたのだが……

「あの子、もしかして泣いている……の？」

すずかさんがクラーケン（仮）の姿を見てそう呟く。

私にはそこまでの感受性がないのでわからんが、クラーケン（仮）を見ると……いたるところに傷痕が見受けられる。

もしかしてジュエルシードに願ったのは……

「……だとしてもやることは一緒です」

アレの願いがどうであれ、ジュエルシードなんてものは封印する。

そもそもあの姿では碌な事にはならないだろう。

ならば……

「ならばいっそ……すずかさん、今足場を作りますので」

魔法で空中に足場を作りすずかさんを下ろす。

「あの……頑張つて」

「はい……せめて一瞬で決めます」

うん、久々に全力で魔法を使うことに……いくぞ！

「——解放します！！」

オーバーミジッ  
OVL!!

魔力とか鬱憤とかストレスとか、とりあえず色んな物を放出し半無敵状態で体中に力を漲らせる。

「……あなたはただ生きたかっただけなのかもしれませんね」

目下で暴れ続けているクラークン（仮）を見下ろし呟く。

そしてセイクリッド・スカイを起動させる。

「……でも私は詫びませんよ？ だから恨んでもらって結構です」

クラークン（仮）に恨まれるのもなんかシュールな気がするが……  
…そう思いながらモードを切り替え、ガンディーヴァ、弓形態へ。

「——さようなら……無慈悲なる白銀の抱擁」

久々の全力全壊……！！

「——アブソリュート・ゼロ……！」

瞬間、世界は白銀に包まれた。

目下には巨大な氷像アイススタチュがある。

悲鳴も雄叫びも全てを空間ごと一瞬で飲み込んだ。

このデバイスは相変わらず厨二性能だ。

【——すごつ、クロノくんやはやてちゃんの氷結魔法の比じゃないねコレ！？】

「——あの巨大な体が一瞬で……これが本場の魔法……？」

エイミィさんもさすがさんも相当驚いているようだ。

ちなみにコレは場合によって封印まっしぐらな魔法だ……威力デカ過ぎだもんね。

そして今回は前回の失敗を踏まえ、周囲に温度調整用の結界を張っているので寒くはない。

さて、後は氷像を砕き、ジュエルシードの封印といこうか。

「——続けていきます、混濁に沈め！ 憤怒の撃鉄……」

「ピコハンマー」

巨大なピコハン  
が氷像に振り落とされ、  
氷が木端微塵に砕け散  
る。

うん、効果は抜群なんだが……なんか色々台なしだ。

だってこれしか思い浮かばなかったんだもん。

あつ、ジュエルシード出てきた。

「【……………】」

2人の沈黙と視線が凄く痛いけど、なに気にすることはない。

そして弓を構える。

あれからこのモードにも色々追加したので……

「——シーリングアロー」

封印術式を含んだショットを撃つなんてこともできるのだ。

これでもう意味のない弓形態なんて言わせない。

一閃、剥き出しになったジュエルシードを射抜く。

ちなみに誘導性も威力もバッチリブーストしているので無問題！  
モーマンタイ

なんかようやくブーストデバイスらしくなってきた。

そして封印付加を伴った射撃はジュエルシードを射抜き……

「——ジュエルシード封印、シリアルナンバー13」

無事に封印完了……しかし、よりによって13、なんか不吉だな。

「あつ、えっと、お疲れ様？だよね」

【あれっ……終わったの？】

なんてゆーかピコピコハンマーが相当シユールだった模様……シヤル帰ったらめる。

「一応、無事に回収完了です」

ひとまず任務……ではないんだよねコレ。

ただ『任務外作業＋シユールな印象・今回の活躍』プライスレス』  
だろうか？

なんか締まりのない終わり方だな……結局いつも通りだが。

海鳴クエスト午前の部、無事終了。

ピロローンー！

【ピコピコハンマー】を習得しました！

原作時間軸／海鳴クエスト（激闘？編）（後書き）

普段目立たないキャラが急に活躍するのも死亡フラグらしいです。

主人公にまさかの死亡フラグが…

でもちよっぴりだけモチ上がりましたv

原作時間軸〱海鳴クエスト（休息？編）（前書き）

とりあえず早く新章にいくべく頑張ります。

海鳴クエストは次回が最期です。

そして今回はいつもの倍です。

原作時間軸／海鳴クエスト（休息？編）

忘れない、あの涙も痛みも悲しみも……って負の方向ばかりかよ！？

いい思い出が少ないな……

ゴホン……『始まり』と『終わり』はワンセット、物理的に永遠なんてものはない、あったらいけない。

行く川の流れはなんとやら……不変なものなんてない。

終末の時計は動き出した、もう誰にも……

臨海公園でのクラーケン（仮）を撃破後、道中すすかさんに魔法に関してアレコレ聞かれながら当初予定の翠屋へ。

どうやら魔法技術に大層興味があるようで……根っからの技術屋というかなんというか。

わかる範囲で回答しながら目的地に到着した。

「さすがにお昼は混んでいますね」

「あつ、予約席にしておくって言ってたから大丈夫だよ」

至れり尽くせりなこと。

「いらっしやいませー」 あつ、2人共きたんだね、奥へどうぞー  
」

美由希さんに案内され昨日と同じ奥のテーブルへ、そこには既に  
先客がきていたようで……

「お疲れ〜」 いや〜なんてゆーかシユールだったねピコハン」

「……良い御身分なこと、待たせた挙句に……まあ、あたしには関係  
ないけど」

先ほどまで通信をしていたエイミィさんと、ずっと（ツツコミを）  
待ち望んでいたリタにちよっぴり心決られる挨拶をいただきました。

昼食……といっても喫茶店ならではの軽食を済ませ事務連絡へ。

「2人ともお勤め御苦労さま。これグランツ騎士団長からなんだけ  
ど……」

そう言ってエイミィさんから渡されたデータは正式な遺失物管理  
者の辞令と今回の任務における依頼、そして……

「――総合Aランクの証明書？ ……特に試験を受けた覚えはないのですが？」

なんでさ？

「ああ、それに関してはグランツ騎士団長から伝言があって『私の方で申請しておいた。なに、これはまっとうな手段であり、身内贓のない審査に基づく考えだ。任務に就く以上は持つておきなさい。ただしそれ以上のランクは自己申請し試験を受け、資格取得をするのだな』だってさ」

要は辻褄合わせか。

リタの方も同じく総合Aランクだが……

「そっちにも伝言あって『お前ならSランクはいけるだろうが、試験もなしにそのランクの申請は無理でな。段階を追って受けてみるのだな』だって、凄いな。グランツ騎士団長にそれだけのことを言わせる実力者なんだね！」

……わかってたことだし、面倒な柵は欲しくないから別に悔しくなんてないよ？

「それと連絡用端末にコレをインストールしてね、これでミッドと

も通信できるようになるんだよ。」

おお、それは便利な……早速インストールを実施する。

「とは言っても今日の夕方には捜査としてフェイトちゃんがかかるから、この件はボタンタッチなんだけどね」

そして一瞬で割と不要な代物に……なんでそんなに上げて落とすのかな？

ん？ 『捜査としてフェイトちゃんがかかる』と言ったか？

「この件はフェイトさんが担当するのですか？」

「うん、すぐに動ける人材の中でジュエルシード事件に関してはフェイトちゃんが適任だからね」

……なんとなくが繋がってきた。

ただしそれは原作を知っているからこそその差異であり、この世界が根本的に異なっていたらアウトだが。

ここらへんで決定打が欲しいところなのだが……

「——適任ね……それって10年前の事件ってやつ？」

ナイスリタ！ それとなく（ど真ん中ストレート）で聞いてくれた。

それがわかれば……ある程度見えてくるのだが。

「あーうん、ごめんねー10年前の件はちょっと話せなくてね……」

……だめか。

じょうがない、帰ってから何とか調べてみるか。

そうしているうちにソフトインストールが終了した模様……新着メール13件。

また13かよ……今日やばいんだろうか？

とりあえず上から流し読みすることに……

？ 送信者：ラグナ

『リースへ、なんとボーイフレンドができましたノノ もっと仲良くなったら紹介するね』

？ 送信者：ヴァイスさん

『ラグナにボーイフレンドができたらしいんだがどこから狙撃すべきだろうか？ 返答求ム』

？ 送信者：ラグナ

『お兄ちゃんに話したら何故かストームレイダーを磨き始めました。今度リースと一緒に狩りに行く予定なんだって？ どこの世界まで行くのかな？ その時はお土産よろしくね♪』

？ 送信者：ヴァイスさん

『ラグナにお前と狩りに行くと嘘付いちゃった、聞かれたら話を合

わせてくれ』

？ 送信者：ラグナ

『実は明日、初デートしてきます♪ 返信がないからリースは忙しいのかもしれないけど、勝利を祈ってくれると嬉しいな♪ じゃあ、おやすみ♪』

？ 送信者：ヴァイスさん

『聞いてしまった…… ラグナが明日デートらしい、事態は一刻を争う。俺は……』

？ 送信者：お母様

『リースへ、グランツさんから話は聞きました。異世界とはイキナリですが、体調を崩さずにね。それとナンパされてホイホイついていけないようにね？』

？ 送信者：カリムさん

『管理主任殿へ、グランツ団長からあったロストログア回収の件ですが、できる限り無傷でと依頼がきています。このメールを見ているころには既に無事確保できているころでしょうか？』

？ 送信者：エリオ

『リースさんへ、お疲れ様です。どうも大変なことになったようで……なんて言えば良いかわかりませんが頑張ってください』

？ 送信者：キャラ

『リースさんへ、リタさんと一緒に事件に巻き込まれたとお聞きしました。どうかご無事で、帰ってきたら連絡して下さいね』

？ 送信者：オレンジ博士

『やあ、いつも面白い作品をありがとう。代金は指定の口座に振り込んでおいたよ。今後は私も娘たちも忙しくなるから申し訳ないが次回依頼は当分先になるね』

？ 送信者：ユーノさん

『こんにちはアペリス、ジュエルシードの事件に巻き込まれたって聞いたよ？ アレはとても危険なモノだから扱いには慎重にね。帰ってきたら話を聞きたいから連絡もらえるかな？ お願い…そして気を付けてね』

？ 送信者：ラグナ

『お兄ちゃんが入院しました』

…… ってヴァイスさんに何があっただんだ！？

以前に死亡フラグよりは入院した方が良いんじゃない？ とは思っていたが……

てゆうか六課大丈夫なんだろうか？

それにしてもお母様…… 気にしないことにしよう。

そしてカリムさん、ロストロギアは既にリタが破壊済みですよ？

カリムさんだから絶対に無理だってわかっていて言っている気がするな……

ちなみにエミリオからメールがないのは、異世界では連絡が通じず、それに皆同じようなメールをしている、といった無駄なことはしないという考えからだろう。

……わかつているから悲しくなんてないもん。

「ところで午後はどうすんの？」

事務連絡後、食後のティータイムをしている最中、リタがそう訊ねてきた。

「今のところ特に予定はありませんね、もう少しだけ街中を散策してみようかとは思いますが……」

午前中に予定していたショッピングモール↓河川敷↓臨海公園は終わってしまったのだが……

「あつ、予定がないのならわたしと一緒に買い物にいつてみない？ さっきのお礼もしたいし、まだ聞いてみたいこともあるし……どうかな？」

お礼って……むしろ巻き込んだのだが？

そう口に出そうとした瞬間……

こら！ お姉さんに恥をかかせるんじゃないぞ！ むしろ誘う勢

いと言わなきゃだめだよ！

勝手すれば？ あたしは自由にうろつかせてもらうけど

外野（てか念話なので内野？）から口撃<sup>くちげき</sup>が……

まあ、私としても予定があるわけではないので……

「私でよろしければお供致します」

男子たるもの紳士であれとな。

ん〜でもその格好じゃねえ、なんか地味…… あっ少し破けてる！  
そういえばさっきバリアジャケット展開してなかったもんね

あの時は空間殲滅でしたし……それに自分だけ、というのも気が引  
けまして…… ってこの服はクロノさんの御下がりなのですか？

それを地味ってあなた……

ふふ〜ん！ こんなこともあるつかとさっき急ピッチで発掘して  
きたのだ！

「美由希ちゃん、ちょっと奥借りるね？ すずかちゃん、リタ  
ちゃん、少しだけ待っててね〜」 アペリス君はこっちきてね」

なんなんだ？

エイミィさんに連れられ奥のスタッフルームへ。

そこにあつたのは……

「お・ま・た・せ」

エイミィさんノリノリ。

「ぶつ、くつ、にっ似合ってるじゃない？」

リタぬところ。

「ああ、懐かしい」 劇でフェイトちゃんが着ていた衣装ですね？」

これはフェイトさんの御下がりだったのか……

「ご察しの通り、＼シャツは少し破けていたので、エイミィさんが用意していた服に着替えることに……それが……」

「……これなんて蒼 石ですか？」

「一応ズボンというかハーフなパンツというか、その辺に救いはあったが……」

「いやあ、昨日もヒラヒラしたブラウスだったから抵抗感ないのかな」  
「な」と思ってたんだけど」

昨日の自分に言ってやりたいわ、ヒラヒラはやめておけと。

そしてお世話になっている手前、断れない自分が悲しい。

「はい、帽子も忘れずにね、いや、これを見ると昔の劇を思い出すわね」と、確か題名は『マリサゲーム』だっけ？」

なにそれこわい。

エイミイさん曰く、この服を着て語尾が『なの』口調の姉役を守る鉄の騎士フェイトさん、ひたすらヤク。ト空容器を積み上げるすずかさん、とっても真紅でバーニングなアリサさん、ひたすら出番のない地味な策士はやてさん……カオスだ。

「じゃあ騎士<sup>ナイト</sup>さん、すずかちゃんの護衛よろしくね」

この格好で外を歩けと？

翠屋を出たら即効でバリアジャケットに着替えよう……魔力消費なんて気にしない。

「あつ、そうだ。セイクリッド・スカイでデカイ魔法使ったでしょ？ データ欲しいから借りるわよ？」

リタにデバイスを取りあげられた……これで退路はないと。

ふと助けを求める視線を美由希さんに送るが……目線が『このリア充が……』と語っていた。

マスターたち

高町夫妻は忙しそう……孤立無援とはこのことか。

「あつ、これ餞別」

そう言つてリタに傘を渡された……どうやら夕方から雨らしい。

ほらほら、ここまで御膳立てしたんだから男らしくいっちゃいなさい――

既に格好が男らしくないんですが？

……しょうがない、ここにはからかわれるだけだ。

「――では行きましょうか、お姫様？」

「――じゃあお願いね、小さな騎士<sup>ナイト</sup>さん♪」

この格好で街中を歩くのはもの凄く辛いが……なに、あと数時間後には帰るのだから……そう思えばなんとでもなる。

どーとでもなれ。

ピロリン――

【蒼き星騎士<sup>せいきし</sup>】の称号を得ました！

原作時間軸〱海鳴クエスト（休息？編）（後書き）

色々煮詰めすぎた話になってしまいました。

そして主人公の行く末は…

今週中には次話投稿したいものです。

原作時間軸／海鳴クエスト（青春？編）（前書き）

何度も書き直すハメに…

どうしても主人公を格好良くするとR指定とか違和感とか出まくる…

なので報われないのはデフォで（笑）

きっと新章では良いところがあります。

原作時間軸／海鳴クエスト（青春？編）

【蒼き星騎士<sup>せいきし</sup>】

説明：黒歴史を恐れない物に与えられる称号

条件：蒼 石のコスプレをした

効果：バリアジャケットに蒼 石コスが登録されました

備考：缺は別売りです

ピロリン！

バリアジャケットにコスチュームが登録されました

……えっ？ それだけ！？

てゅーかいらぬええええ！！

「あんたって重度の厨二病？ なに『終末の時計は動き出した』って？」

えっ！？ まさか前回分のツツコミをここで！？

「いや、その前の『救う』とか『奪う』とか『生きたい』だの『死

にたい』だの……」

やめてええ！？

不在回に分までツツコミを入れないでええ！？

「――厨二病乙」

ぐはあっ！！

外に出て激しく後悔した。

想像以上に視線を感じる……そりゃ目立つよね、外人のコスプレ  
って……

そこ！ 写メとるな！！

でも得意のポーカーフェイスで表面は比較的穏やか。

心の中は涙で海ができているがな！

それはともかく

「どこまで行きますか？ 街中のショッピングモールではまた絡ま  
れるかもしれませんよ？」

精神的にもだいぶ参っているので面倒事は勘弁して欲しいのだが

……

「あら？ 小さな騎士<sup>ナイト</sup>さんは守ってくれないの？」

すずかさんは楽しそうにそう切り返す。

正直な話、デバイスなどなくとも街のチンピラとかナンパ野郎が複数相手でも、身体強化とか魔力放出とかすればどーとでもなるが

……

「——私にできることは『逃走』か『誠心誠意の謝罪』くらいですよ？」

暴力沙汰はダメだ。

異世界の国家権力のお世話になるわけにはいかない。

「立場上、問題は起こせませんし……正当防衛すら危つい身ですよ？ なにぶん身分証明が難しいですから」

だから出来るのは精々逃走と謝罪の二択だけだ。

「この格好もありますし、できればあまり人の多くないところがありがたいです」

視線が痛い……

「そっか、そうだね。じゃあ、予定変更して散歩にしようか？」

お礼も言葉で十分、むしろ巻き込んだくらいだ。

美人さんと一緒に歩けるだけ良しとしよう。

「ねえ、異世界に…急に見知らぬ場所、勝手のわからない所に来て不安じゃなかった？」

午前中からの引き続き、色んな質問に答えながら人通りが少ない道を歩く。

ふと、その中ですずかさんが問うてきた。

不安じゃなかったと言えば嘘になるだろうが……

「色んな要素がありましたからそこまで不安ではなかったですね。そもそも私1人ではなかったですし……それにすずかさんに救われましたから」

ジュエルシードが関わっている時点でいずれ管理局が……そんな楽観的な考えもあったし……まあ、自分1人ではなかったしね。

まあ、途方には暮れていたが。

「……そっか、強いんだねアペリス君は。わたしだったら不安で泣

「いちゃうんじゃないかな？」

「そんなことはありませんよ。表情に出さないだけで内面では散々です……」

自分で言っていて悲しくなってきた……

今までを振り返るとホントそんなのばかりだ。

「それでも、だよ……わたしには出来ないもの」

そう言っただけで急に黙り込んでしまう。

何か悩み事でもあるのだろうか？

こちらは何を言えば良いのかわからないので、2人並びながら人通りの少ない道を沈黙とともに歩く。

いや、どーしろと……気まずさのあまり視線を上に向けて……

「……猫？」

「えっ？ 本当……降りられなくなったみたい」

公園通りの木々、その枝の上から降りられなくなっていると思われるお猫様が……

「にゃああ……」

昨日に引き続き同じ公園でお猫様に出会ったとは……

「アペリス君……あの……」

皆まで言わずとも。

「申し訳ないですけど……」

「あっうん、やっぱり危な」後でエイミィさんに服を汚してしまつた理由、説明と一緒にお願いしますね？」……もう！……ありがとうねアペリス君」

この位のことなら……

「もし枝が折れたら危ないので近づかないで下さいね？ あの子は……なんとか着地できるでしょう……あつ、傘と帽子お願いします」

そう言つてすずかさんに傘と帽子を渡し、木を眺める。

はつきり言つて登れる箇所が……手足をかける場所がない。

でも目立つ魔法を使うわけにもいかない、だつたら……

「——ただ一息で駆け上がるのみ！」

魔法による身体強化を施し、助走をつけ、木に衝撃を与えないように根本を踏み切り……一気に枝まで駆ける！！

そして……

「——にやあっ！？」

「——キャッチー!」

そのまま猫をキャッチして……着地する。

その間ジャスト4秒。

「……ミッションコンプリートですね」

「にゃああ……」

「……えっ? えええええ!?!? 登るんじゃないの!?!」

うん、結果オーライだ。

「にゃあああ……」

うん、お猫様もそう言っている気がする。

「えっ? 捨てられちゃったの?」

……全然違ったみたい。

「にゃにゃにゃん……」

「……そっか、行くところがないならウチにおいで?」

「みゃー」

「うん」

……どーでもなれ。

すずかさん曰く、このお猫様は飼い猫だったのだが、飼い主のお婆ちゃんが亡くなって息子夫婦にポイされたらしい。

本当かどうかはわからんが……

飼い猫に野生は厳しく、餌を求めて木の上まで登ったが降りられなくなっただけらしい。

典型的なアレだな。

で、このお猫様はすずかさんが飼っただけらしい。

「じゃあ更に予定変更してウチに向おうか？」

「みゃっ？」

公園のベンチに座りお猫様を撫でながら、すずかさんがその提案する。

まっ、特に予定はないので異論はない。

「あれっ？ ……雨かな？」

気づけばもう15時を回っていたため、天気予報通りポツポツと雨が降ってきたようだ。

「リタに感謝ですね、まあ、窮屈で申し訳ありませんが……」

そう言って傘を開きずかさんを招く。

「ふふっ、じゃあ行きましょうか？」

「みゃああ」

いざ月村家へ……？

ふむ、道を知らんな……

なんか情けなくなってきた。

雨の中、傘を差し2人（+1匹）並びながら道を往く。

そして住宅街が一望できる大きな橋へとかかったところ

「ねえ？ アペリス君はフェイトちゃんがきたらすぐに帰るの？」

ふと、ずずかさんがそう聞いてきた。

「そうですね。本タイレギュラーというか、事故で来ていたものですから。多少の心残りはありますが本業はあくまで学生ですからね」

御神の技を見られなかったし……今朝のウチに見ておくべきだったな。

「そっか、もつとお話ししてみたかったけど仕方ないか……」

そう呟いて再び沈黙へ……

何か気のきいたことでも言えれば良いのだが……生憎とそんな言葉は出てこない。

口先だけの野郎でもこーゆー時は羨ましくなるな。

こんな時こそ……我等がお猫様

「にゃっ？ にゃにゃ！？ にゃにゃーん！！」

何を言っているのかさっぱりわからんがな。

「えっ？ 違うよーもう！ ただ切っ掛けになればなーとは思っけど……」

「にゃにゃ？」

「そう、勇気を持ってないわたしが新しい一步を踏み出す切っ掛け……」

さっぱりわからん。

「……みやああああ!!」

「きゃっ!?!」

えっ? お猫様が突然ずかさんの腕から飛び出して歩道から…  
…車道へ!?!

なんでさ!?!

そしてテンプレの如くでっかい輸送用トラック(推定80km/h)が……!?!

——咄嗟に身体強化を施し、足元から魔力放出、更にデバイス制御なしの覚えてから一度も使ったことがなかったソニックムーヴ(仮)で飛びだす!

間に合ええええええええ!!

「——だめえええええええええ!!」

悲鳴だけが辺りに響き渡った……

原作時間軸へ海鳴クエスト（青春？編）（後書き）

主人公死んだー！？ いや死んでないけど。

海鳴クエストはこれで終了。

続きも書きあがっているので確認と修正したら上げます。

## 原作時間軸／epilogue（前書き）

ある程度は予定通りの進み具合なのですが、ここまで50話もかかるなんて…早く本編に入りたいと連呼していた割に本当に時間がかかりました。

文章を書く難しさと言いますか…長かったです。

## 原作時間軸 e p i l o g u e

「ふむ、右足骨折、肋骨4本に罫、全身打撲、急激なGによる内臓負荷 e t c …… 全治4か月といったところか…… 何か言い分はあるか？」

…… ありません。

ここは懐かしの聖王医療院、S t ・ヒルデ魔法学院初等科の入学式当日に入院して以来だ。

まあ、入院以外でもちよくちよくお世話にはなっていたが……

そして現在、個室でヴァン師匠せんせいのお叱りを受けております。

「まさかジュエルシード関連ではなく、猫を助けようとして重傷を負うは思わなかったぞ？」

自分も同感です。

「しかも、トラックに撥ねられたのではなく、『跳び出した勢いで橋から落ちる』とは……」

まさか最後の最後でやらかすとは……

確かにお猫様は無事救出できた。

ただ跳び出した勢いが不味かった。

ダイジェストに説明していくと……

？ 身体強化、魔力放出、ソニックムーヴ（制御なし）の急激な跳び出し

？ お猫様救出

？ 歩道の段差に躓くのを避けるためほんの少しだけジャンプ

？ 勢い余って跳び過ぎ& a m p；飛び過ぎて橋の欄干に右足の脛が激突（この際に骨折）

？ その際にお猫様を手放し、お猫様は『なぜか』無事歩道に着地

？ 慣性の法則というか見事に空中何回転もしながら橋の外へ

？ そして20 m以上下の川に落下（この際に水面強打、全身打撲と肋骨に罫）

？ そこで気絶、ようやくソニックムーヴ状態が解除（過負荷による内臓ダメージ）

？ 雨で勢いの増した川に流される（？？？まで10秒もかからなかった）

？ なんとか海まで流される前にすずかさんに救出された（らしい）

ちなみにすずかさん自ら川に飛び込んで救出してくれたみたいで、病院ではなく個人の医者呼んで診てもらったらしい（すずかさんスゲー）

そして気付いたら懐かしの聖王医療院でした、っと。

とりあえずジュエルシード等の件はリタから報告を受けるから安静にしている、そう言ってヴァンせんせい師匠は病室を出ていった。

そして入れ違いでお母様が病室にきた。

「もうリースつたらおつちよこちよいね？ 入院セットは持ってきたから他にも必要なものがあつたら言ってね？」

おつちよこちよいって……

「お医者様の話だと入院2か月と半分、通院1か月と少しみたいね」  
なんかもう『ゆりかご』とか無理っばくね？

途方に暮れているとコンコンとノックの音が部屋に響き渡った。

「はあゝい、開けても大丈夫ですよ？」

色々アレな私に代わりお母様が返答する。

「よう！ お前も入院したって聞いてな。なんだ？ 可愛い女の子かと思ったか？ それは残念、同じく入院中のヴァイスお兄さんでしたっと」

HAHAHAHAと笑うヴァイスさん……なんだろう今のフレーズに何か殺意を抱いた気がする。

「おっと！　これから診断でな、じゃあな！」

えっ？　それだけ？

そして再び締まるドア。

「――ファッ。ン……」

とうとう心の声が表に出るようになった。

そしてまたノックの音が……

「はいはい、空いていますよ？　冷やかしながらご免ですからね」

超投げやり（なんかヤケクソ）でそう返答する。

「あつ、えつと、月村すずかですけど……こんにちはアペリス君……  
…その、タイミング悪かったかな？」

……とりあえず確信した、私には神さまや聖王さまの加護なんてない。

「じゃあ、お母さんは荷物の整理をしておくから、2人で散歩でもしてらっしゃい」

そう言って車椅子を渡され、すずかさんと一緒に中庭までいく。

「アペリス君はお母さん似なんだね？ そっくりでびっくりしたよ」

「そうですね、見た目が若いままですと、いつか自分の方が老けて見えるのではないかと結構不安なものですよ？」

「ああ……うん、それわかるなあ……」

そんな他愛もない会話しながらの中庭を歩く。

「——話は聞きました、川に飛び込んでまで助けていただいた、と」

2人揃って中庭に咲いている花を眺めながら、そう切り出す。

「お礼……言わせて下さい。危険を省みず私を助けていただいたこと感謝致します、ありがとうございます」

「ううん、元々わたしのせいであの子が飛び出しちゃったから……わたしかからも言わせて？ あの子のこと助けてくれてありがとうございます」

「そんなこと……ない……です、わっ私が、勝手に……ウツ……クツ……」

……今回は最後まで言い切れなかった。

なんか涙が止まらない。

いい加減自分が本当に情けなくて……

「私にも……あつた、みたいで、す。悔しい、とか……情けない、とか……人並みの……」

仕方が無い、運が悪い、いつもそうだった。

『諦め』という呪いをずっとその身に刻み続け……

「何が、騎士<sup>ナイト</sup>ですかね？ 結局……助けられて、ばかりで……それで浮れて……さぞ滑稽だった、でしょうね……」

そう自嘲する……今までの分も含め本当に自分が情けなくて……

「——そんなことないよ？ あなたはわたしに一步を踏み込む勇氣、そして新たな道へ進む切っ掛けをくれたもの」

「……えっ？」

顔を上げずかさんを見上げる。

その顔はとても穏やかで、決して嘘を付いているような表情には見えない。

「あのね、アペリス君、どうしてわたしがここにいると思う?」

そーいえば、うって、ミッドじゃん。

わざわざミッドまでお見舞い？ な、わけない、よね……？

「わたしね、今度ミッドチルダに移住することにしたの、今日はお見舞い兼ミッドチルダの下見なんだよ♪」

「……」

え え え え え え え え え え え え え え え ! ?

「どっ、どっしてですか!？」

「技術者として未知の分野は夢がいっぱいなんだよ？　今までは中々その一歩が踏み出せなかったけど……これを期に、ね？」

いや、確かに魔法技術関連に並々ならぬ関心はあったのは感じとれていたが……

「あら、アペリス君は嫌なの？ わたしとは顔も会わせたくない？」

まじカオス。

「ふふっ、これからもよろしくね？  
マイ・リトルナイト」？」

わたしの小さな騎士さん》

原作時間軸 } e p i l o g u e (後書き)

次回より新章です。

これまでと一変します。

だって 自主規制 なので(笑)

次回更新は11/4予定で…

## 本編〈偉大なる獅子（前書き）

新章開始、この章からStS本編です。

（今回はいつもよりやたら長いです）

ここまでくるのに4か月もかかるなんて思っていました…

文章書きはとても難しいです。

ちなみに新章タイトルのD・Cはディレクターズカットではありません…  
せん…

## 本編く偉大なる獅子

幼い頃

見上げるといつも彼女は優しく微笑んでくれていた

時が過ぎ、成長するにつれ

その笑顔を見上げる必要はなくなっていくた

だが、同じ目線になるにはまだまだ足りないようだ

両親は常に暴走状態な人たちだった

だから僕は早く一人前になりたいと……騎士になると言って家を出た

僕の望むものはただふたつ

すべては……

新暦75年5月下旬、いつもの目覚ましより早く目が覚めた休日の朝、天気は快晴ではないが曇りでもない……普通の晴れの日のこと。

少しだけダルイ体を一喝し意識を覚醒、寝巻きから着替え、庭へと向かう。

軽く準備運動とストレッチをこなし、待機状態が剣の形をしたキホルダー…デバイス（シャルティエ）を起動、美しい装飾剣を構える。

【——おはようございました坊ちゃん】

本当にデバイスなのか疑わしいこと極まりないが、いつものことなので無視し、黙々と日課の素振りと型の練習をする。

【あれっ？ スルーですか？】

今でこそ庭先で行えるが、昔は聖王教会本部の訓練場をよく使っていた……わざわざ僕のためにリフォームしてくれた叔父夫婦には頭が上がらないものだ。

【あの〜放置プレイは趣味じゃないんですが……】

いや、それ以前の話か……叔父夫婦には家出をしてからずっと世話になってる状態だ。

【……ぐすん】

小一時間ほど経過し、一通りの型が終了したところ、どこからともなく拍手をする音が聞こえてきた。

いつの間にか庭先にはお客様がきていたようだ……いや、気づいてはいたが彼女なら警戒する必要などない。

逆に違う意味で少しだけ緊張してしまうが……

「どうやら今日は僕の方が早く目覚めたようだね？ 暖かくなってきたから2度寝でもしてしまったのかい？」

少しだけ意地悪な口調で……だが表情も心情も笑顔で客人に尋ねる。

「もう……！ いじめないでエミリオ、この時期のお布団の魔力つてとっても凄いのよ？」

彼女も笑顔でそう返してくれた。

「ふふつ、君の場合は年中そうじゃないのかい？ ああ、言い忘れていたね、おはようマリアン」

そう微笑みながら叔父夫婦の一人娘——従姉のマリアンに挨拶する。

「おはようエミリオ、明日は絶対に私が先に起きて、エミリオを起こしてあげるんだから！」

それならば期待して熟睡することにしようか。

そして彼女は朝食の準備のため家の中へ、僕も朝練を切り上げシヤワーへ。

【マリアンと話すときの一刻でいいから僕にも優しくして下さいよ……】

「黙れ」

【。。。(っД)。。】

さあ、朝食に向うとしよう。

「父さんと母さんは昨日から泊まり込みで仕事みたい……ここところ毎日忙しいのね」

朝食時にマリアンがそう呟く。

ちなみに叔父夫婦は聖王教会の騎士団に所属している。

「そうだね、近頃は各方面に騎士団が派遣されているようだし」

師であり、聖王教会騎士団の長を務めているヴァンもそう呟いていた。

色んな世界にて騎士団を派遣せざるを得ない様々なトラブルが続いていると。

おかげで修行の時間が減っている分、僕にもそれなりには弊害が出ていると言えよう。

だが……こうしてマリアンと2人で食事できることには感謝を。

叔父上たちには申し訳ないことだが……

【あのく僕が存在は……】

「なにか良くないことの前触れじゃなければいいんだけど……」

それは少し大袈裟かもしれないが、用心するに越したことはないだろう。

違和感はある、でも確信は何一つない。

「もどかしいな……」

目に見えない陰謀でも渦巻いているのだろうか……？

まあ、それでも僕の目的のぞみは変わらないだろう。

「？ どうしたのエミリオ……はっ！？ もしかして味付けがおかしかったとか！？」

僕の呟きを勘違いしたのだろう、あわあわと取り乱すマリアン。

「ふふっ、マリアンの料理はいつも通りおいしいよ、ちょっと考え事をしていてね」

そんな姿が愛おしく、ついつい笑みが零れてしまう。

「もう……！ びっくりしちゃったじゃない！」

メツ！ と指を立て注意された。

うん、僕の望みは変わらない。

僕が望むもの、それは…【ああ！！ 坊ちゃんもうすぐ占いの時間ですよ！ 早くテレビの電源を入れてええって窓から久しぶりのお空へええええええええええ！？】

はあ、さつさと朝食を済ませ外出の準備をするか……シャルのせいで気乗りはイマイチだが今日は出かける予定がある。

「あつ！ 昨晩に下準備しておいたお菓子がもう少しで焼きあがるからお見舞いに持っていつてあげてね。」

手ぶらでお見舞いはマナー違反よとマリアンは言う。

「まさかそれで寝坊してしまったのかい？ アイツにそんな気遣いはいらぬよマリアン」

それで寝坊させてしまうなんて……

「あらあら、そんなことを言ってはダメよ？ 大切なお友達でしょ？」

「ただの腐れ縁さ……」

そんなやりとりをしながらお菓子が焼きあがるまでの間に朝食を終え、出かける準備をする。

「はい、コレ。私も今日は一旦、学院の方に顔を出してくるから帰

りは夕方になるわ」

そう言ってマリアンに渡された紙袋からは少しだけ甘い匂いがしてきた。

「僕も夕方までには帰ってくるよ、そうだ！ 今日も叔父上たちが帰宅できないようだったら外食にしようか？」

「ふふっ、そうしましょうか。じゃあ、気を付けて行ってらっしゃいエミリオ」

「……いつてくるよマリアン」

マリアンに見送られ、向う先は聖王教会本部に隣接する聖王医療院……1週間前からアイツが入院している場所だ。

アイツとの腐れ縁の始まりは6歳の時……いや、思い出すのはやめよう。

僕も随分と幼稚だったものだ。

それから共に『色々』と腕を磨き、父の暴走に騎士カリムを含めた3人で苦勞し……その後はSt・ヒルデ魔法学院に入学し……  
様々な経験<sup>トラブル</sup>の末、今に至る。

決して平穏な日々ではなかった。

だが、退屈する日々でもなかった。

そんなことを考えている内に聖王医療院に着いたようだ。

アイツが入院している病室の前まできたのだが……

【入らないんですか坊ちゃん？】

病室に入るのに躊躇しているとシャルがそう訊ねてきた。

「……これは経験上から来る『カン』なんだが、今開けると後悔し  
そうなんだ」

何が、とは言わない。

【……もう少しだけ寄り道していきましようか？】

「……そうだな、確かヴァイスも入院していたな？ そちらにでも  
顔を出しておくか」

【そうですね……てゆーかアレはむしろ坊ちゃんが……なんでもあ  
りません】

アレは勝手に自滅……むしろ自爆か？　僕は何一つ手を出していない。

とりあえずアイツの見舞いは後回し、先にヴァイスをからかいに行くとして。

ヴァイスのことなので診察の時間以外はあまり病室にいないだろうと考え（本々たいした怪我ではないので）最初から喫煙できるスペースから探すことに。

「喫煙室にはいなかった……となると、だ」

【屋上でしょうか？】

なんとかは高い所が好きというしな。

そうして屋上へ向かい、扉を開けると……

「んっ？　おお、お前かよ……看護師かと思っただじゃねえか……」

空を見上げながら煙草を吹かしているヴァイスがいた。

「……屋上も今や禁煙だ、大人しく喫煙室で吸うんだな。それか禁煙しろ」

「こりゃまた厳しい……最近は喫煙者に厳しい世の中になったことで……」

【商売的には良い金になるでしょうけど、人体には百害あって一利もないですからね】

まあ、僕の知ったことではない。

「それにしてもどうしたんだ？　俺を笑いにきたのか？」

「それもあるが「おいこら！……」（半分は）冗談だ。まあ、それでも自業自得だろう……」

僕はあの時、後ろから声をかけたただけだ。

「……忘れようぜ過去のことなんざ？　俺たちは未来という希望に向って生きていきやあいなんだよ」

【なんかキレイにまとめようとしていますよ？】

気が済むまで放っておけ。

「ところでよ？　アイツんところは見舞いに行ったのか？」

我に返ったヴァイスがそう訊ねてきた。

「いや、病室の前で悪寒がしてな。後回しにした」

そろそろ良い時間だろうか？

「ああ、そうだな……行けばわかるか……よし逝ってこい」

おい……

「あと俺さ、明後日で退院だからその祝いを……」

早足で立ち去りドアを勢いよく閉める。

ヴァイスが何か言いかけていたが気にしない。

アイツの病室に向うことにする。

そして再びアイツの病室前にきた。

今回は先ほどのような悪寒はしない。

あまり良い気分もしないが……

【あつ、一応ノックしてから入りましょうね坊ちゃん！】

失礼極まりないデバイスだな？

最近またうるさくなってきた。

再度、待機状態では話せないようにしようか？

まったく……きちんとノックぐらいするさ。

コンコン、とノックしたところ「……どうぞ？」と返事が聞こえてきた。

かれこれ1週間以上は聞いていなかったがアイツの声だった。

若干疲れている声色だったが気にせず入室、そして第一声。

「……失礼した、どうやら病室を間違え「いえ、合ってますから」……そうか」

ふむ、確かにアイツの声だ……どうやら間違えてはいないらしい。

だからこそ問おう。

「——なんだその格好は？」

「……スリーパー（パジャマ）と認識して欲しい……かな」

どう見てもネグリジェだ……しかもピンクでフリフリな……

そして髪にもリボンが……

【わーお、可愛いと思いますよ？　ウチの坊ちゃんには敵いません

がどっからどう見ても美少女ってえええ窓から不法投棄はダメですよおおおおおお……】

少しだけ空いていた窓の隙間からシャルを旅立たせた。

今度からやっぱり黙らせておこう。

「……ナニがあつた？」

問わずにはいらなかった……

「……お母様に強力な味方が付いた」

「……そうか」

僕も気を付けるとしよう。

「そもそも個室だから良いものを……その姿で出歩くのか？」

「それも込みでお世話されている状態……もうお婿に行けません」

……嫁を貰えばいいんじゃないのか？

ひゅるるゝつと、窓からはなんとも言えない春と夏に挟まれた風が吹いていた……

「……それはそうと、かれこれ10日ぶりくらいでしょうか？」

少しは立ち直った……というよりも開き直った……むしろヤケクソなのだろうか？

コイツの場合は表情<sup>おもて</sup>にあまり感情を出さないからわかりづらい。

ついでに妙ちくりんな丁寧言葉も相変わらずだ。

「まあ、正確には9日だな」

「そっか、9日も顔を合わせていなかったのもけっこう珍しいですね？」

そういえば……学院では同じクラスが多かったし、休日も同じ師の元で修行していた……長期休暇ですらよく聖王教会で顔を合わせていたものだ。

腐れ縁もここまで続くと……

「……キモチ悪いな」

「失礼ですよね？」

コイツとの関係はこれくらいで丁度いいものだ。

ふん、百歩譲って『友人』とは認めんこともない、苦難も共に乗り越えてきたものだ。

そういう意味では『戦友』、『共犯者』とも言えないことはないが……

だが、『親友』ではないだろう。

そう、僕たちは互いに深く詮索せず、多くを語り合わない。

だからこそ、それなりに長い付き合いができているのかもしれない。

僕は図々しくて能天気で馴れ馴れしい奴が大嫌いだから……

「世話になっている叔父夫婦の家の従姉が焼いてくれた菓子だ、味わって食べるんだな」

そう言ってマリアンが用意してくれた菓子袋を渡す。

「えっ？　ありがとうございます」

ちなみにコイツにマリアンのことは話していない。

コイツに限ってはないと思うが色々と茶化されるのはゴメンだからだ。

リタや騎士カリムなんかは要注意だな。

「折角だからお茶を入れましょうか、少し待ってて……」

「いらん、長居はしない。そもそも足折れているんだろう？」

「ポットなどを遠隔操作すればできますよ？　まあ、それは次の機会にでも……お菓子は後でいただくことにします」

コイツは相変わらず無駄に幅広い魔法技術& a m p・知識を持っているな……戦闘関連はイマイチだが。

用件、というほどでもないのだが、それだけ済まして退室することにしよう。

「最近になって聖王教会が忙しい……いや、騎士団を派遣するような任務続きだというのは知っているな？」

「……お母様から聞いています。ウチも父さんが騎士ですから」

なぜ『お母様』と『父さん』なのだろうか？

コイツも存外、父親の扱いがひどいのか？

「ふん、わかつているならいい。それでヴァンも忙しくて僕たちの相手をできないそうだ」

あのヒゲは『一応』騎士団のトップだしな。

「そもそも私はこんな状態なのでアレですが……」

まあ、それもそうだな。

せいぜいリハビリと自主練に励むんだな。

「さて、こっちが本題だ。今話した通り聖王教会騎士団は人手不足だ」

この流れならある程度わかるだろう？

「僕も騎士見習いとして任務にあたることにした」

当初は中等科卒業後にと考えていたのが……

少しの沈黙……そして感情の読めない表情で尋ねてきた。

「……そうですか、学院の方は？」

「聖王教会関係のことなら融通がきく、何日も連続で休むわけではないしな」

今までだって割とそうしてきた。

そもそも学院での成績と素行も問題ない。

「……危険な任務ですか？」

「僕もヴァンから総合Aランクの証明書をもらっている、それ相応の任務だろう」

すぐにSランクまであがってやるつもりだが。

「参考までにどんな任務なのですか？」

「明後日から行われるオークション会場の警護だ、本来なら騎士カリムが後見人を務めている管理局部隊が警護にあたるのだがそちらも人手不足でな、確か場所は……」

「ホテル・アグスタ……？」

ほう、知っていたのか。

まあ、オークション自体が極秘というわけでもないしな。

「そうだ、その会場警護にあたる。もちろん複数人での任務だがな」

そして続ける、むしろこれからが本題だ。

「見習いとはいえ騎士を目指す身だ。これを機に騎士としての名を持つと思うっている」

それは両親との決別ではない。

常に暴走状態な両親でも心底嫌っているわけではないのだから。

そう、これは僕の決意だ。

一歩でも先へと進む足がかり、切っ掛け、一人の男として存在の証明をしたがためのワガママ……

「——リオン・マグナス、騎士としてはそう名乗るつもりだ」

古き言葉で『偉大なる獅子』という。

まあ、マグナスの姓自体はそう珍しいものではないが。

数年前、コイツに話そうとして結局は話さなかった僕の望み。

そう、すべては……

——<sup>マリアン</sup>彼女と対等な視線で交わせる一人前の男となるために

その時は少しばかり気が昂っていたのだろうか気が付かなかった。

コイツが普段のポーカークフェイスを崩して驚いていることに……

## 本編／偉大なる獅子（後書き）

まさかのリオンサイドでStS本編が始まります。

主人公の座から降板したわけではないです（笑）

ちゃんと戻ってきます！

そしてリオンサイドでも一応、出番はあります、活躍はともかく。

これからも妄想の限り頑張っていきます。

本編／ホテル・アグスタ（前日）（前書き）

ホテル・アグスタ前日です。

そして久し振りにテイルズ新キャラが…今回は割と空気ですが  
てかりオンサイドでギャグノリが難しい。

## 本編／ホテル・アグスタ（前日）

ホテル・アグスタ

クラナガン南東に位置する周囲を森林に囲まれたホテル。

そこで骨董品、合法ロストロギアのオークションが行われる予定となっている。

今回の……騎士見習いとしての初任務はそこでの会場警護……だ。

どうやら特定ロストロギアに反応する謎の機械兵器『ガジェットドローン』が誤認識してその会場を襲う可能性があるらしい。

騎士カリムが後見人を務めている管理局部隊が任務に就くようだが、あちらもこのような会場警護をできるような人数確保ができないようだ。

そこで聖王教会側に応援要請がきたというわけだ。

こちらでも今回のオークションがロストロギア関連であり、聖王教会側が関わっている部隊からの要請なので騎士団の派遣は出来ないことはなかったのだが……

「ふん、騎士団は多忙で割ける人員がいらない、か……いや、これは僕にとって僥倖か」

現在、各世界において騎士団を派遣する任務が多く、今回の件に

おいて教会側で出せる戦力は修道騎士が1人しかいなかったのだ。

その騎士もすぐ後に別の任務が控えているので、報告や引き継ぎ等ができない可能性があるため、補佐という形で騎士見習いに任務を当たらせることにしたらしい。

その話をヴァンからされた時に僕は迷わず答えた。

「僕を正式に騎士見習いにしてくれ、その任務は僕が当たる」

向こうも半分はそのつもりだったのだろう。

すぐにOKが出た。

僕も試験自体は受けていないがヴァンから総合Aランクの証明証を受け取っていたため、対外的にもなんとかなる。

正式にはS・ヒルデ魔法学院の中等科を卒業後にと考えていたが、思わぬ機会が巡ってきたようだ。

学院と騎士見習いの二足草鞋は失礼かもしれないが、聖王教会としても人手不足でそうは言っていられない、とヴァンは苦笑していた。

「お前の実力ならSランクまで取得できるだろうが、今は時期が悪い。来年以降に受験するのだな。こちらとしてもAランク扱いの方が動かしやすい……すまんが頼むぞ？」

以前からヴァンの弟子として騎士見習いに近い扱いではあったが、正式に騎士見習いになるということはヴァンにも敬意を払っていたか

なければならない。

それだけは微妙に憂鬱だ……

オークション前日の夕方、僕たちは一足先にホテル・アグスタへ到着した。

「シャル……会話は許すが冗談は一切許さない、そのつもりでいろ」  
任務において『何か』を見落とす可能性はある。

シャルは丁寧なんだか適当なんだかイマイチつかみどころがないデバイスだ。

デバイスなのにつかみどころがないとか……

それはともかく経験だけはあるのだからバカにはできない。

【普段から容赦ないじゃないですか……わかりました、坊ちゃんの初任務ですもんね、僕も本気であたることにします】

「……頼りにしているぞシャル」

【……ッ！ 光栄です坊ちゃんっ……！】

さあ、先に到着しているシスタ「キュウウー！」……忘れては

いないのかな。

【リースさんも坊ちゃんを心配しているんですよ】

「……ふん、せいぜい使わせてもらおうでしょう」

「キュウウウ〜」

青と白の長い胴体と頭に羽のような飾りを付けたドラゴン、『ハク』がそこにいた。

昨日、アイツの病室で伝えた僕の決意。

長い沈黙、そしてアイツは……

「——その任務、ハクを連れて行ってもらえませんか？」

そんなことを言ってきた。

「あのドラゴンを？」

「ええ、それなりに役立つと思われますし、私の入院中に遊ばせておくのもアレなので」

確かに……敵襲が絶対にあるわけではないが、使える戦力はそれなりに多いに越したことはない。

僕も空は飛べるが空戦は陸戦ほど得意ではない。

「……いいだろう、今日の帰り預かりに行く」

「こちらにも家に連絡をいれておきます……ご武運を」

「……ふんっ、話はそれだけだ、僕はもう行く」

そう言って病室を立ち去り、シャルを回収してからアイツの家に向う。

そしてドラゴン（ハク）を預かったのは良かったが、コイツのせいでマリアンと2人で外食に行くことができなかった……

そんなやりとりがあつて、ドラゴン（ハク）を今回の任務に同行させた。

アイツが入院中ということなので、もし任務で使えるようだったら、その期間は僕の方で預かる予定だ。

まあ、それはいい、とりあえずハクをホテル上空に待機させ、さつさとシスターと合流することにしよう。

フロントでシスターの部屋を確認するか「あの〜」

どうやら僕に声をかけているらしい。

振り返ると白い修道服を着た青髪の女性がいた。

「……もしかしてあなたがシスターアンジュですか？」

ヴァンから貰っていたデータの人物と似ている。

「あつ、やっぱり君がグランツ団長のお弟子さんだね」 天の巡り  
合わせに感謝を、私がアンジュ・セレーナよ」

件の人物はすぐに見つかったようだ。

その後、すぐにチェックインを済ませ屋上へ。

そこには先ほどのシスターと管理局陸士部隊の制服を着た……幼  
女？がいた。

「……おい、今失礼なこと考えやがらなかったか？」

なるほど、そんな考えをする表情は見慣れているようだ。

「……そう思われるのが嫌ならば魔法で見た目を変える等の手段は  
あるでしょう？」

若干イラッときたのだが丁寧な言葉で返す。

騎士見習いとして言動には気を付けなければならない。

「はんっ！ 別にいいんですけど」

なら言っな！

「まあまあ、軽く自己紹介といきましょう？」

シスターアンジュがそうまとめる。

「こちら騎士カリムが後見人を務める部隊、古代遺失……通称『機動六課』の前線部隊フワードの副隊長であるヴィータ三等空尉よ」

なぜ略したんだ？

「……よろしく」

そして顔はよろしくと言っていないぞ？

「それで私が聖王教会から派遣された修道騎士アンジュ・セレーナ、そして私の補佐として派遣された……」

「騎士見習いリオン・マグナス……です」

面と向かって『見習い』と言うのは抵抗あるな。

「……見習い、か……まあ、シスターアンジュの補佐ということなら良いか」

「——ッ！」

こいつは……！

僕を完全に戦力外として見ている……聖王教会側としても報告、引き継ぎ面での補佐としてしか見ていないのはわかっている（ヴァンの思惑は違うだろうが）

そしてコイツ自身が歴戦の騎士ということも纏っている空気と隙の無さから窺える。

その姿でも一部隊の副隊長を務めているだけはあるし、その言動はともかく見習い騎士への心配も含まれているのだろう。

理解はできる、見習いなのだからこのような形から序々に任務へ当たっていくは当たり前なのだろう……だが、僕は……僕はっ！！

僕が剣を振るうのは……！！

「——僕は【マスター、落ち着いて下さい】……シャル？」

いつものふざけた雰囲気など一切ない声色でシャルが話しかけてきた。

【マスターの実力はこのシャルティエが一番知っています、それにマスターの決意は『この程度』のことで揺るぐものではないでしょう？】

「——ッ！？」

【千里の道も一歩からです……まあ、その一歩もマスターなら百里以上ですよ。】

「……ふん、調子のいいデバイスだな」

まったく……本当に調子のいいデバイスだ。

おかげで落ち着くことができた。

「——基本的に補佐ですが必要に応じ指示を願います。見習いの身ではありますが任務のため粉骨砕身致します」

「……ふん、任務達成に全力はあたりめーだ……細かいことはシスターアングジュから聞いてくれ見習い……『騎士リオン』」

「あらあら」

そう言つて小さな騎士は任務に戻つていった。

「……ありがとうシャル」

長年の付き合いである相棒に礼を……

【いえ、このシャルティエ、坊ちゃんのためなら火の中、水の中、マリ안의スカート……ってええええここ高層ホテルの屋上でずうずうよおおお………】

やっぱりいつも通りのシャルだった。



本編〱ホテル・アグスタ（前日）（後書き）

新キャラは強欲支店長でした（笑）

今のところ空気扱いですが…

そしてリオンの方が書いてて主人公ぽかった…マジでごめん主人公  
とりあえず次回ホテル・アグスタ本編です。

## 幕間とある主人公の日記（前書き）

一応、主人公サイドも書いておこうかと。

てゆーか主人公なのに幕間って…

## 幕間とある主人公の日記

せつかなので入院中は日記を書くことにした。

ただし、誰かに見られたら（自分が）蒸発間違いなしなので嚴重管理だ。

### 【入院1日目】

あと約2か月半……正直長い。

ランニングなど出来ないので体力低下が怖いところだ。

ある程度の回復が確認できたらリハビリがてら頑張るとしよう。

ちなみにいつもの担当医からは「お被いしてこい」とのコメントをいただいた。

医者という言葉じゃないだろう……

ずずかさんだが色々手続きとか準備とかで次に顔を出せるのが4日後らしい。

べっ、別に楽しみになんかしてないんだから！

そして久方ぶりの涙の味はしょっぱかった。

### 【入院2日目】

さっそく昨日の日記を見て後悔した。

速攻で黒歴史になるなんて思わなかった。

それはともかく、ずいぶんと暇なので魔力制御の修行でもすることに。

基礎を振り返るというのも良いものだ。

### 【入院3日目】

引き続き魔力制御の修行……意外と奥が深い。

なんというか、流動するエネルギーを操る感じだろうか？

ここ数年は資格試験の勉強と実践形式の修行が多かったから逆に新鮮だ。

せっかくなので明日以降はセイクリッド・スカイの能力である

大気中の『水分』と『温度』操作について重点的にやってみるか。

……それとお母様？ パジャマと称してネグリジエはやめて下さい。  
い。

### 【入院4日目】

ヴァン師匠せんせいがまたお見舞いにきてくれた。

以前は報告だけだったので、正式なお見舞いは初か。

ただでさえ今、聖王教会は忙しいと聞いているのに……ちょっとだけ嬉しかった。

そしてリハビリと修行用にとアコギ（御下がり）を置いていった。

……なんの修行さ？

暇だったので弾き語りすることに。

こう見えても楽器関連は一通り奏でることができる。

なんたって師匠が音楽講師だ。

弾き語り『冒険譚』……みんな冒険世界の主人公なのさ！

……そう思っていたな。

結局、セイクリッド・スカイでの制御練習忘れていた。

【入院5日目】

今日はさすがさんがお見舞いにきてくれた。  
最初はさすがさんの身の回りの話、なんとか周りは納得できたよ  
うだ。

OHANASHIだろうか？

とりあえず残り手続きをして2カ月後からこちらに住むらしい。  
勉強の方はどうするんだろう？

……気は進まないがヒューゴさんでも紹介してみようか？  
まあ、それはおいおい。

そして……あー、なんてゆつか、化学反応を舐めていた。  
お母様とさすがさんが意気投合した。

……なんでさ？

そして迫りくる魔の手……もうお嬢にいきません（泣）

【入院6日目】

今日からは極力部屋から出ないようにしなければと思い  
トイレも人の気配を伺って気を付けて行ったところヴァイスさん  
と遭遇した。

とりあえず私には神さまと聖王さまの加護がないことは明白だっ  
た。

部屋に戻ってヤケクソでギターを弾いた。  
もちろん防音結界は忘れていない。

【入院7日目】

今日も朝からさすがさんがお見舞いにきてくれた。

なんでも今日からしばらくはまた地球なので、しばしのお別れということ。

そして【ドキューン】に【ズキューン】をされ、【バキューン】された。

ナニがあつたかは想像に任せる。

その後、エミリオがお見舞いにきてくれた。

なんか久し振りだと思ったら「キモチ悪い」と言われた。

……なんでこんな友人しかないんだろう？

また、これから騎士見習いになって任務に当たるらしい。

今日はその報告だったようだ。

しかもホテル・アグスタって……そして新たな名前『リオン・マグナス』

……私の存在って何なのだろうか？

脇Y【削除しました】

とりあえず、私も現場の映像を見てみたかったので

ハクをそれらしい理由付けで同行させてもらうことに。

視界の共有というわけではないのだが、エレメンタルスフィアを通じて似たようなことができる。

エミ……リオンには内緒だが……

エミリオン……ぷっ。

## 【入院8日目】

どうやらリオンが無事にホテル・アグスタに着いたようだ。さすがにプライベートを知ってしまうのはアレだったので聞いていた大体の到着時間にアクセスしたところぴったりだった

らしい。

と、思ったらリオンはハクを速攻で上空待機にしがった。

……意味ぬええええ。

明日以降に期待するか……

さて、どれほどの変化があるのだろうか？

私は……どうするべきなのだろうか……？

そしてまた、セイクリッド・スカイでの制御練習忘れていた……

幕間とある主人公の日記（後書き）

スペックは色々と平均以上（てゆーか高水準）な主人公なのに…

本編〈ホテル・アグスタ（1）（前書き）

書く時間がない…

とりあえずキリのいいところまで…

## 本編〈ホテル・アゲスタ（1）〉

僕の望み

1人の男として存在の証明

その先にある彼女との対等な視線

この任務、そしてこれからの任務の先……必ずつかみ取ってみせる

初日は特に問題なく終了した。

敵対象である『ガジェットドローン』のデータ確認とホテル及び周辺地形の把握、色々とやることはあった。

夜間の警備自体は機動六課が担当するので、聖王教会側としては当日におけるトラブル時の戦力として控えておいてくれとのこと。

ただし、僕は補佐であるため、一応は非戦闘員扱いだ。

まあ、非常時は任せる、とヴァンからも言われているが……

「……歯痒いな」

【仕方ないですよ坊ちゃん、扱いは騎士見習いでシスターアンジュの補佐なんですから】

「わかっているさ……まあ、愚痴っけていても仕方ない。与えられた任務を着実に遂行していだけさ」

例え実力があり、騎士団長の弟子であろうと見習いは見習いだ。

【ほら、食事は豪華そうじゃなかったですか、僕のオリジナルの時代なんて………】

そう言って語り出すシャル……はあ、マリアンの作った料理が恋しい。

オークション当日の昼近く。

僕はシスターアンジュと共にホテルの屋上へきていた。

ついでに上空待機させていたアイツのドラゴンも呼び寄せる。

「キュウ……」

若干だらけているな……

【そりゃあゴハンが缶詰ですからね………】

栄養価ある、量もそれなり……なんの問題がある？

「……もしかしてリオン君は釣った魚にはエサをあげないタイプなのかしら？」

普通は釣った魚なんぞに餌なんてやらないだろう？

そもそも釣りなんてしないが。

【そうですね……昔は僕にだって……】

シャルも一体なんなんだ？

「キュウウウ……」

はあ……？

まあ、それはともかく、もうすぐ機動六課の後詰め本隊がくるらしい。

「そうね……（リオン君の鬼畜っぷりはともかく）……何事もなく無事に終わればいいのだけれども……」

「（なんだ今の間は？）……ですが逆に『何もありませんでした』の方も痛手なのではないでしょうか？」

実績は今後の体制にも響いてくるものだ。

わざわざ応援要請を出しておいて何も無かったというのはあんまりだ。

「そうなのよね〜アウトプットのない業務ばかりだったら必要経費も落ちないわよね……うん、何事もほどほどがベストかしら？」

例え安全第一と言い張ろうが、それには金がかかる。

【いつの時代もそう変わりませんよ……】

いくつもの歴史を眺めてきたシャルの言葉は少しばかり重たかった。

そんな気分が滅入る話をしているうちにヘリが近づいてくるのが確認できた。

【あっ！？ あのヘリ『JF704式』じゃないですか！？ 輸送ヘリの最新型ですよ！ カッコイイですね坊ちゃん！】

「最新型？ 宿泊代まで出してもらっているから、もしかとは思っていたけれど……はあ、お金のあるところはいいわね……」

……はあ、デバイスとシスターのセリフではないな。

そして着陸したヘリから管理局地上部隊の制服をきた代表らしき女性が降りてきた。

「——お疲れ様です。時空管理局本局 古代遺失物管理部 機動六

課部隊長の八神はやてです。この度は応援要請に応じていただきありがとうございます」

年齢は……20歳前後か？

想像より遥かに若い部隊長のようだ。

つまりはかなりのやり手……実力者といったところか。

……そしてイントネーションが変だな。

「――聖王教会修道騎士団所属のアンジュ・セレーナです。そして補佐のリオン・マグナス。非才の身ですが……ってイヌウウウウウウウ！」

へりから大型の犬が出てきた瞬間、シスターアンジュは凄いスピードでバックスライドしていった。

極度の犬嫌いなのか？

「早っ！？ もはやムーンウォークならぬムーンダッシュやん！？ てかなんでやねん！？ ここ普通に自己紹介の場面やん！？」

「私は犬ではない！！」

「えええ！？ ザフィーラが喋ったああ！？ しかもボイス洪いよティア！？」

「ええいウルサイわよバカスバル！ えっと……そうアレよ！ 【ピィ】犬よ！ 八神部隊長専属の！！」

「ちゃうわ！？ ナニが悲しくてこんな渋いボイスの犬やねん！？  
どーせなら揉みごたいのあるええ乳したねーちゃんの方がええわ  
！？」

「主iiiiiiii！？ 犬ではありま「イヌウウウ来ないでええ  
ええ！？」犬ではなああああああいい！！！！」

「——みんな少し頭冷やそうか？」

「ぎゃあああなのはちゃんが魔王化してしまったあああ！？」

「——魔王でいいよ。魔王らしいやり方でOHANASHI聞いて  
もらうから」

「「「「「＼（＾o＾）／」」」」」

「えっ、ちよつなのはちゃん！？ 私は関係な……」

そして最後になぜか何も騒いでいなかった（地味な）金髪の女性  
も巻き込まれていた。

はあ、何をやっているんだか……色々と気力も失せた。

そして騒ぎを尻目に眺めていると、最後（安全なタイミングを見  
計らったよう）にヘリパイロットが降りてきた……どこかで見たこ  
とのある奴だ。

「……まだ入院しているんじゃないのか？」

「言っただじゃねーか、今日退院だつてな」

一昨日、聖王医療院で会ったヴァイスだった。

退院当日に職場復帰か……もしかして早くへりに乗りたかっただけか？

「ふん、まさかお前の所属している部隊だったとはな……なるほど」

【ですね〜】「キュウウウ〜」

ふむ、この部下あってあの上司か……いや逆か？

「いや、頼むから変なところで納得するな」

「ふん、ところでアレはいいのか？」

視界にやたらとピンクの閃光が瞬いている（ような気がする）

「……まあアレも一種のコミュニケーション……か？」

「僕に聞くな。そもそも任務で来ているんだぞ？　いつまで遊ばせておくんだ？」

何をやっているんだか。

「……俺に逝つてこいと？」

「安心しろ、妹<sup>ラゲナ</sup>には『お前の兄は立派だった』と伝えておいてやる」

## 閑話休題

ヴァイスの尊い(?)犠牲のもと『何事も無かった』かのよう互いに挨拶を済ませ、共に任務へ就くことに。

僕はシスターアンジュ、起動六課の地味…シャルマル女史と共にホテル屋上で待機だ。

シャルマル女史に確認したのだが機動六課の戦力は中々に異常だった。

隊長格がオーバースとニアSランク、隊員もBランク以上、後方支援隊にも高ランク魔導師が数名……少数精鋭と言えば納得できないこともないが……

それに騎士カリムが後見人を務めているか……ふん、きな臭いと極まらないな。

「キュウウウ……? ……キュウウウウウウ!」

そんなことを考えていると急にハクが遠くの森を見つめ唸りだした。

【……敵襲でしょうか?】

ちなみに僕とシャルはセンサー等の探索魔法は得意としていない。

こういうのはリタやアイツの得意分野だからな。

そして数秒もしないうちにシャルマ女史の指輪デバイスが光った。

「――あつ…クラーヴイントのセンサーに反応…シャーリー！」

「あらあら、お仕事かしら？」

それにしても随分と敵感知に優れた生物だな…ふん、なかなか使えそうか。

はい！ きたきた、きましたよ！ ガジェットドローン陸戦？ 型！ 機影30…35！ 陸線？ 型2、3、4！

機動六課の後方支援隊ロングアーチから敵情報が入る。

ざっと大小40弱か…こちらの戦力的には問題ない数だろう。

「けっこうな数ね…数に応じたボーナスとかないかしら？」

シスターアンジュなぞ呑気にそんなことを言っている。

「残念ながら一律でしょう。ただ、報告書には書いておきましょうか？」

まあ、気休めだが。

「うん、それお願いね。じゃあ、迎撃に出ます。リオン君はシャルマさんとここから私に連絡お願い…特にイヌが近づいてきたら教

えてね？　とうっ！

そう言ってシスターアンジュは屋上から跳び降りて行った。

——さあ、僕にとっての初任務開始だ……！

本編／ホテル・アグスタ（１）（後書き）

『何事も無かった』：うん、『何事も無かった』んだよ。  
ピンクの閃光なんて見えなかったんだ。

なるべく早くホテル・アグスタ編は終わらせます。

てゆーか頑張らないと主人公が…

本編／ホテル・アグスタ（2）（前書き）

なんとか続きを書けた…

## 本編／ホテル・アゲスタ（２）

初任務だと粹がったところで前線がニアＳランクだと出番などあるわけがない。

屋上でシャルマル女史と映像を眺めながら内心で溜息を付く。

事前に確認した『ガジェットドローン』のデータ及び現在の戦闘映像を見る限りは僕でも問題なく対処できる。

近づく、避ける、斬る、要はたったそれだけだ。

A M Fがある以上はそれが一番堅実だろう。

まあ、物質操作系の魔法で吹き飛ばすこともできるが。

【特に問題なさそうですね……あつ、シスターアンジュ大型２機目撃破です】

昨日確認したところシスターアンジュの実力は総合Ｓランク、デバイスは短剣型で、得意としている魔法は補助、治癒系がメイン。

はつきりいつて単一戦力としては向いていない、とは本人談だ。

だが大型を既に２機撃破しているところを見る限り、圧倒的な経<sup>リテ</sup>験と技術があるようだ。

【あつ、大型３機目撃破……僕たちの出番はなさそうですね】

シャルの言う通りハッキリ言って出番はなさそうに思える。

だが、運命の女神とは随分と気まぐれなようだ。

「……キユウ？ ……キユウウウウ！」

先ほどの敵感知と同じようにハクが唸りだした。

そして数秒もしないうちにシャル女史の指輪デバイスにも反応があった。

「クラールヴィントのセンサーに反応？ この魔力反応!？」

【マスター!】

「ああ、デカイな……それにこれは……召喚魔法か？」

この魔力反応……以前に見たキャロの召喚魔法と酷似している……？

その後、間もなくして前線にも異常がでてきた。

先ほどとは打って変わって『ガジェットドローン』の動きが急に良くなり、前線の攻撃を避けるようになった。

まるで自動機械の動きから有人操作に切り替わったのかのように

……

それが先ほどの魔力反応……おそらく召喚魔法の効果か？

【おそらく微小の召喚獣による無機物自動操作でしょう！】  
オフジェクト・コントロール

だがそれでも前線の戦力からしたら大した問題ではない。

一番の問題は……

【マスター！ 優れた召喚師は転送魔法のエキスパートでもあるんです！ こちらまで回り込まれるかもしれません！】

「……だ、そうです。どうします指揮官殿？」

現場指揮を担当しているシャルマル女史に訊ねる。

「……ヴィータちゃんを戻して……シスターアンジュと犬に前線を任せると？」……ザファイラ！ 最終ラインまで下がっ 犬ではない！……この際どーでもいいわ！ いいから下がって！ それとヴアイス君も狙撃の準備に……【先ほど尊い犠牲になりましたよ？】……あーもう！」

……グダグダだ。

「——シスターアンジュ、僕にも防衛戦参加の許可を」

来るものは僕が全て片付けてやる。

だがシスターアンジュからの回答は僕の思惑とは別にあつたよう  
で……

今、犬……じゃなかった、大型を全て撃破したわ！ これから小型  
を出来る限り『一気に殲滅する』から防衛戦は機動六課のメンバー

に任せていいわ！

犬と言いかけたぞ？

大丈夫なのかあの犬……？

その後、召喚師のところに向かうわ！ リオン君は途中で合流して！

思いがけない回答だった。

「——ッ！ 私もですか！？」

ふふっ、リオン君の実力はグランツ団長から聞き及んでいるわ。それに相手が召喚師だとしたら護衛の召喚獣がいるかもしれないし、そもそも相手が単体とも限らないしね

「——了解しました！」

【マスター！】

「ああ！ 指揮官殿！ シスターアンジュより陸戦？型の全機撃破報告および陸戦？型の広域殲滅に入るとの連絡です！ その後に敵召喚師と接触しますので防衛戦は機動六課にてお願いしますのとこのと！」

未だ混乱気味のシャルマル女史にシスターアンジュの案を伝える。

「あっえっ…広域殲滅！？ わかりました！ ヴィータちゃんも最終ラインまで下がって防衛に当たって！」

こちらは機動六課に任せ、僕も戦場に向うとしよう。

「——行くぞシャルティエ!」

【ええ！ 相手が泣いて謝るまでボッコボコにしてやりましょう!】

そう言って騎士甲冑を……いや、僕の場合はスピード重視で装甲はほとんどないから甲冑というと語弊があるのだが。

黒一色で揃えられた上下とマント、そして所々に白き意匠がこらされた逸品だ。

仮面？ あるわけないだろう？

アイツ曰くジューダスフォーム……ジューダスとはなんのことだ？

【マスター？】

「……なんでもない」

そう疑問を振り去り、ハクに跨る。

まさか僕が竜騎士の真似ごととはな……ふん、悪くはない。

「——さあ、行くぞ!」

いざ、敵召喚師のもとへ。

敵召喚師へと竜に跨り上空を飛んでいると召喚師のいる方向から多数の生物反応があった。

【おそらく召喚獣でしょう！】

微小の召喚獣か……目障りだ。

「――蹴散らすぞシャル！」

敵影確認……銀色の虫？

……関係ない、全て焼き払うのみ！！

シャルの刀身に魔力変換させた闇色の炎を纏わらせる。

それをシャルの力で増幅させ、大きく振りかぶり……

「――塵も残さん！！ 浄破滅焼闇！！」

一瞬で振り抜く！

極大の闇色の炎にて前方広範囲を焼き払う。

【――空のお掃除完了です！】

——了解！ 今から地上のお掃除に入ります！ 私の半径500m以内には近寄らないでね！

皆にそう告げシスターアンジュは広域殲滅に入る。

——天へと還る翼を、貴方に……鳳翼熾天翔！！

その言葉と共にシスターアンジュを中心とした半径500mほどに無数の赫き羽が生まれ、まるで天へと還るように下から上へと螺旋状に吹き荒れ、その空間に存在していた『ガジェットドローン』陸戦？型20機ほどを殲滅していった。

さりげに破壊しているのは敵のみで森が無事なのがワンポイント。

まあ、敵の爆発で部分的な森林破壊はしているが……

さあ、召喚師が逃げちゃう前に合流して叩きましょう！

「——相手は召喚師です、私が先行して足止めします！」

位置的にも僕の方がかなり近い、それに相手は転送魔法のエキスパートである召喚師。

劣勢と判断したのならすぐに退却され、足取りを追えない可能性がある。

例えば逃げられ倒せないとしても顔くらいは拝んでやる。

——私が合流するまでは無理はしないで頂戴……顔を見るだけでいいから

「——了解しました……飛ばすぞ！」

そして数秒もしないうちに最初の魔力反応があつた場所が見えてきた。

そこには既に転送魔法の準備をしている2人組の……男と少女の姿が確認できた。

【――マスター――！】

「――ああ！ 逃がすものか！ デモンズランス――！」

魔力で形成した砲撃級の魔槍を2人組目がけ投げつける！

――ぶち抜く――！！

相手も転送が間に合わないと判断して転送を中断し魔槍を……男の方が片手で掴み受け止めた！？

チツ！ こちらが一瞬でも動揺してしまうなんて……

今思えばヴァンもアレを片手で受け止めていたのだ……つまりはヴァンに近い実力者の可能性がある。

それに召喚師と思われる少女の方も、最初の魔力反応を見る限り相当な実力者だ。

魔力値的にはリタやアイツ並かもしれない。

それに護衛の召喚獣がいるという可能性もある。

正直な話かなり分が悪い……そう思いながらハクから飛び降り着地、数メートル離れた位置から2人組にシャルを突き付け言い放つ。

「——管理局員のように丁寧に言うつもりはない。お前たちの手勢は片付けさせてもらった……大人しく縛につけ」

改めて男と少女を眺める。

男は大柄で年齢は40〜50代といったところか……だがまったく隙が見えない。

鍛え上げられた肉体がコート越しでもわかるようだ。

实力は……機動六課の副隊長グイータより上かもしれない。

少女の方は逆に戦う者には見えない……年齢は多分キャロと同じくらいか。

だが手にグローブ型デバイスを確認できた、間違いなく件の召喚くだん師だろう。

……服装はバリアジャケットか？

私服でアレは少し痛いな……むしろその場合はツレの男が捕まる気がする。

「——ふむ、見事な一撃だったぞ若き騎士よ」

壮年の男がそう答える。

この物言い……もしかしてこいつも騎士なのか？

「——だからこそ理解できるだろう？ 互いの実力を」

「——ツク！」

【マスター！】

シスターアンジュは間に合わない、僕1人では……この2人の相手は難しい。

そして立場上、僕には無茶が出来ない……

そう葛藤していると少女の方が転送魔法を再開する。

僕は……僕は……！

「——さらばだ若き騎士よ」

——僕には……無理だ……

本編〈ホテル・アグスタ（2）（後書き）

ホテル・アグスタ編は次回で終了

仮面は割れませんでした…してないけど。

本編 } ホテル・アグスタ (3) (前書き)

ホテル・アグスタ編終了 } 六課サイドは出番なし (笑)

ついでに主人公も出番なし (泣)

### 本編／ホテル・アゲスタ（3）

本当はわかっていたんだ

一人前とは『自分の行動に責任を持てる』ということ

組織に属することによって抱えるジレンマがあることを

そして…… 1人では出来ないことが多いことを

敵の撃破を終え現場検分に入る機動六課スタッフを尻目、シスターアンジュから引き継ぎを受ける。

彼女はこれからすぐに次の任務に向かわなくてはならないため、ここからが本来の僕の仕事だ。

大体の引き継ぎを終えたところ、機動六課の副隊長が挨拶にきた。

「お疲れです、シスターアンジュ。協力ありがとうございました。それに見習い、お前もな…… おかげで敵召喚師の姿が確認できた」

「いえいえ」 それでは私は撤収します。リオン君、報告の方お願いね？」

「…………はい」

【はい、お疲れ様でした】

そう言ってシスターアンジュを見送る。

「ああそうだ、リオン君？」

が、急に振り返り僕に話しかけてきた。

「……………なんでしょうか？」

「——あまり気負っちゃダメよ？」

「——ッ！」

「うん、また天の巡りあわせがある日まで……」

そう言って今度こそシスターアンジュは去っていった。

結局、最後までよくわからない女性<sup>ひと</sup>だった……

さて、僕も報告用のデータを集めるため、現場検分の結果を……

「なあ見習い」

まだいた副隊長<sup>ヴィータ</sup>が話かけてきた。

正直、今は余計な奴らと話したくない気分だ……さっさと切り上げよう。

「……なんでしょうか？　これから報告用の……」

「——悔しいのか？」

——コイツは……！！

今一番したくない話を……！！

「……………」

返答は沈黙と睨み……今は言葉にできそうにない。

「だんまりか……まあいい聞いとけ。教会側の協力で被害はザフィ……特に問題なく任務を達成できた。それに敵召喚師の姿も確認できた……その実力も含めてな」

敵召喚師……推定オーバーSランクの2人組。

顔が割ればそこから調査していき存在が割りだせるだろう……

「成果はあった。シスターも言ってた通り気負う必要はねえ……少なくともあの場での判断にケチはつけねーよ」

お前は間違ってはいない。

そう言っているのはわかっている。

だが……だが……！

「——あなたに何がわかる……！」

わかっている、これは八つ当たりに近い感情だ。

立場上あまり無理ができないとはいえ……当初の目的である敵の確認を果たそうと……

眼前でみすみす敵を見逃した……例え敵が強いとしても。

もしかしたらシスターアンジュが来るまでは足止めくらいできたかもしれない。

だが、それも既に『i f』の話だ。

事はもう終わっているのだから……

そして紅き騎士は無言……だが僕の発言で怯んでいるわけではない。

……もういい、さっさと報告用のデータを集めよう。

「……失礼します」

そう言って脇を通り過ぎ……

「——お前さ、機動六課ウチにくる気はねーか？」

そんなことを言ってきやがった。

「何も機動六課ウチに所属しろってわけじゃねーよ。お前の立場つてのもシスターから聞いた。だから時間の合う時に訓練トレーニングに参加してみねーかってことだ」

……突然のことなので驚いて言葉が返せない。

この騎士は一体何を考えている？

【——何を考えているのですか『鉄槌の騎士』？】

そんな僕の考えを代わりにシャルが訊ねてくれた。

……ちなみに『鉄槌の騎士』とはなんのことだ？

「……なるほど、似たような見た覚えがある……真正古代ベルカエンシェントのデバイスかテメー？ まあいい、他意はねーよ……ただ1人の騎士としての言葉だ」

シャルのことは後で問い詰めるとするか。

今は……

「——なら、どうしてですか？」

その真意を聞きたい。

「……あーもう、強くなりてーならウダ言っな！ 氣い向いたら来い！ 朝練時なら事前連絡もいらねーから来てみる！ じゃあな！」

そう言って紅い騎士は去っていった。

「……お前の姿が重なって見えたんだよ、昔の……に……」

そして去り際に何か呟いていたが、風に流され最後までは聞こえなかった……

【……ねえ坊ちゃん、どーするんですかあのお誘い？】

「……シャルだってわかっているだろう？」

今の僕を取り巻く環境を考えるとあの提案は正直破格だ。

師であるヴァンも忙しく、アイツは入院中……現状は自主トレくらいしかできていない。

しかも僕は騎士見習いであり、同時にSt・ヒルデ魔法学院の生徒でもある。

見習いである以上、与えられる任務もたかがしれている。

それに訓練の相手は歴戦の騎士。  
トレーニング

機動六課も騎士カリムが後見人を務めている部隊なので話は通し易いハズだ。

【……そうですね】

「まあ、よく考えることにするさ……とりあえずは現状の仕事を片付けるのが最優先だ」

さあ、報告用のデータ収集を行うとしよう。

こうして僕の……リオン・マグナス騎士見習いの初任務は終わった

その中で……悔しい思いをした

自分の中途半端な立場に憤りすら感じた

……だが、ほんの少しだけ前へ進めた気がした

これからの先も色んなことがあるだろう

出会い、別れ、苦勞……でも僕は決して立ち止まらない、立ち止まるわけにはいかない

いつか必ず……君の隣に立てる男になるために

本編〕ホテル・アグスタ（3）（後書き）

そしてリオンが六課側に（笑）

次回からは主人公にもボチボチ出番が回ってくるかと…

本編〱報告、そして日常（前書き）

最後の方、久し振りに主人公登場

もはやオチ要員だけど彼が一応主人公…なハズ

## 本編／報告、そして日常

ホテル・アグスタの件を終え、報告用のデータをまとめたので帰りに聖王教会へ寄り報告を済ませることにする。

生憎とヴァンは任務で不在なので騎士カリムに取り次いでもらう。

騎士カリムは執務室にいらることなので、執務室に向う……その途中にボロ雑巾のような物体が落ちていたがスルーすることに。

【坊ちゃん……】

違う……アレは断じて肉親ではない。

世の中には似た人が複数いるとかいないとか……そう、それだ。

【……引きずった跡は騎士カリムの執務室からのようですが？】

ああ、マリアン。早く帰って君の笑顔が見たいよ

騎士カリムの執務室前まできて、ノックをしてから入室する。

「——聖王教会騎士団 騎士見習いリオン・マグナス、ただいま帰還し、ご報告にあがりました」

そう伝え一礼する。

「——はい、初任務ご苦勞さまでした。報告の方はお茶でもいただきますながら聞きましょうか」

何故かご機嫌な騎士カリムの声色に疑問を抱きつつ顔を上げると

……

【あつ、返り血……】

……データだけ渡してもう帰りたいな。

「——以上です。敵召喚師一味に関しては機動六課…管理局の方で調査を実施するそうです。また今回の解析結果については……いえ、騎士カリムが後見人を務めている部隊なのですから向こうから『正確』なデータがくるのでしょーうね」

「ふふつ、信頼できる部隊ですからね」

お茶をしながら騎士カリムに今回の報告を行う……最後は皮肉のつもりだったのだがな。

「——それと個人的な話で恐縮ですが、機動六課の副隊長に暇があれば訓練トレーニングに参加してみないか、と誘いを受けました」

「まあ、ヴィータに……それでどうするつもりで？」

ヴィータ……シャルの話が正しければ真正古代ベルカに存在した  
夜天の書の守護騎士。  
エンシェント

まあ、そのところは眉唾ものだが……少なくとも印象は歴戦の  
騎士を思わせたので訓練の相手としては申し分ないだろう。

「……悪い話ではありませんし、少し考えてみます」

別に迷っているわけではない。

ただ、今回の件での心の整理がついていない。

もう少し落ち着いてからにするつもりだ。

「そう……行く気になったのなら私に一言下さいな。こちらからも  
話を通しておきましょう」

「……お世話になります」

「まあ、それはお互い様かしら？ 帰りにヒューゴさんを回収して  
いって下さいね？」

現実是非情だった……

報告を終え、残りはデータの確認で十分と判断し、お茶会を切り上げる。

「騎士カリム、そろそろ……」

「……あら、もう少しで陽も沈みますね。ここでお開きにしましょうか？」

騎士カリムに同意し初任務の報告を終えた。

データを片付け、後は帰るだけ……だが一つだけ聞いておきたいことがある。

「——最後に一つだけ、機動<sup>アレ</sup>六課の『本当』の目的はなんなのですか？」

そして陽は完全に沈みきった。

正直に言えばコレは完全にカマかけだ。

報告用データを眺めながら出てきた疑問……たかだかロストログアの回収任務に当たる部隊の後見人を騎士カリムが務める？

確かに対象ロストログア『レリック』を巡っては『ガジェットドローン』なる厄介者や今回遭遇した召喚師一味の件がある。

だが、わざわざ『聖王教会』の介入することではない。

それに少数精鋭『過ぎる』メンバー……そして騎士カリムの『信頼』できる部隊。

騎士カリムとの付き合いもかれこれ7年ほど……性格は把握しているつもりだ。

だからこそ抱いた違和感。

そしてこれらのことより考えられる結論が一つある。

「——貴女レアスキルの預言関連ですか？」

騎士カリムの稀少技能レアスキル……最短で半年、最長で数年先の未来の出来事を散文形式で書き出す預言。

その予言にあのロストログアが関係している……もしくはそれすらも隠れ蓑にするため。

「……………」

騎士カリムからの返答はない。

沈黙は肯定……無言そのものが回答になるなんてひどい話だ。

「……………失礼します」

そう言って執務室を後にする。

陽の沈みきつた部屋で騎士カリムがどんな表情をしていたのか……  
僕にはわからなかった。

「嫌な気分だなシャル。敵は正体不明で強大、味方も隠し事ばかり……」

教会の廊下を歩きながら呟く。

【坊ちゃん……】

「わかつてはいたさ……組織というもの、それに属する者、考え方……」

わかつていた『つもり』だった。

【……僕のオリジナルの記憶にも似たような葛藤があります。でもそれは……それこそが……】

「——大人になる……そういうことなのかな？」

僕は……いや、それでも僕の望みは変わらない、変えるつもりなんてない。

ならば僕の前に立ちはだかる全では……踏み超えていくのみだ。

【坊ちゃん……非常に恐縮なんですが……足元……】

シャルの声に反応し足元を見るとボロ雑巾が……

どうやら踏み越えると決意した最初の障害物は実父<sup>ヒューゴ</sup>だったようだ

……

……とりあえず実家までコレを届けることにしよう。

ボロ雑巾…父を届け、その日は実家に泊まることに……久しぶりに寄ったのだから、と母に言われては断り切れなかった。

次の日はそのまま学院へ。

そして放課後、いち早く帰ろうと思ったのだが彼女もまだ帰宅していない時間であつたため、アイツの見舞いでもどうかとシャルから提案があつた。

ハクのこともあつたので一応報告はしておくのが義理といったところか。

アイツの病室前……ノックはしたのだが返事がない。

【……気配はしますね？ この感じは……多分ですが何かしらの境界を張って気付いていない状態でしょう】

別に前回のような悪寒はしない。

「――入るぞ」

【坊ちゃんの傍若無人ぶりはさすがですね】

「……折るぞ駄剣<sup>シヤル</sup>？」

【・・・・・（つ、）・・・・・】

そして病室のドアを開けると……ギターで弾き語っているアイツの姿があつた。

どうやら防音結界を張っていたようだ。

目を瞑り熱唱しているようで僕たちの存在には気付いていない。

<sup>バジャマ</sup> 服装は以前よりはまともになっていたが……母親似の容姿と腰まである金色の髪、それに妙ちくりんな丁寧言葉……第一印象は10人中9人がコイツを女だと思うだろう（全員と言わないのは僕のプライドだ）

仮に女と間違われても見た目が絶壁……どちらにしても残念には

変わりがない、とはヴァイスの言だ。

間違われるのが嫌ならとりあえず髪でも切れればいいのだが……あ、そういえば似合わなかったか。

それにコイツの場合、母親の趣味には強く言えないようだ。

流されている……と言ってしまえばそれまでだが、どうにも違う気がする。

感謝しているから？ それとも……負い目があるのか？

僕も母には自分勝手な理由で長年家出をしているから多少の負い目は感じているが……コイツほどではないと思う。

……まあ、いいか。

とりあえず今は声を……かけようとも思ったがやめた。

なぜだろうか、この曲は遮りたくなかった。

結局、壁に寄りかかり聴き入ることに。

僕も初等科の頃にヴァンから教えられたが、あまりそちらの才能はなかった。

そういう意味ではコイツは僕より上だったな。

まあ、だからどうしたというわけではないのだが。

きっと僕がいることに気付いたら驚くのだろう。

本当に間が悪いというか……とことんついてない奴だな

……むしろ憑いているのか？

そちらの方が何故かしつくりくるな。

最後の、弾き語りを終え、アイツはまだ目を瞑って余韻に浸っている。

折角なので色々を含みのある拍手を送ってやることにする。

「——ッ！ えっ、みりお……さん？」

ビクリと面白い反応をし、ブリキ玩具のような効果音がしそうな動きでこちらに首を回した。

そしておそろおそろ訊ねてきた。

「……ちなみにいつから？」

【3分以上は前ですね】

僕の代わりにシャルがそう答えた。

3分以上、それはつまり目を瞑り熱唱しているシーンそのもの。

「はは、ははは……」

アイツは力無く笑って……沈んだ。

はあ、何をやっているんだか……その姿を見て僕も溜息をつく。

【……あつ、坊ちゃん今笑って……】

そこにはどこか懐かしさを感じるエミリオ・カトレットの『日常』があった。

本編〈報告、そして日常（後書き）

とりあえずヴィヴィオ登場までリオンのターンを予定

い 上手くまとめられれば残り3〜4話程度…もう少しお付き合いたさ

本編／日常、されどそれは儚くて（前書き）

急に外が寒くなった…もう冬ですね…

本編／日常、されどそれは儚くて

幸せとは人それぞれだろう

だが総じて言えることは『不幸』を知らなければ自分が『幸せ』であることもわからないと思う

つまりは基準……か？

それがなければ自分の立ち位置なんてわからない……そういつにとだ

だからこそ、この風景を『懐かしい』と感じた僕は……どこか変わってきているのだろうか

良い方向か、それとも……

【……坊ちゃん、このモノローグのオチは？】

「——そんなものは無い」

世の中オチがあることばかりだと思っな

「……えっと、何用でしょうか？」

まるで先ほどまでの失態をなかったことにするように、いつものような感情の読み辛い表情に戻った。

「ほう、用がなければくるな、と……」

「あつ、いえ…そういうわけでは……」

「ふん、冗談だ……まあ、大した用ではないからすぐに帰るさ」

ただの報告だ……それも時間潰しの。

「……なら外にでも行きませんか？ 私も気分転換がしたいですから……」

まあ、辛気臭い病室よりはいいか。

……コイツの場合は先ほど失態を忘れさせたいのだろうが。

僕も用が済んだらそのまま直帰することにしよう。

「少し待っていて下さい、すぐ済みますから……」

そう言って浮遊し車椅子に乗り移り、魔法によりソレを操作し、僕の方まできた。

「ほう、なかなか器用だな……」

「……入院中は暇ですからね。魔力制御などをひたすらやっています」

「ご苦労なことだ……だが、一つだけ先に聞いておきたい。

「その格好で「今日のは一応メンズです」……そうか」

以前のようなネグリジェではなかったが、ワンピース型のパジャマだった……

僕もそのタイプを使わないことはないが……まあ、いいか。

どうせなので医療院の庭の方へ行くことに。

道中は他愛もない世間話？

そんなもの僕たちがするわけないだろう。

ホテル・アグスタの件を簡略して伝え、あのドラゴンのことについて話す。

「まあ、役には立ちそうだ。しばらくは僕の方で預かってやってもいい」

「そうですか……基本的に怠け者な性格をしていますので厳しくお願いします」

【いや、これ以上厳しくって……】

シャルがなにかブツブツと言っているがスルーする。

ついでなので騎士カリムが後見人を務めている部隊『機動六課』からの訓練の誘いがあった件も話しておく。

コイツは少し目を見開き驚いた表情をしていたが、すぐにいつも表情に戻り訊ねてきた。

「……どうするんですか？」

「受けようと考えている、今はヴァンも多忙で修行相手がいないからな」

「それでも修行相手ならエリオとかいるじゃないですか？」

「確かに……エリオも強くなった、近接戦闘ならお前より上だろうな。まあ、時々やるのはいいが……後輩相手ばかりではな」

正直な話、エリオの実力は確かだ。

手合わせの相手としても悪くはない。

だがエリオは学院生活を、日々を楽しく過ごしている。

コイツは知らないだろうがエリオが話してくれた重たい過去……アイツは幸せになるべきだ。

だから幸せそうな今を僕の勝手で邪魔したくない。

「……そうですか」

そんな話をしているうちに庭まで着いたようだ。

「やっぱり外の空気の方が幾分マシですね」

自業自得で入院しているクセによく言えた台詞だな。

どちらかというと天気はぐずっているぞ？

「ふん、僕の用は終わりだ、もういい時間だしな」

雨でも降る前にこのまま帰るとするか。

「あつ、そうです。知っていたら教えて欲しいんですけど……」

「……なんだ？」

帰ろうとしたところ、控え目に訊ねてきたので仕方なく質問を聞くことに。

「ヴァイスさんはなんで入院「アホだからだ」………そうですか」

即答してやった。

妹の初デートをストーキングしている際にマンホールの穴から……

…僕は不審な行動をしている知人を心配して『親切』に声をかけてやっただけだ。

本当に何をやっているんだか……自分も来年は結婚するとか言っていたクセに。

……帰るか。

「たびたび申し訳ないですが……」

まだあるのか……

「この本を学院の図書室に返却しておいてもらえないでしょうか？」

そう言って魔法で虚空から取り出したのは一冊の本。

器用なことだ……

「かれこれ2週間くらい前に借りていたのですが……」

忘れていたのか……

「明日でもいいならやってやる」

「はい、よろしくお願いします」

渡された本を見ると古代ベルカの歴史書だった。

あの学院は教会系列のミッションスクールだからベルカ関連の本は多い。

古代ベルカ語表記の本も置いてあるくらいだ。

読める生徒などほとんどいないだろうが……

シャルも言語系が得意だったらよかったのだが……生憎とそうではなかった。

【――僕は騎士として一生涯を主に捧げ〜】

とはシャルの言い訳だ。

【……って最後まで言わせて下さいよ！】

もちろんスルーした。

そんな下らないことを考えていた矢先、ふいにあることを思い出した。

コイツは確か古代ベルカ語の翻訳をしていたハズ……

そして……騎士カリムの預言書も……古代ベルカ語表記だ。

偶然だろうが……少しばかり気になったので、昨日に騎士カリムから聞けなかった預言の内容について知っているか訊ねてみた。

もしかしたら翻訳と解釈の手伝いで部分的にでも知っているかもしれない。

そう少しでも知っていれば……そんな軽い気持ちだった。

だがアイツの反応は予想もなかったほどの長い沈黙。

その後、いつも通りの読めない表情で「最新の預言は知りませんが……」と前置きし、知っている範囲を周囲には洩れないよう念話でポツリポツリと語り始めた。

——ロストログア『レリック』から始まり、地上本部の壊滅及び管理局システムの崩壊へと至る、と思われる預言内容を……

気が付いたら僕は拳を握りしめており……預言の内容と解釈を淡々と語るアイツを……思い切り殴り飛ばしていた。

そして淀んだ空からは耳を裂くような雷鳴が轟き、僕たちに追い打ちをかけるかのように冷たい雨が降ってきた……

本編／日常、されどそれは儚くて（後書き）

エリオは強い、と

局員用の訓練とかを受けていない分、色々な経験は原作より少ないが、一対一の戦いならずっと格上と稽古してきたため、原作よりかなり上の設定です。

本編 偉大なる獅子のある休日（1）（前書き）

寒い…寒すぎる。

足が冷たい…

## 本編 偉大なる獅子のある休日（1）

築き上げるには多大な時間を有した存在ですら、一瞬の出来事で崩壊する

一瞬、たったそれだけで変わり果てるもの

人との関係などその典型だろう

降り注ぐ雨が、崩れ去ったものを全て流してくれればよかったのに

そして……雨が上がつて空が晴れ渡ったら

新しい何かは始まるのだろうか……

人間なんてどんな出来事があつたとしても腹は空くし眠くなる。

所詮はそんな存在な生き物だ。

そんな感想を抱いたのも既に十数回目。

「……もう3週間近く経つのか」

ホテル・アグスタでの初任務からもうそれだけの時間が流れてい

た。

その間に任務はなかった。

普通に学院に通い、稽古も……結局、機動六課には行かなかったが。

ヴァンも今日には任務から帰還するらしいが……あまり聖王教会には行きたくない。

騎士カリムにも、アイツにも……会いたくないから。

「まるで幼稚な子供ガキのようだな僕も……」

思わず自嘲してしまう。

わかっている。

わかっているんだ。

本当はただの八つ当たりだって。

だけど……あの時

「僕は……」

あんなに感情をむき出しで、ただ怒りのまま拳を振るっただろうか？

あれは……何に対しての怒りだったのだろうか？

気が付いたら……車椅子に座り念話で騎士カリムの預言について  
淡々と話すアイツの頬を思い切り殴り飛ばしていた。

【坊ちゃん！？ 何してるんですか！？】

「シャル！ お前は『黙っている！』」

殴り飛ばされた勢いで車椅子ごと転倒したアイツの胸倉を思い切り  
掴み上げ

「——何故黙っていた！ そんな世界の危機に関わることを！」

そう叫んだと同時に淀んだ空からは雷鳴が轟き冷たい雨が降り出  
してきた。

最初の一撃で口内を切ったのだろうか、アイツの口元からは血が  
垂れていた。

だがそんなの構わず問い続ける。

「——黙ってないで答えろ！！」

そんな僕にアイツは……

「……色々な思惑がありました……けれど……」

消え入りそうな小さな声で

「……人々の不安を煽るようなことを吹聴しろと……正気ですか？  
そもそも……」

だけれど淡々と

「——問われてもいないことを教えるやる義理も義務も……ありませんから」

そう答えた。

雨足が激しくなり、ただただ……冷たかった。

「……ミリ……？……リオ？」

アイツの答えは『問われたから答えた』だった。

そして『聞いてこない奴に教えてやる必要などない』とも言った。

「……聞いて……？ エミ……？」

普通に考えて、不安を煽る内容の預言など吹聴しない、させない。  
おそらく騎士カリムやヴァンから口止めをされていたのだろう。

もし僕が逆の立場であっても……

「——エミリオ！」

「……えっ？ ……マリアン？」

名前を呼ばれ気が付くと目の前には……少しばかり怒った顔をしているマリアンがいた。

「『えっ？ マリアン？』じゃありません！」

そうか今日は休日で……

「——ごめんマリアン！ ちょっと考え事をしていて……」

マリアンと買い物に行く途中だった。

買い物と言っても日用雑貨と食品がメインだ。

外で朝食を兼ねた昼食を済ませ、日用雑貨と食品を購入し、マリ  
アンのウィンドウショッピングに付き合う。

そして14時を回ったところか。

なぜだろう……せっかくマリアンと2人で買い物にきているのに。

……全然楽しめていない自分がいた。

「……エミリオ？ ……少し休憩していきましようか」

そう言っただけ彼女と近くの喫茶店に入る。

喫茶『タルタロス』……何かが激しく間違えている気がする。

内装は……いや、もう語らないことにする。

無難にコーヒーを頼んでテーブル席へ。

メニューにあった骸狩りとかもはや食べ物ではないだろう……。

「今日はありがとうエミリオ。父さんも母さんも今日は帰ってこれ  
そうだから美味しいものいっぱい作らないと」

ヴァンもそうだが今日には大半の聖王教会の騎士たちが戻るらしい。

どうやら大きな山が終わったようだ。

「——おまちどうさまですゝ」  
クリフォト 魔界コーヒーお持ちしましたゝ」

眼鏡をかけた中年マスターが嘘んくさい営業スマイルでコーヒー（仮）を持ってきた。

「……どうぞゆっくり」

コーヒー（仮）を置いてマスターは戻っていった。

そして禍々しいデザインのカップに入った液体を眺める。

見た目と香りは普通か……？

商売する以上ヤヴァイものは出さないだろうが……

「……ねえエミリオ、ちょっと聞いてもいいかしら？」

そんなコーヒー（仮）についての葛藤をしているとマリアンが僕に訊ねてきた。

「今日の……いえ、このところずっと！ エミリオは考え事ばかりしているように見えるわ。さっきだって私が話しかけるまで全然気が付かなかったもの」

「……そうだね」

それに関しては……言い逃れはできそうにない。

「私には……相談できないことかしら？」

「マリアン……」

悲しそうな顔をするマリアンに僕もお手上げだった。

「……少し、聞いてくれるかいマリアン？」

そう言って話す……あの日のことを。

もちろん預言の内容や殴ったシーンは省くが。

「……と、こんなところかな」

「えっと……それに対してなんで怒ったかわからなくてモヤモヤしている……？」

「……まあ、概ねそんな感じかな」

説明したところ、マリアンはキョトンとした顔している。

そんなに変わったのだろうか？

とりあえず長く語ったせいで咽が乾いたのでコーヒー（仮）を飲む。

……カップの見た目はと名前はアレだが、意外と上手い。

僕も味には色々とウルサイ方だが……まあ、及第点はやれる味だ。

そう思いながらも一口飲もうとして……

「——エミリオはその子のことが好きなのね？」

「——ブッ!!」

マリ안의台詞に思いつき吹き出した。

それでもマリ안의いる方向ではなく咄嗟に横を向いた僕はさすがだと自負する。

「——ゴホッ、ゴホッ！　いきなり何を言っんだいマリアン！」

僕がアイツを好き？

寒気がする！

そもそも僕が好きなのは……その……であって……

「まあ、好きというのは言い過ぎかもしれないけど……エミリオはきっと心配だったのよ、その子のことが。そして自分に話してくれなかったことに対する嫉妬、というのかしら？ うーん、それもちよつと違うかな……」

心配？ 嫉妬？

この僕がアイツに……？

「……さすがにそれは違うと思うよマリアン」

「でも信賴していたのでしょうか？」

信賴？

「……うん、きっとそうね。エミリオは心のどこかでその子を慕っていたのよ。きっとその子もね。けれど互いに心配させたくなかったから肝心なことは言い合わない」

僕がアイツを慕っていた？

そしてアイツも……？

「これも一つの友情なのかしらね？ きっとその子も相手がエミリオだから嘘を吐かずに答えてくれたのよ。そしてエミリオが怒ったのも無茶しているその子が心配だったから……そんなところかしら？ そもそも、そんな相手以外でエミリオは悩んだりしないでしょう？ もう何年の付き合いだと思っているの？」

お見通しよゝ、とマリアンは言うが……

僕はアイツを「いやゝ若いっていいですねゝ」 お代りはいかがでしょうか？」「……このタイミングで訪れるマスターは存外鬼畜なのかもしれない。

「と、いうわけでその子に謝ってくること！ ちゃんと自分の気持ちを伝えてくるのよ……言・わ・な・い・と、今日の夕食はみんなでニンジンとピーマンのフルコースよゝ」

そう言っでマリアンはタクシーを呼び、先に帰ってしまった。

マリアンは大人しそうに見えて実は行動派だ。

有言実行しかねないだろう……せつかく叔父夫婦も帰宅するのにそれはないだろう。

さりげに自分以外の人質を取られるとは……恐れ入る。

そして時刻は……もう15時になるくらいか。

今から聖王医療院に行つて帰宅するとなると、まあ、丁度良い時間か。

仕方ない……慕っているうんぬんはともかく、殴ったことは謝つておこう。

とりあえずレールウェイの駅まで行こうとした矢先……

「……？　今なにか聞こえたか……？」

何かゴトツというかゴリツというか……

「……あの路地裏か？」

ケンカか何かだったら放っておくが、もし犯罪だった場合は……

「ふん、準備をしておけシャル」

そう言つてシャルの封印を解く。

【——酷いですよ坊ちゃん！　僕に「また黙らせるぞ？」……ズミマゼン、グスン】

シャルの戯言を切り捨て路地裏に向う。

そこには特に何も……いやマンホールが下から開いた？

そして出てきたのは……

「——子供？」

ボロボロの布に身を包み、手には鎖を巻きつけた、くすんだ金髪をした幼子が這いずり出てきた。

……とりあえず今日の夕食はニンジンとピーマンのフルコースで確定したかもしれない。

本編／偉大なる獅子のある休日（1）（後書き）

ドブ子登場！

リオン編はきちんとまとめられたら残り1話の予定。

エリオとキャロの代わりにヴィヴィオを見つけることに成功しました。

本編〈偉大なる獅子のある休日（2）（前書き）

結局まとめきれなかったので次回をリオン編のエピローグにします。

## 本編 偉大なる獅子のある休日（2）

【……今夜はニンジンとピーマンのフルコースで確定でしょうか？】

「冗談はあとにしるシャル」

とはいえどうしたものか……

マンホールから出てきた幼子はそのままだ動かなくなった。

危険かもしれないが、放っておくわけにもいかないので近づく。

一応、脈や呼吸を確認したところ問題はなさそうだ。

おそらく疲れて気絶しているのだろう。

その証拠に足の裏はボロボロ……いったい何所から何のために……  
……正直、疑問だらけだ。

そして手には鎖が……その鎖の先には……

「……何かの入れ物か？」

鎖が巻きついた頑丈そうなケースが『2つ』

「……シャル、わかるか？」

【ちょっと待っていて下さい、今データ照合をしてみます……該当データは……】

それにしてもボロ布一枚でコイツは一体……

【……データ照合完了、該当データ1件！　これは……！？】

「いいから早く結論を言え駄剣<sup>シャル</sup>！」

【グスン……このケースの中身はレリックです坊ちゃん】

「なん、だと……？」

レリック……以前にホテル・アグスタで協力した機動六課が追っているロストログア

そしてアイツが言っていた預言の中に出てくる『旧知の結晶』

「……間違いないのかシャル？」

【はい！　以前にいただいたデータと一致しています……しかもこれは未だ封印されていません！　早く封印しないと……！】

「——ガジェットドローンか」

【……はい、市街地を戦場にするわけにはいきません！】

だが……

「僕には完全封印できないぞ……」

この手のことはアイツやリタの分野だ。

シャルの封印などはリタが作ったのだしな。

……どうする？

まずは聖王教会経由で機動六課に連絡すべきだろう。

だが、その間レリックをこのままにしておくのは危険すぎる。

ならばいつそ下水道にでも投げ捨て「……なにしてんの？」

咄嗟にシャルを構え、声のする方へ振り向く。

そこには……

「……こんな路地裏トコでなにしてんのアンタ？」

「えっと……それにその子は？」

見馴れた2人組……リタとキャロがいた。

……なんだ、なんとかかなりそうじゃないか。

「……レリック、ね」

事情を説明しリタにレリックの封印をもらう。

そして謎の幼子（仮称：ドブ子）の治療にキャラが当たる。

リタが何か意味深に呟いていたので訊ねて……

【坊ちゃん！ 一段落付いたんですから聖王教会に連絡をした方が……】

「……そうだな」

シャルに正論を言われたので、色々と思うところはあるが、今は自分のできる範囲でやれることをするまでだ。

【……それにしてもこの子……似ている？ まさかね……】

そしてシャルの独り言は僕にまで届くことはなかった……

聖王教会に……いや、騎士カリムに連絡するのは少々気まずかったので、今日から帰還しているハズであるヴァンに連絡を取り、説明する。

——状況は理解した。騎士カリムには私から話しておこう

もしかしたら未だ帰ってきていないのか、と危惧もしたが問題なかったようだ。

——私も現場に向かうことにする、それまで待機していなさい

どうやら聖王教会本部には未だ帰還していなかったようで、現場から比較的近いところにいたようだ。

ヴァンとの通信を終え、一息つく。

「……とりあえず待機だ。僕が残るからお前たちは帰っても問題ないぞ?」

封印処理と治療を行っていたリタとキャロにそう告げる。

「用済みポイ? あゝあ騎士さまは冷たいこと」

「あのっ! この子が気になるので……お邪魔でなければ……」

「……好きにしろ」

はあ、まったく……

【そういえばお二人はショッピングの途中だったんですか？】

シャルが2人に訊ねる。

まあ、警戒は僕がしているし、待機中は暇だから特に文句は言わない。

「——あつ……」

2人揃って間抜けな声を上げた……なんだ？ 何か忘れていたのか？

【えっと、どーしたんでしょう？】

「……アイツら忘れてた」

「アイツら？」

「はい、今日はエリオくんとリースさんも一緒だったんです……」

「……何だと？」

エリオはともかく、アイツは未だ入院中だろう。

……いや、もう1か月近く経つから外出許可が下りてるのか？

「ファンシーショップが気まずくて逃げたのよアイツら」

戦略的撤退だな……見事と称賛を贈ろう。

そして聖王医療院に向かわずよかったというべきか……

「あのつ、とりあえず連」「待たせたなエミリオ……いや、リオン・マグナスか？」

キャラロの声を遮り、師であるヴァンが現れた。

「ふん、この際はどちらもいい。コイツが件の子だ<sup>くだん</sup>」

そう言つてキャラロに介抱されているドブ子（仮）を指差す。

アイツらの件は一旦保留、今は現状を最優先だ。

ドブ子（仮）とレリックの入ったケースはヴァンが騎士カリム経

由で連絡した機動六課のヘリにて運搬することになり、ドブ子（仮）が気になるキャラが付添いで同乗、リタもキャラに付き合っ一緒にいくそうだ。

リタの場合は帰りが楽だからとか思っていそうだが……

僕はヘリなんか……特にヴァイスが操縦するヘリなど怖くてゴメンだ。

なんというか技術うんぬんではなく、呪いじみた何か……2人にはやめといった方が無難とは言っておいたのだが……まあ、オーバーランクの隊長殿が護衛のようだし大丈夫だろう。

そっちは任せて、僕とヴァンは機動六課のリインフォース空曹長と共に調査にあたる。

凄く小さい……こんな人種がいるのだろうか？

だがいくら気になるとはいえ、今聞くことではない。

地下水路を辿り、何かを引きずった跡……ドブ子（仮）がきたと思われる道を探索……他にレリックと思わしき反応はないようだ。

「……ふむ、辿れそうなのはここまでか……ずいぶんと遠くからきたようだな。ここは既に廃棄都市区画ではないか」

現状、これ以上は時間がかかる……

「他にレリックの反応もないようだな……ふむ、申し訳ないが残りの調査は機動六課に頼むことにしよう。それでも良いかねリインフ

オース空曹長殿？」

「はいです！　こちらも引き上げるようありましたので、残りの調査は陸士部隊と合同で行うです」

「ではリオン、我々も引き上げるぞ？　地上までは……ふむ、飛んでいくか」

「……いいのか？」

「なに、上は廃棄都市区画だ……少しくらい壊してしまっても問題あるまい」

「仮にも聖王教会騎士団のトップの台詞ではないな……」

「壊したらダメですよ！　壊さないように飛んで下さいです！」

飛ぶのはいいのか……まあ、空戦は得意ではないが飛ぶだけなら僕でも問題ない。

結局3人揃って地上まで飛んできた。

「……解散か？」

「うむ、ここから先は任せるとしよう。越権と取られるのは面倒だからな」

結局、わからずじまいか……

「……まさか廃棄都市から歩いて帰れとは言わないな？」

「そうだな……ここでも市街地飛行に該当するか。ふむ、ヘリと合流し護衛ということで押し切るとしよう」

無茶苦茶だな……

「私もヘリと合流するので一緒にいきましょうです！」

まあ、いい。ヘリと合流することにしよう。

3人で廃棄都市上空を飛行すること数分、ヴァイスの操縦するヘリが見えてきた。

「ヘリは無事みたいですねーまあ、なのはさんが護衛していますから万が一敵襲があっても問題ないです！」

「ふむ、もともと問題もなさそうがな……むっ？」

【——エネルギー反応です！ これは……！？】

エネルギー反応……まさか……！？

「——ヘリを狙っているのか！？」

そして空曹長の通信より情報が入る。

——市街地にエネルギー反応！……大きい！？ 砲撃のチャージ確認！ 物理破壊型……推定オーバーSランク！！

なんだと！？

それをヘリに撃たれたら……耐えられるわけがない！

ヘリにはリタやキャロ（ついでにヴァイス）も乗っているんだぞ！？

「——落ち着け！ 敵はこちらを侮っている。制限のないエースオブエースならば『あの程度』問題ない！ むしろ好機だ！ 私たちで敵を捕えるぞ……！」

「——そうです！ なのはさんは無敵のエースオブエースです！ グランツ騎士団長、犯人確保に協力お願いしますです！」

オーバーSランク相当の砲撃すら問題なく受けきれぬエースオブエース、にわかには信じがたい……だが！

「——信じていいんだな！？」

「——無論だ！／＼はいです……！」

ならば目標は……

「——エネルギー反応の地点……あのビルの上か!!」

狙うタイミングは砲撃を放った直後……自身の勝利を確信きつて油断している時!!

相手に悟られないよう、されど最速で目的地まで飛ばす。

遠くからでもわかるよう砲撃のエネルギー収束率は凄まじい。

だがへりの護衛であるエースオブエースなら防げると味方が断言するのなら、僕たちのやることはこちら……

【——砲撃が放たれます!!】

シャルの声と同時に砲撃は赫い光を放ちながら対象<sup>へリ</sup>に向い一直線に……まるで絶望の象徴であるかのような一撃だった。

それがへりに向い……巨大な爆音を奏でる。

敵からしてみれば例えヘリの護衛が出てこようとそれごとぶち抜くつもりだったのだろう。

だが……その考えは甘すぎた。

だから逆に……

「——今だ！　ぶち抜く！　デモンズランス！！」

砲撃級の魔槍をお見舞いしてやる！

生憎と今回の相手は殺人未遂の現行犯だ。

最初から容赦も猶予も与えない。

「——敵襲だつて！？」

向こうも避け切れないと判断し咄嗟に例の砲撃を撃つたと思われる大砲らしきものを盾にしてデモンズランスを受けるが……

「——甘い！！」

デモンズランスと共に放たれた複数の大型追跡魔力弾にて爆撃する。

「アアアアアアア！！」

「ディエチちゃん!？」

もう1人が名前を叫んでいるようだが無駄だ。

デモンズランス・ゼロ……の未完成版。

本来なら更に身体強化と自己ブーストを同時にかけ、防御力まで瞬間的に跳ね上げる攻防一体の反則技だ。

未だ習得できていないのが難点だが。

だがそれでも問題はない、なぜならば……

「——ここがお前たちの終焉だ……後悔するのだな！ 滅びよ！  
光龍滅牙槍!!」

既にヴァンが準備を終えているからだ。

デバイス  
大剣から凄まじい極光が放たれ、それが3頭の竜を形成する。

それが犯人2人に喰らいつき……遙か上空まで吹き飛ばす。

そして……

「——市街地での危険魔法使用及び殺人未遂で現行犯逮捕です!」

それをリインフォース空曹長が空中にてバインドキャッチする。

その後、ヘリを覆っていた煙が晴れ……

——ヘリの無傷防御成功です！

それが誰の声かはわからなかったが、無傷なままのヘリが姿を現した。

## 本編 偉大なる獅子のある休日（2）（後書き）

ア「ヴァン師匠がなんで滅牙槍を…？」

エ「光龍槍が使えないのに滅牙槍が秘奥義になっているよりマシじゃないですか」

ア「…そうだね。そして私たちの出番がありませんでしたね…」

エ「リースさんはまだいいですよ。僕なんて名前しか出てないんですよ？ もう2カ月以上出演していませんですよ？ 作品内の時間ですと3年くらいですよ？」

ア「それを言ったら私なんて一応主人公なのに…そもそも私が射撃で砲撃の軌道を逸らしたり、メガネを氷漬けにして捕まえたりの予定だったらしいのに…まあ危ない目に合わなかったと思えば悪くはないけど…」

エ「だってリースさん車椅子じゃないですか…それを言ったら僕も『来たれ雷 裁きを受けよ！』とかいいながら雷槍斬撃を放っていたハズだったのに…」

ア・エ「orz」

エ「…それはさておき、なんで僕たちはサードアベニュー（F-23）付近までできていたのでしょうか？」

ア「それはねえーりん…」

エ「誰がえーりんですか」

ア「ヴィヴィオを保護するために先回りしていたのですよ!」

エ「∴ 結局ヴィヴィオはここより手前、むしろ違うルートを歩いていて、違う地点から地上に出た、と」

ア「なのでレリックのケースも落す前、むしろ落とさなかったから2つあったというわけですよ」

エ「つまり僕たちの行動はまったく無駄だったんですね?」

ア・エ「OTL」

本編へ物語の始まり、それは…（前書き）

リオン編これにて終了

本編／物語の始まり、それは…

その後のことは割愛して話そう。

何故かって？

ここから先について僕は何も手を出していない、ただ『見て』『聞いた』だけだから。

最初に犯人２人組の救援と思われる存在が超高速で接近してきた。

だが僕とリインフォーース空曹長はその存在をまったく感知できなかった。

気づいたらヴァンが<sup>デバイス</sup>大剣を振るっており、一撃で返討ちにしていた、という状況だったのだ。

ヴァンに弟子入りして４年、いい加減近づいたかと思われた実力に未だ越えられない壁を感じさせられるような一撃だった。

そして管理局に送られるより先にヴァンと騎士カリムの連名にて、些か強引ではあるがその３名の身元調査を実施したようだ。

その内容について僕は知ることができなかったが、敵アジトの場所が判明したため、任務を終え大半が戻っていた聖王教会騎士団にて数時間後に電光石火の奇襲作戦に出たらしい。

結果、ガジェットドローンの製作者であり広域次元犯罪者であるジエイル・スカリエッティが逮捕された。

それに伴い、スカリエツィと裏で関与していた管理局地上本部のトップであるレジアス・ゲイズ中將の逮捕、更に時空管理局における真のトップであった最高評議会の権限？脱と解散：e t c

どうやら一連の事件を巡る騒ぎはこれにて一旦の終息を見せたようだ。

もちろん事件が残した爪痕は無視できるものではない。

しかし、永遠に癒せない傷痕でもない。

なんだかんだで世界は回っている。

いずれは過去の出来事と割り切り、先へと進むだろう。

結局、人間なんて生き物は先に進むことしかできないのだから……

ドブ子（仮）の件の翌日、事件の後片付けと称し学院を休み、聖王医療院へ向かう。

あの子のことが気になるのもあるが、一番の目的はアイツに会うこと。

【……昨日の夕食はニンジン& a m p・ピーマンオンリーの野菜炒めでしたからね】

叔父夫婦は電撃奇襲作戦に参加のため不在、マリアンと2人で苦しみながら夕食を食べるハメになった。

僕だけならばまだ耐えられる。

だが、彼女まで苦しそうな表情をさせるのは見ていて非常に辛かった。  
マリアン

「……エミリオがきちんと話し合ってくるまで2人ともずっと同じメニューです」

と、心中宣言までされてしまったのだから行くしかない。

それに叔父夫婦まで巻き込むわけにはいかないのだ。

彼らは長い任務を終え、ようやく帰宅できたのだから。

今朝方帰宅した叔父夫婦の話によれば電撃奇襲作戦は成功し、主犯である広域次元犯罪者のジェイル・スカリエッティを逮捕したらしい。

また、ホテル・アグスタでの召喚師も捕まったが一緒にいた騎士らしき男は見つからなかったようだ。

そしてスカリエッティと裏で繋がっていた管理局のお偉いさんも  
近く捕まるらしい。

まあ、その辺は僕の知ったことではない……そんな回想をしている  
間に聖王医療院に到着したようだ。

【さあ坊ちゃん早速病室に……あれ？ どこに向かってるんですか  
？】

僕はアイツの病室には向かわずある場所を目指す。

なんとなくだが病室には居ない気がするのだ。

こういう勘はよく当たる方だと自負している。

アイツとの付き合いも長い。

だから……大体の予想はつく。

「……今日はよく晴れているからな」

ここで一番空に近い場所へ向かう。

そして屋上のドアを開けると……

【……ホントにいました】

「ふん、何をしているんだか……」

屋上の中央。

そこには仰向けで両手を広げ寝転がって青空を眺めているアイツがいた。

松葉杖は律儀に並べて置いてあるあたりアイツらしい。

「……入院患者は大人しく病室で療養していたらどうだ？」

いつまでもここで時間を潰すわけにもいかなないので僕から切り出す。

アイツも僕が屋上に来た段階で気付いていたようで……

「……リハビリの一環です。そもそも怪我人を殴った上に雨の中に放置する人には言われたくない台詞です」

こちらを一目もせず、珍しく嫌味が含まれた返しをされた。

「ふん、悪かったな……それだけ、言いに来た」

そう言っ隣に座り込み、僕も空を見上げる。

「……そうですか」

そして互いに空を見上げながらポツポツと語り出す。

「……晴れです、雲ひとつ見当たらないほどの」

「……ふん、だからどうした？」

「……何処にも目に見える変化がない、比較対象がない、進んでいるのか戻っているかもわからない……」

「……それで？」

「……今まで私は何をやっていたんでしょうか、って」

「ふん、僕の知ったことではないな」

「まあ、そうですね」

「だから……」

「……だから？」

コイツの語る言葉の意味も意図も僕にはわからない。

でもコイツのことだから、どうせ今まで空回りしまくっていたの

だろう。

いつものことだ。

ならばいつそ……

「……忘れてしまえ」

それ以上の言葉は互いになかった。

——見上げた空は雲ひとつ見当たることのない快晴だった。

「……はあ、そんな風に割り切って生きられたら楽なんですけどね」  
ようやくいつもの溜息をしてから、よくわからない表情でそう呟く。

「ふん、別にどんな人生みちを歩もうとお前の勝手だ」

「……そんな末路みちに少しくらい手を差し伸べるつもりはないんですかね？」

ふん、思ってもないことを。

隣を横目で見下ろし、そう思いながら立ち上がる。

「……ほら、さっさと立て」

そう言っおろかもて未だ寝転がっている入院患者に手を差し伸べる。

それに対する反応は……

「……えっ？」

なんとも間抜けな声だった。

何が「えっ？」だ。

お前が手を、と言っただろうが……

まるで何が起こったか理解できない顔をしている。

誰が誰に何を……おそらく頭の中は疑問視でいっぱいなのだろう。

だが、僕にいつまでこんなポーズをさせておくつもりだ。

だからもう一度だけ、だけどハッキリと

「——早くしろアペリス」

そう伝える。

今度はキチンと伝わったようで

「……はい」

声には少しばかりの戸惑いを、だけど手はしっかりと握り返して

「……ありがとうエミリオ」

そう呟いた友人<sup>アペリス</sup>の表情は……どこか嬉しそうに見えた気がした

幼い頃

見上げるといつも彼女は優しく微笑んでくれた

時が過ぎ、成長するにつれ

その笑顔を見上げる必要はなくなっていく

だが、同じ目線になるにはまだまだ足りないようだ

両親は常に暴走状態な人たちだった

だから僕は早く一人前になりたいと……騎士になると言って家を出た

僕の望むものはただふたつ

すべては彼女と対等な目線で交わせる一人前の男となるために

……だけど、もうひとつくらい付け加えてもいいかもしれない

僕自身の歩んできた人生での出会い、紡いできた絆

それらを切り捨てて進む強さではなく

……すべてを抱えてでも進める強さを

ちなみに僕の行動を【ツンデレ乙ウウウ!!】と絶叫した駄剣<sup>シャル</sup>

は雲ひとつない青空へと散っていった。

本編〱物語の始まり、それは…（後書き）

次回からまた主人公サイドです。

まあ、ヴァン師匠は強すぎたと…一応はかつてのラスボス（笑）

ちなみにStSは未だ終わっていません。

ゆりかごは頑張って攻略せねばなりません（笑）

序々章↳グレードショップ（笑）（前書き）

今回は序章にも満たない非常に短い話（？）です。

## 序々章〱グレードショップ（笑）

「——グレードショップをようこそ」

なんかよくわからないが目の前には金髪で虹彩異色オッドアイなお姉さんがいました。

昔、どこかで逢った気がするが何故か思い出せない。

てゆうか誰かに似ているような……

「——ここでは今まで貯めてきましたG Pを特典に変えることができます」 以下があなたのGRADEです」

こっちの疑問なんてお構いなしに話が進んでいく。

もう、どうにでもなれ……とりあえず見てみようか。

〱〱〱下記GRADEを取得しました〱〱〱

・称号ボーナス …… 300

・スキルボーナス …… 70

・フラグボーナス …… 500

・サブクエストボーナス …… 600

・エアーボーナス …… 4000

〱〱〱〱〱〱〱〱〱累計G P：5470〱〱〱〱〱〱〱〱〱

おいこら、エアーボーナスってなんだよ！？ それだけ群を抜いて高いぞ！？

「——それでは下記特典より選択して下さい」ご利用は計画的に」

こつちを完全無視<sup>スル</sup>してお姉さんは話を進めていく。

とりあえず揭示された特典とやらを眺めることに……

|                     |        |
|---------------------|--------|
| ~~~~~特典（1 / 4）~~~~~ | ~~~~~  |
| 【スキル？】無限の？製         | ……600  |
| 【スキル？】？の財宝          | ……700  |
| 【スキル？】？？の魔眼         | ……500  |
| 【スキル？】伏字解放          | ……5000 |
| ~~~~~               | ~~~~~  |

……眩暈がしてきた。

なんて言うか……時と空を隔て過ぎた感MAXだ。

しかしチートがお手頃ポイントだ……だが肝心のところが伏字になっ<sup>て</sup>いて怖い。

そしてその伏字解放に5000つて……まあ、チートなんてあつても逆に生き辛くなるだけだ。

伏字の内容は気になるが、どれを選択しても後悔しそうなので、この項目は完全無視<sup>スル</sup>することにする。

さて、次の項目は……

~~~~~特典（2 / 4）~~~~~

|         |        |    |      |
|---------|--------|----|------|
| 【キャラ追加】 | 砕け得ぬ闇  | …… | 2000 |
| 【キャラ追加】 | 闇統べる王  | …… | 1000 |
| 【キャラ追加】 | 星光の殲滅者 | …… | 1000 |
| 【キャラ追加】 | 雷刃の襲撃者 | …… | 1000 |

……誰さ？ はい、次いこう。

|         |          |        |
|---------|----------|--------|
| 特典(3/4) | ……       | ……     |
| 【アイテム】  | マスターボール  | ……3000 |
| 【アイテム】  | すごいきずぐすり | ……1000 |
| 【アイテム】  | むしよけスプレー | ……500  |
| 【アイテム】  | わざマシン??  | ……5000 |

はい次、ってもう最後の項目か。

|         |          |        |
|---------|----------|--------|
| 特典(4/4) | ……       | ……     |
| 【スキル】   | 秘奥義取得    | ……2500 |
| 【スキル】   | 最大魔力値アップ | ……500  |
| 【スキル】   | 身体能力アップ  | ……500  |
| 【スキル】   | 幸運アップ    | ……5000 |

「——幸運アップ一丁お願いしますー!!」

「……まあ、夢才チですよね」

ピロリン！

【リバーズクルセイダー】の称号を得ました！

## 序々章〜グレードシヨップ（笑）（後書き）

年内完結は難しいので開き直ってゆっくり書くことにしました。

年度内完結は目指したいところですね。

## 序章へ巡り巡ってRestart（前書き）

本当はリオン編中の主人公サイドを回想しようとしたのですが長くてメンドくさくなり封印されました。

その分また短くなりましたのであしからず…

## 序章 巡り巡ってRestart

### 【リバーズクルセイダー】

説明：2重の意味で再誕を冠する称号

条件：脇役からの主人公への復活

効果：リミッターを外させてもらう！

備考：もしかしたら同名のBCが使えるかもね

ピロリン！

ちよっぴりだけ運が上がったかもしれません！

えっマジで！？

ピロリン！

ただし幸運とは限りませんのであしからず。

チキショー！！

人生に迷っていたら、はじまり原点を思い出していた。みち

ハッキリ言って暴力は未だ嫌いだ。

それでも必要だと思って身体を鍛え、魔法技術を磨いてきた。

将来の選択肢を多くするために。

もちろん何もかもが順風満帆にはいかない。

むしろ上手くいかないことばかりとも思える。

それでも……今まで頑張ってきたと（無い）胸を張って言える。

だから……

……だから……

……だけど！

「——私はもっと はいアペリス君、診察の時間ですよ……」

はい  
」

……人生いつもこんな感じです。

最近になって……いや大分前から薄々とは気付いていたのだが……

私<sup>ラック</sup>って幸運値低いんじゃない？

いや、悪運うんぬんは散々言われてきたけどさ。

……だって初等科の入学式に全治1年の大怪我するし、でっかい災害に巻き込まれるし、実験台にされるし、よくわかんない遺跡で化け物と遭遇するし、スイーツを食べに行ったら警防署に行くハメになったし、カリムさん怖いし、知り合いは死亡フラグ乱立するし、自分なりに預言対策考えたら異世界だし、お猫様を助けようとしたら全治4か月の怪我だし、主人公から脇役に降板するし、他人にまで何か悟られているし、顔面（頬）を思いっきり殴り飛ばされた拳句雨の中放置プレイだし、ヴィヴィオの件でヤヴァイと思い行動したがハズレだったし、数の子が捕まってその情報から聖王騎士団の電撃奇襲作戦、そしていつの間にか事件解決していたし……

……私のここ数年の葛藤はなんだったんだろうか？

「……今まで私は何をやっていたんでしょうか、って」

謝罪に来たらしいエミリオと屋上から憎たらしいほど快晴な空を眺め、つつい呟いてしまった偽りのない言葉。ホンネ

しかし、まあ……こんな私にでも手を差し伸べてくれる友人（？）がいるだけ有り難いと感謝するべきか。

とりあえずここ数年の悩みであったＪＳ事件が未然に防がれただけでも良しとするべきだろう……シャルは になっただ。

……エミリオは用事があると言って屋上から去っていった。

シャルの回収にでもいくのだろうか？

私も午前中から黄昏るのは厭きたので、リハビリがてらの散歩を再開、生憎と天気良かったので聖王医療院の庭に向うことにする。

……そして忘れていたのだ。

多分J・S事件が（いつの間にか）片付いたことで色々燃え尽きていたのだろう。

——花咲く庭で私たちは混<sup>ヴィヴィッド</sup>沌な出会いをした



## 序章〈巡り巡ってRestart（後書き）

キャ「…リースさんは出番があるだけ幸せ者です」

ア「…その出番も内容に思うんですが？　てゆーかそもそも主人公という立場なんで」

キャ「わたしなんて久し振りの台詞場面なのにあたった35文字ですよ！？　しかも4年（4か月）以上ぶりの台詞が！！　メールとか名前ではいっぱい出ているのに！　なんです か この格差！」

ア「いや、DC本編での台詞がなかったエリオよりは…」

キャ「それはソレ、これはコレです！」

ア「——ちよいちよい出番のある脇役【現状維持】と完全な体を張ったオチ要員【ギャグキャラ】どちらがいいですか？」

キャ「…世間って本当に冷たいよねフリード？」

フ「キュルクウウ…」

真・本編〱晴れ時々、桜吹雪（前書き）

暑いよりは寒いほうが好きです。

と夏はいつも思っていますが、やっぱり寒いのも嫌いです。

早く布団に籠りたい。

真・本編　晴れ時々、桜吹雪

……これからどうしようか？

聖王医療院の中庭まで散歩がてら歩いてきたのだが特に目的があるわけではない。ここ数年の悩みだったJS事件もいつの間にか片付いてしまったので、何というか暇なのだ。いや、今までも悩んではかりで大きな行動をしていたわけではないのだが……

たどり着いた中庭は綺麗に整えられてはいるが緑一色で花の一つも咲いていない。見る人によってはなにか寂しい印象を与える風景だ。

それでも季節は6月終わりの夏間近、時間帯も午前なのでちらほら散歩や日向ぼっこをしている入院患者の姿が見受けられる。

最初に述べた通り目的があるわけではなかったたので適当に歩き片隅に設置してあるベンチに腰掛け、再び空を眺め溜息をついた。

見上げた空は相変わらず雲ひとつない快晴。

「……はあ、これからどうしましょうかね」

いつまでも引き摺っていても仕方無い。むしろ懸念事項が勝手に消滅しただけ『幸運』だったと認識するべきだ。そう考えられる程度には落ち着いてきた。

しかし、急に消えた懸念事項のウェイトは大きかったようで、何

が喪失感というか物足りなさというか……色々とモチベーションが上がらない状態だ。

「それにしても今日は暖かいですね」

気温湿度共に快適、この後は病室に戻って魔力制御の訓練トレーニングとも思っていたのだが……

「ふわああ……少し……休んでいきますか……」

そつと目を瞑り、身体を休ませ心を落ち着かせる。

せめて夢の中では……そして目が覚めたら少しは……いや、確実に未来まえへと進めるように。

「……まあ、夢オチですよね」

何か不思議な夢を見た気がする。具体的にはこれから周回プレイが始まるような……それにしても夢の中に出てきた誰かは……思い出せない。昔どこかで見た気がするのだが……

まあ、思い出せないならどうでもいい。特に悪夢でも吉夢でもなかったと思うし、予知夢なんて類のものを見れた試しは……ない。

そんな下らないことを考えながら、ふと横を眺めてみた。

その行動に何か意味があったわけではない。何かを感じたわけでもない。本当にただ何気なく自然に……むしろ寝起きだったので少しは寝ぼけていたのかも。

そこには何かがあった、いや……いた。

「……………」

鼻の先5cm、眼に映ったのは私を見ている一対の瞳。そして序々にハッキリしてくる輪郭……眉、鼻、口、前髪……3秒くらいたってそれが人間のものと気付いた。

「……………」

……なんだろう、声をかけるタイミングを逃した。今更驚くわけにもいかないし、このまま見つめ合っているわけにもいかない。傍から見たら絶対におかしいーコマだろう。

「……ママ」

「えっ？」

と思っていいたら隣の子から声を上げてくれた。よく見たら小さい女の子だった。うん、この子は将来空気の読める器のデカイ人間になれるよ。

そしてこの子の台詞からして迷子だろうか？　だがこの子の服装は入院着だ。入院患者なのだろうか？

それにしても『虹彩異色』<sup>オッドアイ</sup>なんて珍しいね。紅と翠の鮮やかな瞳が神秘的に感じる。この子の金髪に良く映える色合いだ。<sup>ロートグリーン</sup>

……うん、そろそろ現実逃避はやめようか。

「……うつ、ふええ……まあまあ……」

ここは聖王医療院、時期は件のレリック発見の翌日、そして中庭……すっかり忘れていた。

……聖王の存在を。

とりあえず今は眼前で泣く子をなんとかせねば……こんな場面を見られたら嫌過ぎる。まるで私が泣かせているみたいではないか。いや、無言で見つめ合ってたけどさ。

ハンカチ……ない。

ティッシュ……ない。

パジャマの袖……半袖だった。

あるのは松葉杖のみ……

役にたたねえ……我ながら本当に使えなかった。

しょうがないので……

「……よくわかりませんが泣かないでください」

そう言いながら頭を撫でてみる。

「……ふええん……ママああ……」

結果、余計に泣きだした。逆の意味で効果はバツグンだった。何これ私が悪いの？　なんかこっちも無償に泣きたくなくてきたんですけど……

……仕方無い、奥の手を。バレたら後で怒られそうだから極力使いたくはなかったのだが……

プチオーバーリミッツ！ 衝撃で吹き飛ばさないように最少の力で身体に魔力を漲らせる。

入院生活中に磨いた魔力制御の成果、病室内で気軽に使用することのできたこの魔法……その集大成、今ここで披露することしよう。

「――無垢な魂よ、癒しの庭に集え」

その言葉と同時に足元と頭上から魔法陣が出現する。それが次第に大きくなっていき……弾け飛び光の粒子になる。そして私を中心に空中から光の雫が降り注ぐ。

「――煌めけ、イノセントガーデン」

降り注いだ雫を浴びた地面からも光が溢れ、その光の中から彩鮮やかな幻想の花々が咲き誇る。そこには地域も年代も気候も季節もなにもかも関係なく花々が咲き乱れ、無垢なる庭を形成し緑一色であった中庭を一つの楽園へと変貌させる。また、周囲の木々からも桜色の花びらを咲かせ、ヒラヒラと宙に舞わせ優しく降り注ぐ。

「……ふええ？ あっ……わぁあ……」

足元に咲き乱れる花々と空より降り注ぐ桜色の花びらにこの子も泣きやんで驚いている。そして降り注ぐ花びらを浴びている姿はま

るでこの世の全てに祝福された者のようでもある。

「……涙は拭えましたかお姫様？」

満開に咲き誇るこの庭の主役<sup>ヒロイン</sup>に微笑みを浮かべ問いかける。

我ながら中々に厨二感MAXの言動だが、あのまま泣かれるよりはマシ……と思いたい。そもそも、これで泣きやまなかったら、まさに無駄な労力だ。<sup>まりよく</sup>実はこれだけで消費量は全魔力の2/3以上なのだ。絶対零度とかより魔力消費が激しい実効果がなにもない幻術って……回復？ ダメージ？ 本当にないありませんよ？

でもまあ、こんな魔法もいいかなって思い作ってみて良かった。本来はただの観賞用みたいなものだが。

とりあえずこれで大丈夫かな？ そう思ってもう一度頭撫でながら幼子に訊ねる。

「——お名前教えていただけますか？」

そう、それは物語が始まる最初の一言。

「……ヴィヴィオ……ふっ、ぐっ、ふええええ……」

また泣き出したあああ！？ 何なの！？ 私が撫でると泣き出すの！？ ナデボならぬナデナキって技能<sup>スキル</sup>なのか！？

「——まあ……ママア……」

と、思いつきり私に飛び込んできた……主に肋骨当たりに。

あつ、今なんか『ボキッ』って音が聞こえた気がした。

ピロリーン！

【イノセントガーデン】を習得しました！

真・本編〱晴れ時々、桜吹雪（後書き）

肋骨と一緒に色んなフラグもばつきばき。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6126u/>

---

私のリリカル・まじカオスな転生記

2011年12月9日07時01分発行